

L i v e デュエルモンスターズ / シャーク

永瀬皓哉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは人間とデュエルモンスタースターズが共存する世界
街には多くのデュエルモンスタースターズがあふれ、人と支え合って生きている

そして、デュエルモンスタースターズと互いに心を通わせ合いながら、時に戦わせ競い合う者たちを、人々はデュエリストと呼んだ
時は流れ、ネットワークを通じて世界中でデュエルが見られる時代
動画配信サイト「D—LIVE」にてデュエルを生配信し、
世界中にデュエルの感動を与える者こそ——Liveデュエリストなのだ

そんなLiveデュエリストたちの夢の祭典、
6つのデュエルジムを攻略し、チャンピオンへの挑戦権を得る、
「デュエルシティ・ジュニアリーグ」が今まさに開催されようとしていた

ここにも、そんな一人のLiveデュエリストが——。

※この作品はアメリカ兎さんとのコラボ小説です

この作品の別視点があちらで展開されていますので、
ぜひ両方ともご覧になってみてください

目次

Prologue

Liveデユエル、オンエアー！ | 1

本編

敗北から始まる物語 | 7

戦略と知略 | 13

脅威の牙 | 22

暴君の炎 | 35

喝采なき戦い | 51

水属性はいいぞ | 65

怒れる魚群 | 75

水属性使いの誇りにかけて | 83

高嶺の華 | 100

同じ魂を宿す者として | 112

向き合うべきもの | 133

襲い来る凸げき団 | 142

隠された牙 | 160

わくわくのデツキ調整 | 169

サーマルジム対策会議 | 180

不死身の巨鳥 | 186

最強ドローの弱点 | 195

釣りインタビュー | 204

きつと強くなる | 216

縁と絆 | 228

対シャルクの研究成果 | 236

冒読者の矜持

250

デツキと向き合う

259

皇を統べる力

268

決死の攻防

278

Prologue

Liveデュエル、オンエアー！

Liveデュエル。

それは10歳から19歳までの未成年デュエリストたちの祭典『デュエルシティ』で行われる戦いを、動画配信サイトを通じて生配信し、世界中の観客に熱狂を届けるデュエル。

ある者はエンターテイメントとして、ある者はデュエル講座として、またある者は別の夢のために顔を売るため。理由はさまざまだが、彼ら彼女らの目指すところはひとつ。

6つのデュエルジムを攻略し、決勝トーナメントでチャンピオンと対峙し、未成年デュエリストの頂点に立つこと。

そして今——そんな『デュエルシティ』ジュニアリーグに出場するため、その開会式に参加する少女が一人。

「では、こちらがLiveデュエル配信用のデュエルディスクになります。デュエルシティ参加用のエントリーネームを登録しますので、ご希望があれば仰ってください」

「エントリーネーム？ 名前かな？ シャルクでお願いします」

「エントリーネーム「シャルク」ですね。かしこまりました。……はい、登録完了しましたよ。では、ご健闘をお祈りします」

エントリーネームの登録を終え、意気揚々とスタジアムへ入ろうとすると、一人のスタッフが何か不安げな表情でシャルクに声をかけてきた。何事かと思いつながら、どうしましたか、と声をかけてみると――

「あの……今しがた登録されたエントリーネームですが、ご本名と同じようでしたが、問題ありませんでしたか？」

「えっ？ 本名じゃなくいいの？」

「はい。というか、むしろLiveデュエルで配信される名前ですので、秘匿性の高いニックネームのようなものを付けるのが通例なのですが……シャルクさんの場合ですと、ご本名をそのまま使われている

ようなので……」

しまった、という声すら出なかった。

元々、D—LIVEのアカウント自体は持っていたが、そこではネットマナー的に「サメ娘」という名前で配信しており、それなりにリスナーも居たものの、こうした大舞台で名前を大々的に晒すというのは、あまりにもまずい。

今からでも「サメ娘」に戻せるものなら戻したいが、そのスタッフに聞いてみると、一度登録したエントリーネームは原則的に変更不可能らしい。もはや叫び声を上げることしかできない状況に、周囲からクスクスという笑い声が聞こえる中、一際大きくゲラ笑いしている声がひとつ。

顔を仮面で隠した、そこそこ長身の少年だった。

「あんにやる……もし大会中に会ったら絶対にボコってやる……!」

怒りはともあれ、エントリーネームの件については肩を落としてつつも、デュエルシテイが始まってしまえば名前など気にならないだろう、あるいは、リアル寄りのエントリーネームだと思われるくらいだ、と思いつながら、シャルクはゲラゲラと笑う仮面の男を記憶に刻み付けて、開会式の始まるスタジアムへと向かった。



開会式が終わり、受付でLiveデュエル専用のデュエルディスクを受け取った紺色の髪の少女——シャルクは、その季節外れな長いマフラーを翻しながら、さつそく第一のジムを目指して、始まりの街を出た。

見渡せば、そこかしこで行われているデュエルモンスターズたちのぶつかり合い。11歳にして初参加のシャルクは、その興奮を抑えきれず、駆け足で荒れた道を進んでいく。

「あつ、君もLiveデュエリストだな! 視線が合ったらデュエル! 常識だよね!」

走り始めてすぐ、短パン少年のゴローが勝負を仕掛けてきた。

そう、この大会において、なんらかの理不尽な賭け事などをふっかけられない限り、仕掛けられた勝負は必ず受けなければならぬ。故にLiveデュエリストの間では「視線が合ったらデュエル」が基本なのだ。

この大会で自身のデッキを——ひいてはそのデッキのモチーフとなった「ある動物」をアピールするため、シャルクもまたそのルールに則って積極的にデュエルを受けた。

「オープンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

この大会に参加するデュエリストは200人以上。その誰もが頂点を目指し、その多くがトーナメントに辿り着くことなく脱落する。

勝負の世界は非情だ。必ず勝者と敗者を二分する。しかし敗者が得られるものは勝者よりも多い。繰り返されるデュエルの中で、どれだけの敗北を次の勝利に繋げられるか。それがデュエリストの強さだとシャルクは知っている。

だからこそシャルクのデュエルに後退の二文字はない。常に見えるているのは「勝敗の向こう側」だけ。

何度も勝って、何度も負けて、そしてその度に学習して強くなり、やがてトーナメントに食らいつく。それはまるで、狡猾にして獰猛なサメのように。

「これで終わりだよ！ 《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》で《セイバー・ビートル》を攻撃！」

「ぼくの《セイバー・ビートル》が……！ でもライフはまだ残って——」

「サメの咬牙は逃がさない！ シャークドレイクの効果発動！ 戦闘破壊したモンスターを、攻撃力を1000下げて蘇生し、追撃ができる！ 行け、シャークドレイク！ デプスバイト！」

「う……うわあああああつ！」

記念すべきデュエルシティ最初のデュエルを勝利で収めると、シャルクは力強くサムズアップし、対戦相手を讃えるように決まり言葉を投げかける。

「ブラヴォー！ 楽しいデュエルだったよ、またやろうね！」

「うん！ 君も大会がんばってね！」

Liveデュエルを終え、その内容に対するコメントを振り返ってみると、やはり評価は様々であった。

『相手の動きをよく読んだいいデュエルだった！』ありがとー！

『妨害の仕方がえげつない』まあ妨害なんてみんなえげつないもんでしょ？ 『性格悪そう』そこまで言う!？」

シャルクの得意な動きは、パワーカードにあまり頼らず相手の動きを先回りして妨害したり、あるいは相手モンスターにデバフをかけて無力化したりと、良く言えばテクニカルでクレバー、悪く言えばパツと見が地味で陰湿なプレイング。

それだけにLiveデュエルをエンターテイメントとして見ているリスナーからは不評だが、逆に戦略性の高いカードゲームとして見ている者からは好評を得ているようだった。

彼女にとって幸いだったのは、彼女自身のメンタルがそうした辛辣な意見に対して極端に弱いわけではなかったことだろう。皮肉には皮肉で返し、称賛を素直に受け取る性質であったことが、彼女自身を救っていた。

『なんでミラフォ使われた時にカウンター打たなかったの？』あれはですねー、あの時点で既に伏せには相手のターンで妨害できる札が伏せてあったのと、フィールドを一旦空っぽにした方が動きやすい手札だったからですよ。墓地に《ライトハンド・シャーク》いましたし」

コメントを返しながら歩き続けていると、少し開けた空き地のような場所で、それなりに大人数の人だかりができていた。

デュエルシテイの参加者の中には、前年度にも参加していたLiveデュエルリストもおり、そうした人物たちは前回のデュエルシテイで得た固定ファンが既にできているため、こうして人だかりができていくこともある。

ただ、まだ開会式を終えて一時間ほど。ほとんどの参加者が最初のジムを目指して必死に進んでいる中、こうも足を止めてひとつのデュエルを見ているとなると、さすがのシャルクにも気にならないことはなかった。

シャルクはデュエルディスクのLive機能を切ると、その人ばかりを掻き分けて、その中で行われるデュエルを覗き見た。

「受けてもらうぞ、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》でダイレクトアタック！」

「うおおおおおお、アツチイイイイツ!!!」

Liveデュエル特有の、デュエル中の周囲に現れるLiveチャットパネルを覗いてみると、『いやそうはならんやろ』『BFでレッドデーモンズドラゴン……?』『変態デッキの見本市かな?』『そうはならんやろ』と困惑の言葉が連なっている。

事実、シャルク自身もその場面だけを見て、この仮面の男が「BF」軸で《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》という謎構築のデッキを使っていることがわかった。

「ターンエンドだ！ デッキトップのドロー1枚で戦況は覆せるかもしれないぞ」

「できねーよ!!!」

「ちなみに、手札が0枚の場合《煉獄龍オーガ・ドラグーン》は1ターンに1度、相手の魔法・罠カードの発動を無効にして破壊するぞ」

「勝てるかあ!!」

そのデッキが強いか弱いかはひとまず置いておくとして、ギリギリ納得のいく構築理由を捻りだしてみると、「BFの手札消費の激しさを《煉獄龍オーガ・ドラグーン》でアドバンテージに変えている」とも取れなくはない。

まったく理解の届かない構築とプレイングではあるが、彼はそのまま圧倒的なパワープレイによって勝利を収めてしまった。すると、その謎構築デッキと非合理的なプレイングに反して、彼には周囲から拍手喝采が浴びせられた。

確かに、彼のプレイングは大量のカードを一気に吹き飛ばす豪快な効果や、高火力で一気にライフを削り取る大型モンスターがいて、デュエルに詳しくない人からしてもその強さをわかりやすくアピールできていた。

また、彼は序盤の動きが遅く、おそらくその構築ゆえの手札事故を

起こしていたのだろうが、逆境に追い込まれてようやくそれが解消されたのか、そこからは怒涛の勢いで巻き返していったこともあって、「逆転劇」というエンターテイメント性の高いデュエルを見せていた。シャルクのようなタイプが「戦略家のデュエリスト」だとするのなら、彼は間違いなく「エンターテイナーのデュエリスト」だろう。引きの強さや、相手の動きなど、自身の実力ではどうにもならない「運」のようなものも鑑みた上で逆転に成功するところを見るに、彼は地力もそれなりにある方だろう。

(……なんか納得いかない。あんな戦略性も駆け引きもないデュエルなのに、こんなにも人々から認められるなんて……。それに何より！)

緻密な戦略、ブラフの駆け引き、思考の読み取り。運や偶然ができる限り絡まないよう理論的に構築された安定性の高いデュエルを行う彼女にとって、その仮面の男は対極の存在であり、直感的に「敵」となるべきものであった。

そして、そんな相手を見つけてしまった以上、デュエリストならば掛ける言葉は一つしかない。

「あなたさっきエントリーネーム登録してた時に思いつき爆笑してた奴じゃん！ さっきのアレめちやくちや恥ずかしかったんだからね！」

「む？ なんだ小娘、貴様も今回の大会の参加者か。よかろう、我が圧倒的な暴力で捻じ伏せてくれる！ 我が名は蛮族！ 名を名乗れえい！」

「あたしはシャルク！ ここで会ったが一時間目！ デュエルだ！」
「では手加減なしでいくぞ！ 全力でかかってこい！」

蛮族と名乗るその男は、力強くデュエルディスクを構えると、その背後に巨大なドラゴンの幻影が浮かび上がったように見えた。

「オーブンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

シャルクと蛮族。これから幾度となく別れと出会いを繰り返し、互いを磨き上げていく二人の出会いには、こうして始まった。

本編

敗北から始まる物語

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》の効果発動！ 自身以外の全てのカードを破壊する！」

「ぐっ……！ でも《F Aーブラック・レイ・ランサー》が破壊される時、オーバーレイユニットを身代わりにして破壊を免れる！ さらに永続魔法《ホワイト・サルベージ白の救済》が破壊されたことで、デッキから《超古深海王シーラカンス》を準備表示で特殊召喚！」

「だがそれ以外の伏せカードと3体のエクシーズモンスターは破壊させてもらおう！」

「でもF Aの攻撃力は2100！ タイラントの攻撃を受けてもまだライフは500残る！」

蛮族とのデュエルも終盤、全体破壊の効果を受けながらも、場にエクシーズモンスターと最上級モンスターを残したことで、シャルクのライフは首の皮一枚つなごった。

Liveチャットでも、『この状況でモンスターを残せたのは上手い』『しぶとい』『全体破壊を耐えた！ まだいける！』と、この逆境で踏みとどまったシャルクのプレイを讃える声が見られる。

しかし、シャルクの表情は浮かない。攻撃を防ぐために伏せていた《神風のバリアーエア・フォース》を破壊され、場に残ったのは一切の耐性がないモンスターが2体だけ。そのどちらもタイラントの攻撃力を下回っている。

(墓地にある《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》の効果でリンク5を出せるけど、それでもレモンタイラントを突破できない。ここは敢えて攻撃を受けて、返しのターンにシーラカンスで大量展開して逆転する！ 逆にシーラカンスを狙われても、F Aをリンクアップしてタイラントを破壊する！)

このターンさえ凌ぎ切れば、次のターンで状況を変えられる。そう判断したシャルクの表情は、険しいながらも自信に満ちており、彼女

らしい狡猾で獰猛なデュエルスタイルを表しているかのようであった。

しかし、その表情を見た蛮族は、どこか意外そうに「ほう」と声を漏らした。

「貴様、この状況でそんな目が出るということは、次のターンでこの場をひっくり返せるという自信があるらしいな」

「とーぜんっ！ デュエルはいつだって逆転の可能性を秘めてる！

1枚のドロローが奇跡を起こすことだってあるんだ！ この場さえ凌げば、まだまだ勝負はわからない！」

「ふん、言うではないか。貴様の言う通り、デュエルは1ターン後までわからない！ 1枚のカードに秘められた可能性が全てを一転させることもある！ しかし——だからこそこのデュエル、ここで決めさせてもらうぞ！」

「——ッ！」

蛮族はその仮面の奥にどんな表情を隠しながらか、シャルクのことを肯定しながらも、その上で彼女に「逆転を許さない」と言いのける。

そんな自信に満ちた彼の言葉を聞いて、『出た！ 蛮族さんの理不尽デュエルだ！』『逆転絶対許さないマンかな？』『自信と殺意が比例しすぎでは？』と沸き立つLiveチャット。

同時に、周りでこのデュエルを見ていた野次馬たちのテンションも最高潮へと達している。

現時点のシャルクのライフを鑑みるに、タイラントからの攻撃を受けてもまだ残る数値。シャルクは次のターンに賭けるが——。

「いくぞ！ 《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》で《FAーブラック・レイ・ランサー》を攻撃！」

「でもその攻撃じゃあたしのライフを削り切れない！ ここを凌げば次のターンでひっくり返してやる！」

「それはどうか？ この瞬間、手札から速攻魔法《イージー・チューニング》！ 墓地の《BF—疾風のゲイル》を除外し、タイラントの攻撃力を1300ポイントアップする！」

「攻撃力……4800!？」

タイラントの攻撃力が跳ねあがったことで、通過するダメージ量が1400から2700となり、彼女にその攻撃を防ぐ手段はない。

墓地の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》でランク5のエクシーズに入れ替えようとしても、タイラントの効果でバトル中の魔法・罫は無効にされてしまう。

シャルクは悔し気に唇を噛みしめながらも、俯くことなくタイラントを……そして蛮族を見つめた。

「……次は負けないからね」

「俯くことなく我が姿を焼き付けるか。その意気やよし！ やれ、タイラント！ 獄炎のクリムゾンヘルタイド！」

「くっ……うわあああああっ！」

暴君の一撃を受け、黒き槍術士は為す術もなく焼き払われ、シャルクのライフは0を刻んだ。

『最後に引いた1枚が《イージーチューニング》とかどんな引きだよ』『惜しい！』『返して逆転できるって言葉がハツタリじゃないならホントに惜しいな』『対戦相手の引きがヤバすぎた』というコメントの通り、今のデュエルは本当に紙一重のところまで勝敗がついた。

フィールドだけを見れば、強力なシンクロモンスターを持つ蛮族が優勢に見えたが、シャルクの言葉通り、彼女には次のターンで場をひっくり返す準備が整っていた。そういう意味では、本当に追い込まれていたのはむしろ蛮族の方であった。

しかし、そんな状況で蛮族がドロートしたたった1枚のカード、それが《イージー・チューニング》であり、このターンで勝負を決められる唯一の一手だった。

周囲からは「さすが蛮族！」「信頼と実績の暴力デッキつえー！」「やっぱ破壊と高火力が正義なんだよなあ！」と蛮族を称賛する声が沸き立つ。

しかし当の本人は何も言わず、シャルクをじっと見つめながらその場に佇んでいた。シャルクも、周囲の声に一切の興味を示さないまま、ぐっと立ち上がり、吼えた。

「……ブラヴオー！ マジで理不尽で納得いかないけど、でもムカつ

くくらい楽しいデュエルだった！ あなたの顔と名前、覚えたからね！ 次に会った時はあたしがその懐の勝利をもぎ取ってやる！ おぼえとけ！」

「ふうん、威勢のいい奴だ。我がバイオレンスデッキをその魂に刻んで震えるがいい小娘エー！」

「小娘じゃない！ シャルクだ！」

「我が魂に刻むにはまだまだ安く軽い名よ！ その名を俺に刻むのなら俺に勝利するのだなア！」

ふん、と蛮族の脇を通って駆け出すと、彼の姿が見えなくなった先で、彼女はその歩みを緩めた。デュエルディスクのLiveチャットでは、先程のデュエルに対する議論が行われている。

『ラスト直前で《神の氷結》を使わされたのが痛かった』『でもオーガドラグーンは止めないとヤバかったしな……』『ラストでリクルートしたシーラカンスにはどんな意味があったの？』『返して展開する気だったんだろ。公開情報だけなら耐えきれた状況だったし』と、凡そその議論の内容に間違いはない。

そして、その内容のどこにも彼女のプレイングミスを指摘するものはなかった。それはつまり、彼女は自分にできる最善にして最高の手段を使い切って蛮族に挑み、そしてその上で敗北したのだ。

『破壊耐性があるモンスターをもっと採用したら？』『水属性でその類のカードは多くないんだよね』『これだけ話しててミスが見つからないのすごいな』でしよー？ あたし出来る子なんだよねー。『水属性のポテンシャルの低さが露呈したな』……それは違うよ！

気付けば、知らず知らずの内に目尻から一滴の光が溢れていた。

「今回のデュエルの敗因はあたしの実力があの人に追いついてなかったからだよ。あたしのデッキは……サメたちは最高の仕事をしてくれた！ 最後の最後まで必死に喰らいついてた！ だから……みんな水属性を、サメのいいところをもっともっと知って行ってね！」

ぼろぼろと零れる光を乱暴に拭うと、シャルクは今にも崩れそうな、だけど必死の笑顔でサムズアップを送った。

そんな彼女の笑顔に、Liveチャットも『なかないで』『水属性ほ

んとに好きなんだな』『水属性というよりサメでは?』『むしろいつそ満足するまで泣いてくれ』と、Liveデュエリストとして、あるいは水属性を愛する者としての彼女の姿勢を評価するコメントで埋められていた。

だが、実のところシャルクの内心はそこまで殊勝なものではなかった。

(あんのクソ蛮族……! あたしの可愛いサメをよりにもよって焼き払った拳句、戦略性もクソもない破壊力と高打点だけで勝負決めやがった……! しかもあいつに負けたせいで水属性のポテンシャルが低いとまで言われた! 次会ったら絶対泣かす! ぼっこぼこにしてやる!)

もはや完全な逆恨みであるが、シャルクの心は燃えていた。

それは「ライバル視」というにはあまりにも一方的で意地汚く、「嫌悪」と呼ぶにはあまりにも相手を真つ当に認めていて、一言では表しきれない怒りとリスpekトの感情が緋い交ぜになっていた。

「おつ、Liveデュエリストだな! この先のトンネルを通りたいなら俺を倒していくんだな!」

「今のあたしは機嫌が悪いから、一気に噛み砕いてやる! いくよ!」
「オーブンチャンネル! Liveデュエル、オンエア!」

次のジムに繋がるトンネルの直前で、バックパッカーのユーヅが勝負をしかけてきた。

ほとんど八つ当たりにも近い形でデュエルは進行していき、『さっきのデュエルの憂さ晴らしみたいに暴れてて草』『1ターン目からエクシーズ4体展開はひどい』『相手の動きを観察する前にボコつてて草生える』とLiveチャットも盛り上がっている。

「これで終わり! 《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》でダイレクタアタック!」

「ぎゃあああああつ!」

今はまだ道半ば。越えがたい壁が幾つも立ちはだかっている。しかし彼女がその歩みを止めることは決してない。高すぎる壁が超えられないのなら殴って壊せばいいのだ。

サメの咬牙は狡猾にして獰猛。自らの前に立つあらゆる逆境を牙ひとつで砕くサメのように、彼女のLiveデュエリストとしての魂もまた狡猾で獰猛なのだ。

戦略と知略

「さっきのデュエル、みんなどうだったー？ えっ、『相手に何もさせる気がなくて草』『妨害多すぎて盛り上がらなかった』？ まあ先行とつたらまず妨害を用意するのが基本だからね。『シャルちゃんのエースはやっぱリシャークドレイクなの？』そうだよー。N.O.って高額レアだけど、一目惚れしたのはあの子だけだね」

N.O.とは、デュエルモンスターズに多く存在するカテゴリのひとつであり、属性・種族・混成カテゴリから運用方法までバラバラであるものの、どれも強力な効果を持つがゆえに高額なレアカードであることが共通している。

この世界において、カードは大きく2つのパターンが存在し、野生のモンスターの大多数が占める「オリジナル」と、カードショップで売られている「レプリカ」があり、N.O.のオリジナルは野生のデュエルモンスターズが多数存在する「ワイルドエリア」でもほとんど見つからず、ほとんどレプリカしか見つからない。

シャルクの持つ《N.O. 32海咬龍シャーク・ドレイク》もまたそんなレプリカの一枚であり、レプリカでありながら1枚で一万DPが消える高額レアであった。

「いつかオリジナルのシャークドレイクに会ってみたいよね！ 『でもN.O.って曰くつきのカード多くない？』『オリジナルのは不穏な噂のカード多いって聞くよな』『シャルちゃんそのN.O.ほんとに安全？』大丈夫だってば！ これレプリカだから！ ただのカード！」

曰くつきのカードというものは、デュエルモンスターズが生活に密接なこの世界において、そこまで珍しいものではない。

あるカードを持つと不幸になるだとか、逆にあるカードを手に入れたから健康になったとか、一枚一枚のカードが持つ不思議な力というものは、ジnkスのひとつのパターンとして信じる者とそうでない者がいる。

しかし「ひとつのカテゴリ」という、共通した特徴を持つ複数のカードのほとんどが曰くつきとなるものは、さすがにそう多くはない。だ

が彼女の持つ「No.」のオリジナルは、多くの場合「そういうもの」として捉えられており、事実そうした噂が絶えないという。

「これからもよろしくね、シャークドレイク！」

信頼を込めてカードに軽くキスをすると、『シャークドレイクそこ代われ』『幼女の唇を奪うとかNo. はやっぱ悪だわ』『シャークドレイクくんさあ……』などとLiveチャットでのシャークドレイク株が急降下していく。

とはいえ、シャルクにとってシャークドレイクは特別な相棒のような存在でもあり、事実ここまでのデュエルでは皆勤賞。あの蛮族にもギリギリまで健闘してみせた頼れるナイスガイである。

そうした理由もあって、Liveチャットでのシャークドレイク炎上は数分と待たず鎮火され、話の内容は徐々にシャルクのプレイングへと逸れていく。

『さっきのデュエル、一応勝ったけどシャルちゃんっぽい動きではなかったよね』そうだねー、私はどっちかっていうと少しずつ安定したアドバンテージを稼ぐタイプだから、序盤からガンガン動いて妨害しまくって一方的にボコるのは得意なスタイルではないね。さっきのはたまたまそれが出来る手札だったただだよ」

たとえば1ターン目の動きについてであったり、

『やっぱバハシャ餅は害悪、はつきりわかんだね』まあ気持ちはわかるよ。お手軽で万能妨害するもんね。ただ海竜族と水族だから、魚族が主軸のあたしのデッキだと後のことを考えて優先順位を落とすこともあるよ。墓地行ったら《ホワイト・サルベージ白の救済》で戻せないからね」

あるいは広く知られた強力コンボに対する捉え方だったり、『シャルちゃんって横に黒いの並べるの得意だよね』まああたしがっというより水属性がね。なんなら《カッター・シャーク》と《エクシズ・リモータ》と、あとはまあ適当な手札から特殊召喚できるモンスターが1体いるだけでエクシズモンスター4体並ぶよ。最後のななくても3体は並ぶしね」

またはエクシズモンスターの扱い方についてであったり、彼女の得意とするプレイングには、多くの意見が寄せられた。

それらのほとんどは彼女のプレイングに好意的なものだったが、中には『餅が強いだけでは？』『大量展開した後のリカバリー考えてくね』『ブラホ安定』という否定的なものもあった。

しかし彼女はそれらのコメントにも答えを用意しており、『餅が強いのはホントにそう。そこはマジであたしの実力関係ない。リカバリーは考えてたよ。サルベージ用の魔法もあったし、なんなら餅がある程度カバーするし、何よりバックにリボーン張ってたしね。ブラホは打つてもいいけど餅で奪うよ？』

と、全てのコメントに対して真摯に対応していた。逆に言えば、そうした結果論に対しても対応できるだけのプレイングを、彼女は常に心掛けていることに、Liveチャットは戦慄していた。

中には『なんで結果論に反論できるんですかね』『あの妨害する気満々のフィールドでなお返されること想定してたのか……』『相変わらず用意周到で草』『対戦相手の子シャルちゃんと次戦ったらアナフィラキシーショックで死にそう』などと冗談も交えつつ割と本気で引いている者もいるが、シャルクは好意的な意見として受け入れている。

薄暗いトンネルの中、デュエルディスクの画面が普段よりも見やすいせいで、いつもよりコメント返しに勢いをつけていると、進行方向で立ち止まりながらこちらを睨んでくる少年が一人。

「おや？ あなたは先程D^ドーL^ドiveのタイムリーランキング上位の動画に映っていた……シャルクさん、でしたか？」

大きな丸眼鏡と、白いヘッドホンを被ったその桃色の髪の少年は、シャルクの紫色の瞳をじっと見つめると、小さなポシエツトの中からデュエルディスクを取り出し、それを装着しながら彼女に声をかけた。

「僕はインテリ。この大会のリーグマスター推薦のLiveデュエリストです。さっきのLiveデュエル、戦略も駆け引きも素晴らしいものでした。……でも、頭脳戦の最強はこの僕です！ 無名のLiveデュエリストなんかに負けるわけにはいかない！」

Liveデュエリストのインテリが勝負をしかけてきた。

「オーブンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

先行はインテリ。彼の言いがかりはよくわからないながらも、おそらくは「知能派デュエリストの座をかけて戦え」みたいなことを言いたいのだろうと思ひ、パワーデッキ使いでないことは確かだろうと、シャルクはその動きを注意深く観察し始めた。

「僕のターンからです！ 手札からレベル6以上の魔法使い族モンスターを墓地に送り、手札からこのカードを特殊召喚するか、墓地に送ります。僕は手札の《ブラック・マジシャン》をコストに、《マジシャンズ・ソウルズ》を特殊召喚します」

「ブラマジ使い……！」

「そう。これがリーグマスターから推薦状とともに受け取った最強のデッキ、『ブラック・マジシャン』です。《マジシャンズ・ソウルズ》の特殊召喚後、墓地から《ブラック・マジシャン》を特殊召喚します」
ブラックマジシャン。長きに亘るデュエルシティの歴史において、初代チャンピオンが使用したエースモンスターということもあり、その名を知らないデュエリストはいない。

多彩なサポートカードを使いこなし、カテゴリではなく特定の一枚をサポートする所謂「専用カード」の数においては他の追隨を許さず、まさしく「技」の象徴ともいえる。

だがそれだけにブラックマジシャンだけでなく、そのサポートカードに至るまで大半が高額カードで埋め尽くされており、ほとんどのデュエリストにとって「憧れ」の対象になっているのだが――。

「さらに《ブラック・マジシャン》が存在する時、手札から《師弟の絆》を発動できます。デッキから《ブラック・マジシャン・ガール》を特殊召喚し、さらにデッキから《黒・爆・裂・破・魔・導》をセットします」

「モンスターが一気に3体……。しかも今伏せたあのカードは……」
「その通り。今セットした《黒・爆・裂・破・魔・導》はブラマジ師弟が並んでいる時、相手の場のカードを全て破壊する速攻魔法です」
「見えてるとはいえ、ひっでー地雷じゃん……」

エクシーズモンスターを大量に並べることを得意とするシャルク

にとつて、複数のカードを同時に破壊するカードは最も苦手とする部類だ。

モンスターだけならまだリカバリーがとれるが、魔法・罫まで破壊されるとなると、初動を間違えばそのまま完封される可能性も秘めている。

「さらに魔法カード《ルドラの魔導書》発動。フィールドの《マジシャンズ・ソウルズ》を墓地に送って2枚ドロウします。バックに1枚伏せてターンエンドです」

「ぐえー……動きづらいンゴ……」

唯一標的にしやすかった《マジシャンズ・ソウルズ》を場から退かされてしまい、これでブラマジ師弟をまともに突破せざるをえなくなってしまう。

「じゃああたしのターン、ドロウ！　まずは永続魔法《ホワイト・サルベージ白の救済》を発動。さらに手札から《ライトハンド・シャーク》をコストにして《ホワイト・ステイングレイ》を特殊召喚。何もなければ手札から《エクシーズ・スライドルフィン》を通常召喚するよ。……どうする？」

「……水属性リンク4で最も警戒すべきなのは《バハムート・シャークバハムート・シャーク》からの《餅カエル餅カエル》ですが……《ホワイト・サルベージ白の救済》が回収できるのはあくまで魚族。ならまずは《バハムート・シャーク》までは待ちましようか」

「んじやお言葉に甘えて。レベル4の《ホワイト・ステイングレイホワイト・ステイングレイ》と《エクシーズ・スライドルフィンエクシーズ・スライドルフィン》でオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。ランク4、《バハムート・シャークバハムート・シャーク》！」

「では《ブラック・バーニング・マジック黒・爆・裂・破・魔・導》で」

「ですよねー」

だがこれで不安材料は伏せカード1枚のみ。むしろシャルクはこの瞬間を待っていた。

「破壊された《ホワイト・サルベージ白の救済》の効果発動。デッキから魚族1体を特殊召喚するよ。おいで、《超古深海王シーラカンス超古深海王シーラカンス》！」

「くっ、永続魔法を先んじて発動していたのはそういうことでしたか

……！」

「シーラカンスの効果発動。手札の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》をコストに、デッキから下級魚族を可能な限りリクルートする！」

「なっ……なんですかそのデタラメな大量展開能力は!?!」

深海の王者、シーラカンスの呼びかけに応じるように、シャルクのデッキから大量に湧き出る魚の群れ。

「おいで、《トライポッド・フィッシュ》《シャクトパス》《深海の白タウナギ》《キララー・ラブカ》！」

「一気に場を埋め尽くして……! それもレベル3のモンスターが3体……お得意のエクシーズ召喚ですか?」

「まああたしの得意な召喚法は確かにエクシーズなんだけどね……でも他の召喚法だって出来ないわけじゃない! いくよ! シーラカンスとラブカをリンクマーカーにセット! 召喚条件は水属性2体! リンク召喚! リンク2、《海晶乙女マリネセスコーラルアネモネ》!」

「あれだけ同じ条件を満たすモンスターがいるのに、わざわざ攻撃力2800をリンク素材に……?」

シャルクのEXゾーンに現れたのは、華やかなドレスを身に纏う乙女。

魚の多いシャルクのデッキでは珍しい人型モンスターだが、珊瑚モチーフだと思えば彼女にデッキに合わないこともない。しかし彼女にとって重要なのは見た目でもなければ効果でもなく、その召喚に必要となった素材の方であった。

「続いてレベル3の《トライポッド・フィッシュ》に、レベル4の《深海の白タウナギ》をチューニング! シンクロ召喚! レベル7、ホワイトオーラ・モノケロス《白鬨気一角》!」

「リンク召喚に続けて、シンクロ召喚……!?!」

そう、シャルクが最も得意とする召喚法がエクシーズ召喚であることは間違いないが、だからといって決して他の召喚法が使えないわけではない。

しかし召喚法が異なるとしても、モンスターを横に並べる動きは変

わらない。

「さらに《ホワイトオーラ・モノケロス白鬪気一角》の効果発動！ 墓地から魚族モンスター1体を蘇生するよ！ 帰っておいで、シーラカンス！」

「最上級モンスターが一気に2体……！」

「続いてレベル7の《ホワイトオーラ・モノケロス白鬪気一角》と《超古深海王シーラカンス》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク7、《水精鱗ガイオアビス》！」

現れたのは荘厳なる海神の化身。その絶大な覇気の前で、並みのモンスターはその力を発揮しきれない。

「ガイオアビスが存在する時、レベル5以上のモンスターは攻撃できず、ガイオアビス以下の攻撃力を持つモンスターが発動した効果はオーバーレイユニットを1つ使うことで無効にできる！」

「途端に制圧モンスターを出してくるじゃないですか……！」

「続いてコールドアネモネの効果発動！ 自身のリンクマーカー先に攻撃力1500以下の水属性を蘇生する！ 戻っておいで、《トライポッド・フィッシュポッド・フィッシュ》！ 墓地から復活した《トライポッド・フィッシュポッド・フィッシュ》はレベルが1つ上がるよ！」

「これで《シャクトパスシャクトパス》と《トライポッド・フィッシュポッド・フィッシュ》のレベルが並んだ……！」

「レベル4の《シャクトパスシャクトパス》と《トライポッド・フィッシュポッド・フィッシュ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《深淵に潜む者深淵に潜む者》！」

リンクからシンクロ。そしてシンクロからエクシーズへと繋いでいく動きには、一切の戸惑いや躊躇がなく、そして一度その動きを阻害されていることを鑑みれば、彼女のデュエルの完成度の高さが垣間見える。

だがそれでも、インテリはその表情を変えない。あのセットカードにこの動きを全て無に帰すだけのポテンシャルがあるのか、それともハンドアドバンテージ1枚分の余裕か。

いずれにしても、彼の中ではまだ逆転のプランが存在しているのだろう。

「エクシーズモンスターを特殊召喚したことで、墓地の《エクシーズ・スライドルフィン》の効果発動！ 墓地のこのカードを《深淵に潜む者》のオーバーレイユニットに変換するよ！」

「ガイオアビスで攻撃とフィールドの効果を封じ、深淵で墓地の効果を封じる……。バハシャ餅をなくしてなおこの制圧力……！」

「《深淵に潜む者》が存在する限り、場の水属性の攻撃力は500アツプするよ！」

単純な全体強化としての意味もあるが、それ以上に大きいのはガイオアビスの攻撃力を上げることで、その効果範囲を広げる意味がある。このフィールドなら、少なくともモンスター効果に対する対応力はそれなりに高い。

となると、怖いのはやはりあの伏せカードだろう。現状、シャルクの手札は1枚だけ。展開に使用したカード以上に、《黒・爆・裂・破・魔・導》をやり過ぎすために消費した手札が多すぎた。

幸いなことに、ブラマジ師弟の攻撃力はシャルクのフィールドのモンスターだけで突破可能だ。そもそもブラマジ師弟の攻撃力が低いのもあって、戦闘面での不安はない。

だが逆に言えば、インテリはその低攻撃力を補う手段を用意しているということでもある。これがもし《聖なるバリアーミラーフォース―》のような全体破壊カードであったなら、さすがに目も当てられない。

「やっぱり怖いのはその伏せだよね。つてことで魔法カード《ギャラクシー・サイクロン》発動するけど、何かある？」

一切の容赦がない一撃に、Liveチャットが『無慈悲で草』『無抵抗で死ぬ(意識)』『一瞬で仕留める気満々やんけ』などというコメントで満たされていく。

「さすがにそれは厳しいですね。ですが何もできないわけではありません。対象になったセットカードを発動します。《マジシャンズ・ナビゲート》！」

「げえ、無駄撃ちじゃん……！」

「手札から《ブラック・マジシャン》を特殊召喚し、デッキから《幻想の見習い魔導師》を特殊召喚します。そして《幻想の見習い魔導師》の効果でデッキから3枚目の《ブラック・マジシャン》をサーチしますよ」

「ブラマジ2体にガールと見習い……。ランク7と6が並ぶやつじゃん……。関係ないけど、ブラマジ3体とかそのデッキ総額いくらすの?」

「ノーコメントで」

脅威の牙

「とりあえず幻想だけでもどうかしないかね。ガイオアビスの効果発動。オーバレイユニットを1つ使い、フィールド上に存在する攻撃力3300以下のモンスターの効果を無効にする！」

「無駄です！ 《幻想の見習い魔導師》はフィールドで発動して墓地で解決する効果です！ ガイオアビスが無効にするのは「フィールド上の効果」であって「フィールドでの発動」ではありません！ よって《幻想の見習い魔導師》は止まりません！」

「《深淵に潜む者》が止められるのは「墓地で発動する効果」であって「墓地で解決する効果」には対応していない……！ ガイオアビスと深淵が止められないスレスレのラインを掻い潜って……！」

このまま攻撃しても、《幻想の見習い魔導師》は自身を墓地に送ることとで閻属性・魔法使い族の攻撃力を2000ポイントアップさせてしまう。

だからこそ、シャルクが取れる手はたったひとつだけ。

「バトル！ 深淵で幻想見習いに攻撃！」

「まあ、後のことを考えればそうしますよね……。《幻想の見習い魔導師》の効果はフリーチェーンではありません。自身が攻撃対象になった場合は効果も使えない。ここは大人しく倒されますよ……！」

インテリ：LP7800

この状況で唯一、自分のモンスターを守りながら幻想見習いを退ける方法は、他でもない幻想見習い自体を攻撃することのみ。

攻撃された幻想見習いの攻撃力は2000。シャルクのフィールドのどのモンスターよりも低いその攻撃力なら、単純な戦闘で突破可能だ。

「さらにコーラルアネモネでガールに攻撃！」

「さすがに容赦がありませんね……！」

インテリ：LP7300

「ガイオアビスでブラマジに攻撃！」

「ここまでは受けてあげます！ 次のターンで反撃しますよ！」

インテリ：LP7000

「これだけの猛攻を受けてなおブラマジをまだ1体残すなんて……！
あたしはこれでターンエンドだよー！」

Liveチャットでも『あれだけのモンスターの攻撃を捌ききった！』『インテリすげえ！』『攻撃力2000以上のモンスター3体での攻撃だぞ?!』『やっぱブラマジすげえわ』と、インテリを称賛するコメントがずらりと並ぶ。

実際、シャルクも相手の場を一掃したとはいえ、並の相手ならライフの半分程度はごっそり削れる猛攻だっただけに、削り取ったのがたった1000ポイントだけということに、驚きを隠せないでいた。

「凌ぎ切りましたよ……！ それでは僕のターンです。ドローー！」

「今のうちにコメント読も。『ここからインテリがどう動くか気になるな』『頑張れインテリ！』『シャルちゃんをぶっ倒せ！』えっ、あたしの応援は?!」

「あなた普段ファンとどんな交流してるんですか……。僕は手札から魔法カード《ティマイオスの眼》を発動！ フィールドの《ブラック・マジシャン》を墓地に送ることで、《ブラック・マジシャン》を融合素材とする融合モンスター1体を融合召喚します！」

「何それっつよ」

通常、融合召喚には融合魔法とその素材となる2枚以上のカードが必要となり、1体の融合モンスターを出すために最低でも3枚以上のデイスアドバンテージを負わなければならない。

しかし、インテリの発動した《ティマイオスの眼》は、ティマイオス自身と《ブラック・マジシャン》の2枚だけで条件の厳しい融合モンスターを呼び出すことができ、その召喚コストを最低限に抑えている。

「《ブラック・マジシャン》1体で融合！ 融合召喚！ レベル8、《超魔導師—ブラック・マジシャンズ》！」

「何そいつ知らない」

「ブラック・マジシャンズが存在し、魔法・罫カードの効果が発動した時に僕は1枚ドローできます。そしてそのカードが魔法・罫だったな

ら、それをセットしてそのターンに発動できます」

つまりは、魔法・罨を発動することでデッキトップの魔法・罨を直接発動できる効果。そしてモンスターであったりタイミングの合わないカードだとしても、単純なドロワー効果としてハンドアドバンテージを取り戻せる。

現在、インテリの手札は1枚。あれがもしも魔法カードだとすれば、ブラック・マジシャンズの効果が発動するが、だとしてもブラック・マジシャンズの効果そのものはフィールドアドバンテージを取れない。

攻撃力2800という数値はそれなりに高いが、ガイオアビスが存在する以上、レベル5以上は攻撃できず、攻撃力3300以下はフィールドでの効果を封じられる。

「では——攻めさせてもらいます！ 魔法カード《冥王結界波》を発動！ このターン、相手にダメージを与えられない代わりに相手フィールドの全てのモンスター効果を封じます！」

「《深淵に潜む者》の効果が消えて攻撃力が下がった挙句、ガイオアビスの妨害効果も使えなくなった……！」

「さらに魔法カードの効果が発動したことでデッキから1枚ドロワー……！ 僕は引いたカードをセットし、そのまま発動します！ 永続罨

《永遠の魂》！」

「ま……マズいッ！ あれはやバすぎる！」

ブラックマジシャンの欠点のひとつは、その知名度の高さゆえに大半の使用カードの効果が把握されていることだ。

そして今しがた発動した《永遠の魂》もまた、その効果の全容が広く知られているカードの一枚。そして効果を知っている以上、その脅威性も把握しているシャルクは、その一枚を引き当てるインテリの運命力に戦慄する。

「まずは墓地から《ブラック・マジシャン》を蘇生します。そして《永遠の魂》が存在する限り、《ブラック・マジシャン》は相手の効果を受け付けません。では……バトルです！」

「来る……ッ！」

「《超魔導師―ブラック・マジシャンズ》で《水精鱗―ガイオアビス》を攻撃！」

「相討ち狙い……!?!」

お互いの攻撃力は2800の同値。激しい攻撃がぶつかり合い、両者はその身を滅ぼす、が――。

「《超魔導師―ブラック・マジシャンズ》が破壊された時、墓地から《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》を1体ずつ特殊召喚します！」

「まだそんな効果を残して……!」

「続いて2体の《ブラック・マジシャン》で《海晶乙女マリンセスコーラルアネモネ》と《深淵に潜む者》を攻撃！
ブラック・マジック
黒・魔・導！」

「くあ……っ！ 見事に全部ひっくり返してきた……!」

あの強力な制圧効果を持つフィールドを、たった2枚の手札から逆転してきたインテリの突破力の高さに、シャルクだけでなくLiveチャットからも『あのフィールドをひっくり返した!』『あれだけ固いフィールドだったのに……』『実質魔法2枚でこれだけ展開してきた……!』と称賛と驚嘆の声が漏れていた。

「本当なら《ブラック・マジシャン・ガール》で直接攻撃したいところですけど、《冥王結界波》の効果であなたへのダメージは0になってしまふ。残念ですがバトルはここまでです。メイン2もなし。ターンエンドしますよ」

これでシャルクのフィールドはがら空き。手札も0。インテリの手札も同じく0とはいえ、フィールドには2体の《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》が並んでいる。

しかし、幸いにもインテリのバックに伏せカードはない。《永遠の魂》がある限り《ブラック・マジシャン》にカード効果では手出しできないが、妨害札がないことが確定しているのはシャルクにとって僥倖であった。

「コメント欄すごいことになってるよこれ。『手札0、フィールド0、勝ったな風呂入ってくる』『いや勝ったなってどっち視点だよwww』『そらインテリよ』『この裏切り者おおお!』ちよつとインテリくん

「人気すぎない？」

「ふつ、優秀なプレイヤーが称賛されるのは当然のことですよ。さあ、あなたのターンです！」

「シャルクの場合は空っぽだが、少なくとも墓地はそれなりに潤っている。」

「まだまだ逆転の手段はいくらでもあると、シャルクは決意と共にその指をデッキトップにかける。」

「あたしのターン、ドロロー！……さつすがあたしのデッキ！ まずは墓地の《ライトハンド・シャーク》の効果発動！ あたしの場にモンスターがいない場合、墓地からこのカードを特殊召喚する！」

「まずは召喚権を行使せずレベル4を蘇生……。まあその程度は予想できてましたよ」

「続いて手札から《カッター・シャーク》を召喚して効果発動！ デッキからレベル4の魚族モンスターを1体リクルートする！ 出ておいで、《ランタン・シャーク》！」

「手札1枚から一気にレベル4が3体。彼女のデッキの中で、その重い召喚条件を要求するカードはたった1枚。彼女が最も信頼し、最も愛するあのモンスター。」

「Liveチャットも『レベル4が3体……くるぞインテリ！』『安心と信頼の展開力』『あの状況からエースに繋いでいくのか！』『さすがだぞ！ カードの相性をバッチリ理解しているんだな！』と盛り上がりを見せている。」

「いいや、残念ながら今回はそつちじゃないんだよね！ あたしはレベル4の《ライトハンド・シャーク》《カッター・シャーク》《ランタン・シャーク》でオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 《FABラック・レイ・ランサー》！」

「Liveチャットが『シャークドレイクじゃない！』『えっ、そいつ正規召喚するの？』『ランク3に乗せる以外の方法で出てくるとこ初めて見た』とざわつく中、インテリは油断することなくその視線をFAへと定めている。」

「《F Aーブラック・レイ・ランサー》のエクシース召喚成功時、墓地の《エクシース・スライドルフィン》の効果再び発動！ このカードをオーバーレイユニットにするよー！」

「オーバーレイユニットがじゃらじゃらと……」

「《F Aーブラック・レイ・ランサー》は自身の持つオーバーレイユニットの数×200ポイント攻撃力がアップする！ 今F Aが持つオーバーレイユニットは4つ！ よって攻撃力は2900！」

攻撃力2900。現時点で最も高い攻撃力だが、《永遠の魂》がある限り《ブラック・マジシャン》は何度でも復活を果たしてしまう。だとすれば、敢えてここでダメージ量も低くまた復活してくる《ブラック・マジシャン》を狙う理由はない。

リカバリーの手段に乏しく、攻撃力が低いため通過ダメージも稼ぐことのできる《ブラック・マジシャン・ガール》が狙いであることはインテリにも予想できた。

しかしそれなら返しのターンで2体の《ブラック・マジシャン》を素材にランク7のエクシースモンスターを呼び出し、《F Aーブラック・レイ・ランサー》を除去してしまえばいい。そう思っていた矢先、状況は一変する。

「バトル！ 《F Aーブラック・レイ・ランサー》で《ブラック・マジシャン・ガール》を攻撃！ ブラック・ブライト・スピアー！」

「《ブラック・マジシャン・ガール》がやられた……！ ですがこの程度のダメージなら……！」

インテリ：LP6100

「ダメージはね！ でも本題はこっち！ 《F Aーブラック・レイ・ランサー》が戦闘でモンスターを破壊した時、相手の魔法・罠カードを1枚破壊する！ 狙いはもちろん《永遠の魂》！」

「しまっ……！」

「たしか《永遠の魂》には、その強力すぎる効果の代償として、フィールドを離れたら自分のモンスターを全滅させちゃうデメリットがあったはずだよな？」

「『ブラック・マジシャン』特有の、使用カードの知名度の高さがこん

なにもわかりやすく仇になるなんて……！」

F Aの効果によつて射抜かれた《永遠の魂》が破壊され、それに伴い二人の《ブラック・マジシャン》の魂もまた墓地へと眠つていく。

さらに《F A―ブラック・レイ・ランサー》には、破壊される場合にオーバーレイユニット全てを身代わりにするこゝとで、その破壊を免れる効果もある。

「あたしはこれでターンエンド！ えっ、何？ 『エースじゃなくてブ
ラレかよ！』『あの状況でよく対応できたな』『対応力の鬼』『人の心が
なくて草』いやいやいや普通でしょ！ 相手の場に利用できるカード
があつたら使うに決まつてるじゃん！ えっ『人の心を抉る天才』？
そこまでクズくないでしょ！」

逆転に次ぐ逆転。互いの手札は0だが、今度はフィールドアドバン
テージがシャルクの方にある。ここで仮に逆転カードの代名詞《死者
蘇生》を引かれても、互いの墓地に攻撃力2900を上回るカードは
ない。

また、「ブラック・マジシャン」というデッキには基本的に特殊召喚
に関するカードが多く、相手の除去を狙えるのは《千本ナイフ》と《黒
の魔導陣》くらい。しかしそれらはフィールドに《ブラック・マジシャ
ン》の存在を前提とする。

そうなると《ブラック・マジシャン》を蘇生するカードと除去カー
ド、最低でも2枚のカードが必要だ。だからこそ、インテリがこの状
況を打破するためにはデッキから2枚ドロウあるいはサーチできる
カードが必須となる。

「僕のターンです、ドロウ！ ……魔法カード《貪欲な壺》を発動しま
す。墓地の《ブラック・マジシャン》2枚と《ブラック・マジシャン・
ガール》《マジシャンズ・ソウルズ》《幻想の見習い魔導師》をデッキ
に戻し、2枚ドロウします！」

「ここで貪欲……！ ほんとすごい引きだよねインテリくん！」

「ドロウ！ ……魔法カード《黒魔術のヴェール》発動！ ライフを1
000払い、墓地の《超魔導師―ブラック・マジシャンズ》を蘇生し
ます！」

インテリ：LP5100

ブラックマジシャンズの攻撃力は2800。FAの2900には僅かに届かない。しかしインテリにはまだ手札が1枚だけ残されている。

ここで魔法カードを発動して次のドローに賭けるか、それとも――

「バトル！ 《超魔導師―ブラック・マジシャンズ》で《FA―ブラック・レイ・ランサー》を攻撃！」

「自爆特攻!? 自ら破壊されて《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》をリクルートするのが狙い？ でも、だとしても逆転の一手には――」

「この瞬間、速攻魔法《マジック・エクスペンド黒魔導強化》を発動！ 墓地に《ブラック・マジシャン》が1体存在することで、《超魔導師―ブラック・マジシャンズ》の攻撃力を1000ポイントアップします！ そして魔法カードを発動したことでブラックマジシャンズの効果が発動し、1枚ドロー――！

速攻魔法の発動による手札増強と、その効果による攻撃力の上昇によるFAの突破。しかしFAには――。

「さあ行きなさい！ ブラックマジシャンズ！」

「ぐうっ……！ でも《FA―ブラック・レイ・ランサー》は、オーバーレイユニットを全て取り除くことで破壊を免れる！ アーマーパーシ―」

シャルク：LP7100

FAの破壊耐性効果により、フィールドを空にされることは防いだ。

だがさすがにカードを消耗しすぎた。エクストラデッキのカードを6枚も使用し、手札は使い切り、デッキはこの短いターン数で12枚も消耗した。主にデッキの消耗はシーラカンスのせいだが。

Liveチャットでも『ブラレは残ったけどさすがにシャルちゃんでも厳しいな』『次のドロー次第では負けもありえる』『むしろ魔法使ったらブラックマジシャンズの効果でドローされちゃうしな』と、

シャルクに対して悲観的な意見が多い。

しかし——それでもこの状況で最もデュエルを楽しんでいるのは他でもないシャルクであり、そして同時に最もこの状況に危機感を感じているのは、ここまで窮地に追い込むほど逆転されてきたインテリの方であった。

「……バトルは終了。僕はこれでターンエンドします。ターンの終了と同時に《黒魔導強化》マジック・エクスペンドの効果が切れ、《超魔導師—ブラック・マジシャンズ》の攻撃力は元に戻ります」

「ギリギリ！　ギリギリの勝負がサメたちの好きな戦い方！　あたしのターン、ドロー！」

シャルクにターンが回り、今度はさっきと逆にインテリの場に1体だけのモンスター。そして破壊された後のリカバリーがあるという点においても、先程のFAと状況が似ている。

「あたしも《貪欲な壺》を発動！　墓地の《バハムート・シャーク》ホワイトオーラ・モノケロス《白闘気 一角》《セイバー・シャーク》《海晶乙女コーラルアネモネ》マリンスェス《深淵に潜む者》をエクストラデッキに戻して2枚ドローするよ！」
「ですが魔法カードの効果を発動したので《超魔導師—ブラック・マジシャンズ》の効果が発動しますよ。1枚ドロー。……そしてこのカードをセットします」

「この状況でセットすることは罠かな。魔法カードや特殊召喚関連の罠が多くなりがちなブラマジデッキで、相手ターンに発動する罠といえは……攻撃反応よりも効果無効系のカードかな？　だったら構わないよ！　2枚ドロー！」

ブラックマジシャンズの効果でセットされたカードは、それが速攻魔法や罠カードであってもそのターンに発動できる。「ブラック・マジシャン」で採用される効果無効系の魔法は永続魔法やフィールド魔法が多いため、この状況でセットするなら罠しかない。

しかしその罠においてもシャルクの動きを妨害するのなら攻撃反応か召喚反応、あるいは効果発動に対する罠のいずれかが必要だ。しかし「ブラック・マジシャン」関連の罠は特殊召喚に関連するものが多く、除去や妨害は汎用カードに頼らざるをえない。

そして、召喚反応で広く使われる《激流葬》はリカバリーがあるとはいえブラックマジシャンズを犠牲にしまい、永続魔法・永続罫は発動してもシャルクの墓地にある《ギャラクシー・サイクロン》によって破壊されてしまう。

だからこそ、ここでセツトするのはフリーチエーンの無効札しかない。

「まずは《死者蘇生》を発動！ 墓地から《超古深海王シーラカンス》を蘇生するよ！」

「ここで《死者蘇生》ですか……！ いや、僕と違ってデッキの枚数をほとんど増やさずドロウした分、引き当てる確率は確かに高い……。ただの運だけではないということですか……！」

「手札の《エアールピード》をコストにシーラカンスの効果発動！ デッキから《ハリマンボウ》《レフトハンド・シャーク》《セイバー・シャーク》を特殊召喚！」

「レベルは3—3—4……。ランク3か、それともコーラルアネモネか……」

リクルートされたモンスターの並びから、即座に次の動きを予想するインテリだが……。

「まずは墓地の《エアールピード》の効果。このカードと墓地のガイオアビスを除外してさらに2枚ドロウ……。速攻魔法《サイクロン》を発動するよ。シーラカンスの効果にも召喚にも反応しないのだから……。それ、《巨神封じの矢》だよな？」

「なっ……!? よくわかりましたね……。そう、これは《巨神封じの矢》^{テイタノサイダー}です。でも念のため発動はさせてもらいますよ。《Fアーブラック・レイ・ランサー》を対象に発動し、攻撃力を0にして効果を無効にします！」

そう、この状況で最も警戒すべきカード。それは複数のエクシーズを並べるシャルクにとって最大の天敵となる《巨神封じの矢》^{テイタノサイダー}しかない。

「これで安心して動けるよ！ じゃあ……。レベル3の《ハリマンボウ》と《レフトハンド・シャーク》でオーバーレイ！ 2体のモンスター

でオーバーレイネットワークを構築！ エクシードズ召喚！ ランク3、《発条空母ゼンマイティ》！

「ゼンマイ……!? 本当なら《巨神封じの矢》テイタノサイダーの墓地効果で再セットしたいところですが、この効果は墓地に行ったターンには使えません……！」

「だよね！ ゼンマイティの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、デツキから《ゼンマイシャーク》を特殊召喚！」

「これでレベル4が2体……！ 《バハムート・シャーク》か《深淵に潜む者》か……。いや、この状況なら間違いなく……！」

まずい、とインテリの直感が危機を告げる。

「レベル4の《ゼンマイシャーク》と《セイバー・シャーク》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシードズ召喚！ ランク4、《深淵に潜む者》！」

「やっぱりそっちですか……！」

「そりゃあね！ 《深淵に潜む者》の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使って、このターン相手は墓地で発動する効果を使えない！ これで《超魔導師―ブラック・マジシャンズ》のリカバリー効果は封じたよ！ さあ……バトルだ！」

今、シャルクの場のモンスターはシーラカンスと《深淵に潜む者》と《ゼンマイティ》FAの4体。しかしFAは攻撃力を0にされ効果も無効化されているため、実質的に戦闘に参加できるのは2体のみ。

しかし——シャルクには既に勝利の方程式が見えていた。

「《超古深海王シーラカンス》で《超魔導師―ブラック・マジシャンズ》に攻撃！」

「相討ち……！ 本来なら《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》を呼びますが……！」

「そう、その効果は墓地発動だから《深淵に潜む者》によって封じられている！ 続いて《深淵に潜む者》でダイレクトアタック！」

「ぐうううっ……！」

インテリ：LP2900

「続いてゼンマイティでダイレクトアタック！」

「うわあああつ！」

インテリ：LP1400

「で……ですが残るのは攻撃力0の《FAーブラック・レイ・ランサー》のみ！ 次のターンで……！」

「悪いけど……次のターンなんてない！」

「なんですつて!？」

「墓地の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》の効果発動！ 自分の場の水属性エクシーズ1体を素材として、ランクの1つ高い水属性エクシーズにランクアップさせる！」

序盤でシーラカンスのコストとして捨てられていた罫カード《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》が、今この窮地でその役割を果たす展開に、Liveチャットも『ランクアップトラップ!』『ここでランクアップ!』『そっういえば落ちてたな』『完全に存在忘れてたわ』と沸き立つ。

「あたしはランク3の《発条空母ゼンマイティ》でオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！ 狡猾なる脅威の牙！ ランク4、《NO.32海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「……ここでシャークドレイク!？」

シャルクのエース、シャークドレイクの出現に、『出た！ シャルちゃんのエースモンスター!』『初欠勤かと思ってた』『お また せ』『意地でもシャークドレイクを出すという鉄の意思を感じる』と盛り上がるLiveチャット。

絶対的な存在感と威圧感の前に、インテリはこのデュエルで初めてその足を後退させた。

「まだバトルは続行中！ やっちやえシャークドレイク！ プレイヤーにダイレクトアタック！ デプス……バイトオオオッ！」

「くっ……うわああああああああつ!!」

インテリ：LP0

Liveデュエルを終え、インテリは悔しげに俯くと、握り締めた拳をゆつくりと開き、その顔を上げた。

「今日のところは僕よりあなたに風が吹いたみたいですね。でも……これであなたのデツキとスタイルは覚えました。次はこうはいきませんよ」

「ブラヴオー！ インテリくんこそ、一進一退の面白いデュエルをあげよう！ またやろうね！」

サムズアツプを掲げると、シャルクはインテリの横をすり抜けてトンネルを抜けていく。

その場に残されたインテリはしばらくその場に佇み、そんな彼を慰めるように、二人のマジシャンの幻影が彼の背後に並び立っていた。

暴君の炎

トンネルを抜けると、燃えるようなオレンジ色の空と黄金色に輝く小麦畑がシャルクの視界を彩った。

デュエルディスクのカメラ機能で写真を撮ると、Liveチャットも『最初のジムがあるウィンドミルタウンだな』『田舎っぽいけど綺麗などこだな』『地元じゃん』『撮影うまいな。同じ景色見たことあるけどこんな風に撮れなかったぞ』と、おおよそ好意的なコメントが集中する。

ここに来るまで、蛮族やインテリの他にも幾度かのデュエルを繰り返して、既に時間は夕方。さすがにジムへ挑むには日を改めようと、シャルクはウィンドミルタウンのカードショップへと向かった。

カードショップにはデュエリストが宿泊するための施設が併設されており、デュエルシティの期間中に限っては、参加者のLiveデュエリストにのみその宿泊施設を無料で提供している。

そうした施設はそれぞれの街のカードショップに限らず、野生のデュエルモンスターが多く生息するワイルドエリアでも、共同宿泊用のロッジが点在しており、同じく大会参加者にのみ無料提供されている。

「いやー、さっき戦ったインテリくん強かったね！ えっ？ 『でもライフほぼ半分しか削られてないんだよな……』『あんだけ妨害と逆転を繰り返してそれは厭味か？』『シャークドレイクへの執念が凄かった』？ いや、ライフはともかくとして妨害と逆転はデュエルの醍醐味じゃん。シャークドレイクはまあ相棒だからね！ そりゃあね！」
Liveチャットのコメントを返しながらカードショップの宿泊受付を済ませて部屋に入ると同時に、ある一つのコメントがシャルクの目に留まった。

『さっき戦った蛮族のデュエルがトレンドに入ってるぞ』

蛮族。ここまで高い勝率を収めてきているシャルクにとって、唯一自分に黒星をつけたLiveデュエリスト。

ただの敗北であるならいざ知れず、「カードゲームは戦略ゲーム」と

いう思想を持つシャルクにとって、戦略も駆け引きもなく破壊力と高火力を持って雑に盤面を突破するそのスタイルは、彼女にとって絶対に受け入れがたいものであった。

しかし、動画配信サイト「D-LIVE」のトレンドにも入っているとところを見ると、デュエルのスタイルはともかくとして、強力な大型モンスターを従え、豪快な破壊効果とド派手な攻撃力で逆転するデュエルは、エンターテイメントとしては間違いなく一流なのだろう。

「蛮族……あの合理性の欠片もないデツキで、どうしてあんなに強くなれるんだよ！ 特にあの《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》ってドラゴン！ あいつだけは次に戦ったら絶対に倒してやる！」

露骨に感情を露わにするシャルクに、Liveチャットは『燃えてんねえ！』『これはライバルですわ』『一方的にライバル視してるだけだろ』『向こうはたぶん気にも留めてないぞ』と呆れ混じりではありつつも応援のコメントを残している。

中には『まああれはシャルちゃんと相性悪そうだもんな』『駆け引きとかに一切応じず罫もブラフもぶっぱして殴ってくるからな』『シャルちゃんへのデツキ攻撃力2800で頭打ちだから……』と、両者の相性の悪さを見抜いている者も少なからず存在する。

シャルクはカードショップで数枚のカードを購入してデツキを改造すると、さっそくウィンドミルジムの門を叩いた。

ジムに入って早々に、その奥からこちらに向かって歩いてきたのは、昨日シャルクを完膚なきまでに叩きのめしたあの蛮族であった。「む、貴様はさっきの小娘ではないか。俺よりも先に進んでいたと思っていたが、どうやら先に試練を勝ち進んだのはこちららしいな！」

「んな……っ！ なんであんな寄り道デュエルを繰り返してたくせにあたしより早くジム攻略してんの!? なんかムカつくから、あたしとデュエルしろ蛮族ウ！」

「よかろう。デュエルの申し込みを受けて逃げるような俺ではない！」

我が魂たるタイラントの一撃をその身に刻み、今一度その威力を叩き込んでくれるわ！」

顔合わせから一分と待たずデュエルをふっかけると、二人はジムの外に出て、互いに向き合う。

「オーブンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

ライバル（仮）の蛮族が勝負をしかけてきた！

早朝から始まるデュエルに、Dド—LラIイVイEエのLiveチャット欄も『おつ、ジム直前デュエルか』『また蛮族じゃん』『大会初日から二回も同じ相手と戦うとかある？』『ただだけ蛮族のこと目の敵にしてんだ』と概ね好意的な意見が続いている。

先攻は蛮族。手札が0の時に力を発揮するインフェルニティを軸にしていることと、インフェルニティの罠の大半が妨害に秀でていることもあって、シャルクにとっては先行をとられたくなかったが、先攻・後攻の決定はデュエルディスクが自動で行うためどうしようもなかった。

「私のターンからだ。まずは手札から永続魔法《黒い旋風》を発動。このカードはBFが召喚された時、そのモンスターよりも攻撃力の低いBFをデッキからサーチする」

「相変わらずなんでそんなわけのわかんない混成デッキで先攻に都合のいいカードをピンポイントで引けるんだよ！」

「デッキを信じていけばデッキが応えてくれるからな。私は《BF—蒼炎のシユラ》を召喚し、《黒い旋風》の効果発動！ デッキから攻撃力800の《BF—砂塵のハルマツタン》をサーチし、効果発動！

場にBFがいる時、そのモンスターのレベルをこのカードに加えて特殊召喚する！」

「シユラのレベルは4で、ハルマツタンの元々のレベルが2だから……レベル6で特殊召喚か」

これで蛮族の場には2体のモンスターが並んだものの、そのレベルはバラバラ。チューナーもない。このままリンクに繋ぐことも考えられるが、彼の狙いが「手札を減らす」ことだとすれば、そもそも《黒い旋風》の効果は発動しない。

だからこそ、シャルクは蛮族がここで止まることはないと確信した。

「続いて自分の場にBFが存在することで手札の《BF―突風のオロシ》を特殊召喚。いくぞー！ レベル6のハルマッタンに、レベル1のオロシをチューニング！ シンクロ召喚！ レベル7、《A BF―涙雨のチドリ》！」

「さっそくシンクロしてきた……！」

「チドリは墓地のBFの数だけ攻撃力を300上昇させる！ よって現在のチドリの攻撃力は3200！ バックにカードを2枚セットし……さあ掛かってこい小娘エー！」

BF特有の展開力による速攻のシンクロ召喚と、その手札消費の激しさを逆に利用した手札0状態。

一見無駄しかないような構築のデッキでありながら、そのプレイングには一切の無駄もミスもなく、シャルクは歯噛みしつつも蛮族の実力を改めて認めざるを得なかった。

それはリスナーも同じなのか、『蛮族のデッキってインフェルニティ軸だよな？』『なんで手札の多い序盤だけBFが出張ってくるんだよ』『ちゃっかり手札使い切つて草』と、そのプレイングを称賛するコメントが多い。

「あたしのターン、ドロー！ 攻撃力3200……。あたしのデッキの強化なしでの最大打点は2800……戦闘では越えられないけど、それでもやりようはある！」

「ほう……？」

「まずは魔法カード《ホワイト・サルベージ白の救済》を発動！ そして手札から《プリンセス鯰っ子姫》を召喚して、効果発動！ 召喚時にこのカードを除外して、デッキから《カッター・シャーク》をリクルートする！」

シャルクのフィールドに現れたのは、刃のヒレを持つ小柄なサメ。彼女のデッキを回転させる上で欠かせないモンスターであり、シャルクからの信頼も篤い。

そして、その効果を以前の戦いで知っている蛮族もまた、今までのような軽口を噤んだ。

「《カッター・シャーク》の効果発動！ デッキからレベル4の《ランタン・シャーク》を特殊召喚する！ そしてこの効果で特殊召喚したモンスターは効果を発動できないけど、効果が無効になるわけじゃない！」

「永続効果や効果外テキストのような「発動しない効果」は有効、ということだろうか？」

「あなたに説明されるのは癪だけど……その通り！ あたしはカッターとランタンをレベル5として扱い、オーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク5、《ヴァリアント・シャーク・ランサー》！」

シャルクの声に応えて現れた黒騎士は、彼女を守るように立ち聳え、その手の槍をチドリへと向けた。

「まだまだいくよ！ 《ヴァリアント・シャーク・ランサー》のオーバーレイユニットを全て使って、手札の《エクシーズ・リモータ》を特殊召喚し、効果発動！ 墓地のカッターとランタンを蘇生するよ！」

「レベル4が3体……来るか！」

「レベル4のカッター、ランタン、リモータでオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 狡猾なる脅威の牙！ ランク4、《N.O. 32海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「こちらも早々に貴様のエースモンスターが見られるとは……よほど俺を買っていると見える！」

シャルクを挑発するように言う蛮族だが、その誘いに彼女が乗ることとはなかった。それは戦略家として常に冷静であることを努めようとする彼女のスタンスによるものでもあるが、それ以上に彼女が蛮族を買っているというのは、否定しようのない事実であったからだ。

そして——だからこそ彼女は誰よりも冷静に、自分にできる全力を彼にぶつける気でした。

「《ヴァリアント・シャーク・ランサー》の効果発動！ シャークドレイクのオーバーレイユニットを1つ使い、チドリを破壊する！」

「これも簡単にチドリを退かされるとは……！」

「バトルだ！ シャークドレイクでシユラを攻撃！ デプスバイト！」

「くっ……！」

蛮族：LP7000

「シャークドレイクの牙は逃がさない！ オーバーレイユニットを1つ使い、戦闘破壊したシユラの攻撃力を1000下げて相手の場に蘇生し、もう一度攻撃できる！ 追撃のデプスバイト！」

蛮族：LP5000

「悪くない攻撃だ……受けてやろう、ここまではな！」

「何をする気か知らないけど……続いて《ヴァリアント・シャーク・ランサー》でダイレクトアタック！」

「罨カード《リジエクト・リボン》発動！ ダイレクトアタックを無効にし、バトルを終了する！ そして墓地のシンクロモンスターとチューナーの効果が無効にして特殊召喚する！ 現れるチドリ！ オロシ！」

再び対峙するチドリの前に、シャークランサーの槍が止められる。

「くっ……！ なら、《ホワイト・サルベージ白の救済》の効果で《カッター・シャーク》を手札に戻し、あたしはバックにカードを1枚セットしてターンエンド！」

自慢の連続エクシーズを妨害することもなく、ライフこそ失いつつもフィールドには依然としてチドリが立っているこの状況、シャルクにとつてはまさしくまさか。

墓地から復活したことでチューナーでなくなったチドリは、レベル1のチューナーさえいればレベル8のシンクロモンスターに化けるかもしれない。しかし、この状況でそれも都合よくレベル1チューナーを引けるかといえば、普通なら否である。

しかし——対戦相手が蛮族となれば、その「まさか」は実現する。「私のターン、ドロー！ 私がドローしたのは《インフェルニティ・デーモン》！ 手札がない状態でこのカードをドローした時、こいつを特殊召喚してデッキからインフェルニティカードをサーチする！」
『デーモン参上！ おつ、BFいるじゃーん。えっ何？ お前ら効果

抜けてんじゃん、ザツコー！」

『おまつ……デーモンお前それ野郎が言っつていいセリフじゃないだろ！　そういうのはLive☆Twinみたいなメスガキにだけ許されるセリフだぞー！』

「うるさつ……」

「私は《インフェルニティ・リローダー》を手札に加え、そのまま召喚して効果発動！　自分の手札が0の時、デッキからカードを1枚ドロ―し、それがモンスターならそのレベルに応じたダメージを相手に与え、魔法・罠なら自分が500ダメージを受ける！」

デーモンとチドリのやりとりを華麗にスルーしつつ、現在のライフポイントは8000と5000。よほどの大型モンスターを引かなければその差は埋められず、失敗すればライフは半分に近づくこの状況で、蛮族の目に躊躇いはなかった。

「ドロ―！……私が引いたのは魔法カード《インフェルニティ・パラノイア》！　500ポイントのダメージを受けるが……安いものだ！」

蛮族：LP4500

「魔法カード《インフェルニティ・パラノイア》を発動！　自分の場のリローダーをリリースし、それとは名前の異なる同レベルのインフェルニティ1体を、効果を無効にして特殊召喚する！　現れる、《インフェルニティ・リベンジャー》！」

「デーモンでサーチすることもできたのに、わざわざリローダーでパラノイアを引く可能性に賭けて、こつちをデッキに残してた……!?!　そんな低確率な手段を、こんな窮地で……!」

「私がデッキを信じている限り、失敗など有り得ん！　俺はレベル7のチドリにレベル1のリベンジャーをチューニング！　シンクロ召喚！　レベル8、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》！」

「け……けど《ヴァリアント・シャーク・ランサー》の効果発動！　シャークドレイクのオーバードレイユニットを1つ使い、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を破壊する！」

「カウンター罠《インフェルニティ・バリア》！　自分の場にインフェ

ルニティが存在し、手札が0の時、相手の発動した魔法・罠・モンスターの効果を無効にして破壊する！」

シャークランサーの効果を弾くカウンター罠の発動に、シャルクの表情が驚愕に染まる。なぜなら、あのカウンター罠がセットされていたのは1ターンの最後。ほぼBFのみで動いていたあのターンだ。

もう片方の伏せに《リジエクト・リボン》があつたとはいえ、蛮族がこのターンでシャルクの間を突破しつつ《インフェルニティ・バリア》を発動するためには、リベンジャーを場に出す手段をドロースるのが最低条件であり、それを見越して伏せていたはずだ。

だが彼のデッキのモンスターの半分はBFであり、魔法・罠・BFのどれを引いてもシャークランサーをやり過ごせず、シャークドレイクを突破できない。だからこそ——彼の「絶対に逆転の一手を引ける」という自信が、そのカウンター罠には秘められていた。

「続いて《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の効果！ 自分の手札が0の時、自身の攻撃権を失う代わりに、相手の場のモンスター1体を破壊し、その攻撃力の半分のダメージを相手に与える！ インフェルニティ・デス・ブレス！」

「ごめん、シャークドレイク……！」

『サメの丸焼き一丁あがりイ！』

「このクソ脳みそドラゴン！」

シャルク：LP6600

「バトルを終了し、ターンエンドだ」

「あたしのターン……ドロース！」

このドロースでシャルクの手札は4枚。うち《カッター・シャーク》の情報は相手にバレているとはいえ、手札の枚数および情報アドバンテージはシャルクの方が圧倒的に上。

それでも、相手がインフェルニティデッキである以上、そのアドバンテージは実質的にないに等しい。何せあちらは手札0を前提に動くデッキであるため、むしろ手札がある方が慢心ともいえるからだ。

Liveチャット欄でも、この状況を吉と見るか凶と見るかは二分化されている。『手札の枚数に差がある今が攻め時だ！』『手札も伏せ

もない今がチャンス!』というものもあれば、『手札がないのがこわい』『まだ墓地にリベンジヤーが構えてる』というものもある。

「あたしはまず《ホワイト・サルベージ白の救済》の効果で墓地の《エクシーズ・リモーラ》を手札に戻して、もう一度《カッター・シャーク》を召喚。そして魚族の召喚に成功したことで手札から《シャーク・サッカー》を特殊召喚」

「実質的にレベル3が2体……いや、3体か」

「その通り。《カッター・シャーク》の効果で《シャーク・サッカー》と同じレベル3の魚族をリクルートするよ。来て、《キララー・ラブカ》!」
ここまでランク4を中心に動いてきたとはいえ、シャルクのデッキはランク3と5を状況に合わせて使い分けるエクシーズ特化デッキ。

しかし以前の戦いではその全てを出し切る前に敗北したことが、今となつては情報アドバンテージのひとつになっているのは皮肉だろうか。

「レベル3のカッターとサッカーとラブカでオーバーレイ! 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築! エクシーズ召喚! ランク3、《トライエッジ・リヴアエア》!」

「素材を3体使つて、攻撃力1800……?」

「高打点で殴るだけがデュエルじゃない! エクシーズモンスターが特殊召喚されたことで手札から《エクシーズ・スライドルフィン》を特殊召喚! さらに《トライエッジ・リヴアエア》からオーバーレイユニット2つを取り除いて《エクシーズ・リモーラ》を特殊召喚する! ただし墓地にレベル4が1体しかいないため、蘇生効果は使わない」

Liveチャットでは『素材からカッターを抜けばリモーラの効果使えたんじゃない?』『お? プレイングミスか?』『シャルちゃんらしくないミスだな』『でもしれつとラブカ落としたぞ』と、《エクシーズ・リモーラ》の効果に対する指摘がいくつか上がるが、シャルクは敢えてそれを無視した。

「レベル4の《エクシーズ・スライドルフィン》と《エクシーズ・リモーラ》でオーバーレイ! 2体のモンスターでオーバーレイネットワーク

クを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《深淵に潜む者》！」

「墓地効果を妨害するエクシーズモンスター……狙いは《インフェルニティ・リベンジャー》の封印か！」

「その通り！ オーバーレイユニットを1つ使い、《深淵に潜む者》の効果発動！ 相手の墓地で発動する効果をこのターンだけ封じる！」

水属性の攻撃力が500上がり、これでトライエッジの攻撃力は2300。それでも、デスドラゴンには遠く及ばない。しかし――、

「《トライエッジ・リヴアイア》の効果発動！ 相手モンスター1体の攻撃力を800ポイントダウンさせ、効果を無効にする！」

「くっ……！ 我が《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の牙を抜くとは……この屈辱は忘れんぞ！」

「これでデスドラゴンの攻撃力は2200！ リベンジャーの復活効果も封じてる！ バトルフェイズいくよ！ 《トライエッジ・リヴアイア》で《インフェルニティ・デス・ドラゴン》を攻撃！ トライデントウオーターズパウト！」

攻撃力の差はたった100。だがその100が今この状況では絶対的な数値となり、デスドラゴンを討ち滅ぼす。

自分を強化するのではなく、相手を弱体化させてコツコツとアドバンテージを稼ぐシャルクの定番のスタイルに、『シャルちゃんお得意のデバフコンボだ！』『これでさっきのミスは帳消しか？』『いや、これだけ計算高いシャルちゃんがあんな凡ミスするか？』『きっとまだ何かあるぞ』と驚嘆するLiveチャット。

蛮族：LP4400

「続いて《深淵に潜む者》で突風のオロシを攻撃！」

「よくここまでもったなオロシ……」

蛮族のちよつとした呟きに、Liveチャットが『たしかに』『オロシしれつと生き残ってたからな』『役割を終えたな』と同意する。

「バトルを終了して、ターンエンド。さあ、この盤面をひっくり返せるものならやってみなよ！」

「言われるまでもない！ 私のターン！」

「この瞬間、《深淵に潜む者》の効果発動！ このターン墓地で発動す

る効果を封じる！」

オーバーレイユニットを使い切ったことで攻撃力アップの効果は失ったが、これで行動の一端は妨害できる。

特に墓地のインフェルニティを回収する《インフェルニティ・パラノイア》を封じられたのは大きい。だが――、

「構わん！ 永続魔法《インフェルニティガン》発動！ このカードを墓地に送り、墓地から《インフェルニティ・デス・ドラゴン》と《インフェルニティ・デーモン》を特殊召喚し、デーモンの効果発動！」
『やつちまいましたよデスドラゴンの旦那！』

『おうとも。でもまずはお前の効果からな？』

『またしても逆転の一手……！』

「デツキから《インフェルニティ・ミラージュ》を手札に加え、そのまま召喚して効果発動！ 自分の手札が0の時、ミラージュをリリースすることで墓地の《インフェルニティ・リローダー》と《インフェルニティ・リベンジャー》をそれぞれ守備表示で蘇生する！」

「狙いはレベル5……いや6か！」

攻撃力の上昇効果が消えた今、シャルクのフィールドにはオーバーレイユニットのない低打点モンスターが2体。

ライフにはまだいくらか余裕があるとはいえ、さすがに危機的状況であることは否めない。

「まずは《インフェルニティ・リローダー》の効果だ！ 自分の手札が0の時、デツキからカードを1枚ドロし、それがモンスターなら相手に、魔法・罠なら自分にダメージを与える！ ドロー！ ……俺が引いたのは魔法カード《簡易融合》！」

蛮族：LP3900

「この状況で500ライフでそれは安すぎる……！」

「ライフを1000払って《簡易融合》発動！ エクストラデツキからレベル5以下の融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚する！」

蛮族：LP2900

「簡易融合召喚！ 現れる、《サウザンド・アイス・サクリファイス》！」

『グワーツ！ 直射日光が普通の500倍眩しい！ 千眼だけに！』
「やかましいわ!!」

「サウザンドアイズの効果発動！ 相手モンスター1体をこのカードの装備カードとして吸収する！ 狙いは《トライエッジ・リヴアイア》、貴様だ！」

サウザンドアイズの不気味な口に食われ、肉の盾として吸収されたトライエッジを見て、シャルクの表情は悔しげに歪む。

「そしてレベル4のデーモンとレベル1のサウザンドアイズに、レベル1のリベンジャーをチューニング！ シンクロ召喚！ レベル6、《インフェルニティ・ヘル・デーモン》！」

「攻撃力2200……。そう高い数値ではないけど……！」

「そうだ、貴様の言う通りデュエルとは数値だけではない！ ヘルデーモンの効果発動！ 相手モンスター1体の効果を無効にし、自分の手札が0ならそれを破壊する！」

「《深淵に潜む者》の効果は発動したターンの行動を封じるものだから無効にされて破壊されても墓地封印は継続されるけど……破壊はキツイ……！」

サウザンドアイズは攻撃ができないとはいえ、蛮族のフィールドには効果を使用していないデスドラゴンとヘルデーモンがいる。

2体の攻撃力の合計は5200……。このままダメージを受ければ大打撃は免れないが――、

「バトル！ 《インフェルニティ・ヘル・デーモン》、《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の順でダイレクトアタック！」

『幼女に合法的にダイレクトアタックできるヤッター！』

『この瞬間がデュエルモンスターの醍醐味つてもものよお！』

「それは通せないよ！ 永続罫《バブル・プリンガー》！ レベル4以上のモンスターはダイレクトアタックできない！」

「ふん……。さすがにそう甘くはないか。いい判断だ小娘。ならば私はこれでターンエンド！ エンド時に《簡易融合》で呼び出したモンスターは破壊される。さあ、逆転できるものならしてみろ小娘エー！」

驚異的な除去能力を持つサウザンドアイズは消えたが、《簡易融合》

で場に出されたモンスターは蘇生制限を満たしているため、いつ復活するともわからない。

だが後ろに伏せカードのない今が最大のチャンスであることは間違いない。

「あたしのターン！ あたしは魔法カード《貪欲な壺》を発動！ 墓地の深淵、シャークドレイク、シャークランサー、サッカー、ランタンの5体をデツキおよびエクストラデツキに戻して2枚ドロウする！……ッ、ドローツ!!」

今の自分にできる全力の想いを込めたドロウ。その想いにデツキは——応えた。

「いいカードは引けたか？」

「うん！ 最高のドロウだよ！ あたしは《ホワイト・サルベージ白の救済》の効果で墓地の《カッター・シャーク》を手札に戻して、そのまま召喚！」

「またシャークランサーか」

「ううん、そうじゃない！ 《カッター・シャーク》の召喚に反応して《シャーク・サッカー》を特殊召喚し、《カッター・シャーク》の効果発動！ デツキからレベル3の魚族、《ハリマンボウ》をリクルートする！」

レベル3のモンスターが実質3体。しかし《貪欲な壺》でエクストラに戻したカードの中に、トライエッジはない。

ならば2体を用いたランク3かと誰もが思った。しかし……、

「レベル3のカッター、サッカー、マンボウでオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク3、《牙鯨帝シャーク・カイゼル》！」

「またも3体の素材を求めながら攻撃力1800の低打点モンスター……やはり何かあるらしいな！」

「もちろん！ でも今までののと違って、こっちはド派手な効果だよ！ シャークカイゼルの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使って、このカードにシャークカウンターを1つ置く！ そしてこのカードがバトルする時、ダメージステップの間このカードの攻撃力はシャークカウンターの数×1000ポイントアップする！」

実質的に攻撃力2800。しかしそれでもデスドラゴンの攻撃力は――。

「そしてオーバーレイユニットから取り除かれた《ハリマンボウ》の効果発動！ 相手モンスター1体の攻撃力を500ダウンさせる！

対象は当然デスドラゴン！」

『痛ッ！ 地味に痛い地味に痛い！ やめっ……ヤメロオー！』

「またしてもデスドラゴンの牙を抜くとは……！ 覚えておけ！」

『いや別に牙は抜かれてないけど』

「さらに魔法カード《エアールピード》発動！ シャークカイゼルのオーバーレイユニットを1つ使い、あたしの手札の数×400ポイントのダメージを相手に与える！」

「くっ……この程度！」

蛮族：LP2500

「バトル！ シャークカイゼルでデスドラゴンを攻撃！ カイザーバスター！」

シャークカイゼルの巨大な口から放たれた水流に呑み込まれ、デスドラゴンが破壊されると、いよいよ蛮族とシャルクのライフの差が開く。

蛮族：LP2200

「くっ……！ 場のモンスターが戦闘破壊されたことで、墓地の《インフェルニティ・リベンジャー》がレベル8となって復活する！」

「……バトル終了。あたしはバックに1枚伏せてターンエンド」

ライフでは圧倒的優位に立っている。レベル4以上のダイレクトアタックを封じる永続罫も、シンクロ主体の蛮族にはかなり深く刺さっている。しかしそれでも、いやむしろだからこそ、シャルクの緊張は最高潮に達していた。

以前のデュエルで学んだこと、それは蛮族が「追い込まれるて真価を發揮するタイプ」であること。互いの実力が拮抗し、デュエルが切迫していけばいくほど、彼の中のデュエリストとしての――否、エンターテイナーとしての本能がその実力を何倍にも高めるのだ。

「この状況……誰がどう見ても俺のピンチ。ダイレクトアタックを封

じられ、相手の場には実質攻撃力2800のモンスター。しかも次のターンには3800にまで上昇する。誰もが私の敗北を疑わない状況だというのに……他の誰でもない貴様のその目が、誰よりも我が敗北を疑っている！」

「当然でしょ。あなたはムカつくけど……デュエリストとしての実力はあたし自身が身をもって知ってる！ だからこそ油断も慢心もしない！ あなたには……あたしの持つ戦略の全てを叩き込む！」

「ふん……よかろう！ ならば刻み込むがいい！ 私の、タアアアアア！」

蛮族は勢いよく引き抜いた手札を見ると、そのまま静かにシャルクに視線を向けた。

「私は魔法カード《終わりの始まり》を発動。私の墓地の闇属性が7枚以上の時、その内の5枚を除外して発動できる。墓地のデーモン、サウザンド・アイズ、シユラ、ハルマツタン、チドリを除外し、3枚ドロ！」

「手札を一気に増やした……ここで決めるつもりだ」

「当然だ。私は手札から《ジャンク・シンクロン》を召喚。墓地から《B F―突風のオロシ》の効果が無効にして特殊召喚する」

『おまたせしました！ おいでオロシくん！』

『また効果無効で呼び出しか……』

「相変わらずひどいテーマ混成……」

これで蛮族のフィールドのモンスターは3体。チューナー2体とシンクロモンスター。そしてレベルの合計は10とくれば、シャルクでなくとも察しはつく。

「だが回れば同じだ。私はレベル6の《インフェルニティ・ヘル・デーモン》に、レベル3の《ジャンク・シンクロン》と、レベル1の《B F―突風のオロシ》をチューニング！ シンクロ召喚！ 跪け、命乞いをしろ！ 我が魔王の降臨だ！ レベル10、《レッド・デーモンズ・ドラゴン・タイラント》！」

「前と口上ちやうやんけ！」

この土壇場で現れた蛮族のエースモンスター、タイラント。

窮地からの大逆転はまさしくエンターテイメント。Live
チャットも『うわ出た』『なんでインフェルニティとBFとシンクロン
でレモンが出るんだ……』『そうはならんやろ』『シャルちゃん頑張れ
！』『ここを耐えればまだチャンスはある！』と、シャルクにとつての
宿敵の登場に大いに沸き立っている。

「タイラントの効果発動！ 自身以外の全てのカードを破壊する！」

「《神風のバリアーエア・フォース》が……！」

「危ないカードを伏せていたな……。だがこれでエアフォースはおろ
か、あの厄介な《バブル・ブリンガー》もない！ 装備魔法《巨大化》
をタイラントに装備！ 自分のライフが相手を下回っているため、タ
イラントの攻撃力は元々の数値の倍となる！」

「こ、攻撃力……7000……!?!」

「トドメだ！ 《レッド・デーモンス・ドラゴン・タイラント》でダイ
レクトアタック！ 獄炎のクリムゾン・ヘル・タイドオオオツ！」

シャルク：LPO

「……ブラヴオー」

喝采なき戦い

自分が負けたことに気づいた時、既にそこに蛮族の姿はなかった。ふとLiveチャットを見てみれば、呆然と立ち尽くす彼女を心配するようなコメントが数分間に亘って続いていた。

「……また負けた。シンクロ対策の《バブル・ブリンガー》も入れたのに。3000ラインを突破するためのシャークランサーだって使って……なのに、負けた……」

俯くその顔から零れそうになる光は、だけでも今度こそ流さない。ぶんぶん頭を左右に振ると、その頬をぱんぱんと叩いて、気合を入れ直す。

「大丈夫！ 別にあたしが弱かったわけじゃない！ あたしは強い！ けど……蛮族の方があたしよりもっと強かった！ それだけ！

今回の確信した！ あいつに挑み続けてればあたしはもつともっと強くなれる！ だからこれからは見つける度にデュエルを挑んでやる！ だから、みんなもあたしがあいつに勝つまで、ずっと応援してね！」

につ、と笑ってサムズアップすると、『次に泣くのは勝った時だな！』『いいライバルじゃん』『ライバルというより目の敵では？』『堂々とストーカー宣言してて草』という励ましの言葉が返ってくる。

シャルクはデッキホルダーに戻したカードの中から、相棒のシャークドレイクを取り出すと、「これからも一緒にがんばろうね」と声をかけ、ウインドミルジムへと入っていった。



「ようこそ！ デュエルシティ参加者のLiveデュエリストですね！ ここまでの戦績を確認するため、デュエルディスクをお借りしますね！ ……7勝2敗。はい！すでに5勝以上されているのでジムリーダーにチャレンジできます！ 頑張ってくださいね！」

「ふーん、5勝しなきゃいけなかったんだ。あの、ちなみに次のジムの

ノルマとかはわかるんですか？」

「いいえ。次のノルマは実際にジムで確認してもらい、足りない場合はまた道を引き返してもらおうことになりますね」

「そっか。まあとりあえずここに勝たないと取らぬ狸のなんとやらだし。ありがとうお姉さん！　じゃあ、さっそくいつてきますー！」

ジムスタッフに先導されながらジムの奥に入っていくと、スタジアムに繋がる通路へと通された。スタジアムに入ると、対面する入り口からは、このウインドミルジムのジムリーダー、ソニックが駆け足で向かってきていた。

「ようこそ、ウインドミルジムへ！　まだ大会二日目なのにもう2人目だなんて、今年のチャレンジャーはレベルが高くて参っちまうよね！」

「2人目……？　つてことは、あたしの前に挑んだのあいつかよ！」
「おっと、知り合いだったかい？　でも、まずは目の前の勝負に集中してもらおうか！　エンジンは掛かってきたかい？　じゃあ——始めようか！」

互いに距離を取り、デュエルディスクを構える。そして——ジムリーダーのソニックが勝負をしかけてきた！

「オーブンチャンネル！　Liveデュエル、オンエアー！」

互いにカードを5枚ドロし、デュエルディスクが先攻を決める。

デュエルディスクが示したのは——ソニック。

「まずはオレのターン！　まずはこのカードからだ！　自分フィールドにモンスターが存在しない時、手札から《SRベイゴマックス》を特殊召喚できる！　そして特殊召喚されたベイゴマックスの効果発動！　デッキからスピードロイドをサーチするぜー！」

「初手から召喚権を使わず展開しつつサーチ……優秀だね。そういうのあたしのデッキにも欲しいよ……」

「オレは《SRタケトンボグ》を手札に加え、そのまま特殊召喚！　こいつは自分の場に風属性がいれば特殊召喚できる！　そしてさらにタケトンボグの効果発動！　自身をリリースすることで、デッキからチューナーのスピードロイド1体をリクルートする！　来い、

《SR赤目のダイス》！」

「チューナーと非チューナーを召喚権を残して展開……この人、強い！」

1ターン目から早々にシンクロ召喚の構えを見せつつ、未だ召喚権を残しているばかりか、手札消費も1枚のみという無駄のなさに、『さすがソニックさん、展開が早い！』『マツハサイクラの称号は伊達じゃないぜ！』『最初のジムでこれは鬼では？』と盛り上がるLiveチャット。

シャルクもまた、この状況に焦りを感じつつも、努めて冷静に事態の把握を優先する。

「いくぞー！ ベイゴマックスと赤目のダイスをリンクマーカーにセット！ 召喚条件は風属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《HSR—GOMガン》！」

「シンクロ召喚じゃない……!?!」

「そう慌てるなって！ 俺は手札から《SRダブルヨーヨー》を召喚！ 墓地の《SR赤目のダイス》を蘇生し、赤目のダイスの効果発動！ 自分フィールドのスピードロイドのレベルを、ターン終了時まで1〜6の好きな数字にできる！」

「いじりすぎってレベルじゃなくない?!」

リンクモンスターを展開しつつ、今度こそ間違いなくシンクロ召喚の構え。そしてなおも手札を3枚残している手腕は、間違いなくジムリーダーとしての実力が伺える。

「オレはダブルヨーヨーをレベル5として扱い、レベル5となったダブルヨーヨーに、レベル1の赤目のダイスをチューニング！ シンクロ召喚！ レベル6、《HSR—魔剣ダーマ》！」

「シンクロモンスターを1ターン目から……いや、でもまだリンクモンスターの効果を使ってない！」

「その通り！ 続いてGOMガンの効果発動！ エクストラデッキから2枚目の《HSR—魔剣ダーマ》を除外し、デッキからレベルの合計がダーマと同じになるようにスピードロイド2体を選んで、相手はそのどちらかをランダムに選び、選んだ方が手札に、選ばれなかった

方が墓地に行く！俺が選択するのは《SR電々大公》と《SRタケトンボーグ》！」

「そのあたりは予習済み！墓地効果のある電々大公には手札に行つてもらう！あたしが選ぶのは《SR電々大公》！」

そう、普通なら墓地効果のある《SR電々大公》を墓地に、ターン1とはいえ手札から特殊召喚できる《SRタケトンボーグ》を手札に迎えたいところだ。

デュエルシテイに参加する以上、ジムリーダーがどんなカードを使うか、ある程度の予習をしながら挑んでいるシャルクにとって、これが最善策であることは疑うべくもなかった。

「ならGOMガンのもう一つの効果！オレはこのターン、風属性モンスターをもう一度だけ召喚できるぜ！来い、《SRバンブー・ホース》！」

「まだ召喚権が残ってた……!?!」

「バンブーホースの効果発動！手札からレベル4以下のスピードロイドを特殊召喚するぜ！現れろ《SR電々大公》！レベル4のバンブーホースに、レベル3の電々大公をチューニング！シンクロ召喚！レベル7、《ウインドペガサス@イグニスター》！」

リンク1体とシンクロ2体。ここまでして未だ残る2枚の手札。

どこそのライブリアンがいなくて本気でよかつたと思いつながらLiveチャットを確認すると、『展開が早過ぎて目が回る』『シャルちゃんこれ越えられるか？』『ジムリーダーやっぱつえーわ』『そりやつええでしよ……』と困惑と驚愕が入り混じったカオスが繰り広げられている。

「そしてここで魔剣ダーマの効果を使わせてもらうぜ！墓地のダブルヨーヨーを除外して、お嬢ちゃんに500バーンを与える！」

「地味バーンだけど、先攻からライフを削られた……！」

シャルク：LP7500

「永続魔法《マシンナイズ・ライフエンジン機構部隊の防衛圏》を発動してターンエンド！」

すっかりリカバリー手段も用意してターンを終えると、『最初からリンク1体とシンクロ2体にリカバリーまで……』『隙がないという

か、容赦ないな』『あれジム用のデッキでリーグ本戦用じゃないもん
な』『さすソニ』というコメントが次々に流れてくる。

しかし、それもそのはず。ウインドミルジムは、このデュエルシ
ティにおいて最初のジムであり、デュエル——ひいてはカードゲーム
の基礎である『展開』『サーチ』『妨害』『戦闘』の全てをこなしてチャ
レンジャーを迎え撃つ最初の壁である。

だからこそチャレンジャーには極端な特化デッキで挑むか、あるい
はソニツクのマルチスタイルを全て捌き切る器用さが求められるの
だ。そして彼を越えてようやく、カードゲームの基礎を修めたことにな
るのである。

「あたしのターン、ドロロー！ 魔法カード《簡易融合》を発動！ エク
ストラデッキからレベル5以下の融合モンスターを融合召喚扱いで
特殊召喚する！ 簡易融合召喚！ レベル5、《深海に潜むサメ》！」
「さつそく強力なカードを使ってきたな！ さて、どう展開するつも
りだ!？」

「あたしは手札から《ランタン・シャーク》を召喚！ このカードは水
属性のエクシーズ召喚に使う場合、レベル5としても扱うよ。レベル
5の《深海に潜むサメ》と《ランタン・シャーク》でオーバーレイ！
2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エク
シーズ召喚！ ランク5、《ヴァリアント・シャーク・ランサー》！」
これまでのソリティアじみた動きと比べると、やや単調にも見える
プレイングに、Liveチャットが『ランク5が1体か。まあ普通だ
な』『シャルちゃん事故った?』『いつもの人の心が感じられないプレ
イングはどうした』と心配の声を募らせる。

しかし、さすがにここで止まるほどシャルクも甘くはなかった。
「さつそく《ヴァリアント・シャーク・ランサー》の効果発動！ オー
バーレイユニットを1つ使うことで、相手のモンスター1体を破壊す
る！ 狙いは攻撃力が一番高い《ウインドペガサス@イグニスター》
！」

「くっ……！ だがウインドペガサスならまだ……！」

「さらに魔法カード《白の水鏡》ホワイト・ミラーを発動！ 墓地から《ランタン・シャーク

ク》を蘇生し、デッキから同名のカードをサーチするよ！ 2枚目の《ランタン・シャーク》をサーチ！」

「召喚権はもう使ってるが、ここで魔法カードを消費してまで蘇生してくるってこたあ、まだ何かあるな！」

「そりゃあね！ 自分の場に水属性モンスターが存在することで、このカードは特殊召喚できる！ おいで、《サイレント・アングラー》！」

これでレベル4のモンスターが2体。シャルクの従えるシャークランサーの効果を十二分に発揮するためにも、彼女がここで止まるはずがない。

「レベル4の《ランタン・シャーク》と《サイレント・アングラー》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《バハムート・シャーク》！」「攻撃力2600……こいつあへびいだぜ！」

これで相手の場にはHSRハイスピードロイドが2体のみ。どちらもシャルクのモンスターで対処可能な攻撃力だ。

「バトル！ まずは《ヴァリアント・シャーク・ランサー》で《HSR—GOMガン》を攻撃！ シャーク・プライド・スピアー！」

「ぐっ……！ やってくれるぜ！」

ソニック：6500

「だが機械族モンスターが破壊されたことでチェーン1マシンナーズ・ディフェンスリジョン《機甲部隊の防衛圏》が、フィールドのカードが破壊されたことでチェーン2《ウインドペガサス@イグニスター》の効果が発動するぜ！」

「しまった……！」

「まずはウインドペガサスの効果で自身を墓地から除外し、バハムートをエクストラに戻す！ そして防衛ディフェンスリジョン圏の効果で墓地から《SRベイゴマックス》を手札に戻す！」

「欲張らずに《バハムート・シャーク》の効果を使っておけばよかった……！ え？ 『シャルちゃん不調か？』『動きがぎこちないな』『いつもの流れるようなコンボができてないな？』うぐぐ……好き放題言ってくれるよもう！ そりゃあたしだって上手くいかない時くら

「いあるよ！」

彼女の脳裏をちらつくのは、やはりジム直前でリベンジに臨みながら、またはや敗北を喫した蛮族とのデュエル。あの時も、すぐに持ち直したとはいえプレイングミスをしでかした。あれは勝利を急ぐあまり、彼女の思考に乱れができたからだ。

シャルクの最大の強みは、エンターテイメント性をかなぐり捨てて得た、冷徹で冷淡なまでの冷静さ。そしてどんな時でも慢心しない一種の臆病さが、彼女の強さを支えている。

しかし、あの時も——そして今も、彼女はその冷静さを保てていない。「自分らしい、戦略と駆け引きがモノをいうデュエルさえできれば勝ち負けはどうでもいい」という考え方だった今までとは違い、勝利のための戦略と駆け引きを求め始めている。

それは彼女にとって一つの成長の第一歩ではあるのだが、それがこの大一番で迫りながら、彼女の脱ぎ捨てきれない殻がそんな成長を邪魔していた。

「でも……だからこそ、上手いかない時もあるからこそ、戦略つてのは盤石じゃないといけないんだ！ リカバリー手段なら整ってる！」

「ここはしっかり対処する！」

「ほう……？ なら見せてもらおうか！」

「あたしはバトルを終了して、メイン2に移行！ 永続魔法『ホワイト・サルベージ白の救済』を発動して、墓地から《サイレント・アングラー》を手札に戻す！ バックに1枚セットして、ターンエンド！」

このデュエルは絶対に負けられない。デュエルシテイの期間は3か月間だが、同じジムに挑めるのは一日一回。ここでチャレンジに失敗すれば、真っ先にここを突破した蛮族との差がさらに開いてしまう。

この初動、明らかに自分が勝負を急ぎ過ぎていたとシャルクは自らを律し、デュエルディスクのLiveチャットを見直す。

すると『冷静になれ！』『目の前の勝負に集中して！』『いつもの容赦ない戦略を見せてくれ！』という、これまでの戦いをずっと見ていてくれた目が、ここまで応援してくれた声が、シャルクの背を支える

かのようにだった。

「オレのターン！ 《バハムート・シャーク》の攻撃と効果、どちらを優先するかはあのタイミングじゃ難しい判断だった。確かに後のことを考えりゃあ餅を出すのが鉄板だが、ダメージを稼ぐために攻撃してから効果を使いたい気持ちも理解できる！ だからこそ……お嬢ちゃんの実力が低くないと信じて、ちよつとだけ本気を出すぜ！」

「何か、来る……ッ！」

「墓地の電々大公の効果！ 自身を除外し、墓地の《SR赤目のダイス》を蘇生する！ そして手札からベイゴマックスを召喚し、デッキから3枚目のタケトンボークを手札に加え、そのまま特殊召喚してリリース！ デッキから2枚目の《赤目のダイス》をリクルートする！」

「ベイゴマックスと赤目のダイス2枚……。でも赤目のダイスの効果で出せる最大レベルは決まって……いや、だからこそその2体か！」

赤目のダイスがレベル変更を行うのは自身ではなく他のスピードロイド。よって赤目のダイスのレベルが1である以上、何度シンクロしても最大レベルは7であり、2体も展開する理由はない。

しかし、それはあくまで赤目のダイスの効果を2回とも使用するなら、の話だ。

「2体目の《赤目のダイス》が特殊召喚成功時、効果発動！ ベイゴマックスのレベルを6にする！ レベル6となったベイゴマックスに、レベル1の赤目のダイスをチューニング！ シンクロ召喚！ レベル7、《WWーウインター・ベル》！」

「そうだよね。そしてその2体目は……！」

「続いてレベル7のウインターベルに、レベル1の赤目のダイスをチューニング！ シンクロ召喚！ 天空を駆け抜ける蒼き風！ レベル8、《HSRーカイドレイク》！」

レベル8の大型シンクロモンスターの登場に、シャルクは後ずさりつつも、その能力を見極めんと睨みつける。

「カイドレイクのシンクロ召喚に成功したことで、こいつの効果が発動する！ このカード以外の全てのカードを破壊するぜ！」

「うわあつ！ よくもシャークランサーを……！ でも永続魔法

《ホワイト・サルベージ》の《白の救済》が破壊されたことで、デッキから魚族モンスター1体を特殊召喚するよ！ あたしは《超古深海王シーラカンス》を守備表示で特殊召喚！ そしてレベル5以上の水属性が特殊召喚されたことで、今破壊された《神の氷結》を再びセット！」

「おつと……全部壊したと思ったたら2枚も残っちゃったか。それにこっちはカイドレイクだけ……これはミスったかな？ だが……今伏せた罠の効果までは把握してないが、さすがにシーラカンスの厄介さくらいは知ってるからな、ここで処理させてもらう！ バトルだ！」

シーラカンスの規格外れの展開能力は、デュエルモンスターズ全体を見渡してもそう多くない強力な効果だ。

ワンターンキルや無限ループなど、さまざまなコンボに利用されるその能力は、「水属性」「魚族」というマイナーな属性と種族だからこそ許されている効果であり、そうあってなお、一般的にその凶悪さが知られている。

だからこそ、ソニックはここでシーラカンスを見逃すわけにはいかなかった。

「カイドレイクでシーラカンスを攻撃！ 暴風のブラストウインド！」

「くうっ……！ さすがにジムリーダー！ 簡単に突破してくれる……！」

「オレはバックにカードを1枚セットして、ターンエンドだぜ！」

こうも派手に動き回り、ソニックの場には攻撃力3000が1体。バックには伏せが構えており、手札も1枚残されている。

対してシャルクのフィールドには発動条件を満たさない《神の氷結》が1枚。手札こそ2枚あるものの、その両方が《ランタン・シャーク》と《サイレント・アングラー》だと割れている以上、単調な動きでは対処されてしまう。

だからこそ、今欲しいのは「あのカード」しかない。

「あたしのターン、ドロー！ ……来た！ あたしは《深海のデイヴァ》を召喚！ 効果でデッキからレベル3以下の海竜族《深海の

アーチザン』を特殊召喚し、効果発動！ デッキトップを墓地に送り、墓地から《ランタン・シャーク》を蘇生する！」

デッキトップから落ちたのは《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》。今この状況ではどうにもならないカードだが、後々必ず必要になる1枚だ。

「レベル4の《ランタン・シャーク》とレベル1の《深海のアーチザン》に、レベル2の《深海のディーヴァ》をチューニング！ シンクロ召喚！ レベル7、《白闘気一角》！」

ホワイトオーラ「白闘気……？ ダメだな、やっぱり水属性には明るくねえ！」

「そう？ ならこれから知っていつてね！ モノケロスの効果発動！

墓地の魚族モンスター1体を蘇生する！ 戻っておいで、《超古深海王シーラカンス》！」

げえ、と苦々しい表情で身構えるソニックと同様に、Liveチャットもまた『流れるようなシンクロ召喚……』『やっと調子が戻ってきたな』『信じられるか？ 手札消費1枚なんだぜ、これ』『ジムリダーが呆然としてるの草』とその流れに勢いづく。

そう、シーラカンスが場に出たとなれば、さすがにソニックもうかうかしてられない。

「シーラカンスの効果発動！ 手札の《ランタン・シャーク》を捨てて、デッキから《ハリマンボウ》《キラー・ラブカ》《トライポッド・フィッシュ》を特殊召喚！ そしてレベル7のシーラカンスとモノケロスでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク7、《水精鱗—ガイオアビス》！」

「ガイオアビス……！ あいつはトーナメントで見たことあるぜ！ ありやマズい……！」

「続いて《キラー・ラブカ》と《トライポッド・フィッシュ》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《海晶乙女コーラルアネモネ》！」

シンクロに続きエクシーズ、そしてさらにリンクへと繋ぐその動きには一切の乱れがなく、シャルクのペースが戻りつつあることを明確に示していた。

「コーラルアネモネの効果！ 墓地の《トライポッド・フィッシュ》を蘇生する！ レベル3の《ハリマンボウ》と《トライポッド・フィッシュ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク3、《発条空母ゼンマイティ》！」

「攻撃力2800、2000、1500……このままならカイドレイクを突破できる奴はいねえ、が……！」

「ゼンマイティの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、デッキから《ゼンマイシャーク》を特殊召喚！ そして今オーバーレイユニットから取り除かれた《ハリマンボウ》の効果でカイドレイクの攻撃力は500ポイントダウン！」

「それは通せねえな！ 罨カード《マグネット・フォース》！ 元々の種族が機械族のフィールドのモンスターはこのターン、相手のモンスター効果を受けない！」

シャルクがこれだけの展開を通し、ようやく筆り取った勝機。しかしそれはソニックが仕掛けていた防衛線を突破することなかった。——かのように思われた。

「水属性の打点の低さは有名だ。だから3000ラインのモンスターを出せば並みの相手ならそこで止まる。けどお嬢ちゃんがそんな生半可なデュエリストじゃないってことはわかった。打点の低さを補うためのデバフを仕掛けてくると読んで正解だったな！ お嬢ちゃんには悪いが、このデュエルはオレの勝ち——」

「つふふ、あはははははは！ やっぱりね、こうすれば絶対に「引つかかると思ってたんだ！」

「——何？」

「ソニックさんの言う通り、水属性の弱点は打点の低さ。それを補うためにデバフを多用するのも間違いじゃない。でも……それをジムリーダーが対処できないはずがない。いやむしろ——「見えてる地雷」を対処せざるをえない！ その貴重なセットカードはそのためのものだってわかってた！ でも……だからこそ忘れてない？ あたしの最後の手札を！」

このターンの開始時、シャルクの手札は《ランタン・シャーク》と《サイレント・アングラー》の2枚。だからこそドロリしたのが《深海のディーヴァ》だということとは間違いない。そしてシーラカンスのコストに《ランタン・シャーク》を捨てた以上、残った1枚は――。

「しまっ……！」

「自分フィールドに水属性モンスターが存在することで、手札から《サイレント・アングラー》を特殊召喚！ レベル4の《サイレント・アングラー》と《ゼンマイシャーク》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《深淵に潜む者》！」

「水属性全体の攻撃力を上昇させるエクシーズモンスター……！」

「デバフに警戒しすぎて、バフへの警戒を怠ったそっちの戦略負けだよ！ 《深淵に潜む者》の効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使って相手の墓地効果を封じる！ さあ、バトルだ！ ガイオアビスでカイドレイクを攻撃！ アビスライジング！」

「ぐああああつー！」

ソニック：LP6200

「くっ……！ 墓地に送られたカイドレイクのサーチ効果は《深淵に潜む者》によって封じられてやがる……！」

「続いてゼンマイテイでダイレクトアタック！」

「それは通せねえな！ 手札から《SRメンコート》のモンスター効果発動！ このカードを攻撃表示で特殊召喚し、相手モンスター全ての表示形式を守備表示にする！」

「やつぱりね。最後の手札はダイレクトアタックへの手札誘発だと思ってたよ。もし相手があたしじゃなかったら、まだ勝負はわからなかったかもね！ 墓地の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》を除外して効果発動！ あたしの場の水属性エクシーズを素材に、それよりもランクが1つ高い水属性エクシーズにランクアップさせる！」

リンクモンスターの性質上、守備表示にならないコーラルアネモネを残し、ガイオアビス・ゼンマイテイ・深淵の3体が守備表示になるものの、即座に対応するシャルクの機転に、ソニックは舌を巻いた。

そして、ここまでの彼女のデュエルを見守り続けてきたLiveチャットのファンたちは、既に彼女がどのモンスターを呼び出すのか、見当がついていた。

「ランク3の《発条空母ゼンマイティ》でオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！ 狡猾なる脅威の牙！ ランク4、《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「そ……そいつはヤバすぎる！」

「行くよ！ シャークドレイクでメンコートを攻撃！ デプスバイト！」

「うっ……ぐあああああっ！」

ソニック：LP3000

「罠カード《マグネット・フォース》によって相手の効果から守られるのはフィールドのカードだけ！ シャークレイクの効果発動！ 戦闘破壊したモンスターの攻撃力を1000ポイント下げて相手の場に特殊召喚し、再び攻撃できる！」

「メンコートの低打点がこうも露骨に利用されるたあ……ナイスだぜ、お嬢ちゃん」

「そっちこそ！ さすがジムリーダー、強敵だったよ！ 行け、シャークドレイク！ メンコートに二度目の攻撃！ デプス……バイトオ！」

「ぐっ……うおおおおおおおっ!!」

ソニック：LP0

デュエルの終わりと同時に、彼女を迎えたのは拍手喝采ではなく、突き刺すような沈黙であった。

しかしそれに反するように、Liveチャットでは『さすがの悪役ムーブ!』『二重の防衛網を掻い潜って……』『最終的に後半はほとんどシャルちゃんの手のひらの上だったな』『そしてやっぱりシャークドレイクは皆勤賞なんだよな』と、大いに盛り上がっていた。

そんなLiveチャットと会場の観客たちの反応の違いは、やはり彼女のデュエルを「戦略カードゲーム」と見ているか「エンターテイ

メント」と見ているかの違いだろう。

ソニックの防衛網を突破するタクティクスも、相手の狙いを誘導する駆け引きも、間違いなく戦略カードゲームとしては称賛されるべきものだった。だがその万全過ぎるほどの戦略は、ソニックの行動を思い通りに誘い込み、抵抗を封じて上から殴りつける戦い方。

そんな彼女の戦い方に、会場は完全に引いてしまっていた。

「ブラヴォー。最高のデュエルだったよ。次は決勝トーナメントで戦おうね」

「へっ、言ってくれませ！　だが、そうだな。お嬢ちゃんくらいの実力者なら、そういうこともあるだろう。だが、もしそうなれば次こそは本当の本気で行かせてもらおうぜ！　……だが、そのスタイルを続けるんなら気をつけるこった。この大会はデュエリストじゃない奴だつて大勢見てる。ある程度は「見栄え」も意識しないと、敵が増えていくぜ」

「敵が増えるのはいいことだよ！　敵が増えれば増えるほど、たくさんデュエルができる！　たくさんデュエルして強くなれば、色んな人にもっともっとサメの強さを知ってもらえる！　いいこと尽くめじゃん！」

「そういうことじゃ……いや、まあ今はいいか。そのうちわかるさ。さあ、これがウインドミルジムをクリアした証、ライザーバッジだ！　受け取りな！」

ソニックから手渡されたライザーバッジを受け取り、カード状のフレームにセットする。

ライザーバッジを手に入れたことで、次のジムへ参加する二つの条件のうち、片方を満たしたことになる。

「ついでだ！　その手腕を認めてこのカードもくれてやる。俺のデッキにも入ってるが、お前さんも相性は悪くないだろう！」

シャルクはソニックから《虚空海竜リヴァイアール》を受け取った。「お嬢ちゃんなら次のジムは面白い試合になるだろう！　相棒のシャークドレイクともども、大事にしるよ！」

「ありがとう！　じゃあ、決勝トーナメントで！」

水属性はいいぞ

ウインドミルジムでの試合を終えると、シャルクはそのままカードショップへと直行した。

カードショップには宿泊施設が併設されており、デュエルシティの開催期間中、参加者はそれぞれの街に点在するカードショップに無料で宿泊することができる。

シャルクはカードショップの受付でチェックインを済ませると、部屋に戻ってLiveチャットへの返事を返していた。

『さっきの試合すごかったな』そう？　ありがとう！　これからもどんどん頑張るよ！　『頑張った結果がああ意識誘導と妨害の応酬か……』まあデュエルモンスターズは戦略ゲームだからね、騙し騙されが楽しいゲームでしょ？　言っちゃえばああいうのは騙される方が悪いんだよ』

試合に対するコメントは、大会開始直後と比べるとだいぶ大人しいものになっていた。それは決して彼女のファンが増えたから、という意味ではなく、彼女のプレイスタイルが苦手なリスナーが離れていったからだ。

事実、SNSの一部ではジム2人目のチャレンジャーということはいくつかの切り抜き動画がアップロードされていたが、その反応は賛否が分かれており——むしろどちらかといえば否定的なコメントが目立っていた。

相手の行動を妨害することも、相手の意識を他のカードにすり替えることも、カードゲームとしては反則ではない。前者にはそういうカードとしてデザインされたものも少なくなく、後者は番外戦術とはいえカードゲームにはそうした駆け引きが必要な場面も多い。

しかしそれを理解できているのはシャルクと同じデュエルモンスターズをプレイしているデュエリストだからだ。少しでもデュエルモンスターズに関わっていれば、彼女のプレイングがどれほど高度なものなのか理解できる。しかし、大半の観客やリスナーはそうではない。

デュエルモンスターズという存在が普遍的なものであるこの世界において、デュエルモンスターズを「見る」ということは自然なことであり、それに対する知識というものが少ない者でも、カードの見た目や演出の派手さだけでも楽しめる。それがエンターテイナーとしてのLiveデュエリストの一面だ。

しかし、シャルクのスタイルはそうしたエンターテイナーとしてのそれとは真逆のスタイルであり、マイナーなカードを使うことで情報アドバンテージの少なさを最大限利用し、相手の効果や攻撃、あるいは精神状態までもを掌握しながら流れを支配するその動きは「戦略カードゲーム」としての性質を最も強く引き出している。

だからこそ、デュエルモンスターズを「カードゲーム」として捉えている者は信頼と畏怖を込めてリスナーとなっており、逆に「エンターテイメント」として捉えている者からは侮蔑と軽蔑の意味を込めて炎上するのだ。

『最後のメンコートは見えててシャークドレイク温存してたの？』そうだね。あれ1ターン目からずっと握ってたから、手札誘発だとは思ってたよ。でもカード効果には全然反応しないから、攻撃反応だったのもわかってた。フェーダーならどうしようもないけど、SRデッキならメンコートだろうなって思ってたギリギリまでシャークドレイクは出さなかったよ」

しれっとした表情を変えることなく、あの時メインフェイズでシャークドレイクを出さなかった根拠を説明すると、『じゃあ最初からシャークドレイク皆勤賞は決まってたんだな』『むしろシャークドレイクを活躍させるためにメンコートを引きずり出したとも言えるな』『だからコーラルアネモネから殴らなかつたのか』という反応が並ぶ。

事実、シャルクにはあの時、終盤の動きのほとんどが想定できていた。カイドレイクを戦闘で突破するには、どうしても水属性の打点では適わない。そうになると自軍の打点を挙げるか敵の打点を下げるかしか選択肢はなかつた。そして水属性の特性上、後者が得意であることは、ジムリーダーなら知っていてもおかしくはない。

だからこそ、シャルクは敢えてそのデバフを囿に使い、次の展開のために自分の手札への警戒をデバフへの警戒にすり替えた。《ハリマンボウ》をリクルートし、オーバーレイユニットにすれば、間違いなく相手の妨害札はそこで使われると読んで。そして、事実その読みは正しく、意識誘導は成功した。

あとは得意の連続展開で自軍にバフをかけ、手札誘発となるメンコートを引きずり出し、「攻撃表示で特殊召喚する」という効果を最大限利用するため、メンコートが出た直後にシャークドレイクを呼び出した。そしてバフの効果も合わさって、ライフを削り切ったというわけだ。

『カイドレイクを効果で除去するって選択肢はなかったの？』うーん、確かにシャークランサーならできるだろうね。でもシーラカンスで呼び出したモンスターは効果が無効になるし、何よりあたしのデッキにレベル操作なしでレベル5以上のモンスターってシーラカンスだけなんだよね。たぶんそれはソニックさんもわかってたと思うよ』

水属性は展開とデバフの他にも、いくつか得意とするジャンルが存在する。手札を削る「ハンデス」や、相手の動きを阻害する「表示形式変更」に加え、エクシーズ召喚やシンクロ召喚を多いに助ける「レベル変更」がそれだ。

特に「シャーク」と名の付くモンスターはそうした効果が多く、レベル3〜5を自在に使い分けられることができるため、基本的にメインデッキに入るモンスターはレベル3と4だけだ。

シャルクの場合、シンクロ召喚のためにレベル2以下もいくつか採用してはいるが、上級モンスターに関しては強力な展開能力を持つシーラカンスしか採用していない。

『妨害・デバフ・除去……しかもレベル変更も得意。水属性ってこんなに強かったんだな』そう！ そうなんだよ！ 打点の低さは効果で補いながら相手の妨害と状況のコントロールを狙えるテクニカルな属性！ カードゲームはやっぱりカードパワーでゴリ押しするんじゃないくて戦略と知識がモノを言うんだよね！ 水属性はいいぞ』

シャルクの活躍により、こうした水属性への再評価に関するコメント

トも増えてきた。

これまで水属性が不遇とされ、マイナーデツキとまで言われてきた経緯には、シーラカンス登場時点での魚族のバリエーションの少なさや、融合・シンクロ登場時点でのエクストラの貧弱さが主な原因と言われている。

無論、他にも理由は様々ではあるが、ひとつの転機となったのはエクシーズ召喚の到来である。エクシーズ召喚以降、水属性のエクシーズモンスターは今まで堰き止められていた流れを取り戻すかのよう
に数を増やし、水属性とエクシーズは切っても切れない関係となった。

その後、ペンデュラム召喚がブツシュされていた時代となると、再び一気に冷遇されるようになるが、リンク召喚が来ると海晶^{マリィンセス}乙女を始めとして少しずつではあるが水属性の強化もぽつぽつと追加されていった。

そうして今、シャルクのデツキにはペンデュラム以外の全ての召喚法が混在しているものの、やはり軸となるのはエクシーズ召喚であり、それらは展開・妨害・デバフといった水属性の特徴をしっかりと押さえた優秀なエクシーズモンスターたちだ。

『シャルちゃんから見ると水属性が苦手なデツキは？』うーん、やっぱり打点が高い相手はキツイよね。有名どころで言うところの《ブルーアイズ・カオス・MAX・ドラゴン》なんかは天敵といってもいいね。効果の対象にもならないし効果で破壊できないから、除去もデバフも効かない上に打点が4000だもん。詰みだよ詰み」

水属性が苦手な相手は、やはり何度も言うが打点の高いモンスターを多く採用するデツキとなるだろう。

インテリの使用する「ブラック・マジシャン」と同等以上の知名度を持つ「ブルーアイズ」デツキなどはその筆頭であり、高い打点と豊富なサポート、そして切り札の強固な耐性もあって、打点の低い水属性はどうすることもできなくなる。

ちなみにこれだけ打点が低いと連呼する理由はというと、水属性の最高打点というものが3300というのがひとつの原因と言えよう。

その3300の片方は儀式モンスター、片方はシンクロモンスターであり、召喚条件とデメリットを持たないモンスターとなると3000、それも1体のみである。

これがどれだけ低い値かといえば、闇・光・地属性の最高打点が5000であり、パワフルなイメージのない風属性でさえ4000、水属性と同じくらい不遇な時代もあった炎属性でも3800である。

召喚条件とデメリットを持たないモンスターに限っても、闇属性は3000が12体。光属性は3300が3体。地属性は3000が7体。炎属性は3000が1体だがデメリットつきなら3500であり、風属性は3000が1体でデメリットなしなら2900が2体というところまで落ちるものの、それら3体はカテゴリ化されておりサポートが存在する。

しかし水属性は3000打点が1体のみ。それもカテゴリ化されていないブルーアイス・ホワイトナイト・ドラゴン《青氷の白夜龍》である。サポートするには属性・種族サポートか、レベル8という点を活かすしかないが、レベル8のドラゴンという意味なら、その有用性は光・闇あたりに軍配が上がる。

だがそうした弱みを理解していてなお、シャルクが水属性デッキを使うのは、ただ単に「サメが好き」という理由ではなく、戦略上の強みも存在した。それが「情報」である。

水属性は先にも述べた通りマイナーな属性であり、カテゴリではなく属性デッキとして組む者はそう多くない。そのため水属性のカテゴリの知識は知られていても、水属性そのものや、それをサポートするカードの知識は一般的ではない。

それでいて、デュエルシテイに参加するLiveデュエリストは自分がLiveデュエルで目立つためにも、「勝てるデッキ」というものを構築してくる。それはつまり、イコールではないとしても近似的な意味で「メジャーなデッキ」を使ってくるということだ。

そうになると、やはりものを言うのは知識である。相手がどんなカードを使い、それがどんな効果なのかを把握していれば、除去の対象であったり、あるいは相手のライフ管理についてであったり、そうしたことに警戒しながらプレイングができる。

だが、水属性の知識を持つ者はそう多くないため、実質的に「初見殺し」的な動きが可能となるのだ。特に顕著なのは、ここまでも多く活躍した《ホワイト・サルベージ白の救済》などがその筆頭だろう。もし相手がこのカードの効果を知っていれば、シーラカンスが出ない場面はもつと多かつたはずだ。

『ちよつとアレな話だけど、そのデッキ組むのにいくらぐらいしたの？』ああ、そういうのも気になるよね、全然かまわないよ。でもねー、水属性つてそもそもマイナーだからそんなに高いカードつて多くないんだ。正直高かったのはNナシバース0くらいで、あとは汎用の魔法・罫が地味にかかったつてくらいかな」

そして、マイナーなカードというものは同時に、人気がない……もつと突き詰めれば「安い」カードでもあるのだ。

カードの強さに関わらずレアリティの高さによつてショーケース行きかそうでないかを定めるカードショップでさえ、水属性のレアカードは「不人気だから」というだけでストレージ行き、ということも少なくはない。

さすがにレアリティも高く効果も強力な《バハムート・シャーク》や《深淵に潜む者》はショーケース行きだが、それでも後者はワンコイン払えばお釣りとともに購入でき、前者もそれなりに高いカードではあるものの――。

「特にあたしの場合、《バハムート・シャーク》は大会の開会式直前にワイルドエリアを通つた時に野生のをデュエルして捕まえたから、実質0円なんだよね。だから一応この《バハムート・シャーク》意識あるよ。あんまり喋らない子だからレプリカと勘違いされてるだろうけど」

デッキホルダーから《バハムート・シャーク》のカードを取り出し、それを「ほら」とカメラに映すと『マジだ！ カードのパスワードがちゃんと書いてある！』『大会開始前から豪運発揮してて草』『サメを愛し、サメに愛された幼女』『野生のバハシャの遭遇率つて水辺を半日ぐるぐるして出会うか出会わないかレベルだったはずでは？』と困惑の色が広がっていく。

そう、ワイルドエリアにはカードショップで売られている「レプリカ」のデュエルモンスターズの元となる、「オリジナル」のモンスターたちが生息している。しかし、その大半は下級モンスターや、貧弱なステータスのバニラモンスター、あるいは貧弱な効果の特殊召喚モンスターなどであり、有用なカードほど警戒心が高い。

そのため、ワイルドエリアで強力なモンスターと出会うには、それらのモンスターの方からデュエリストに惹かれて近付くのを待つしかない。あるいは、生息域をうろちよろして鬱陶しいと思われてデュエルを仕掛けられたところを迎撃してカード化する以外ないのだ。

だがシャルクの場合、少なくとも後者ではない。トラブルでワイルドエリア前の駅に到着してしまい、そのまま最短ルートで最初の街であるサーマルタウンに向かおうとしたところ、《バハムート・シャルク》の方からデュエルを仕掛けられたのだ。それは即ち、そのカードがシャルクに強く惹かれたという意味でもあるのだ。

「《バハムート・シャーク》は効果も強力だしデザインもカッコいいから好きだよ。ちゃんと尾ビレは縦向きだし、よく見ると臀ビレもあるし。翼と手足があるのはちよつと気に入らないけど、まあ海竜族だもんね。ただバハムートって本来バカデカイ魚だったと思うんだけど、デカイ魚とサメが合体してどうして竜になるのか誰か説明してくれない？」

シャルクの不本意そうな質問に、『えっ、バハムートって竜じゃないの？』『伝承のバハムートは魚だぞ』『そもそもバハムートがドラゴンってイメージなのはゲームとかの影響だよな』『確かに魚と魚が合わさって竜になるのは意味わからんな』と、Liveチャットも概ね同意を示している。

バハムートの由来云々はともかくとして、《バハムート・シャーク》そのものは間違いなく強力な水属性エクシーズの1体であり、ここまですシャルクのデュエルを何度も支えてきたモンスターの1体である。

彼が寡黙なのは《バハムート・シャーク》としての性質というよりも、彼自身の性格であろう。たとえ同じモンスターのオリジナルでも、それらにはそれぞれの個性があり、それぞれの好みも存在する。

シャルクを気に入って近寄ってきた《バハムート・シャーク》がいるのと同時に、彼女を好まない《バハムート・シャーク》もいるということだ。

『ちなみに餅は？』餅は普通にパック買ったら当たったやつだよ。強いとはいえ字レアだしね。なんなら2枚くらい余ってるよ。むしろ同じ字レアなら《カッター・シャーク》がもう1枚ほしい。誰か持ってたら明日は次のクーラントタウンに向かうのでその道中ください。餅とトレードでもいいです。ぜひお願いします」

水属性デッキ、その中でも魚族を中心として動くデッキにおいて《カッター・シャーク》の有無、あるいは採用枚数はデッキの安定性に直結する。さらに言えば、《カッター・シャーク》にアクセスできる《鱒ブリンセスつ子姫》は、実質4枚目以降の《カッター・シャーク》とも言い換えられるのだ。

先ほども述べた通り、水属性はエクシーズ召喚に大きく依存しており、《カッター・シャーク》は自身のレベルを3〜5の好きな数字として扱える効果と、デッキの魚族にアクセスして展開の起点となる効果を持つ。

エクシーズモンスターを横に並べて強固な布陣を整える水属性デッキにおいて、レベル変更とリクルート効果を一体で補う《カッター・シャーク》の重要性は、まさしくデッキを支える要であり、リクルート手段の少ない魚族という種族においては「小柄なシーラカンス」ともいえるのだ。

『あれ5枚くらいあるけどそんなに強いのか？』『3枚あるけど効果読んだことすらなかったわ』『今住んでるところがクーラントタウンだから明日からしばらく持ち歩いておくわ』やったー！ みんな大好きだよー！ ちゅっちゅー！ ストレージを探してはみたんだけど、マイナーカードだから売っても安いと思われてるのか、全然なかったんだよね……』

このあたりは、水属性に限らずマイナーカードあるあるといえるだろう。

マイナーカードだからこそ「価格は安い」が、価格が安いからこそ

「そもそも売られない」という連鎖ができており、ストレージをいくら漁っても目的のカードが見つからないということが多々ある。

幸いなのは、水属性のモンスターや、水属性をサポートするカードは、イラストをばつと見ただけでほしい「あ、水っぽいな」というデザインをしているため、見つけやすいということだ。イラストの背景が全体的に青系統ならたいがい水属性関連である。

「唐突に水属性のいいところ紹介とかしてみよっか。うーん、そうだなあ……リカバリーが上手い、とか？ 破壊された時に発動する効果を始めとして、『サルベージ』や『白の救済』ホワイト・サルベージなどの回収手段が豊富なことかな。あと汎用カードの『貪欲な壺』はエクシーズを一気に展開する水属性と特に相性がいい」

通常魔法『貪欲な壺』は、墓地のモンスターを5枚デッキに戻して2枚ドロウする効果を持ち、普通に発動していればデッキが5枚増えて2枚減る、つまりデッキ枚数がプラス3枚となって、引きたいカードを引く確率を下げてしまう。

しかし水属性の場合、『バハムート・シャーク』を始めとしてエクシーズモンスターを横に並べる手段が豊富に存在し、多くのデッキで採用される『聖なるバリアーミラー・フォース』や『激流葬』などの全体破壊によって大量の融合・シンクロ・エクシーズ・リンクモンスターが墓地に行きがちだ。

そうなった場合、墓地からそうしたモンスターたちをエクストラデッキに戻すことで、デッキ枚数を一切増やすことなく、ただただ2枚ドロウできる凶悪カードに早変わり。むしろ墓地から蘇生してしまおうと再利用しづらいエクシーズモンスターにおいては回収効果すらメリットとなる。

そうした水属性特有のメリットを話すと、『確かにシャルちゃんリカバリー上手いもんな』『戦線維持というより次のターンで逆転するって意味でのリカバリーが多いな』『水属性つてもしかして強いのでは？』と、水属性を再評価していく流れができて始めている。

『水属性いいな。ちよつと組んでみたいかも』いいと思う！ あたしとしてはサメモチーフのカードを激推ししたいところだけど、水属性

はキレイ系・かわいい系からグロテスクなやつまで色んなカードがあるから、自分好みのカードが絶対にあるはずだよ！ 水属性のことで悩んだら意見箱にくれれば返事を返すから、ぜひ組んでみてね！」

そう言うと、それを皮切りにいくつかのコメントが『俺も組もうかな』『水パーツどのくらいあったっけな……』『エリアちゃんかわいいヤッター！』『そういえば亀モチーフのカードもそこそこ種類あったな』と水属性デッキに関心を示しており、「サメを広める」というシヤルク最大の目的の一端が果たされたようにも見えた。

「さて……じゃあ今日はこの後お風呂に入って明日の準備とかしなきゃいけないから、そろそろ配信も終わるね。今日はみんなお疲れさま！ また明日もよろしくね。じゃ、おつサマー！」

怒れる魚群

翌日。ウインドミルジムの攻略も終え、シャルクは足早に次の街――クーラントタウンへと続く道を歩いていた。もちろんその道中でもデュエルはしており、以下がそのハイライトである。

『罨カード《ポセイドン・ウエーブ》発動！ 相手の攻撃を無効にし、あたしの場の水・魚・海竜族の数×800のダメージを与える！ あたしの場にはシーラカンスとその効果で展開した4体の魚族がいる！ よって4000ポイントのダメージ！』

『バトル！ 《水精鱗―ガイオアビス》《F.A―ブラック・レイ・ランサー》《深淵に潜む者》《海晶乙女マリンスズコーラルアネモネ》でダイレクトアタック！』

『《ストイック・チャレンジ》をシャークドレイクに装備して、バトル！ シャークドレイクで相手モンスターを攻撃！ 装備魔法の効果で通過ダメージは2倍となる！』

ウインドミルタウンのカードショップで購入し、新たにデッキに入された装備魔法《ストイック・チャレンジ》の性能チェックも含めて、宿を出発してからここまで5人のデュエリストたちを下してきたシャルクだったが、そのお陰もあつてデッキは以前よりも火力不足に悩むことが減ったように感じた。

特に《ストイック・チャレンジ》の効果は、オーバーレイユニットを3つ持つてエクシーズ召喚される《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》と相性がよく、シャルクはこのコンボを特に気に入っているようだった。

できることなら相手モンスターの攻撃力を0にする方法もほしいところではあつたが、そこまで詰め込むとコンボに必要なカード枚数が増えてしまい、安定感が落ちるため、彼女はひとまず現状に満足していた。

「ふふん、好調好調！ 水属性なんだからデバフを活用するのは当たり前なんだけど、そもそも相手の打点を手っ取り早く超えたいなら装備カードで強化しちやえばいいってのは、初歩的すぎて逆に見失つて

たポイントだったよね！ ストレージでこのカードを見つけた時は全身に電流が走ったよ！」

満面の笑顔で《ストイック・チャレンジ》のカードを両手で大事そうに抱えるシャルクに、『ホントになんで今まで思いつかなかったんだ』『水属性使いだからこそその見落としか』『まあ確かに水属性ならデバフが真っ先に思いつくもんな』『そもそも装備魔法自体が不安定なカードってのもあるしな』とやや苦笑気味なコメントが寄せられる。

コメントの一部にもある通り、装備魔法とは数ある種類のカードの中でも不安定なカードである。モンスターに装備して維持する、という特性上、『サイクロン』のようなシンプルな魔法・罠への除去だけでなく、モンスターが戦闘や効果で除去された場合にもフィールドから離れてしまう。

だからこそ、水属性の場合、ただ攻撃力を上げたいだけなら装備魔法よりも《アクア・ジェット》のような永続的に攻撃力を上げる通常魔法の方が有用性は高い。だがやはり「ただ攻撃力を上げるだけ」なら、その分の数値を得意のデバフで稼げばいい、ということになってしまう。

故にシャルクが求めたのは「1ターン維持できるだけで役目を果たす装備魔法」であり、もつとシンプルに言えば「一気にライフを削り取れる装備魔法」であった。そうして見つけたのが、エクシーズモンスターの攻撃力を上げつつ、戦闘ダメージを倍加する《ストイック・チャレンジ》である。

「何人が言ってる人もいるけど、装備カードは維持が難しいから今までは敬遠してたんだよね。でも《ストイック・チャレンジ》なら維持なんてしなくても1ターンあれば相手のライフを大幅に削り取ってくれる！ いやーありがたいありがたい！」

カードを腰のデッキホルダーに戻し、周囲を見渡す。もう少し歩けば、この辺りでは一際目立つ大きな橋が見えてくるはずだ。その橋を渡ってトンネルを抜ければ、漁業と潮騒の街、クーラントタウンに着く。

少し駆け足になりそうになる気持ちを抑えながら、逸る思いで歩み

を進めていくと、どうやら橋の前で数人が言い争っているようだった。

「この先に進みたいならオレっちに勝ってから進むんだな！」

「いや、デスから僕はこれから出勤なのでデュエルディスクは持つてなくて……」

どうやら、この橋の直前で通せんぼをしている迷惑なデュエリストがいるらしい。極力関わらないように、しれっと通り過ぎようとしたところ、通せんぼされていたスーツ姿の男性が、シャルクを見つけて声をかけてきた。

「ああつ！ すみませんそのキミ！ この人たちがこの橋を通せんぼして困っているんです！ このままでは会社に遅刻してしまいません！ どうか助けてはくれませんか！」

「ん？ お前もこの橋を渡るつもりか！ ならオレっちと勝負だ！

勝てばここを通してやるが、負ければ引き返して——いや、お前はLiveデュエリストだな！ だったらLiveデュエルだ！ オレっちとのデュエルを生配信しろ！」

「うげ、悪質な凸デュエルじゃん……。Liveデュエルがしたいならこんな方法じゃなくて普通に挑んでよね！ もう……。ホントならこのままスルーするつもりだったけど、あなたたちの狙いがLiveデュエリストなら、蛮族もあなたたちを倒したんでしょ！ だったらやってあげる！」

シャルクはデツキをデュエルディスクにセットし、Liveチャットをデュエルモードに切り替える。

「オープンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

凸げき団のしたっぱが勝負を仕掛けてきた！

先攻はシャルク。相手のデツキが判明していない以上、彼女が先攻でやることは決まっている。

「あたしのターンからだよ！ あたしは永続魔法《ウォーター・ハザード》を発動！ その効果により、自分の場にモンスターがいないため《カッター・シャーク》を特殊召喚！ そのまま効果発動！ デツキから《ホワイト・ステイングレイ》を特殊召喚！」

「攻撃力たったの1600と1400！ その程度なら……」

「そしてこの2体をリリース！ おいで、深海の王者！ 《超古深海王 シーラカンス》！」

「なっ……いい、いきなり攻撃力2800の上級モンスターだと!？」

シーラカンスの登場に驚く相手の凸げき団の反応を見て、シャルクは相手の力量をおおまかにだが把握した。

下級モンスターを2体並べた時、彼はそれをリンクモンスターやエクスィーズモンスターへの布石とも思わず軽視した。また、召喚権が残っていることにも気づいていないのか、今こうしてアドバンス召喚をしたことにも驚いた顔を見せている。

見た目からして、未成年ではあるはずだ。だとすれば、自分の町に申請さえすれば大会への参加資格である「推薦状」はもらえたはず。なのにこうして凸げき団などというならず者に身を落としているならば、彼は他の大会参加者よりも遥かに弱いということ。

「手札の《神の氷結》を捨ててシーラカンスの効果発動！ デツキから《キラールラブカ》《ライトハンド・シャーク》《セイバー・シャーク》《トライポッド・フィッシュ》を特殊召喚！ これらは攻撃できず効果も無効化される！」

「た、大量に湧いてきたからって、攻撃も効果も使えないんじゃない……」
「いいや、使うようならいくらでもある！ あたしは《超古深海王シーラカンス》と《トライポッド・フィッシュ》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《海晶^{マリリンセス}乙女コーラルアネモネ》！」

「今度は攻撃力2000のリンクモンスター!?! だ……だが攻撃力2800のシーラカンスを素材にしたのはプレイングミスだろ！ どう考えてもそっちの戦力ダウンだ！」

確かに凸げき団の言う通り、ここまで攻撃力が最も高かったのはシーラカンスだ。それを素材に攻撃力の劣るモンスターを出すのは、パッと見ただけならミスにも見えるかもしれない。

だがそれはこのカードゲームを——デュエルモンスターズを知らない者にだけ許される発想だ。ただ攻撃力の高いモンスターを出せ

ば勝てるわけではないのがデュエルモンスターズであり、さらにいえばカードゲームであり、もっと遡るなら戦略ゲームというものなのだ。

あの蛮族ですら、タイラントの高打点を通すために全体破壊の能力を使ったり、そもそもタイラントを呼び出すために様々なサポートを駆使して戦っていた。ただ攻撃力だけでゴリ押しデュエルではなかった。

「……あなたはモンスターのステータスしか見てないんだね。カードにはそれぞれ与えられた役割がある。一見貧弱そうに見える下級モンスターが、苦しい逆境をひっくり返すカギにもなる。それがデュエルモンスターズの醍醐味じゃないの?」

「そういうのは貧弱モンスターしか持ってない奴がせせこましく戦う姿を正当化するための言葉だろ! オレっちみたいな優秀なデュエリストにそんな小手先の技なんて必要ねーの!」

「あっそう。ならまあ、好きにしなよ。あたしも好きにさせてもらおうから。あたしはコーラルアネモネの効果で墓地の《ホワイト・ステイニングレイ》を蘇生。ステイニングレイは蘇生された場合、チューナーとして扱うよ」

どこか失望した様子のシャルクの背後に、まるで彼女の感情に呼応したかのように、無数の魚たちの幻影が現れたことに、果たして凸げき団は気づけただろうか。

彼女の今までの戦い方と、そして彼女の見守るように現れた魚たちの幻影を見たLiveチャットは、『あれはシャルちゃんにとって禁句でしょ』『低ステータスモンスターに助けられたことのないデュエリストとかいないでしょ』『サメたちもよう怒つとる』『何気に既にパートナー入ってるの草』と呆れと怒気が入り混じった様子を見せている。

「レベル3の《キラ・ラブカ》に、レベル4の《ホワイト・ステイニングレイ》をチューニング! シンクロ召喚! レベル7、

ホワイトオーラ・モンケロス

《白闘気一角》! シンクロ召喚に成功時、墓地のシーラカンスを復活させる!

レベル5以上の水属性が表れたことで、墓地の《神の氷

《結》がセットされるよ!」

「こ、今度はシンクロ召喚?! それにシーラカンスまで戻って……!」
「続いてレベル4の《ライトハンド・シャーク》と《セイバー・シャーク》でオーバーレイ! 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築! エクシーズ召喚! ランク4、《バハムート・シャーク》!」

「リンクとシンクロだけじゃなく、エクシーズまで……! どんだけ動くんだよ! さっさとオレっちにターンを回せよ!」

凸げき団の言葉を一切無視して、シャルクはその手を動かす。

「シーラカンスは一度墓地に行つてから復活したので、効果を再び発動できるよ。手札の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》を捨てて、デッキから《ハンマー・シャーク》と《ランタン・シャーク》を特殊召喚!」

「レベル4のモンスターが2体……じゃあ今度もまた?!」

「ちよつとは学習した? あたしはレベル4の《ハンマー・シャーク》と《ランタン・シャーク》でオーバーレイ! 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築! エクシーズ召喚! ランク4、《深淵に潜む者》!」

これで2体目のエクシーズモンスター。だが凸げき団はそちらに意識が向きすぎて、もう片方のことをすっかり忘れていた。

「続いてレベル7のシーラカンスとモノケロスでオーバーレイ!」

「なっ……シンクロモンスターを素材にするのか!?!」

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築! エクシーズ召喚! ランク7、《水精鱗^{マーメイド}—ガイオアビス》!」

既に戦意が尽きかけている凸げき団に対して、シャルクは容赦なく次の手を打つ。

「《バハムート・シャーク》のオーバーレイユニットを1つ使い、効果発動! エクストラデッキからランク3以下の水属性を特殊召喚する! おいで、《餅カエル》!」

「リンクモンスター1体に、エクシーズモンスターが4体……!?!」

「《深淵に潜む者》にオーバーレイユニットがある限り、あたしの水属

性モンスターは全て攻撃力が500ポイントアップする。最低打点は《深淵に潜む者》の2200、最高打点はガイオアビスの3300。あたしはこれでターンエンド。さあ、あなたのターンだよ」

容赦なく展開したシャルクに対して、Liveチャットは『相手に何もさせる気がなくて草』『妨害いくつあるんだこれ』『ブチギレ魚群のみなさんもこれにはニツコリ』『シャルちゃんそういうところやぞ』と大いに盛り上がっており、同時に彼女の本気的一端を見てドン引きする者も中にはいた。

「お……オレつちのターン、ドロー！」

「この瞬間、《深淵に潜む者》の効果発動。オーバーレイユニットを1つ使い、このターン相手は墓地で発動する効果を使えない」

「そ……その程度ならまだ……！」

「さらにガイオアビスがいる限りレベル5以上のモンスターは攻撃できず、攻撃力3300以下のモンスターがフィールドで発動する効果はオーバーレイユニットを1つ使って無効にする。また《餅カエル》は自身をリリースして相手の発動したあらゆるカードを無効にしてあたしの場にセットする」

「な、ならモンスターを2体以上展開できれば……！」

「他にもあるよ。さつきセットした《神の氷結》は、あたしの場に水属性モンスターが2体以上いれば相手のモンスター効果を無効にするし、墓地の《キラール・ラブカ》は自身を除外して相手の攻撃を無効にするし、同じく墓地の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》を除外すればよりランクの高い水エクシーズを出せるよ」

仮に《サンダー・ボルト》か《ブラック・ホール》のどちらかを2回、あるいは両方を1回ずつ打てれば可能性はなくてもないが、生憎と凸げき団の手札にそんなカードはなく、そもそもそれらのカードはいずれも高額であるため、凸げき団のデッキにさえ入ってはいなかった。

「……サレンダーする」

「ん、じゃあ……通らせてもらおうね」

Liveデュエルを終え、デュエルディスクをポーチに入れてその

場を去ろうとするシャルクに、絡まれていたスーツ姿の男が声をかける。

「キミ、助けてくれてありがとう。これはうちの会社で作っているローラーブーツの試作品なんだが……お礼に君にあげよう!」

「あつ、ど……どうも。つてローラーブーツ? これただの厚底ブーツじゃない?」

「厚底になっている部分は取り外しができて、そこにローラーが隠れているんだ。だからわざわざ履き替えなくても、この厚底パーツを付けたり外したりすれば滑るか歩くかを切り替えられるよ! 特にそれは「無限起動」をモチーフにした都合上、ある程度の走行は電動アシストしてくれるし、とても頑丈だよ!」

「んしよつと……おお、ほんとだ。爪先に力を入れると足を動かさなくてもスイーって滑っていく!」

シャルクは多機能ローラーブーツを手に入れた!

仮にもローラーブーツは玩具の一種なのだが、その頑丈さと機能の多さにLiveチャットのコメント欄は『何その便利なアイテム』『これで移動が楽になるな』『最近の玩具すげーな』『普段から履いてれば荷物はローラーモードにした場合の厚底パーツだけか』『かさばらない! 素敵!』と困惑を隠し切れない様子。

「塗装カラーはサーマルシテイにあるドリームインダストリアル管轄のドリームショップに来てくだされば変更できますので、ぜひご利用ください! それでは!」

「おお……めちやくちや勢いあるおじさんだったな……。さて、あたしもそろそろ行こうか! 『いいもんもらえたじゃん』そうだね。爪先に力を入れてたら勝手に滑ってくれるから、こういう舗装された道なら便利だね。そうじゃないところは厚底モードかな」

Liveチャットの返事を返しながらその場を後にしていくシャルクを、凸げき団は悔し気に見送ることしかできなかった。

水属性使いの誇りにかけて

クーラントタウンに入ってすぐ、シャルクが向かったのはジムでもなければ宿でもなく、クーラントタウンの謳い文句である「海風と潮騒の街」の通り、港である。そして着くなりデツキホルダーとカバンとローラーブーツを脱ぎ捨て、海へと飛び込んだ。

海の中には、野生の——オリジナルの水属性モンスターたちが豊富に生きており、シャルクはサメ以外にもこうした水属性モンスターと触れ合うことが、このバトルシティに参加した理由のひとつでもある。

（わっ、スターフィッシュだ！ それと……横に居るのはアーマード・スターフィッシュかな？ あつちのはヒトデンチャク！ やっぱりワイルドエリアの湖と違って、こういう海にしかないモンスターに出会えるのは旅の醍醐味だよね！）

ワイルドエリアの水辺というのは基本的に淡水の湖である。そのため、海の生物はあまり多くはない。水陸どちらでも生活できる一部のモンスターを除き、多くの海に生きるモンスターは、やはりこうして海に面した街に行かなければ出会えない。

シャルクはスターフィッシュを陸に上げると、そのままカードとなくなってしまった。知能やステータスの高いモンスターならばこうはいかないが、スターフィッシュのステータスは500にも満たず、知能も決して高くはない。

そのため陸に上げられ、目の前に強いデュエリストがいれば、こうしたモンスターたちは降伏せざるをえないのだ。

「やったーっ！ 《スターフィッシュ》ゲット！ この可愛い星型……やっぱり海の生き物は最高だね！」

「あら、なかなかいいことを仰いますのね」

カード化したばかりのスターフィッシュにキスをすると、デツキには入れていないカードを収めるためのデツキホルダーに入れ、再び海に入ろうとしたところに、凜とした雰囲気を纏った少女の声がかかる。

振り返ってみれば、縦ロールのプラチナブロンドヘアをツインテールにした、いかにもお嬢様というオーラを放っている少女が、水浸しのシャルクを見ながらにこにここと笑っていた。

「あなた、水属性デツキを使っていますの？」

「うん！ 特にこれといったカテゴリには属してないけど、サメがモチーフのカードを中心にした水属性デツキ！もしかしてあなたも？」

「ええ。大会参加者なのでカテゴリまでは言えませんが、水属性を使っていますわ。いいですわよね、水属性。美しくて華やかで……まさしくデュエルモンスターズにおける高嶺の花ですわ」

「わかるー！ 水属性はキレイなのも可愛いのもいっぱい居て、それでいてトリッキーなカードもいっぱい……最高にカードゲームしてる感じがするよね！」

朗らかに笑いあうと、シャルクは堤防から立ち上がり、その少女と視線を交わす。

「あたしはシャルク！ あなたは？」

「セレブですわ。水属性使いは珍しいので、ついお声をかけさせてもらいましたけれど、よろしかったかしら？」

「うん！ この辺り浅瀬だし、あたしが使うようなサメ系のモンスターはあんまりいなかったから。あと2・3回潜つてもいいのが居なければ、ブーツ履けるように足だけ拭いてからカードショップに行くつもりだったし」

「それがいいと思いますわ。びしょびしょのままジムに行くわけにもいきませんでしょうし。そうですね……これを羽織ってお行きになつて？」

そう言つて、セレブはカバンから取り出したバスタオルをシャルクの肩にかけた。

「いいの？」

「ええ、予備はありますもの。では、わたくしは一足お先にジムに参りますので」

「ありがとう！ 次に会ったらデュエルしようね！」

去っていくセレブを見送ると、シャルクは再び海に潜った。



「ふーっ、さっぱりした!」

あの後、さらに2枚のモンスターを手に入れてカードショップの公衆浴場でシャワーを浴びると、シャルクもまたクーラントジムへと向かった。

運が良ければ、さつき別れたセレブがジムを出るところを迎えるくらいはできるかもしれない。そんなことも思いながらジムの前に到着すると、聞き覚えのある声が二つ、何やらもめているようだった。

「そのタイラント! どこで手に入れました!?!」

「知らんな。貴様には関係ない。だがデュエリストに何かを問うのであれば手段はひとつ! 俺とデュエ——」

「あーっ! 蛮族! ここで会ったが百年目! あたしとデュエルだ!」

「また来たか小娘エ! ふうん、デュエルとなれば受けて立つのがLiveデュエリスト! ここで逃げては男が廃——」

「あなた……シャルク! 今はわたくしとこの殿方のお話中でしてよ! ……はっ! まさかあなたもこの殿方を狙って……そうはいきませんわ! ならばわたくしとデュエルですわ!」

口論していたのは蛮族と、なぜかセレブ。

どうやら蛮族の持つタイラントに何か因縁があるようだが、それを遮ってシャルクが蛮族に勝負をしかけたことで、セレブは何かを勘違いしたようだ。

デュエルを挑まれたら断れないのがデュエルシティ。こんな形でセレブと戦うことになるとは思ってもいなかったが、それでも咄嗟にデュエルディスクを構えるくらいには、シャルクもデュエリストだった。

そして言葉を全て遮られた蛮族は、二人がデュエルを始めたのを見ると、そそくさと去っていった。

「オープンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

Liveデュエリストのセレブが勝負をしかけてきた！

「まずはわたくしのターンからですわ！ わたくしは手札から

《海晶乙女ブルータン》を召喚！ 召喚時の効果でデッキから

《海晶乙女マンダリン》を墓地に送りますわ！」

「マリンセス！ 水属性だと珍しいリンクカテゴリ！ まだ新しい召喚法だけど……さて、どう動くのかな？」

セレブが繰り出したモンスターは、最新の召喚法「リンク召喚」を軸とする【海晶乙女】デッキ。

シャルク自身も使用するカードではあるが、あれはあくまで「水属性の汎用リンク」という扱いで使用しているのであって、使用者の少ない水属性ということもあり、彼女は【海晶乙女】デッキの動きまでは未だに把握しきっていない。

「まずはこれがご挨拶ですわ！ わたくしはブルータン1体をリンクマーカーにセット！ 召喚条件はマリンセスモンスター1体！ リンク召喚！ リンク1、《海晶乙女ブルースラッグ》！」

「さっそくリンク召喚してきた……！ でもその低ステータス、本命は効果だよね！」

「ええ、もちろん。ですがブルースラッグの効果にチェインして、まずはブルータンの効果から処理させていただきますわ！ デッキトップから3枚をめくり、その中からマリンセスカードを1枚手札に加え、それ以外はデッキに戻します！ さて、その3枚は——」

「《貪欲な壺》《海晶乙女波動》《シーアーカイバー》ね。ならまあ、選択肢は1つきりだね」

「ですわね。《海晶乙女波動》を手札に加え、他の2枚をデッキに戻しますわ。ですが続いてブルースラッグの効果！ 墓地のマリンセスモンスターを回収します。ではブルータンを手札に戻しますわね」

手札消費0で現れたリンクモンスター。それどころか、リンク素材となったブルータンによって手札枚数は先攻にして6枚。

うち2枚は情報が割れているとはいえ、水属性らしいコストやリンクを取り戻す動きは、シャルクから見ても清々しいものだった。

Liveチャットを見てみれば、『シャルちゃん以外の水属性使い初めて見た』『しかも珍しいリンク軸の水属性デッキ!』『リカバリーの取り方も水属性らしいな』『気付いたらリスナーの水属性知識が増える……』と、驚愕と歓喜をもって受け入れられている。

「さらに手札の《海晶乙女シーホース》の効果! 自分の場のリンクマーカーの先にこのカードを特殊召喚しますわ! おいでなさい、シーホース!」

「いいねー、どんどん来るのすつごく良い!」

「さて、いつまでそんな余裕を見せていられるかしら? わたくしはシーホースをリンクマーカーにセット! 召喚条件はマリッセスモンスター1体! リンク召喚! リンク1、《海晶乙女シーエンジェル》! シーエンジェルの効果でデッキから《海晶乙女の闘海》マリッセス・バトルオーシャンを手札に加えますわ!」

2体目のリンクモンスターにより、フィールド魔法が手札に加わった。

フィールド魔法は通常、お互いの場に影響するが、今サーチされた《海晶乙女の闘海》マリッセス・バトルオーシャンのような専用フィールドは、基本的に使用者が一方的にその効果を受けられ、なおかつ自分フィールド全体に影響を与えるため、そのポテンシャルはあまりにも大きい。

その効果までは確認できないものの、フィールド魔法が手札に加わったことで、シャルクの紫色の瞳によりいっそう強い闘志が宿る。「続いて墓地のマンダリンの効果! 自分フィールドにマリッセスモンスターが2体以上存在することで、このカードをシーエンジェルのリンク先に特殊召喚しますわ! ただし、フィールドを離れた場合に除外されてしまいますけれど」

「このために落としてたんだね……! さすが水属性カテゴリー! 無駄がない!」

「お褒めに与り光栄ですわ。でも……これを見てもそう言っていないかしら? わたくしはブルースラッグとマンダリンをリンクマーカーにセット! 召喚条件は水属性モンスター2体! リンク召喚! リンク2、《海晶乙女コーラルアネモネ》!」

「出た！ コーラルアネモネ！ その子やっぱり強いよね！」

自身も使用するコーラルアネモネの登場にはしやぐシャルク。しかしそんなことにはお構いなしに、セレブの動きは止まらない。

「コーラルアネモネの効果発動！ 墓地のブルースラッグを蘇生しますわ！ そして今度はブルースラッグとシーエンジェルをリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《海晶乙女クリスタルハート》！」

「クリスタルハート……！ あたしの知らない水属性リンク……！
くうーっ、昂らざるをえないよ、こんなデュエル！ さあ、もつともつとあたしを楽しませてよ！」

「そうおっしゃるのなら、見せて差し上げますわ、わたくしの最高潮を！ わたくしはフィールド魔法《海晶乙女の闘海》を発動！」

周囲を彩る華やかな水のステージの登場に、Liveチャットも大いに盛り上がっていく。

「この舞台に咲き続ける限り、わたくしは高嶺ですわ！ コーラルアネモネとクリスタルハートをリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体以上！ リンク召喚！ 高嶺に佇む麗しき華！ リンク4、《海晶乙女ワンダーハート》！」

手札は依然として6枚。それでいて現れるリンク4モンスター。おそらくはセレブのエースモンスターであろうワンダーハートの登場に、シャルクの目が爛々と輝く。

「コーラルアネモネが墓地に送られたことで、コーラルアネモネのもう一つの効果発動！ 墓地の《海晶乙女シーホース》を手札に戻しますわ！」

「手札が全然減らない……！」

「そしてワンダーハートのリンク召喚に成功したことで、《海晶乙女の闘海》の効果が発動しますわ！ 墓地のコーラルアネモネ・ブルースラッグ・シーエンジェルの3体をワンダーハートに装備し、その枚数×600ポイント、装備モンスターの攻撃力をアップします！」

「攻撃力、4200……!?!」

「いいえ。バトルオーシャンが存在する限り、マリンセスは全て攻撃力が200ポイントアップします。ですからワンダーハートの攻撃力は4400ですわ!」

「水属性の最大の弱点である打点不足がまるで嘘みたいに……! すごい! すごいよマリンセス! こんな水属性がいたなんて!」

水属性の打点不足は、今まで何度も説明した通り最大の課題のひとつでもある。それを専用とはいえフィールド魔法1枚で解決する動きに、シャルクは驚きを隠せなかった。

だが——シャルクは既にワンダーハートの突破方法を見つけつつあった。が、しかし——、

「まだですわ! 永続魔法《サイバネット・オプティマイズ》発動!

1ターンに一度、サイバース族を召喚できますわ! おいでなさい、《海晶^{マリンセス}乙女パスカルス》! パスカルの召喚成功時、手札からブルータンを再び特殊召喚!」

「またコーラルアネモネ……? でもあれは名称ターン1制限があるし……」

「【海晶乙女】デツキだからといって、マリンセスリンクしかないわけではありませんわ。パスカルスとブルータンをリンクマーカーにセット! 召喚条件はサイバース族2体! リンク召喚! リンク2、《スプラッシュ・メイジ》!」

新たに現れたリンクモンスターは、サイバースデツキでは汎用扱いの《スプラッシュ・メイジ》だが、このモンスターには効果を使用するとサイバース族しか出せなくなる制約が存在する。

既にブルースラッグの効果を使用している以上、水属性以外のモンスターは使用できない。この上《スプラッシュ・メイジ》まで躊躇なく使用するつもりなら、彼女のデツキには水属性・サイバース族以外のモンスターは皆無に等しいのだろう。

「《スプラッシュ・メイジ》の効果発動! 墓地のブルータンを蘇生し、この2体をリンクマーカーにセット! 召喚条件は水属性モンスター2体以上! リンク召喚! リンク3、《海晶^{マリンセス}乙女マールド・ロック》!」

「リンク4に続いてリンク3……これはいよいよ最初からクライマックスだね！」

「マーブルドロックの効果で墓地のブルータンを手札に回収し……まあ、この程度でしょうか。ターンエンドですわー！」

攻撃力4400のリンク4モンスターと、攻撃力2700のリンク3モンスター。これだけ動いておきながら、手札情報の大半が割れるとはいえ消費そのものは1枚というだけでも、セレブの力量の高さが窺い知れる。

シャルクのデッキに入っているカードの中に、攻撃力4400を戦闘で突破する方法はない。《ハリマンボウ》や《キラ！ラブカ》でデバフをかけ、《深淵に潜む者》で全体強化しても、それでもやはり届きはしない。

だからこそ、シャルクはカード効果でワンダーハートを突破せざるをえないのだが――。

「ああ、先に行っておきますけれど、バトルオーシャンがある限りEXモンスターゾーンのカードは相手の効果を受けませんわよ」

「えっ。じゃあバトルで突破しなきゃどうにもならないってこと!？」

詰ん……いや、詰んではないか？ ……うん、できるかな？

まあドロ―次第かな。じゃあ行こうか！ あたしのターン、ドロ―！

「さて、お手並み拝見ですわね」

あらゆる効果を通じず、相手の手札には現時点でブルータンが確定している以上、戦闘による破壊とダメージは最低でも1回は無効になってしまう。

「アッーッ！ どうにもできねー！ 誰か壊獣をあたしにくれーっ！」

珍しく反撃の手を掴めないシャルクの様子に、Liveチャットが『シャルちゃんですら突破できないのか』『マジで!? シャルちゃん負ける!』『蛮族以外には初めてか……?』『いや、でもシャルちゃんならなんとかしそうじゃね?』と動揺する。

しかしそれでも、まったく何もできないわけではない。

「ひとまず戦線を整えるだけでもしなきゃマズい！ あたしは《カッター・シヤーク》を召喚して、効果発動！ デッキから《ランタン・シヤーク》を——」

「そうはさせませんわ！ 自分フィールドにリンク3以上のマリンセスが居ることを条件に、手札から《海晶乙女波動》マリンセス・ウエーブを発動！ 相手モンスター1体の効果をターン終了時まで無効にし、さらにこのターン、自分フィールドのモンスターは全て相手の効果を受け付けませんわ！」

「カッターの効果を止めた挙句、さらに盤面を固くしてきた……！ できれば《サイレント・アングラー》が欲しいところだけど、手札にないものはどうしようもない……。あたしは《白の救済》を発動し、バックに2枚伏せてターンエンド！」

シャルクがこうまで動きに四苦八苦する理由のひとつが、水属性の相性による問題だ。実は水属性が苦手とする相手のひとつが、他でもない水属性なのである。

永続魔法《水アクアリウム・ステージ舞アクリウム・ステージ台》や、エクシーズモンスターの《スノーダスト・ジャイアント》などを筆頭として、水属性以外のモンスターに対する妨害・デバフなどがいくつ也存在する。そのため水属性同士のミラーマッチでは、そうした一部のカードが実質的に使用不可となるのだ。

そして、《バブル・ブリンガー》などはレベルを参照する効果のためエクシーズ・リンクには効果を発揮できず、《アイスバーン》に至っては水属性およびリンクモンスターに対して無力であるため、セレブのデッキは水属性が軸でありながら、同時に水属性キラーであるとも言っている。

（やっぱ……手札の《水アクアリウム・ステージ舞アクリウム・ステージ台》が完全に死に札になった……。手札を入れ替えなきゃ絶対に死ぬ……！）

「わたくしのターンですわね！ ドロー！ いいタイミングですわね。魔法カード《手札抹殺》を発動しますわ！ お互いに手札を全て捨て、同じ数だけドローしますわよ！」

「セレブちゃんほんつとに好き！ ありがとう！ らびんらびんゆー！」

「えっ、そんなに手札悪かったんですの……?」

ほら、と言つて捨てる手札をセレブに見せると、セレブの表情が憐れむようなものへと変わるのをシャルクは見逃さなかった。

「ま、まあ庶民に等しく情けをかけるのも高貴な立場にある者の務めですわ……」

「ホントにありがとう！　じゃあ2枚捨てて2枚ドロー！」

「ではわたくしも3枚捨てて3枚ドロー。……これならまあ、悪くはありませんわね。まずは墓地のパスカルスを除外して効果発動。墓地の《海晶乙女波動》マリッセ・ウエーブを手札に戻します」

「うわーん！　また固くなったー！」

Liveチャットが『崩せねえ……』『因果応報で草』『今までやってきたことじゃん』『やられる側になるとやっぱキツイのか』とこれまでのシャルクの動きと比較する中、シャルクは身振りこそ大げさにしつつも、心では冷静に相手のフィールドを崩す算段を立てていた。

（無敵の布陣はあっても無敵のカードなんてない。あのワンダーハートにも必ずウィークポイントとなる何かがあるはずなんだ。どこだろう。戦闘・効果で突破できないなら、あの圧倒的な攻撃力を支える装備カードを全部割れれば? ……いや、待って?　そもそもあの鬼のような強化と耐性の根本となるものって――）

セレブの手札は4枚。その内、情報が割れているのは《海晶乙女波動》マリッセ・ウエーブのみ。

ただでさえ固い盤面だが、セレブがここからどう展開して攻めてくるか、劣勢のほずにもかかわらず、シャルクはワクワクしていた。

「まずは《海晶乙女ブルータン》をワンダーハートのリンク先に召喚し、効果発動。デッキから2枚目の《海晶乙女マンダリン》を墓地に送りますわ」

「またこの動き……リンク4までいくつもりだ」

「フィールドのリンク先にモンスターが召喚されたことで、手札から《シーアーカイバー》を特殊召喚。さらにフィールド上にマリッセ・モンスターが2体以上存在するため、墓地からマンダリンを蘇生しますわ。……さて、行きますわよ?」

これで再びセレブの場にはリンク召喚の準備が整った。

Liveチャットも『またあの連続リンク召喚が来る!』『今度はシーアーカイバーまでいるしな』『大丈夫? シャルちゃん死ぬ?』『また固くなるのか……』と動揺を露わにする。

「わたくしはマンダリンとブルータンをそれぞれリンクマーカーにセット! 召喚条件はどちらもマリッセスモンスター1体! リンク召喚! リンク1、《海晶乙女ブルースラッグ》! 《海晶乙女シーエンジェル》!」

「一気に展開してきた!」

「ブルータンの効果でデッキトップ3枚をめくりますわ。パスカルス・サルベージ・シーホースですわね。シーホースを加えますわ。ブルースラッグの効果で墓地のブルータンを回収し、シーエンジェルの効果でデッキから2枚目の《海晶乙女の闘海》マリッセス・バトルオーシャンをサーチしますわ!」
「ぐえーっ! あのめちやくちや固いワンダーハートの唯一の弱みであるバトルオーシャンの破壊までリカバリーとってきた!」

これで手札は5枚。4枚は情報が割れているが、だからこそこのままでは止まらないとわかってしまう。

「続いてブルースラッグとシーエンジェルをリンクマーカーにセット! 召喚条件は水属性モンスター2体! リンク召喚! リンク2、《海晶乙女コーラルアネモネ》!」

「コーラルアネモネ……! 働き者だなあお前はホントに!」

「コーラルアネモネの効果で墓地のブルースラッグを蘇生し、コーラルアネモネとシーアーカイバーをリンクマーカーにセット! 召喚条件はサイバース族モンスター2体以上! リンク召喚! リンク3、《シューティングコード・トーカー》!」

「リンク3……? もしかして、リンク4はワンダーハート1枚だけ?」

シャルクはてつきり、ここでシーアーカイバーとブルースラッグをクリスタルハートにして、そのクリスタルハートとコーラルアネモネでワンダーハートを出すのだと思っていた。

しかし出てきたのはワンダーハートでもなければマールブルドロッ

クでもなく、カテゴリすら異なる《シユーツィングコード・トーカー》であった。

そんなシャルクの疑問に、セレブは当然といった表情で答える。

「もちろんですわ。ワンダーハートはわたくしのデツキの象徴！

わたくしのエース高嶺に佇む華ですもの。エースは1体きりだからこそ映えるのですわ！」

「なるほど……。戦略よりも見栄え。セレブちゃん自身の矜持！プライドいいね、そんなにデツキを信じて愛してるなら、そりゃあそれだけデツキが応えるはずだよ！ でも……。だったらなおさらここでは止まらないよね！」

「ええー。わたくしは手札の《海晶乙女シーホース》をワンダーハートのリンク先に特殊召喚！ ブルースラッグとシーホースをリンクマーカーにセット！ 召喚条件はサイバース族モンスター2体！ リンク召喚！ 2体目の《スプラッシュ・メイジ》！」

「《スプラッシュ・メイジ》……ってことは！」

「《スプラッシュ・メイジ》の効果発動！ 墓地のシーホースを守備表示で蘇生し、この2体をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体以上！ リンク召喚！ リンク3、《海晶乙女マールド・ロック》！」

バトルオーシャンの効果で、攻撃力4400のワンダーハートと、2700のマールドロックが2体。加えて連続攻撃可能なシユーツィングコード。リンク3以上のエース級モンスターが4体も並んだこの状況に、シャルクは言葉を失った。

「マールドロックの名称ターン1効果で墓地のシーホースを回収して……。さて、バトルですわ！」

「うえっ!? 感心してる場合じゃなかった！ ヤバい！」

「まずはワンダーハートで《カッター・シャーク》を攻撃！」

「うわあああっ！」

シャルク：LP5200

「続いて2体のマールドロックの攻撃！ マリンセスサブマージ！」

「バトルオーシャンによって効果から守られているのはクリスタルハートを使用してEXモンスターゾーンに居るワンダーハートだけ！
だったら片方は止めさせてもらおうよ！ 罫カード《ポセイドンウェーブ》！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「ですが片方は通りますわ！」

「くっ……うわあっ！」

シャルク：LP2500

「最後に《シユーテイングコード・トーカー》の攻撃！ シユーテイング・コンプリート！」

「バトルオーシャンが強化するのはマリンスレスだけだよ！ だってライフで受けきれない！ ぐうううううっ！」

シャルク：LP200

「《シユーテイングコード・トーカー》が狙いをつけられるのはモンスターのみ……順番が変わっていてもライフは残っていた、というわけですわね。まあいいですわ。バトル終了。わたくしはカードを1枚セツトして、ターンエンドですわ」

4体のエース級リンクモンスターの連続攻撃をなんとか凌ぎ切り、ライフを残したシャルクだが、このターンでバトルオーシャンを攻略しなければ次のターンで間違いなくやられる。

いや、仮にこのターンでバトルオーシャンを破壊できても、既にセーブの手札には2枚目のバトルオーシャンが確定しているため、このターンで仕留めるか、次のバトルオーシャンを妨害するカードが出せなければ終わりだ。

この絶体絶命の状況に、今まではなんだかんだ言いつつもシャルクの逆転を信じていたLiveチャットたちが狼狽え始めた。

「あたしのターン、ドロロー！ ……本当ならそういう固い盤面はさ、ひとつひとつ丁寧に崩していくべきなんだろうけど……でもごめんね、あたし蛮族（まんのうぢ）から学んだことがあるんだ」

「学んだこと……う？」

「どんなに固い盤面でも、荒ぶる海のように全てを呑み込んでしまえば関係ないんだよ！ まずは《白の水鏡》（ホワイト・ミラー）を発動！ 墓地から《カツ

ター・シャーク』を蘇生して、デッキから同名カードを手札に加える！　そしてそのまま効果を発動するけど……止めるよね？」

「もちろんですわ！　手札から《海晶乙女波動》マリネセス・ウエーブ発動！　《カッター・シャーク》のモンスター効果をターン終了時まで無効にし、このターンわたくしのマリネセスは相手の効果を受け付けませんわ！」

おそらくは囷だということは、セレブにもわかつている。しかし《カッター・シャーク》は魚族デッキにとって初動の中核。これを見過ごすわけにはいかない。

「まだ召喚権は残ってる！　手札から《セイバー・シャーク》を召喚し、効果発動！　自身と《カッター・シャーク》のレベルを1つずつ下げろ！」

「レベル3のモンスターが2体……来ますわね！」

「うん！　レベル3となった《セイバー・シャーク》と《カッター・シャーク》でオーバーレイ！　2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！　エクシーズ召喚！　ランク3、《超量機獣グランパルス》！」

「グランパルス……？　知らないモンスターですわね。ロボットにしては可愛い見えた目をしていますけれど」

外見は確かに可愛いですが、セレブにとっては最も忌むべきカードであることを、この時の彼女は知らなかった。

「グランパルスの効果発動！　オーバーレイユニットを1つ使い、相手の魔法・罫カードを1枚破壊する！　あたしが破壊するのは当然バトルオーシャン！」

「なっ……！　わ、わたくしのバトルオーシャンが……！　わたくしを彩る輝きの舞台が……！」

グランパルスの放った魚雷によって崩れ去るバトルオーシャンを見て、それを精神的支柱としていたセレブだけでなく、場のマリネセスたちもまたそのステータスを一気に落とした。

「バトルオーシャンが失われたことでセレブちゃんのマリネセスたちのステータスは全て元に戻る！　けどその手札に2枚目のバトルオーシャンがある以上、装備カードを纏ったワンダーハートはこのま

まにしておけない！ 墓地の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》を除外し、効果発動！」

「そのカードは、わたくしの《手札抹殺》で捨てていたカードの片方……！」

「自分の場のエクシーズモンスターを、ランクが1つ高い水属性エクシーズにランクアップさせる！ あたしはランク3のグランパルスでオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！ 狡猾なる脅威の牙！ ランク4、《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》！」

ついに現れたシャルクのエースモンスターの登場に、『やっと来た！』『おまたせ、待った？』『ううん、今きたところ』『こないで』『帰ってもいいよ』とLiveチャットは安堵の声を洩らす。

とはいえ、シャークドレイクだけではあの堅牢な守りを突破できない。だからこそ、Liveチャットはシャルクの動きに注視した。

「そしてあたしは装備魔法《白のヴェール》をシャークドレイクに装備！」

「《白のヴェール》……!? ですがそのカードのデメリットは……！」
「あれ、知ってる？ なら詳しい説明は省くけど、まあその通り。この装備魔法が破壊されたらあたしは3000のダメージを受けて負ける。けど……ここまで「魅せるデュエル」であたしを楽しませてくれたセレブちゃんには、あたしも全力で応えなきゃデュエリストの名折れってものだよ！」

破壊されれば3000ポイントの自爆ダメージ。あまりにも重すぎるデメリットに、Liveチャットは『そんなリスクを背負ってまで使うカードなのか？』『知らんな。誰か効果わかる？』『俺もってる！ 確かにこの状況なら強い！』『俺も！ このカードなら逆転ワンチャンある！』と疑い半分、逆転へのワクワク半分といったところ。
「そ……その効果が通る前に、罠カード《貪欲な瓶》を発動！ 墓地の手札抹殺・クリスタルハート・シーエンジェル・スプラッシュユメイジ・マリッセン・ス・ウエーブ海晶乙女波動をデッキに戻して1枚ドロウしますわ！」

「構わない。行くよ！ シャークドレイクでマールブルドロックを攻撃

！ この瞬間、《白のヴェール》によって相手は魔法・罨をダメージステップ終了時まで発動できず、相手の場の魔法・罨の効果を無効にする！」

「元々、これらの魔法・罨はバトルオーシャンがなければ、相手ターンでは意味のないカードたちですわ。ですが攻撃は通しません！ マーブルドロックの効果発動！ 手札のマリンセスモンスターを捨てることで、この戦闘による破壊とダメージを無効にしますわ！」

セレブの手札から《海晶乙女シーホース》マリンセスが墓地に送られ、破壊とダメージが止められる。

しかし、戦闘そのものを行ったことで、シャルクの仕掛けていた反撃の一手が確定した。

「罨カード発動！ 《かっとピング・チャレンジ》！ 自分のバトルフェイスに攻撃したエクシーズモンスターに再び攻撃する権利を与え、そのバトルで攻撃する時、相手はダメージステップ終了時まであらゆるカード効果を発動できない！」

「なっ……！ で、ですがお忘れではなくて？ 《海晶乙女波動》マリンセス・ウエーブによってわたくしのモンスターは全て相手の効果を——」

「忘れてないよ！ この効果で封じるのは相手モンスターの効果の発動じゃなくて、モンスター効果を含むカード効果の発動をしようとする「相手の行動」！ よって《海晶乙女波動》マリンセス・ウエーブには阻害されない！」
ついにシャルクの放った反撃の牙が、セレブの堅牢な守りを突破した。

「行け、シャークドレイク！ マーブルドロックに2度目の攻撃！ デプスバイト！」

「マーブルドロックが……！ いえ、あのカードを装備している以上、このままでは……！」

セレブ：LP7700

「装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊したことで《白のヴェール》の効果が発動！ 相手の魔法・罨カードを全て破壊する！」
「くっ……！ 恐れていたことが……！」

バトルオーシャンを失い、ワンダーハートの耐性が失われたのにも

関わらず、シャルクがワンダーハートを狙わず装備カードだけを全滅させた狙いが、今になってようやくセレブにも理解ができた。

バトルオーシャンがワンダーハートに対して強固な耐性を与えるのは、それが「クリスタルハートを素材としてEXモンスターゾーンに置かれたマリンスェス」だからだ。クリスタルハートを素材にしていれば、そのマリンスェスリンクモンスターは圧倒的な効果耐性を得られる。

しかし問題は、3枚のリンクモンスターを装備できるのが「EXデッキに置かれたマリンスェス」だけ、それもリンク召喚時のみという点だ。

バトルオーシャンを一時的に失えば、そのステータスは元に戻ってしまい、装備カードを失えば再びバトルオーシャンを発動しても上昇値はたったの200ぽっち。しかもEXモンスターゾーンを埋めたままでは装備カードを付け直すこともできない。

「シャークドレイクにも追加攻撃できる効果があるけど、《かつとビング・チャレンジ》もシャークドレイクも、攻撃の権利を追加できるのは一度まで。あたしはバトルを終了し、《白の救済》の効果で墓地の《カッター・シャーク》を回収してターンエンド」

サメの猛攻と、歌姫の防御。どちらも一進一退のデュエルはまだ、終わりが見えない。

高嶺の華

シャルクとセレブのデュエルは、今まで制圧と妨害を繰り返してきたシャルクにとって因果応報とも言えるようなスタートを切った。ただし、固い守りという意味では同じでも、その根本となる並びはまったく違うものだ。

シャルクの場合、相手の行動を制限・妨害することで味方を守りつつ相手を苦しめる動きを得意とするが、セレブの防御戦術は自分のモンスターに対する効果を一切受け付けない強固な「耐性」をつけることで自分だけではなくモンスターも守り抜き、水属性とは思えない高打点で戦うデツキ。

その上で、相手の行動を妨害するカードもしつかり備えており、自分を守るための「防御」と相手を縛るための「防御」が同時にできている。故にシャルクは攻め手が遅れ、2ターン目にしてライフ200まで追い込まれてしまう。

しかし、シャルクも水属性使いとしてのプライドがある。セレブの堅牢な守りを貫く牙を研ぎ澄まし、ついには彼女のキーカードである《海晶乙女の闘海》マリセンス・バトルオーシャンを突破するが――。

「わたくしのターン！ まずはマールブルドロックの効果で墓地から《海晶乙女シーホース》マリセンスを回収」

「まあ、バトルオーシャンは使わないよね……」

「ええ。わたくしはカードを1枚セットして、ターンエンドですわ」
「攻撃の手が止まった……？ いや、セレブちゃんのことだし絶対何かあるはず……」

これまでの戦いから、彼女の動きが防御に徹したものだということにはわかってはいる。

だからこそ、魔法・罨ゾーンの圧迫が失われた今、彼女のセットカードが放つ威圧感は今までの比ではない。

「あたしのターン、ドロロー！ マールブルドロックの攻撃耐性が固いのはマズいよね。つてことで速攻魔法《手札断殺》を発動させてもらうね。お互いに手札を2枚捨てて2枚引こっか！」

「マーブルドロックのコストがマリンスモンスターに限定されているのをわかっていて、それ以外のカードを引かせるための断殺ですね……」

「そういうこと！ セレブちゃんの手札にブルータンとシーホースがあるのを見えてるからね！」

これで手札の情報はまったくわからなくなったが、マリンスモンスター以外のカードを引いた確率も決してゼロではない。

さつきまでは「確定で2回止められる手札」だったが、今は「最大で2回止められるかもしれない手札」となっただけで十分。その上――

「あつ、今セレブちゃん顔を顰めたね。ってことは最低でも1枚は、マリンスモンスターじゃないカードが来ちゃった感じ？」

「しまつ……いい、いいえ！ そんなことありませんわ！」

「あはは、セレブちゃんは素直だなあ。でもだからって容赦しないよ！ 手札から《深海のディーヴァ》を召喚！ 効果でデッキから《深海のアーチザン》を特殊召喚するよ！」

「……通しますわ」

さつきまではまったく自由に動けていなかったが、《手札断殺》でも恐れていた《海晶乙女波動》マリンスモンスター・ウェーブは引かれていなかったことに、シャルクだけでなくLiveチャットもが安堵の様子を見せる。

「シンクロの起点になるこれを通すなら、召喚・特殊召喚に対する妨害はないと思っていみたいだね。なら遠慮なく！ 《深海のアーチザン》の効果発動！ デッキトップを1枚墓地に落として、墓地のカタージャークを蘇生するよ！」

墓地に落ちた《神の氷結》を一瞥すると、そのまま視線を目の前のフィールドに戻す。

「レベル1の《深海のアーチザン》と、レベル4の《カッター・シャーク》に、レベル2の《深海のディーヴァ》をチューニング！ シンクロ召喚！ レベル7、《白鬮ホワイトオーラ・モノケロス気一角》！」

「シンクロモンスター……！ それにさつき落ちた《神の氷結》は……！」

「そう、モノケロスの召喚にチェインして、墓地の《神の氷結》の効果発動！ レベル5以上の水属性が特殊召喚に成功したことで、このカードをフィールドにセットできる！ そしてモノケロスの効果で墓地の《カッター・シャーク》を蘇生する！」

攻撃はできないが、これでエクシーズの起点である《カッター・シャーク》が現れたことで、シャルクの動きがより激しくなっていく。《カッター・シャーク》の効果発動！ 自分の場の魚族モンスター1体のレベルを参照し、それと同じレベルの魚族をデッキからリクルートする！ あたしが選ぶのはレベル7の《白鬪気一角》！ホワイトオーラ・モノケロス よってデッキからレベル7の《超古深海王シーラカンス》を特殊召喚！

「現れましたわね！ 水属性デッキの真骨頂！」

「レベル7のシーラカンスとモノケロスでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！

ランク7、《水精鱗―ガイオアビス》！」

「EXモンスターゾーンに……？」

ルール改定後の新マスタールールでは、エクシーズ召喚されたモンスターはEXモンスターゾーンとメインモンスターゾーンのどちらにも出すことが可能である。

シャルクのデッキには必ずEXモンスターゾーンに出さなければならぬリンクモンスターのコーラルアネモネが入っている以上、本当ならEXモンスターゾーンを開けておくのが好ましいはず。

だというのに、わざわざEXモンスターゾーンを埋めた彼女のプレイングに、セレブは警戒心を示した。

「さらに！ シャークドレイクのオーバーレイユニットを2つ取り除いて、手札の《エクシーズ・リモーラ》の効果発動！ このカードを特殊召喚し、墓地の《カッター・シャーク》と《セイバー・シャーク》を蘇生するよ！」

「これでレベル4のモンスターが4体……！」

「レベル4の《カッター・シャーク》2体と、レベル4の《セイバー・シャーク》《エクシーズ・リモーラ》でそれぞれオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召

喚！ ランク4、《バハムート・シャーク》！ 《深淵に潜む者》！
これでエクシーズモンスターが4体。《深淵に潜む者》は守備表示
だが、得意の墓地封印とフィールドのモンスター効果妨害が存在しつ
つ、全体の攻撃力も高い今が、最大の攻撃チャンス。

「バハシャの攻撃力はキープしたいから、このままバトル！」

「そのバトルフェイズ開始時にリバースカードをオープン！ 《儀水
鏡の反魂術》！ まず反魂術の効果でワンダーハートをエクストラ
デッキに戻し、墓地のブルータンとシーホースを回収しますわ！」

「EXモンスターゾーンを開けてきた……。なら狙えるのは1体だけ
か。なら、シャークドレイクでシューティングコードを攻撃！ デプ
スバイト！」

「きやあつ！」

セレブ：LP7000

シャークドレイクの素材は既に一つも残っていないため、追撃はで
きない。

他のモンスターでマールドロックを攻撃しても効果で破壊もで
きずダメージも与えられない。手札コストを払わせることはできる
が——しかし。

「バトル終了。メイン2で《バハムート・シャーク》の効果発動。オー
バーレイユニットを1つ使い、エクストラデッキから《牙鯨帝シャ
ーク・カイゼル》を特殊召喚！ そしてシャークカイゼル1体でオー
バーレイ！」

「カード効果もなしで、エクシーズモンスターを素材にエクシーズ召
喚を……。!?!」

「1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築！ ランク
アップ・エクシーズチェンジ！ ランク4、《F.A.ブラック・レイ
ランサー》！」

「ブラックレイランサー……。なかなかわたくし好みの見た目ですわ
ね」

「それは光栄だけど、残念ながらこの子はあたしの大事な仲間だから
あげられないね！ あたしはこれでターンエンド！」

バハシャ餅という選択肢もないわけではない。特に自分が優勢なこの状況において、詰めの一手として《餅カエル》は極めて優秀だ。しかしそうだとしても、シャルクにはこの瞬間、ブラックレイランサー以外の選択肢はなかった。

セレブの使用するマリONSEスは、サイバース族らしく手札からの展開を軸として高リンクモンスターを出す動きを得意とする。しかし手札から出す効果の大半は「手札から発動する効果によって自発的に現れるもの」「フィールドの効果によって呼び出されるもの」「墓地の効果によって呼び出されるもの」の3つによるものだ。

その内、墓地の効果による展開は《深淵に潜む者》によって、フィールドの効果による展開はガイオアビスで警戒済み。恐ろしいのは手札から自発的に現れるモンスターのみ。しかし――。

（深淵とガイオアビスを処理しない限り、セレブちゃんに許されるのは手札からの展開だけ。見えてる手札情報から考えられるのは、ブルータンに召喚権を使い、シーホースをマールドロックのリンク先に特殊召喚するはず。手札の1枚はバトルオーシャンだから、次のドロを含めて不明情報は3枚。マールドロックのコストに何枚残すつもりかな？）

そう、シャルクは敢えて《餅カエル》を出さないことで、セレブの手札消費を加速させるために展開手段を残したのだ。

現在、セレブの持つ5枚の手札のうち、情報が割れているのはブルータン、シーホース、バトルオーシャンの3枚。次のドロで手札が6枚になるため、不明情報は3枚となる。

その内、果たして何枚を展開に使用し、何枚をマールドロックのコストに残すか。これがシャルクの仕掛けた賭けだった。

「わたくしのターン！」

「そのドロフェイズに《深淵に潜む者》の効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、このターン相手は墓地で発動する効果を使用できなさい！」

「構いませんわ！ わたくしは手札から《海晶乙女ブルータン》を召喚！」

「その召喚時、ガイオアビスのオーバーレイユニットを1つ使って効果発動！ 相手の場に存在する攻撃力3300未満のモンスターの効果を全て封じる！」

ここでブルータンがマンドリンをデッキから落としても、深淵によつて墓地効果は封じられてはいる。しかし返しのターンでゲームセットに持ち込めなかった場合のことを考えれば、ここで動きを止めるのは悪手ではない。

また、同時にマールドロックのサルベージ効果を封じられたのも大きい。現在のところ、彼女の墓地に手札に戻せるマリッセスは存在しないが、コーラルアネモネをエクストラデッキに戻されても厄介だからだ。

「そちらは困ですわ！ 手札から《海晶^{マリッセス}乙女シーホース》をマールドロックのリンク先に特殊召喚し、手札の《シーアーカイバー》の効果発動！ このカードもまたマールドロックのリンク先に特殊召喚しますわ！」

「水属性モンスターが3体……マールドロックを維持するつもりならリンク3？ ……いや、3枚目の「あのカード」を使えば！」

「お気づきになられたようですわね。わたくしは《シーアーカイバー》とシーホースをリンクメーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2！ 3枚目の……《海晶^{マリッセス}乙女コーラルアネモネ》！」

マールドロックの効果は消えても、リンクモンスターとしての性質であるリンクメーカーは当然ながら消えることはない。

マールドロックがメインモンスターゾーンに置かれていたおかげで、セレブはリンク先の空白を残しつつコーラルアネモネのリンク召喚に成功した。

そして、コーラルアネモネのリンク先が空いているということは一

「コーラルアネモネの効果発動！ 墓地のブルースラッグを自身のリンク先に——」

「この瞬間、罨カード《神の氷結》を発動！ 自分の場に水属性モンス

ターが2体以上存在する時、相手モンスターの効果を無効にし、攻撃を封じる！」

「しまっ……い！」

「このカードをセットしてたことはセレブちゃんにも見えてたはずだけど……勝負を焦ったね。もつとも、そうさせたのはあたしだけだ」そう、シャルクの狙いはここだった。セレブのワンダーハートに対する信頼と、ワンダーハートをエクストラデッキに戻したことで、返しのターンでワンダーハートを出そうとすることは見えていた。だからこそ、セレブに精神的威圧を与えて動きを誘導する必要があった。

そのためシャルクはマールドロックへの追撃を敢えて行わずセレブに手札を残させ、墓地効果とフィールド効果を封じ、餅カエルを敢えて出さないことでコーラルアネモネを誘い出した。あの時見えていた手札だけでも、コーラルアネモネを出すだけなら十分に可能だったからこそ読めていた。

そしてその手札が見えていてなお、もう1体のマールドロックではなくワンダーハートに戻したなら、既にもう1体水属性を出す方法があったことは明らかだった。

故に彼女はその「謎の1体」と「コーラルアネモネ」を誘き出しつつ、ワンダーハートに至らせないための手段を講じ、そこから意識を逸らせるよう深淵とガイオアビスを出したのだ。

「ガイオアビスの効果を止めないってことは手札に《海晶乙女波動》マリONSES・ウエーブはないってこと。そしてエクストラを圧迫しがちなマリンセスで、セレブちゃんはワンダーハートを1枚残し、リンク3のマールドロック2体はフィールドと墓地。その上でシューティングコードも使った。コーラルアネモネ3枚採用なら、3枚目のマールドロックなんて余裕はないよね？」

「くっ……い！」

もしも3枚目のマールドロックが存在するのなら、彼女の性格上シューティングコードではなく3枚目のマールドロックが既に現れているはずだ。

そこまで見抜いた上でのこの状況。セレブだけでなくLiveチャットまでもが、シャルクの観察力と駆け引きのいやらしさに驚愕していた。

「このために《深淵に潜む者》を守備表示でエクシーズ召喚したんですのね……。このワンダーハートを封じることができるという確信があったからこそ、あなたのライフを削り切るには攻撃力2500のマーブルドロックで攻撃力2200の《深淵に潜む者》を攻撃するしかありませんもの」

「そうだね。仮に今マーブルドロックに攻撃されて《深淵に潜む者》がいなくなっても墓地封印はこのターン中は有効だし、セレブちゃんのフィールドで2番目に攻撃力が高いのは2000のコーラルアネモネ。だけどその場合、あたしの場の最低打点は2300に戻ったブラックレイランサーだからね」

「……わたくしはカードを2枚セットして、フィールド魔法《海晶乙女の闘海》マリッセス・バトルオーシャンを発動！」

「なっ……。なんでこのタイミングで!? 確かにそのフィールド魔法なら攻撃力が上がるけど、それでもブラックレイランサーには届かないのに……!」

あの魔法・罠カードがブラフか攻撃反応型なら、シャルクの装備魔法《白のヴェール》によって封じられてしまう。仮にフリーチエーンだったとしても、防御系のカードを多く採用している彼女のデッキに、《白のヴェール》を破壊できる《サイクロン》系統のカードはそう多くはないだろう。

だったらむしろ、マーブルドロックの効果を使うためのコストとなるマリッセスモンスターのだミーとして手札に握ったままの方がシャルクにプレッシャーがかかり、ガイオアビスの最後のオーバーレイユニットを使わせるはず。

そうでなくとも、バトルオーシャンは現時点では戦略的になんの意味もない。ここまでシャルクを追い詰め続けたセレブが、それを理解していないはずはない。なのに――。

「このフィールド魔法、《海晶乙女の闘海》マリッセス・バトルオーシャンは、わたくしを高嶺へと至

らせてくれるカード。この舞台が在り続ける限り、わたくしもまた高嶺で在り続ける！ たとえ勝負には負けても……わたくしは高嶺の華として散りますわ！ わたくしはこれで、ターンエンド！」

「高嶺へと至る舞台……。セレブちゃんが、高嶺でいるための世界……。そんなもの、デュエルの結果にはなんの意味もないのに……。戦略的になんの意味もないのに……。でも……。カッコいいよセレブちゃん！ このデュエル、最も自分らしく自分のカードを信じぬいたのはセレブちゃんだ！」

「……さあ、やりなさい」

セレブの凜とした眼光が、シャルクを捉えた。

「……うん！ あたしのターン！ あたしは魔法カード《貪欲な壺》を発動！ 墓地のディーヴァ、アーチザン、グランパルス、カッター、リモーラの5体を戻して2枚ドロー！」

「……………」

「《深淵に潜む者》を攻撃表示に変更し、深淵とガイオアビスの効果発動！ 相手の墓地効果とフィールドのモンスター効果を封じる！

ただし《深淵に潜む者》のオーバレイユニットがなくなったことで、攻撃力は元に戻る！ さあ……バトルに入るよ！」

シャルクの胸に、今までになかったモヤモヤした何かが募る。

なぜセレブはたった1枚のフィールド魔法にあれほどこだわるのか。無意味なプレイングをするのか。それがカードを信じるということなら、自分はもしや誰よりもカードというものを信じないデュエリストなのだろうか。そんな思いがぐるぐると渦を巻く。

だがそれでも——たったひとつだけわかることがある。

このデュエルでセレブは、シャルクにはない「何か」を示してくれた。

それがなんなのか、今はまだわからないが……。それでも彼女が示して見せてくれたものは、きっとこれからのシャルクを変えるだろう。

だからこそ——シャルクは今、このデュエルに、どうしようもなく勝ちたい！

「いくよ！ まずはガイオアビスでマールブルドロックを攻撃！ アビ

スライジング！」

「きゃあああああつ！」

セレブ：LP6900

「くっ……ですがシャークドレイクでなくて幸いでしたわ！ マーブルドロックが破壊されたこのタイミングで、罨カード《海晶乙女雪花》マリンスェス・スノーを発動！ エクストラデッキから、マーブルドロックよりもリンクマーカーの数が少ないマリンスェスをリンク召喚しますわ！」

「マーブルドロックのリンクは3……リンク2以下で最も攻撃力の高いリンクモンスターはコーラルアネモネだけど、それはもう3体とも使っちゃってる。なら次点のブルースラッグ……？」

「いいえ。わたくしのデッキに採用されているブルースラッグとシーエンジェルは共に2枚。既にどちらも使用している以上、使えるマリンスェスはたった1枚」

「たった1枚……？ でも……じゃあ、その1枚……！」

「そう！ わたくしの信頼するワンダーハートは無理でも、その魂たるこのモンスターだけは、たとえ負けるとしても共に居てもらいますわ！ 現れなさい、リンク2！ 《海晶乙女クリスタルハート》！」

セレブのフィールドに現れたのは、攻撃力0のクリスタルハート。

ここまで来れば、もはや無意味なプレイングと吐き捨てることは許されない。あれは——クリスタルハートは、セレブの魂の象徴なのだ。

自らの在り処をバトルオーシャンに定め、自らの魂と共に散る覚悟を決めた彼女のデュエルに、Dド—LライIイVブEのリスナーだけでなく、シャルクまでもが魅せられた。

「クリスタルハートがEXモンスターゾーンに特殊召喚されたことで、バトルオーシャンの効果発動！ 墓地のマーブルドロック、コーラルアネモネ、ブルースラッグをクリスタルハートに装備！ 全体強化と合わせて、攻撃力2000！ そして《海晶乙女雪花》マリンスェス・スノーの効果でクリスタルハートは相手の効果を受けませんわ！」

「……ッ！ なら速攻魔法《エクシーズ・インポート》を発動！ セレブちゃんのフィールドに存在する、シャークドレイクよりも攻撃力の

低い特殊召喚されたモンスター1体を、シャークドレイクのオーバードレイクユニットに変換する！ 対象はコーラルアネモネ！」

「まだですわ！ 速攻魔法《ハーフ・シャット》を発動！ クリスタルハートの攻撃力を半分にするので、このターン戦闘では破壊されませんわ！」

「さすが、防御に関しては固い……！ でも、それでもこのデュエル、絶対に勝ちたいんだ！ バトルフェイズは続行中！ シャークドレイクでブルータンに攻撃！ デプスバイトォ！」

「くっ……きやあああああっ！」

セレブ：LP5800

「シャークドレイクが戦闘で相手モンスターを破壊したことで、シャークドレイクと《白のヴェール》の効果が発動する！ まず白のヴェールで相手の魔法・罠を全て破壊し、シャークドレイクの効果で戦闘破壊したモンスターを弱体化させて引きずり出し、再び攻撃の権利を得る！」

「バトルオーシャン……！ よく、わたくしを高嶺へと支え続けてくれましたわ。あとは……わたくしとクリスタルハートがお相手しますわ！」

バトルオーシャンと装備魔法の崩壊。《ハーフ・シャット》のおかげで攻撃力が0に戻ることはなかったが、それでもクリスタルハートの攻撃力はたったの1000。

それでも……彼女の瞳から高嶺の光が消えることはない。

「わかったよセレブちゃん……本気なんだね。だったら……シャークドレイク！」

セレブの覚悟に、シャルクの魂の炎が燃え盛る。

「シャークドレイクのオーバードレイクユニットを1つ使い、ブルータンの攻撃力を1000下げてセレブちゃんのフィールドに蘇生する！

そして攻撃だけ……これは連続攻撃じゃなくて追加攻撃の権利を得る効果！ だからまずはこっちからだ！ 行け、ブラックレイラ

ンサー！ ブルータンに攻撃！ ブラックブライトスペアー！」

「ぐっ……ううっ……！」

セレブ：LP4000

「続いてバハムートシャークでクリスタルハートを攻撃！ ゴツドボイス！」

「くうっ……！」

セレブ：LP2400

「《深淵に潜む者》でクリスタルハートを攻撃！」

「くっ……耐えて、みせますわ……！ わたくしの魂が、耐え続ける限り！」

セレブ：LP1700

「これで最後だ！ シャークドレイクでクリスタルハートに……セレブちゃんの魂に攻撃！ デプス……ッ、バイトオオオッ！」

「——お見事ですわ」

セレブ：LP0

同じ魂を宿す者として

「ブラヴオー！　ありがとう、すごく楽しいデュエルだったよ、セレブちゃん」

「それは、Liveデュエリスト冥利に尽きますわね。でも残念ですわ。あの男には用がありましたのに」

「あ、そうなの？　じゃああたしがアイツをぶっ倒した後で……ってもういない！　あのクソ蛮族すぐいなくなるな！」

デュエルを終え、本来の目的であった蛮族を探そうと周囲を見渡すと、既に彼の姿は残っていないかった。

しかし、戦いは終わっても、シャルクの胸には一つだけ、燻り続けているものがあつた。

「えつと、セレブちゃん……」

「なんですの？」

「最後のセレブちゃんのターン、セレブちゃんは《白のヴェール》で破壊されることをわかった上で、《海晶マリンセス乙女の闘海》を発動してたよね。

いくらお気に入りのカードだとしても、クリスタルハートと違って最後まで一緒にいられるわけじゃないってわかってるのに、なんで……？」

そう、セレブの最後のターン、彼女はシャークドレイクに装備された《白のヴェール》の効果を理解した上で、破壊されるとわかっていながらフィールド魔法を発動した。

彼女がバトルオーシャンのことを心の支えにしていることは理解できる。だとしたら、なおのこと破壊されることがわかっていれば発動しない——できないはずなのだ。だからこそ、シャルクはあの時のセレブの判断をどうしても聞きたかった。

「……あなたには、信頼するカードはありますか？　それはモンスターでも魔法でも罫でもいい。ただ、「このカードと一緒になら絶対に大丈夫」と思えるような、そんなカードが」

「信頼するカード……。あたしのお気に入りは、《No. 32 海咬龍 シャーク・ドレイク》だけど……それはあくまで、この子があたしの

デッキで一番攻撃力が高くて、フィンニツシャーになりやすいから、戦略の中心にしているってだけだ。そこに特別な感情はないよ」

「だとしたら、あなたにはまだわからないでしょう。わたくしがどれだけ説明しても、きつと納得はできませんわ。わたくしはワンダーハートと共に居れば負けない気がしますし、バトルオーシャンが在ればどんな状況でも臆することなく戦えますわ。それが「信頼するカードに支えられる」ということですよ」

信頼するカードに支えられるデュエル、あるいはデュエリスト。それは即ち、運と知識と戦略がモノを言うカードゲームにおいて、「戦略」を支えるものが自分自身ではなく自分の使う駒^{カード}だと認めること。

これまでカードを戦略の道具として使い続けてきたシャルクにとつては、まったく理解のできない思想だ。だがそれでも、シャルクはそんなセレブの言葉を笑って流すことはできないでいた。

事実として、セレブのデッキは1ターン目からワンダーハートが現れ、バトルオーシャンが発動し、あの強固な防衛能力を見せつけた。それは、彼女のデュエルを、あるいは彼女自身を、カードたちが支えようとしていたからだと考えれば、納得もいく。

「……確かに、今のあたしにはまだわからない。カードは戦略を支える道具であつて、デュエリストを支えるものじゃないって思つてる。けど……セレブちゃんの言葉が嘘だとも思えない。なんだろ、勝負には勝つたのに、デュエリストとして大切な部分で、負けた気がするよ」
「そのようですね。ですが、そう思えるのなら、あなたがカードの心を知る日もそう遠くはないと思いますわよ。……それでは、わたくしはここで。またいつか、リベンジさせていただきますわ」

そう言うと、セレブはクーラントジムに背を向けて歩いていってしまつた。

残されたシャルクは、しばらくその場に立ち尽くすも、ぶんぶん頭を振って迷いを払いのけると、クーラントジムの中に入つていった。



「ようこそ！ デュエルシティ参加者のLiveデュエリストですね！ ここまでの戦績を確認するため、デュエルディスクをお借りしますね！ ……14勝2敗。はい！すでに10勝以上されているのでジムリーダーにチャレンジできます！ 頑張ってくださいね！」

二日目にしてもう二人目なんて、今年の参加者は勢いが凄いですね、と言われて、シャルクは一人目が誰なのか、すぐに見当がついた。そもそも、ジムの目の前でセレブと揉めていたところからして、あれはクーラントジムをクリアした直後の出来事だったのだろう。そうなると、朝早くにウインドミルタウンを出てギリギリ午前中に到着したシャルクが先んじられるとなれば、彼は昨日の内にクーラントタウンに着いていたのだろう。

パッと見た限りでも、蛮族の年齢はシャルクよりも4〜5歳ほどは上だろう。デュエルシティ・ジュニアリーグには10歳から参加可能であるため、おそらく初参加ということはあるまい。だが、彼の戦略のメチャクチャさとはかくとして、実力はほかでもないシャルクが誰よりも知っている。

そんな彼が、どうして誰よりも早くジムに挑む必要があるのか。単に強いから？ 効率よくデュエルシティを攻略したいから？ 前者はありえる。シャルクすら下すあの実力なら、十分に考えられるだろう。だが後者はない。あんなデュエルをする人間が「効率」などというものを求めるとは思えないというのが、シャルクの判断だ。

だからこそ、追いつきたい。彼が何を求め、どんな景色を見ているのか。どれだけの強さを持てば、彼と同じ「前に誰もいない景色」を見えるのか。その答えを見つけ出すためにも、このデュエル——セレブからもらったヒントから答えを導き出すいい機会だ。

ジムスタッフに先導され、スタジアムへと繋がる通路を、俯きながら歩いた。考えて、考えて、考えて——そしてわかった。考えてもわからないということが。

きつとセレブの出したヒントが導く答えは、デュエルの中にしかないのだ。だとしたら、このクーラントジムはその答えを見つけない

打ってつけ。なぜなら、このジムのリーダーは――。

「ようこそ、クーラントジムへ！ アタシはこのクーラントジムのジムリーダーを務める珊瑚！ あんたがチャレンジャーのシャルクだね？」

「はい！ 珊瑚さんのことは、小さい頃から憧れでした！ クーラント水族館のショーのお姉さんとして、無数の水属性モンスターと共に泳ぐさまは、まるで本物のマーメイドのようで……」

「ああ、アタシはそっちのアタシのことを知ってるんだね。でも嬉しいね。水族館の華役とはいえ、ショーのお姉さんなんてそう名が通るものでもないだろうに」

「いいえ。あたしは珊瑚さんを知って、将来の夢が決まりました。あたしは水族館の飼育員になりたい。水属性モンスターの……サメのいいところをもっと色んな人に知ってほしい！ そのためにこの大会に参加したんです！ だからこそ……今はあなたに全力で勝ちたい！」

シャルクの将来の夢。それはプロデュエリストでもなければ、Diverでもなく、水族館の飼育員。サメと共に泳ぎ、サメと共に生きたい。そして多くの人にサメのことを知ってほしい。そんな夢のために、デュエルを学んでこの大会に挑んだ。

デュエルを真剣に極めようとするデュエリストにとっては、不純な夢なのかもしれない。デュエルに真っ向から向き合っていない、そんな最低なデュエリストなのかもしれない。だとしても――それでもいい。

デュエルで勝ち続ければ――サメを活躍させ続ければ、チャンピオンになれば、人々は絶対にサメを見てくれる。サメの恐ろしさも、カツコよさも、否が応でもわかってくれる。そう思っ、彼女はデュエルディスクを構えた。

「ふっ……あはははっ！ サメのよさを知ってほしい、か！ いいね、いい夢じゃないか！ 何も、全てのLiveデュエリストがプロになれるわけじゃない。リーグに参加しなきゃプロには行けないし、デュエルに関係する会社にだって枠は決まってる。だから、誰がどんな目

的でデュエルをしても自由だ。それに……水族館の仲間になるかもしれないなら、なおさら失礼なデュエルはできない！」

「珊瑚さん……」

「でも、だったら厳しくいかせてもらうよ、シャルク！ アンタが本気でサメを愛してるなら、アタシの全力に伝えてみな！ いくよ——！」

ジムリーダーの珊瑚が勝負をしかけてきた！

「オープンチャンネル！ Liveデュエル、オンエア——！」

先攻は——シャルク。

「まずはあたしのターンからです！ あたしは手札の《トライポッド・フィッシュ》を墓地に送り、魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！ デツキからレベル1の《鱒っ子姫》を特殊召喚します！」

「《鱒っ子姫》……いいカードだね。それに墓地に落ちたあいつも……なるほど、やるじゃないか」

「特殊召喚された《鱒っ子姫》の効果発動！ 自身を除外して、デツキからレベル4以下の魚族モンスター1体を特殊召喚する！ あたしは《カッター・シャーク》を特殊召喚！」

初っ端から展開されるシャルクのエクシーズの起点、《カッター・シャーク》だが、珊瑚はそんなシャルクの使うカードの効果を見透かしているかのように、落ち着いた様子で彼女の動きを見守っていた。「さらに《カッター・シャーク》の効果発動！ デツキから自身と同じレベルの魚族を1体、守備表示で特殊召喚する！ あたしは《ランタン・シャーク》を特殊召喚！ そしてこの2体は水属性のエクシーズ召喚に使用する場合、レベル3〜5の好きな数字として扱う！」

「いいね、さっそく来るか！」

「あたしは《カッター・シャーク》と《ランタン・シャーク》をレベル5として扱い、オーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク5、《ヴァリアント・シャーク・ランサー》！」

シャルクのデツキでは序盤から現れ、彼女と幾度となくデュエルを共にしてきたモンスター、《ヴァリアント・シャーク・ランサー》の背

中を見て、シャルクはふとあることに気づいた。

今まで、彼女はずっとデュエルをする時、対戦相手を見ていた。それは対戦相手の表情や視線の動きを見て、相手が引いたカードをどう捉えているのか、相手が破壊されたくないカードはどれかを見極めるためであり、それもまた盤外ではあるものの戦略のひとつとしてやっていたことだ。

だが——だからこそ彼女はずっと見逃していた。共に戦うモンスターターの背中。自分を守ってくれるカードたちの表情や想い。それらからずっと、目を背け続けていた。

「シャークランサー……」

「どうしたシャルク！ アンタのターンはまだ続いてるんだ、ポーっとするのはやめな！」

珊瑚の呼びかけに、シャルクはハッと気づくと、意識を目の前の対戦相手に向けなおした。

「……っ！ あ、あたしはこのターン、まだ通常召喚を行ってない！

手札から《ライトハンド・シャーク》を召喚して、効果発動！ デツキから《レフトハンド・シャーク》を手札に加える！」

「召喚権が残っているとはいえ、既に攻撃力2500のシャークランサーが出ている状態で、わざわざ攻撃力の低い標的を用意した……？
ってことは、まだ動くつもりだね！」

「もちろんです！ 魔法カード《浮上》を発動！ 墓地からレベル3以下の水・魚・海竜族モンスター1体を守備表示で特殊召喚します！」

あたしは《トライポッド・フィッシュ》を蘇生し、効果発動！ 墓地から蘇ったこのカードのレベルを、3から4に上げる！」

「これでレベル4のモンスターが2体……やっぱりね！」

シャルクのフィールドに2体のモンスターが並んだことで、珊瑚もまたこの後の動きを察したかのように警戒する。

「レベル4の《トライポッド・フィッシュ》と《ライトハンド・シャーク》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《バハムート・シャーク》！」

シャルクのフィールドに現れるサメと竜の特徴を併せ持ったモンスター、《バハムート・シャーク》は、彼女のデュエルにおける攻防のどちらにおいても支え続けたモンスター。

そして同時に、この大会に参加する直前、ワイルドエリアで自らシャルクに接触し、彼女のカードとなった唯一のモンスター。だからこそ、シャルクの瞳にはその背中があまりにも心強く映る。

「《バハムート・シャーク》のオーバーレイユニットを1つ使い、効果発動！ エクストラデッキからランク3以下の水属性エクシーズを特殊召喚する！ あたしはランク3の《牙鯨帝シャーク・カイゼル》を特殊召喚！」

「シャークカイゼル……？ 先攻1ターン目なら、妨害に秀でた《餅カエル》じゃ……？」

「もちろん餅も強いけど……でも、この子を出すためにはシャークカイゼルじゃなきゃダメなんだ！ あたしはランク3のシャークカイゼルでオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！ ランク4、《F A ーブラック・レイ・ランサー》！」

シャルクのフィールドに現れた3体のエクシーズモンスターたち。いずれもシャルクを幾度となく助けにくれたモンスターばかり。

そんな彼らに守られるかのように立つシャルクは、その口元を緩ませると、どこか納得したように笑い声を洩らした。

「ぶっ、ふふふっ……あははははっ！ なんだ、こんなことだったんだ！ こんな……当たり前で、いつだって目の前にあったものだったんだ……。あたしが今まで、ずっと見過ごしてきたものは……！」

「シャルク……？」

「珊瑚さん。あたしはあなたに憧れて、デュエルの世界に飛び込んだ。元々、戦略ゲームは得意だったし、カードゲームなら誰にも負けない自信があった。そんな中に、サメモチーフのカードがあったから、あたしはすぐそれに食いついた。でも……あたしはデュエルモンスターズを「カードゲーム」としてしか見てこなかったんだ」

デュエルモンスターズは、世界中の誰もが当然のように知っている

カードゲームであり、ルールを知らなくてもテレビでプロのデュエルを見ない日はないだろう。

何年か前からは、D—LIVEという動画配信サイトでもデュエルの生配信が行われるようになって、Liveデュエルというものも注目されるようになった。

だがカードゲームである以上、シャルクにとってデュエルモンスターズとは「エンターテイメント」ではなく「戦略ゲーム」の一種であったのだ。戦略のためのコストとして自らのカードを犠牲にすることも、相手をブラフにかけることも、罠に嵌めることも、それがルールに反しなければ批難される理由などない。そう思っていた。

事実として、デュエルモンスターズの公式はそうしたプレイングを否定はしない。むしろ戦術として、それを推奨している節もある。だがそれでも——人に見られる云々の前に、彼女は省みなければならぬものから目を逸らし続けていたのだ。

「デュエルモンスターズはカードゲームだ。それは間違いない。でもそれ以上に、デュエリストとデュエリスト、そしてデュエリストとデッキとの交流なんだ！ 対戦相手と向き合わず、デッキのカードとも向き合わないデュエルなんて、そんなのデュエルモンスターズである必要なんてない！ あたしは——デュエリストでありたい！」

「……なるほど。アンタの中で燻つてたもの、それが今ようやく小さな火になったようだね。でも……そんな小さな火じゃアタシを倒すことなんてできない！ もっとだ……もっと熱く燃やしな！」

「もちろん！ あたしはバックにカードを1枚セットして、ターンエンドです！」

シャルクのターンが終わり、今度はいよいよ珊瑚のターン。

本来ならどんなカードで攻めてくるのか警戒するはずだが、シャルクもまるでさっきの珊瑚のように、彼女がどんな動きをするのかわかっているかのごとく、冷静な瞳を相手へ向けていた。

「アタシのターン、ドロワー！ フィールド魔法《忘却の都レミューリア》を発動！ このカードが存在する限り、全ての水属性モンスタールの攻撃力は200ポイントアップする！」

「あたしの場のモンスターは全て水属性。よってシャークランサーが2700、バハムートが2800、レイランサーが2500になりま
す」

「もちろんわかってるさ。あたしは手札から《水精鱗―アビスパイク》を召喚し、効果発動！ 手札の《水精鱗―アビスヒルデ》を捨てて、デッキから《水精鱗―オーケアビス》を手札に加えるわ！」

珊瑚の使用してきたカードは相手ターンにも容赦なく展開することとで有名な【水精鱗】デッキ。

ジムリーダーを対策するため、リーグ本戦でのジムリーダーたちの戦いを予習していたことと、それ以上に元々彼女に憧れていたシャルクにとっては、彼女がこのカテゴリーを使用することはわかっていた。

「手札から捨てられたアビスヒルデの効果発動！ 手札のオーケアビスを特殊召喚！ そして今度はオーケアビスの効果！ アビスパイクのレベル以下の水精鱗をデッキから特殊召喚し、その後アビスパイクを墓地に送る！ あたしはデッキから《水精鱗―アビスディーネ》を特殊召喚し、アビスパイクを墓地へ！」

「いきなりレベル3のモンスターを2体並べてきた……！ だけどランク3くらいなら……！」

「おっと、そう焦んないでほしいね。あたしは水精鱗の効果によって特殊召喚されたアビスディーネの効果発動！ 墓地からアビスヒルデを特殊召喚する！」

普段なら、レベル3が3体のこの状況、エクシーズの前触れと警戒して疑わなかっただろう。しかしもしも彼女の手札に「あのカード」があるとすれば、ランク3などという甘い状況にはなりえないということ、シャルクは知っていた。

「さらに魔法カード《白の水鏡》を発動！ 効果の説明は必要かい？」
「墓地の魚族を蘇生し、同名カードをサーチする……。手札のやりくりが重要な水精鱗では、そこまで強力なカードになるんですね……！」

「さすがに水属性使い、わかってたか。じゃあ遠慮なく。墓地から《水精鱗―アビスパイク》を蘇生して、デッキから2枚目のアビスパイ

クをサーチするよ。そしてこれで、アタシのフィールドには水属性モンスターが4体並んだ！」

「やっぱり、狙いはレミューリア……！」

さすがにカテゴリにまでなると把握してないカードもあるが、水属性あるいは魚族のサポートとなれば、シャルクもたいがい効果を把握している。

そして、珊瑚が最初に発動したフィールド魔法《忘却の都レミューリア》もまた、水属性の全体サポートとして、その効果を記憶していた。

「やっばバレてたか。フィール魔法《忘却の都レミューリア》の効果発動！ 1ターンに一度、自分の場の水属性の数だけ、自分の水属性モンスターのレベルを上げる！ アタシの場にいる水属性は4体！

よってすべての水精鱗マーメイルのレベルを4つ上げる！」

「これでレベル7が3体とレベル8が1体……！」

「そう！ アタシはレベル7となったオーケアビスとアビスヒルデでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク7、《水精鱗マーメイル—ガイオアビス》！」

シャルクもしばしば制圧の一手として使用する大型エクシーズモンスター、ガイオアビス。

これまでは仲間として共に戦ってきたが、こうして対峙すればその威圧感は並大抵のそれではない。

「さらに！ アタシはアビスパイクとアビスディーネをリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水・魚・海竜族モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《水精鱗マーメイル—サラキアビス》！」

「サラキアビス……！」 戦闘・効果で破壊するとデッキから水属性を墓地に落とし、墓地の水属性を蘇生する。実質的なリクルート効果……！」

「ん？ ああ、そうだね。水属性の汎用リンク扱いするならその通りだ。でも使うのが【水精鱗マーメイル】では……それだけじゃない。そしてガイオアビスがサラキアビスのリンク先に居る限り、相手はレベル5以上のモンスターでは攻撃できず、オーバーレイユニットを1つ使えば攻

撃力3500以下のモンスター効果を使用することもできない！」

これでシャークランサーの破壊効果とレイランサーの耐性効果、そして《バハムート・シャーク》の展開効果も封じられた。

そして攻撃力3000以下の効果を封じられたということは、シャルクのデッキでガイオアビスの効果を抜けられるモンスターはいない。こういう時、頼みの綱となる《深淵に潜む者》も、それ自身が攻撃力1700であるため、ガイオアビスに効果を封じられてしまう。

あるいは装備魔法で強化すれば抜けられるかもしれないが、今のところシャルクの手札は先程サーチした《レフトハンド・シャーク》のみ。現状ではどうしようもない。

「でも……ならせめてオーバーレイユニットは削らせてもらいます！」

あたしは《ヴァリアント・シャーク・ランサー》の効果発動！ 1ターンに一度、《バハムート・シャーク》のオーバーレイユニットを1つ使い、相手モンスター1体を破壊する！」

「させないよ！ ガイオアビスの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使うことで、相手の場の攻撃力3000以下のモンスター効果を封じる！」

「ですよね……。それでも、これで次のあたしのターンが来れば、ガイオアビスは効果を使わざるをえない。そうすれば、少なくとも次の珊瑚さんのターンからは動ける！」

「くっ……やってくれるね。アンタのそういう水属性使いらしい機転の良さ、嫌いじゃないよ。でも、だからこそここでライフを奪う！」

バトルだ！ ガイオアビスでシャークランサーを攻撃！ アビスライジング！」

「うわあああああつー！」

シャルク：LP7200

先制ダメージを与えたのは珊瑚。やはり同じ水属性使いとしての年季は、そのまま知識と経験となって彼女の戦略を支えている。

そして何より、彼女は自分のモンスターたちを心から信頼している。その信頼に応えようと、デッキもまた彼女を支え、助けようと動いているようにも見える。セレブとのデュエルで、デュエリストと

デッキの関係性が少しずつ見え始めてきたシャルクには、それがじんわりと理解できた。

「まだサラキアビスが残ってはいるけど、こいつの攻撃力は1800……。さすがにどうしようもないね。アタシはバトルを終了。メイン2でカードを1枚セットして、ターンエンド!」

珊瑚のターンが終了し、シャルクにターンが回る。

セレブに続き、二度目の水属性使いとの対戦。Liveチャットもまた、『動きはいつもと同じなのに、なんか雰囲気違うな』『いつもみたいな険しい表情してないな』『相手を自分の意図に嵌めた時のシニカルな笑顔もないな』『なんか、純粹に楽しいデュエルしてる感じがする』と、彼女の異変に気付き始めていた。

勝ちたいのは、勝たなければならぬのは今までも同じ。デュエルは戦略だというスタンスも、相手を嵌めて自分のペースを保つスタイルも変わってはいない。だが——それでも彼女の中に、今までとは決定的に違う「何か」が生まれつつあった。

「あたしのターン! まずセットしていた《ギャラクシー・サイクロン》を発動! 相手のセットカード1枚を破壊する!」

「伏せを警戒してきたか……でも残念だったね! 破壊されたのは《アビスコイン》! セットされているこいつが破壊された時、相手モンスター1体を墓地に送る! 狙いは《バハムート・シャーク》!」

「シャークランサーに続いて、バハムートまで……!」

「さらに! 相手ターンに手札を1枚捨てることで、サラキアビスの効果発動! デッキから水精鱗1体を手札に加える! アタシは手札の《水精鱗—アビスグンデ》を捨て、デッキから《水精鱗—アビスリンデ》をサーチする!」

手札1枚コストにすることで水精鱗をサーチする効果。確かに強力な効果ではあるが、問題なのは効果の方よりも——、

「そしてこの瞬間、コストとして捨てられたアビスグンデの効果発動! 墓地の水精鱗1体を特殊召喚する! アビスディーネを守備表示で特殊召喚!」

「アビスディーネが《水精鱗》の効果で特殊召喚されたことは……

！」

「そう！ アビスディーネの効果が発動する！ 墓地の《水精鱗マーメイル—オーケアビス》を守備表示で特殊召喚！」

これで珊瑚のフィールドには水属性モンスターが4体。次の彼女のターンまでに相手モンスターを減らせなければ、2体目のガイオアビスが確定してしまう。

「あたしは手札から《サイレント・アングラー》を特殊召喚！ このカードはあたしのフィールドに水属性モンスターが存在する時、特殊召喚できる！ さらに《レフトハンド・シャーク》を通常召喚！」

「レベルは4と3……なら狙いはリンク召喚か」

「今のあたしにできるのはこれしかない！ あたしは《サイレント・アングラー》と《レフトハンド・シャーク》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《海晶マリルンセス乙女コーラルアネモネ》！」

今までは、何の変哲もないただのカードだったはずだ。なのに——

「一緒に戦って、セレブちゃん！ あたしはコーラルアネモネの効果発動！ 墓地のトライポッドを蘇生する！」

「させない！ ガイオアビスの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、攻撃力3500以下の攻撃力を持つモンスターの効果をターン終了時まで無効にする！」

「でもこれで、ガイオアビスのオーバーレイユニットは全て消えた！ バトルだ！ ブラックレイランサーで、サラキアビスを攻撃！ ブラックブライトスピアー！」

「くうっ……い！」

珊瑚：LP7200

「だけど！ 相手によって破壊されたサラキアビスの効果発動！

デッキから《水精鱗マーメイル—アビスディーネ》を墓地に送り、墓地から《水精鱗マーメイル—アビスパイク》を守備表示で特殊召喚して効果発動！ 手

札のアビスパイクを捨て、デッキからアビスグンデを手札に加える！」

「これでまた水属性が4体……！ だけどまだバトルは終わっていない！ 続いてコーラルアネモネでオーケアビスを攻撃！」

「くっ……オーケアビスは破壊されるけど、守備表示だからダメージは受けない！」

これで珊瑚のフィールドにモンスターは3体。それもレベルを持つモンスターはレベル3と4でバラけている。

このままならリンク2のサラキアビスが出てくる程度で済むかもしれないが、既に彼女の手札にはレベル3のアビスグンデが確定している。

「バトルを終了し、あたしはこれでターンエンド！」

これでガイオアビスの効果が終了し、効果と共に失われていたブラックレイランサーの攻撃力が、再び2300から2500へと戻る。また、ガイオアビスの素材がなくなったことで、レベル5以上の攻撃も可能となった。次のターンで逆転の一手を講じれば、あるいは——そう、誰もが思うかもしれない。

しかしシャルクは違った。次のターンが来ればどうにかなる。そんな甘い考えが通じる相手ならば、彼女はジムリーダーにはなれなかっただろう。まして相手はシャルク自身が「憧れ」とまで称したデュエリスト。ならばこそ、そのデュエルは苛烈にして鮮烈だ。

「アタシのターン、ドロロー！ 魔法カード《サルベージ》を発動！ 墓地のアビスヒルデとオーケアビスを手札に戻す！ さらに今戻したオーケアビスを通常召喚して効果発動！ 場のアビススパイク以下のレベルを持つ水精鱗^{マーメイル}をデッキから特殊召喚し、アビスパイクを墓地に送る！ アタシはアビスリンデを守備表示で特殊召喚！」

「ガイオアビス1体と、レベル3が3体……！ またレミューリアの効果が来る！」

「フィールド魔法、レミューリアの効果！ アタシの場のアビスディーネ、アビスリンデ、オーケアビスのレベルを7にして、アビスディーネとオーケアビスでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク7、

《水精鱗——ガイオアビス》！」

「2体目のガイオアビス……!」

「まだまだ! オーバーレイユニットのないガイオアビスとアビスリンクデをリンクマーカーにセット! 召喚条件は水・魚・海竜族モンスター2体! リンク召喚! リンク2、《水精鱗マメイール—サラキアビス》! これで、サラキアビスのリンク先にいるガイオアビスの攻撃力は500アップする!」

これで再び、レベル5以上のモンスターは攻撃を封じられ、攻撃力3500以下のモンスターは効果まで封じられてしまった。

しかもこのターンに発動できるモンスター効果は、シャルクのフィールドにはない。さっきのようにオーバーレイユニットをシャルクの意味で減らす算段すらないのだ。

「確か、FA化したブラックレイランサーには戦闘・効果での破壊をオーバーレイユニットに肩代わりさせる効果があったわね。なら先にガイオアビスの効果を使わせてもらおうわ。オーバーレイユニットを1つ使い、攻撃力3500以下の相手モンスターの効果を封じる!」

「ブラックレイランサーが自身の効果で上昇していた数値は効果無効とともになくなり、レミューリアの影響と合わせて攻撃力2300となるよ」

「バトル! ガイオアビスでブラックレイランサーを攻撃! アビスライジング!」

「くっ、あああああっ!」

シャルク：LP6000

一気に1200ポイントのダメージを受けたシャルクだが、それでもまだ彼女の瞳の中の小さな火は消えてはいない。

それどころか、まるでその小さな火が灯火となって、希望への道筋を照らしているかのようにすらあった。

「アタシはこれでターンエンド! さあ、かかってきな、シャルク!」
ターンがシャルクへと回り、彼女の指がデッキトップのカードに触れる。

今までは感じ取ることなく漠然と引いていたドロークカード。しか

し今は、まるでデッキが生きて彼女を勝たせようとしているかのように、その鼓動を感じ取れた。

「あたしの、ターン！……よし！　まずはコーラルアネモネの効果発動！　墓地のライトハンドを蘇生する！　そしてライトハンドがいれば、墓地のレフトハンドをレベル4として蘇生できる！」

「だったらコーラルアネモネの効果にチェーンしてガイオアビスの効果！　オーバーレイユニットを1つ使い、このターン相手は攻撃力3500以下の効果を使用できない！」

「でもそれは、効果処理時に場に存在したモンスターの効果を封じるだけ！　発動後に召喚したモンスターに、その影響はない！」

「くっ……！　やっぱりガイオアビスの効果の穴を理解してたか……！　でもあそこで止めなきやランク4が出てた。止めないわけには……！」

シャルクの誘導にまんまと引っかかった珊瑚の様子を見て、『出た！　シャルクちゃんの意識誘導だ！』『コーラルアネモネとことん無効にされてて草』『まるでコーラルアネモネがシャルクちゃんをガイオアビスから守ってるみたいだ』と騒ぎ始めるLiveチャット。

しかしその捉え方は実際のところとても近いものがあった。コーラルアネモネは召喚してからずっと、シャルクの戦略を守るかのように自身の効果を犠牲にし続けている。彼女の戦略を——否、彼女自身をコーラルアネモネが支えるかのように。

「ありがとう、コーラルアネモネ。だったらここからは、逆転の一手だ！　あたしはチューナーモンスター《深海のディーヴァ》を召喚し、効果発動！　デッキから《深海のアーチザン》を特殊召喚！　さらにアーチザンの効果でデッキトップを墓地に送ることで墓地の《ライトハンド・シャーク》を効果無効状態で蘇生する！」

デッキトップから落とされた《エアール・トルピード》をちらりと見ると、内心ガッツポーズをしながらも、シャルクはそのままフィールドに視線を戻す。

「レベル4の《ライトハンド・シャーク》と、レベル1の《深海のアーチザン》に、レベル2の《深海のディーヴァ》をチューニング！　シ

「白闘気……！」
ホワイトオーラ、モノケロス

「モノケロスの効果発動！ 墓地の《カッター・シャーク》を特殊召喚し、そのまま《カッター・シャーク》の効果発動！ モノケロスのレベルを参照し、それと同じレベルの魚族モンスターをデッキからリクルートする！ モノケロスのレベルは7！ よってデッキから——現れる！ 《超古深海王シーラカンス》！」
「そのモンスターは……！」

水属性使いならば、知らないはずのない魚族の代名詞、シーラカンスの登場に、ようやく珊瑚の表情から僅かに余裕の色が消えた。

「さらに墓地に送られた《エアール・トルピード》の効果発動！ 墓地のこのカードとシャークカイゼルの2枚を除外し、デッキからカードを2枚ドローする！ お願い、来て！ ……ドローッ！」

「アーチザンで墓地に送ってたのはあのカードか……なるほど、アンタもなかなかデッキに愛されたいデューリストじゃないか！」

「うん……デッキのカードたちは、いつだってあたしのことを信じて、愛してくれていた……。あたしがそれに見向きもしなかっただけ。あたしがそれに応えようとしなかっただけ。でも……今ならもうわかる。この子たちの想いが！ だからこそ負けられない。自分のためだけじゃない……共に戦ってくれるこの子たちのためにも！」

何が変わり、何が変わらなかったのか。それを明確に言い表せる者は、本人であるシャルクを含めて誰もいない。それでも、彼女のデューエルを見続けてきたリスナーたちは、そんな彼女の変化を間違いなく認めていた。

カードとデューリストとの関係。それはリスナーたちも『デューリストとカードの信頼か』『なんかわかるよな。デッキも使い続けていると手に馴染んでくるし』『あるある。組んだばかりのデッキは全然回らないんだよな』『うん。でも少しずつ欲しいカードが欲しい時に来てくれるようになる』と認めていた。

彼らの言う通り、それは決してシャルクが特別なわけではない。デッキを作ったばかりの頃は、デッキのカードはてんで回らないこと

も少なくない。だが少しずつカードを理解し、改良を重ね、何度も何度も使い続けるうちに、だんだんデッキが自分のプレイングに馴染んでくる。そんな感覚は、デュエリストなら誰にでもあるはずだ。

「あたしは手札から《神の氷結》をコストに、シーラカンスの効果を発動！ デッキから《キララー・ラブカ》と《ハリマンボウ》を特殊召喚！」

「レベル3のモンスターとレベル7のモンスターがそれぞれ2体ずつ。いや、ゼンマイティの効果は確か……！」

「あたしはレベル3の《キララー・ラブカ》と《ハリマンボウ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク3、《発条空母ゼンマイティ》！」

シーラカンスからのゼンマイティ。見覚えのある動きに、Liveチャットのリスナーたちは『いつもの』『うわ出た』『パターン入った』『ヒエツ、ゼンマイティ！』とトラウマを刺激されている。

「続いてレベル7の《白鬪気一角》ホワイトオーラ・モノケロスと《超古深海王シーラカンス》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク7、《水精鱗ガイオアビス》マーメイル！」「アンタも、ガイオアビスを……!? け、けど！ そっちのガイオアビスの攻撃力は3000！ あたしの3500のガイオアビスには敵わない！」

「まだまだよ！ ゼンマイティの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、デッキから《ゼンマイシャーク》を特殊召喚！」

「これで再びレベル4のモンスターが2体……！ 来るね！」
「いいえ、2体じゃありません！ 永続魔法《白の救済》ホワイト・サルベージを発動！ 墓地の《サイレント・アングラー》を手札に加えて、そのまま自身の効果で特殊召喚！」

レベル4のモンスターが3体。その布陣を見て、珊瑚はその目を大きく見開いた。

「レベル4の《カッター・シャーク》《ゼンマイシャーク》《サイレント・アングラー》でオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 狡猾なる脅威の牙！」

ランク4、《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「その、ナンバーズは……！」

「そう！ このナンバーズは珊瑚さんの切り札でもある《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》！ あなたに憧れてデュエリストになって、あたしがありつたけのお小遣いを使って手に入れたレプリカのナンバーズ！ レアリティで言えば珊瑚さんのオリジナルには敵わないけど……でも、この子はあたしが誰よりも上手く使える！ そう信じてる！」

そう、珊瑚のエースモンスターはシャルクと同じ……いや、シャルクのエースこそが珊瑚と同じシャークドレイク。

そして、珊瑚の持っているシャークドレイクは、この世界に100枚存在するオリジナルのナンバーズのうち、32番目を意味するオンリーワン。

レアリティだけでなく、オリジナルである以上、そのシャークドレイクには意思が宿っている。だからこそ、シャークドレイク自身の意思が、珊瑚を助けようとベストなタイミングで最高の力を発揮する。「バトルに入ります！」

「なるほど、先にサラキアビスを戦闘破壊することでガイオアビスの攻撃力を下げて、ガイオアビス同士で相討ちさせるのが狙いか！」

「だったらメインフェイズ終了時にサラキアビスの効果発動！」

「させない！ ガイオアビスの効果発動！ このターン、相手は攻撃力3000以下のモンスター効果を使用できない！」

「けど、効果は無効になってもコストにされたアビスグンデの効果は発動する！ 墓地からガイオアビスを蘇生！」

「構いません！ このままバトル！ コーラルアネモネでサラキアビスを攻撃！」

「ぐっ……きやあああつ！」

珊瑚・LP6800

「けど……サラキアビスの効果で、デッキからアビスタージを墓地に送って、墓地のアビスディーネを守備表示で蘇生し、アビスディーネの効果で墓地のアビスリンデを守備表示で蘇生する！」

「まだ止まりません！ シャークドレイクで前のターンから居たガイオアビスに攻撃します！」

「なっ……この状況でまだ相討ち狙い!?」

「それは違います！ さつきゼンマイティの効果が発動する時にオーバーレイユニットとして墓地に送られた《ハリマンボウ》の効果が発動しています！ よって、ガイオアビスの攻撃力は500ポイントダウンしています！」

これでガイオアビスの攻撃力は2300。シャークドレイクとの戦闘で一方的に倒すには十分な数値となった。

「やっちゃえ、シャークドレイク！ ガイオアビスを攻撃！ デプスバイトオ！」

「くっ……まずい！ シャークドレイクの効果は……！」

珊瑚：LP6300

「シャークドレイクが戦闘で相手モンスターを破壊したことで効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、相手モンスターの攻撃力を1000下げた状態で蘇生し、再び攻撃する権利を得る！」

「ガイオアビスの力を弱らせた上で何度でも喰らいつく……サメらしい獍猛な力だね！」

「もう一度やっちゃえ、シャークドレイク！ もう一度ガイオアビスを攻撃！ デプス、バイトオオツ！」

「きゃああああああつ！」

珊瑚：LP5300

シャークドレイクの連続攻撃を受け、一気に1500ポイントのライフを削られる珊瑚であったが、それでも未だガイオアビスは1体だけとはいえ健在。

シャルクのフィールドにはオーバーレイユニットを残したガイオアビスが残っている以上、彼女とてガイオアビス同士の相討ちは望みはしないだろう。むしろ、味方を犠牲にするのならシャークドレイクの攻撃はこちらのガイオアビスに向け、弱体化したガイオアビスにシャルクのガイオアビスが攻撃するはずなのだ。

「まだまだ！ ガイオアビスでアビスディーネを攻撃！ アビスライ

ジングー！」

「くっ……さすがに見逃してはくれないか！」

「続いてゼンマイティでアビスリンデを攻撃！」

「くうっ……でも今度はアビスリンデの効果がある！ アタシはデッキから《水精鱗―アビスタージ》^{マーメイル}を特殊召喚し、効果発動！ 手札のアビスグンデを捨て、アビスパイクを回収！ そして捨てられたアビスグンデの効果で、墓地のガイオアビスを蘇生するよ！」

これで再び2体のガイオアビスが並んだ。そしてアビスタージを含めば水属性が3体。次のターン、手札のアビスヒルデとアビスパイクの効果を絡めれば、3体目のガイオアビスが出る可能性は高い。

「あたしはこれで、ターンエンド！」

「なるほど、同じ水属性使ってだけでも面白いのに、まさかエースまで同じだなんて……ほんと、最高のデュエルだよ！ でも、シャークドレイクを一番使いこなせるのは他でもないアタシ自身！ その座だけは譲れないね！ アタシのターン、ドロー！」

シャークドレイク使いとしての意地が、ぶつかる――。

向き合うべきもの

「アタシのターン、ドローー！」

同じシャークドレイクをエースとして従えるデュエリストとして、何よりも水属性使いのジムリーダーとして、珊瑚がこのデュエルに懸ける思いは、他のチャレンジャーに対するそれよりも遥かに熱く燃えていた。

まして、自分に憧れてデュエリストになったという少女が、「誰よりもシャークドレイクを上手く使える」などと言えば、彼女のその想いに応えるためにも手加減はできなかつた。

「アタシは手札から《水精鱗―アビスパイク》を召喚し、効果発動！

手札の《水精鱗―アビスヒルデ》を捨てて、デッキから3枚目の《水精鱗―アビスタージ》を手札に加える！」

「アビスヒルデをコストにした……ってことは！」

「そう！ アビスヒルデの効果で手札のアビスタージを特殊召喚できる！ 現れる、アビスタージ！」

「これでレベル4のモンスターが3体……来るッ！」

ついに現れる。珊瑚のエースモンスターにして――初めて水族館でデュエルショーを見た時、マーメイドかと思紛うかのような美女が操っていた、真の海の帝王が。

「アタシはレベル4の《アビスタージ》2体と《アビスパイク》でオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシース召喚！ 獰猛なる深海の牙！ ランク4、《No. 3 2海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「来た……！ これが珊瑚さんのエースモンスター……オリジナルのシャークドレイク No. 32！」

シャルクの従えるシャークドレイクは「憧れ」の象徴だ。だが憧れでは理想には届かない。それをわかっているからこそ、珊瑚の「理想」の牙は鋭く力強くシャルクに向けられる。

2体のシャークドレイクの対峙に興奮したのは、シャルクだけではない。Liveチャットのリスナーたちもまた、『シャークドレイク

vs シャークドレイク!』『実はシャルちゃんが使ってるの知ってか
らずっと期待してた』『同じエースモンスター同士の戦いつてロマン
だよな!』と熱く沸いている。

「まずは魔法カード《エクシーズ・ギフト》を発動させてもらうよ!
自分フィールドにエクシーズモンスターが2体以上いることで、
シャークドレイクのオーバーレイユニットを2つ取り除き、2枚ド
ローする!」

「ここでドローはキツイ……!」

「いいカードを引いたよ。アタシは続けて《貪欲な壺》を発動! 墓地
のサラキアビス2枚とアビスグンデとアビスディーネ、そしてアビス
タージをデッキに戻して2枚ドロー!」

「リンク2枚はエクストラ行きだから、デッキ枚数的には実質3枚戻
して2枚ドロー。デッキ枚数の増加を最小限に抑えてきた……!」

これで珊瑚の手札は3枚。そのどれもが公開情報なし。普段通り
の爽やかな雰囲気をつつたポーカーフフェイスも一切崩れておらず、表
情から彼女にとって有益なカードが引けたのかそうでないのかすら
察せられない。

「まずはバトル! アタシは海咬龍シャークドレイクでゼンマイテイ
を攻撃! デプス・バイト!」

「ゼンマイテイが……! でも守備表示だからダメージはない、けど
……!」

「そう、アンタも知ってる通りシャークドレイクの効果が発動する!
オーバーレイユニットを1つ使い、戦闘破壊したゼンマイテイの攻
撃力を1000ポイント下げて相手の場に引きずり出し、再度攻撃す
る権利を得る! 今度こそ噛み砕け、シャークドレイク! デプス・
バイト!」

「くっ……うわあああああつ!」

シャルク：LP5500

「まだ終わらないよ! アタシのガイオアビスで、アンタのガイオア
ビスを攻撃! アビスライジング!」

「迎え討てガイオアビス! アビスライジング!」

2体のガイオアビスが起こした津波がぶつかり合い、互いに波の中へと呑み込まれて破壊されていく。

ついに、シャルクのフィールドに残されたのはシャークドレイク1体のみ。珊瑚のフィールドにはまだ攻撃権の残ったもう1体のガイオアビスが残っている。

「アンタの墓地にゼンマイティの素材として抱えられたまま墓地に送られた《キララー・ラブカ》がいることは見えてるよ。でも、その効果は一回きり。しかも対象を選べない！ だったここで使わせてやる！ ガイオアビスでシャークドレイクを攻撃！ アビスライジング！」

「くっ……！ 墓地の《キララー・ラブカ》の効果発動！ シャークドレイクに対する攻撃を無効にして、ガイオアビスの攻撃力を500ポイントダウンさせる！」

「ホントならシャークドレイクがゼンマイティを攻撃した時に使いたかっただろうけど、そいつで守れるのは水・魚・海竜族だけ。機械族のゼンマイティは守れないからね。アタシはバトルを終了。バックにカードを2枚セットしてターンエンド！」

やはり水属性使いとしての知識はシャルクと比較しても同じかそれ以上。《ハリマンボウ》の時にゼンマイティへと意識が向いたことで、同時にもう一つのオーバーレイユニットであるラブカにも気が付いたのだろう。

だがそれはシャルクにとっても想定内。闇属性や光属性ならまだしも、水属性はマイナーだけにカテゴリが違っていても採用するサポートは被ることが多い。《キララー・ラブカ》も、属性・種族・レベルを鑑みてみれば【水精鱗】^{マーメイル}使いが知っていても何もおかしくはない。

しかしそれは同じく水属性カテゴリである【海晶乙女】^{マリンスেস}使いのセレブが他の水属性サポートに疎かったこともあり、Liveチャットでは『やっぱり水属性ジムってこともあって知識が半端ないな』『それに相手をよく見てるよな』『シャルちゃんのプレイングって水属性使いとしては普通なのかもしれん』と驚愕の様子を見せている。

「あたしのターン、ドロロー！ まず永続魔法《白の救済》^{ホワイット・サルベージ}の効果発

動！ 墓地の《ゼンマイシャーク》を手札に回収！ さらにコーラルアネモネの効果！ 墓地から《深海のアーチザン》を特殊召喚して効果発動！ デッキトップを墓地に送って、墓地から《深海のデイーヴア》を蘇生します！」

「レベルの合計は3……いや、まだ通常召喚権を残してる。それにさつき戻したあれは……！」

「あたしは手札から《ゼンマイシャーク》を召喚し、効果発動！ このカード自身のレベルを4から5に上げる！」

レベルの合計は8。そして珊瑚は、既にシャルクがなんのカテゴリのシンクロモンスターを採用しているかを知っている。

だからこそ、知識や経験よりも先に本能が察した。——まずい、と。

「レベル5となった《ゼンマイシャーク》と、レベル1の《深海のアーチザン》に、レベル2の《深海のデイーヴア》をチューニング！ シンクロ召喚！ レベル8、《白鬨気白鯨》ホワイトオーラ・ホエール！」

「その、シンクロモンスターは……！」

「さすが珊瑚さん、知ってましたか。なら小難しい説明はいりませんよね。この子の……《白鬨気白鯨》ホワイトオーラ・ホエールのシンクロ召喚時の効果はとってもシンプル！ 相手の場の攻撃表示モンスターを全て、破壊します！」

大空を泳ぐように現れたホエールの巨大な体躯が、徐々にその高度を落としていき、そして珊瑚のフィールドのモンスターたちを押し潰した。

「アタシのモンスターたちが、全滅……！」

「行きます！ あたしは《白鬨気白鯨》ホワイトオーラ・ホエールで珊瑚さんにダイレクトアタック！」

「ぎゃあっ……！」

珊瑚：LP2300

「続いてコーラルアネモネでダイレクトアタック！」

「くっ……受けてあげるわ！ ここまではね！」

珊瑚：LP100

「シャークドレイクでダイレクトアタック！」

「罨カード《ポセイドン・ウエーブ》発動！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「仕留めきれなかった……！ あたしはバトルを終了。バックに1枚セツトして、ターンエンド！」

シャルクの猛攻を受け流し、ついにはライフ100まで追い込まれた珊瑚。しかしその瞳はまだ勝負を諦めてはいない。むしろ、今までよりもより強く、勝利を確信しているかのような光が見えたように思えた。

そして、だからこそシャルクはこのデュエル、絶対に諦めるわけにはいかなかった。この勝負で——オリジナルのシャークドレイクと対峙したことで、彼女はより強く求めようとしているのだ。今までの自分の行いを——カードを省みようとしなかった自分を、カードが、シャークドレイクがどう思っているのか。その答えを。

だからこそ——彼女はその手に握る1枚に、すべての可能性を懸けた。

「アタシのターン！ その《白鬨気白鯨》は何度倒そうと墓地の水属性の数だけ復活し続ける。だったら……狙いはそつちだ！ シャークドレイク！ まずは魔法カード《スペシャルハリケーン》を発動！

手札の《水精鱗——アビスグンデ》を捨てることで、互いの場の特殊召喚されたモンスターを全て破壊する！」

「互いのは言うけど、今フィールドにあるのはあたしのモンスターだけ。それも全て特殊召喚されたモンスター……！」

「さらにコストとなったアビスグンデの効果で、墓地のアビスリンデが復活！ もちろん特殊召喚されているので破壊されるけど、アビスリンデはフィールドから破壊されればデッキから新たな水精鱗を呼び出せる！」

巨大な竜巻に呑み込まれ、シャルクのシャークドレイク、コーラルアネモネ、ホエールと、珊瑚のアビスリンデが破壊される。

「相手によって破壊されたこの瞬間、墓地の《白鬨気白鯨》ホワイトオーラ・ホエールの効果が発動！ 墓地のゼンマイティを除外して、このカードをチューナー扱いで特殊召喚する！ そしてレベル5以上の水属性が特殊召喚され

たことで、墓地の《神の氷結》をセットする！」

「こつちもアビスリンデの効果でデッキからアビスタージを特殊召喚
！」

「アビスタージ……!? 手札コストもないこの状況で!? それに、ア
ビスディーネをリクルートすれば墓地のレベル3水精鱗^{マーメイド}を蘇生して
ランク3・5のエクシーズにも繋げられるのに……！」

「もちろんそれも可能だけど、それじゃホエールを突破できないから
ね! アタシは罨カード《天龍雪獄》を発動! 相手の墓地からモン
スター1体を特殊召喚し、その効果を無効にする。そしてアタシとア
ンタのフィールドに同じ種族のモンスターがいれば、それらを1体ず
つ除外する!」

相手の墓地のモンスターを奪い、互いのモンスターを除外する罨
カード。

その効果を聞いて、ようやくシャルクは先程の珊瑚のプレイングに
納得がいった。

「アタシはアンタの墓地から《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》
を奪い、《天龍雪獄》の効果でアビスタージと《白鬪気白鯨》^{ホワイトオーラ・ホエール}を除外
する!」

「ホエールが、突破された……!」

「バトルだ! シャークドレイクでダイレクトアタック! デプス・
バイト!」

「ぐっ、うああああああっ!」

シャルク：LP2500

「さて……自らのエースモンスターまで奪われ、とっておきのホエー
ルも復活できない。それでもアンタは——」

「諦めません。今までのあたしだって諦めなかったし、今のあたしは
もつと諦められない! あたしはまだ、デッキの……仲間たちの声を
聞いてない! あたしを支え続けてくれた仲間たちの思いを知らな
いまま……負けたりなんてできるわけがない!」

「そう。ならアンタの意地を見せてみなよ! アタシはこれでターン
エンド!」

今までだって、デュエルで諦めることはなかった。どんなに絶体絶命の状況でも、それを覆す戦略を導き出してきた。

だが——今ならそんな「戦略」なんて根拠は必要ない。デッキが支えてくれる。仲間たちが一緒に戦ってくれる。それだけで、諦める理由なんてどこにもなくなる。

「あたしの、タアアアン!! ……あたしは装備魔法《自律行動ユニット》を発動! ライフを1500ポイント払い、相手の墓地のモンスター1体を自分の場に特殊召喚し、このカードを装備します!」

シャルク：LP1000

「オリジナルのナンバーズを!? そんなことしたら、アンタ……!」

珊瑚の言葉が届くよりも早く、シャルクの意識は昏く深い心の水底へと沈んでいた。そこに居るのはシャルクと——そしてオリジナルのNo.32の二人きり。両者を遮るものは何もなく、静かに向かい合っていた。

「あなたが、オリジナルのシャークドレイク……。あたしはずっとあなたに聞きたかった。あたしが今までしてきたこと……。デッキを信じて、犠牲を厭わず、自分の知識と戦略だけを頼りにデュエルを続けてきたことを、そしてあたし自身を憎んでるんじゃないかって!」

『……………』

「それが聞きたいがために、珊瑚さんからオリジナルのあなたを借りたの。オリジナルは、デュエルの中で自分と同じレプリカの記憶を共有するって聞いたことがある。だから、あなたなら知ってるはずなんだ。あたしのシャークドレイクが、あたしのデッキのみんなが、あたしをどう思ってるのか! お願い、聞かせてシャークドレイク!」

『……憎んでなどいない。貴女はただ勝利のために……。夢のために必死だったただけだ。それに、貴女はわらわたちをぞんざいに扱ったわけでもない。無意味な犠牲など一度もなかった。貴女の言う「犠牲」は、常にわらわたちの力を十二分に発揮するためであった。そんな貴女だからこそ、わらわも——そして皆も、貴女を守り、支えるため一丸となったのじゃ』

シャークドレイクはそう言うと、その姿を純白へと染めていく。

まるでそれは——主の色に染まるために一切の色を抜いた「白無垢」のように、美しく凛々しく華やかな姿へと昇華されていく。

『さあ、わらわを呼ぶのじゃ。そして目の前の相手の懐にある勝利を奪い取り、お主の戦いが——これまでの行いが間違いではなかったことを証明してみせるがよい。そのためになら、わらわもまた真の姿をもつて力を貸そう』

「シャークドレイク……」 「！」

名前を呼ぶと同時に、シャルクの意識は珊瑚とのデュエルへと戻った。

目の前の状況は——互いのフィールドにシャークドレイク。相手には伏せも手札もなく、こちらには永続魔法の《ホワイト・サルベージ白の救済》と、今のところ役目を果たせないままの《神の氷結》がセット状態。そして珊瑚にはバレていないものの、ブラフとしてセットした《水舞台》のみ。

できることといえば相討ち——。

「いや、さつきシャークドレイクが言つてたことが確かなら……！」

「アンタ、まさか……！」

「そうか……！ オリジナルのあなたにだけできること、今ならわかるよ！」

シャルクは自らの意識を深く深く沈めていくと、カードの中に宿るシャークドレイクの意識にアクセスする。

そして、アクセスした先に見たものは——、

「——見えた！ これがシャークドレイクの真の姿！」

「シャルクに、紫色のオーラが……！ 間違いない。あれはアタシが昔、シャークドレイクの真の姿を制御しようとして失敗した時の……！」

「あたしは海咬龍シャークドレイク1体でオーバーレイネットワークを再構築！ カオスエクシーズチェンジ！ 深海に潜みし、狡猾にして獍猛なる脅威の咬牙！ 《CNo. 32海咬龍シャーク・ドレイク・バイス》！」

シャークドレイクの真の姿——シャークドレイクバイスの出現に、

目の前に立つ珊瑚だけでなくリスナーたちもまた驚愕する。

『なんだあの姿！』『シャークドレイクが進化した？』『あれシャルちゃん大丈夫なのか!?』『見た目は綺麗だけど……』と、一気にコメントの流れが加速するのを横目に、シャルクと珊瑚は視線を交わす。

「ありがとう、シャークドレイク。あなたのおかげで、肩の荷が少しだけ降ろせたよ」

『ならばよし。さて——では最後の仕上げじゃ。わらわの力、使いこなせるであろうな?』

「もちろん！ さあ、バトルだ！ あたしはシャークドレイクバイスで、シャークドレイクを攻撃！」

「攻撃力は互いに同じはず！ ということは……！」

今までオリジナルのシャークドレイクの所持者でありながら、バイスへの進化までは至ることのできなかつた珊瑚には、シャークドレイクバイスの効果がまったくの未知となっている。

そして、今この状況において、その力が最大限に発揮されるということも、彼女は知らないのだ。

「この瞬間！ シャークドレイクバイスの効果発動！ あたしのライフが1000以下の時、バイスのオーバーレイユニットを1つ使い、墓地のシャークランサーを除外することで、相手モンスター1体の攻撃力を0にする！」

「攻撃力を下げるんじゃないやなく、強制的に0に固定する効果……！」

「やっちゃえ、シャークドレイクバイス！ デプス、カオス……バイトオオオッ！」

「き……きやああああああああつ!!」

珊瑚：LPO

襲い来る凸げき団

「ブラヴオー！ 最高のデュエルでした！ このまま勝ち進めていたら、今度は決勝トーナメントでよろしくお願いします」

「ああ。楽しいデュエルだったよ。それに、ごらんよ。今のデュエルで、Liveチャットも大盛り上がり。観客のみんなも、こんなに歓声が上がってる。全部、アンタのデュエルを讃えるものだよ、シャルク」

「あたしのデュエルを、讃える声……」

最初のジム戦は、ソニックこそ褒めてはくれたが、実際はひどい有り様だった。相手を策略に貶め、勝利のためにあらゆる手段をとった。ルールにこそ反しなかったが、ルールさえ守っていれば何をしてもいいと思っていた。

だがこのデュエルで、シャルクは自分のデツキと向き合い、そしてほんの少しだけではあるが、セレブの言葉の意味を理解できた。仲間が支えてくれる心強さ、デツキを信じる想い。デュエリストとデツキがひとつになり、今まで出しきれなかった何かが溢れ出したように思えた。

シャルクは手にしたオリジナルのシャークドレイクを見つめると、それを珊瑚へと差し出した。

「これ、返しますね。あと、ありがとうございます。オリジナルのシャークドレイクのおかげで、あたしの中の暗くて重かった何かが、すっとんと落ちた気がします」

「……ううん、それはアンタが持ってなよ。さっきのシャークドレイクの真の姿は、アタシじゃ制御しようと思ってもできなかったものだから。きつと、その子はアタシじゃなくてアンタを主と定めたんだ」
「でも、オリジナルのナンバーズって値段がつけられないくらい高価なはずじゃ……！」

「今のアンタならわかるんじゃない？ カードは使われなければなんの価値もない。何億つまれて売られるよりも、アンタに使われることの方が、きつとシャークドレイクも喜ぶはずさ」

もう一度シャーウッドレイクを見つめると、シャルクはそれを大事に抱きしめ、デッキホルダーに入れた。

「じゃあ、そっちのシャーウッドレイクは珊瑚さんにお渡しします。レプリカなんで、シャーウッドレードもいいところですけど……でも、きつとシャーウッドレイクも、珊瑚さんのことが好きだと思いますから！」

「わかった。じゃあ、これを渡すよ。クーラントジム攻略の証、メビウスバッジをね！」

シャルクは手に入れたメビウスバッジをパズルフレームにセットすると、それを懐のポケットへと戻す。

「次に戦う時は決勝トーナメント、だったね。その時はジム用のデッキじゃなく、アタシの本気のデッキで戦わせてもらう。それまでに、もつと強くなっておいで！」

「はい！ その時にまた会いましょう、珊瑚さん。そして——シャーウッドレイク！」



クーラントジムを出ると、ちようど入れ違いになるかたちでセレブと出逢った。あちらもシャルクに気づくと歩みを止め、駆け寄るシャルクに微笑みを向けた。

「セレブちゃん！」

「シャルク。また会いましたわね」

『セレブちゃん来た！』『シャルちゃんセレブちゃんに懐いてんな』『セレブちゃんに懐いてるシャルちゃんてえてえ』と妙な盛り上がり方をしているLiveチャットを見ないようにデュエルディスクをポーチに入れると、シャルクはセレブの手をとった。

「ありがとう、セレブちゃん！ セレブちゃんのおかげで、やっと少しデッキとの向き合い方がわかった気がする！」

「そう。それなら負けた悔しさを抑えてアドバイスした甲斐もありますわね」

「うん！ あたしは一足先に次の街を目指すけど……セレブちゃん、また会うことがあったら、もう一度デュエルしよう！ 今度こそ、知識と戦略だけじゃない、あたしの全力で戦ってみせるから！」

「ええ、もちろんそのつもりですわ。負けっぱなしでなんていられませんもの。それに、あなたとはきつとまた巡り合うことがあると思いますわ」

シャルクとセレブは互いにハイタッチすると、そのまま背を向けて歩き始めた。シャルクは次の街へ。セレブはクーラントジムへ。

どちらも目指しているところは同じ決勝トーナメント。歩む道こそ違えど目的地が同じであるならば、再びその道が交差することもあるだろう。

その時を楽しみにしながら、シャルクは少し駆け足で次の街へと向かった。

クーラントタウンを抜ける途中、ふと出会った一人の青年が、シャルクに声をかけてきた。

「どうやらシャルクのチャンネルを登録しているリスナーの一人で、前日に言っていた『カッター・シャーク』を渡すために声をかけたようだった。」

「この子、ほんとにもらつていいの!? ありがとう！ 大事に使わせてもらうね！」

「どうやら青年はもともこのクーラントタウンに住んでいたようで、シャルクにカードを渡すとそのまますぐ近くの家の中に入った。」

「みんな見てた？ 今リスナーのお兄さんから『カッター・シャーク』をもらったよ！ 次の街の宿についたらさっそくデツキを改良しなきゃね！」

「やや興奮気味にLiveチャットに話しかけると、『おめでどう！』『現実での交流もデュエルシティの醍醐味よな』『まあそのせいで厄介なリスナーとかもいるけどな』『今回のリスナーはまともでよかった』と、ややシャルクの身を案じる意見が目立った。」

デュエル中のプレイングや過去の言動から勘違いされがちだが、

シャルクはデュエルさえ絡まなければ年相応の無邪気な少女だ。他人を疑うことも悪く言うことも、基本的にはあんまり好きではない。蛮族に対しても、デュエルの戦略性のなさやパワーと破壊力に頼った動きが気に入らず突っかかっているだけで、蛮族自身を否定したことは今のところない。むしろ、なんだかんだで目標としている節もある。

「次はサーマルタウンだね。開会式をやったところ。この辺りだと一番栄えてる街だから、ついでにブティックとかにも寄ろうか」

デュエルディスクのLiveチャットと会話をしながらクーラントタウンの出口である『クーラント鉱山』を通ってサーマルタウンはずれへと向かうついでに、洞窟の中にいる水属性モンスターもいくつか手に入れた。

洞窟の中に溜まった湧き水の中には、カエルなどを中心とした水族モンスターがいくつも見られた。また、シャルクが特に喜んだのは水辺のすぐ近くに開いたそこそこの大きさの穴の中から、スクリーチが顔を出していたことだ。

知能は低い、ステータスが高く気性もそれなりに荒い上、水中でなくても生きられるため、デュエルで力関係を教えることでようやくカード化に成功すると、シャルクはすぐさまそれをデッキに入れていないカードを収める方のデッキホルダーへとしまった。

もっとも、デッキに入れないカードとは言うが、それは決してそれらのカードが使えないという意味ではなく、デッキ調整をする際のストレージ的な意味が多い。また、枚数さえ集まれば、この大会では複数のデッキを使用することも認められている。

だからこそ、今ゲットした《スクリーチ》も、宿でデッキ調整をする際にデッキ入りするかもしれないし、そうでないかもしれない。

「さて、この辺りの水属性モンスターはだいたい見つけたかな。じゃあそろそろちゃんと進もつか」

途中、コウモリ型のモンスターや岩石族モンスターをいくつか見かけたものの、それらを全てスルーしながら炭鉱の中を進んでいくと、何やら争う声が聞こえた。

本当なら避けていきたいところだが、炭鉱の中はほぼ一本道。人がいるということは、当然ながらその一本道の途中にいるということだった。

「お前もLiveデュエリストだろ！ オレたちとLiveデュエルをして、オレたちをD—LIVEの人気者にしろ！」

「だ、だから私はLiveデュエリストじゃありません！ ただの作業員です！ 作業のジャマですし、デュエルディスクだつて持つてないんだからデュエルなんてできません！ 帰ってください！」

「いいや嘘だね！ ここはデュエルシティの通り道！ クーラントタウンの次にサーマルタウンに戻ってくるやつはみんなここを通るんだ！ お前だつてそうだろう！」

シャルクが争いの現場につくと、どうやら二人組の男——凸げき団のしたつぱたちが、作業員の女性に因縁をつけているところだった。

スルーしたくてもできないことは見てわかる。それに、作業員の女性が困っているのも見てわかる。そして何より——自分のデツキの仲間たちが、最初に出会った凸げき団の言動を思い出して怒りに震えていることも。

「あなた、そんなにLiveデュエルがしたいならあたしが相手をしてあげるよ」

「あアン？ なんだよ、ガキか！ お前みたいな弱っちそうな奴を相手にしても有名にはなれねーんだよ！」

「そう？ これでもジム戦を除いて14勝2敗、もちろんジムもちやんと2つクリアしたからここにいるんだけど？」

ほら、と言つて2つのジムバッジが収められたパズルフレームを見ると、凸げき団はその意識をシャルクへと向けた。

シャルクは視線を作業員の女性に送ると、その女性は静かにその場を去つていった。

「いいだろう！ そんなに言うんならお前をぶつ潰して有名になつてやるー！」

「オイラたち凸げき団に噛みついたこと、後悔するんだな！」

「噛みつく……？ 生温いよ。噛み砕いてあげるよ！」

デュエルディスクを左腕に装着すると、シャルクはそのままLiveチャットをデュエルモードに変更。

カメラ機能をオンにして、DトLライIイVブEのチャンネルへとアクセスする。

「オープンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

凸げき団のしたつばAと凸げき団のしたつばBが勝負をしかけてきた！

ルールはバトルロイヤルモード。フィールドとライフは各自別々で、仲間同士での手札の情報交換はなし。2vs1のハンデとして、シャルクが先行。全てのプレイヤーが1ターン目を終えるまでドローと攻撃はできない。

「まずはあたしのターン！ あたしは手札から《ハンマー・シャーク》を召喚し、効果発動！ 自身のレベルを4から3に下げること、手札からレベル3の《キラー・ラブカ》を特殊召喚！」

「先攻からいきなりレベル3のモンスターを2体並べてきやがった……！ つてことは、エクシーズ召喚か！」

「前に戦ったやつよりはマシみたいだね。じゃあわかつてるみたいだし、さっそく行くよ！ レベル3の《ハンマー・シャーク》と《キラー・ラブカ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク3、《発条空母ゼンマイティ》！」

先攻1ターン目から繰り出されたエクシーズモンスターはゼンマイティ。1ターン目で攻撃ができないため守備表示での登場だが、その効果は強力だ。

「ゼンマイティのオーバーレイユニットを1つ使い、効果発動！ デッキからゼンマイモンスター1体を特殊召喚する！ 来て、《ゼンマイシャーク》！」

ゼンマイティから《ゼンマイシャーク》への流れは、シャルクの得意とする連続エクシーズの構えだ。実質的にレベル3く5のいずれとしても扱う《ゼンマイシャーク》ならば、シャルクの手札次第では柔軟にエクシーズへとつなげられる。

「さらに魔法カード《簡易融合》インスタント・フュージョンを発動！ ライフを10000払い、エクストラデッキからレベル5の《深海に潜むサメ》を簡易融合召喚！ そして《ゼンマイシャーク》の効果で自身のレベルを4から5に上げる！」

シャルク：LP7000

「これでレベル5のモンスターが2体……まさか、連続エクシーズ!?」
「その通り。あたしはレベル5の《深海に潜むサメ》と《ゼンマイシャーク》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク5、《ヴァリアント・シャーク・ランサー》！」

シャルクの前に現れるシャークランサーの背をちらりと見ると、その視線を対戦相手2人に戻す。

レプリカであるシャークランサーには意識がない。だからこそ、何も言わないことはわかっている。それでも——彼は間違ひなくシャルクの仲間の一人なのだ。シャルクに向けたその背の大きさが、シャルクを守ろうとするシャークランサーの決意の強さなのだと信じて。
「魔法カード《エクシーズ・ギフト》を発動！ あたしのフィールドにエクシーズが2体以上存在することで、シャークランサーのオーバーレイユニットを2つ使って2枚ドロウする！」

「エクシーズモンスターが2体並んでおいて、手札はまだ3枚も残ってやがる……！ こいつのデッキどうなってるんだ……！」

「あたしはバツクに1枚セットしてターンエンド！ さあ、今度はそっちの番だよ！」

先攻1ターン目から連続エクシーズを決めたシャルクに、凸げき団Aは驚きの表情を見せるが、すぐにまた苛立たしげな表情へと戻り、自分のターンへと移った。

「オレのターン！ へっ、最初から連続エクシーズしてくるのには少し驚いたが……水属性なんてマイナーなデッキ、どうせロクな効果も持ってねえんだろう！ だったら恐れるもんなんて何もねえ！ 軽く捻ってやるぜ！」

「マイナーなデッキなことは認めるよ。でもロクな効果を持ってない

かどうかは、戦ってみればわかるはず。さあ、能書き垂れてないでかかってきなよ」

「このガキ……ッ！ いいだろう、泣かせてやる！ 俺は手札から《機甲部隊の最前線》を発動！ さらにレベル7の《可変機銃ガンナードラゴン》を、攻守を半減させることで妥協召喚する！」

妥協召喚モンスターと、戦闘破壊をトリガーとする《機甲部隊の最前線》の並びを見て、シャルクはすぐにその目的に気づいた。

「妥協召喚したモンスターは戦闘破壊されて墓地にいった時点で、《機甲部隊の最前線》で参照する数値が元々の攻守となる。つまり、目的は戦闘破壊をトリガーとして攻撃力2800以下の閹属性・機械族をリクルートすること、かな？」

「ガキにしちや物分かりがいいじゃねえか！ 最初のターンは攻撃できねえから自爆特攻ってわけにやいかねーが、それでも動きづらくはなるだろう！」

「いや、全然？ あたしはゼンマイテイのオーバーレイユニットを1つ使い、シャークランサーの効果発動。相手フィールドのモンスター1体を破壊する。《機甲部隊の最前線》のトリガーはあくまで戦闘破壊。効果による破壊には反応しない」

「なっ……！」

シャークランサーの放った槍が、ガンナードラゴンを貫く。

ガンナードラゴンの効果による妥協召喚は、あくまで通常召喚であって特殊召喚ではない。よって、凸げき団Aの召喚権はすでに使い切っている。

「だ、だったらガンナードラゴンが破壊されたことをトリガーとして、手札から《機皇帝ワイゼル∞》を特殊召喚するぜ！ こいつの攻撃力はお前の黒いやつと同じ2500！ そうそう簡単には倒せねえはずだ！ それにこいつは1ターンに一度、相手の魔法の発動を無効にして破壊する！ 魔法による除去も楽じゃねえ！ ターンエンドだ！」

攻撃力2500の壁。加えて魔法妨害。本来の目論見が崩れてな

お、この咄嗟の機転は凸げき団にしては中々のものだ。また、レベル1最大の打点という意味では、永続魔法《機甲部隊の最前線》マシンナイズ・フロントラインとの相性も決して悪くはない。

ただし、ガンナードラゴンとワイゼルだけなら【機械族】デツキか、程度の認識であったところを、《機甲部隊の最前線》マシンナイズ・フロントラインによって【閻属性・機械族】というところまで絞られてしまったのは、シャルクを相手にする上で迂闊だったと言わざるをえない。

閻属性かつ機械族に属するカードの中で、当初の目的であったガンナードラゴンからのリクルート範囲内に入っており、なおかつまとまったカテゴリに属さないモンスターは、そう多くない。

有名どころで言えば、《リボルバー・ドラゴン》を有するギャンブルデツキの王道、【機械龍】マシンドラゴンだろう。ワイゼルの存在から【機皇】かとも思えるが、あれは閻・地・風の混合であるため《機甲部隊の最前線》マシンナイズ・フロントラインとは噛み合わないことも少なくない。

それらにアタリをつけながら、シャルクは凸げき団Aの分析と並行して、凸げき団Bの動きからも目を離さなかった。

「オイラのターン！ オイラは手札から機械族の《超電磁タートル》を墓地に送り、もう1体の《ディープ・スペース・クルーザー・ナイン》を特殊召喚するんだな！」

（いきなりレベル9のモンスターを特殊召喚……。光・機械でまとめるならシンクロの線はない。なら狙いはランク9かリンク？ まだだ、狙いをきちんと見極めないと……）

「さらに《ディープ・スペース・クルーザー・ナイン》の特殊召喚に反応して、速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動！ 相手の場にモンスターがいる時、自分フィールドの攻撃力1500以下のモンスターと相手フィールドのモンスターを、互いがそれぞれ1体ずつ選び、同名カードを可能な限り特殊召喚するんだな！」

「あたしのモンスターは全てエクシーズ……。そっちのワイゼルは確か……」

「ああそうだよ、自身以外の効果じゃ特殊召喚できねえ」

「ごめんなんだな、アニキ。じゃ、じゃあオイラはデツキから2体の

《ディープ・スペース・クルーザー・ナイン》を特殊召喚するんだな！」
これで2人のフィールドにはレベル1・攻撃力2500のワイゼルと、3体のクルーザーナイン。

ターンプレイヤーでない凸げき団Aはともかくとして、レベル9の低打点モンスターを並べた凸げき団Bは、間違いなくここで動く。

「オイラはレベル9の《ディープ・スペース・クルーザー・ナイン》3体でオーバレイ！ 3体のモンスターでオーバレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク9、《永とこしえのジエネレイドの王オルムガン

ド》！」

「ジエネレイド……!?!」
「オルムガンドの攻撃力は、このカードが持つオーバレイユニットの数×1000ポイントなんだな！ よって現在は攻撃力3000！ オイラはカードを1枚伏せて、ターンエンドなんだな！」

攻撃力3000の大型エクシーズモンスター。しかもジエネレイドといえば、高レベルでまとめられたカテゴリというだけあって、強力な効果をいくつも揃えている。

さすがにジエネレイドはシャルクにとっても専門外で、その効果までは把握していないが、少なくとも現状を楽観視することはできなくなった。

「あたしのターン、ドロー！ ワイゼルは1ターンに一度、魔法を封じる効果がある……」

「その通り！ その伏せカードが何かはわからねえが、てめえのデッキは見た感じ展開力に秀でてる分、除去用の魔法は数が少なええ！ だったら一つでも止めりゃあ十分よ！」

「加えて、オイラはお前のスタンバイフェイズにオルムガンドの効果を発動するんだな！ オーバレイユニットを1つ使って、オイラとお前は互いにカードを1枚ドローしなければならず、そしてその手札かフィールドから1枚を選んでオルムガンドのオーバレイユニットにするんだな！」

「……おっけー、通すよ。ドロー……今引いたこのカードをオルムガン

ドに与えるよ」

相手も同様に引いたカードをオーバーレイユニットに加え、これでオルムガンドの攻撃力は4000まで跳ね上がった。

しかし、シャルクの中では既に逆転の方程式が完成しつつあった。「さて、じゃあテストといこうか。あたしは永続魔法《ホワイト・サルベージ白の救済》を発動。このカードの効果であたしは毎ターン墓地の魚族を回収できるよ」

「そんなもん通すわけがねえだろう！ オレは《機皇帝ワイゼル∞》の効果発動！ 《ホワイト・サルベージ白の救済》の発動を無効にし、破壊する！」

「ふふつ、テストはイッパツ不合格だね！ 相手によって破壊された《ホワイト・サルベージ白の救済》の効果発動！ デツキから魚族モンスター1体をサーチ、またはリクルートする！」

水属性特有の、マイナーであるが故に相手の知識不足を活かしたプレイング。

まして魔法に対する警戒心が高かった凸げき団Aだからこそ、この策略は間違いないと通じるという確信があったからこそ、シャルクの堂々としたプレイングがなおさら相手を警戒させ、成功率を上げた。

「そんな効果があったのか……！ だが、下級の魚族なんてどうせ雑魚ばっか！ 何も怖いもんなんで——」

「下級？ あたしそんなこと言ったっけ？」

「——えっ。そ、その手の効果が持つリクルートの制限ははたいがいレベル4以下じゃ……」

「残念、《ホワイト・サルベージ白の救済》のサーチ・リクルート効果にそんな制限はないよ。あたしが選ぶ魚族は《超古深海王シーラカンス》！」

「なっ……なんだとお!?」

いきなり現れた最上級モンスター《超古深海王シーラカンス》の雄大な姿に、凸げき団は二人揃って驚愕を隠し切れないでいた。

そんな凸げき団の様子に、Liveチャットも『まあ気持ちはわかる』『俺も最初聞いた時「は？」ってなった』『相変わらず駆け引きが上手い』『まあ毎ターン回収って聞いたら無効にしたくなる気持ちはわかる』とシャルクの駆け引きのいやらしさを痛感していた。

「シーラカンスの効果発動！ 手札の《レフトハンド・シャーク》をコ

ストに、デツキから《ライトハンド・シャーク》と《トライポッド・フィッシュ》を特殊召喚！」

「あ、あの永続魔法1枚を妨害したばかりに、大型モンスター1体と、さらに2体のリクルートだと……!?!」

「続いて《発条空母ゼンマイティ》と《トライポッド・フィッシュ》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！

リンク召喚！ リンク2、《海晶^{マリンスピリット}乙女^{セレス}コーラルアネモネ》！」

シーラカンスからのコーラルアネモネ。シャルクお得意のエクシーズへと繋がる流れだ。

「コーラルアネモネの効果発動！ 墓地の《トラポッド・フィッシュ》を特殊召喚し、効果発動！ 《トライポッド・フィッシュ》自身のレベルを3から4にアップ！」

「これでレベル4のモンスターが2体！」

「いいや、まだだよ！ 自分フィールドにライトハンドがいることで、墓地のレフトハンドが復活し、レベルが3から4になる！」

「レベル4のモンスターが3体なんだな……!?!」

珊瑚から託されたこのカードが教えてくれた。デツキのカードたちは自分を認めて支えてくれていたのだと。だとするのなら、そんな仲間たちの信頼に応えないわけにはいかない。

最高のタイミングで、最高の結果を出すために、シャルクは仲間たちを信じて全力のプレイングをしてみせなければならない。そして——それが今だ！

「あたしはレベル4のライトハンド、レフトハンド、トライポッドでオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 狡猾にして獰猛なる脅威の牙！ 《No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「ナ、No. 32だと!?! しかもウルトラレア……オリジナルのナンバーズじゃねえか！ そいつはクラントジムのジムリーダーしか持っていないはずじゃ……!?!」

「その珊瑚さんに認められて託されたんだ！ 次に会う時まで、最高のシャークドレイク使いとして戦う約束をして！ あたしは《ヴァ

リアント・シャーク・ランサー』の効果発動！ シャークドレイクのオーバーレイユニットを1つ使い、ワイゼルを破壊する！」

「マシンナリス・フロントライン またも効果破壊されたことで、永続魔法『機甲部隊の最前線』はその力を発揮できない。」

「バトル！ 海咬龍シャークドレイクで、オルムガンドを攻撃！」

「そうはさせないんだな！ リアクティブ・アーマー 罨カード『炸裂装甲』発動！ 相手の攻撃宣言時に発動し、その攻撃モンスター1体を破壊するんだな！」

「それは構わないけど、その『炸裂装甲』にチェーンして、罨カード『神の氷結』発動！ オルムガンドの効果を無効にする！ 効果によって攻撃力が上昇しているオルムガンドは、その効果を失ったことで攻撃力0だ！」

「で、でもどつちにしろ リアクティブ・アーマー 『炸裂装甲』で……！」

「残念だけど、レフトハンドを素材にしてエクシーズ召喚されたシャークドレイクは効果じゃ破壊されない！ いっちゃえ、シャークドレイク！ デプス・バイト！」

凸げき団B：LP5200

「さらにシャークドレイクの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、戦闘破壊した相手モンスターの攻撃力を1000下げて引きずり出し、再び攻撃する権利を得る！ ただしその攻撃は連続で行う必要はないから、コールドアネモネでオルムガンドを攻撃！」

「オーバーレイユニットのないオルムガンドの攻撃力は0……！
ぐっ、ぎゃああああっ！」

凸げき団B：LP3200

「続いてシャークドレイクでもう片方の凸げき団にダイレクトアタック！ デプスバイト！」

「させるか！ 手札から『機動要犀トリケライナー』の効果発動！ 相手が3回以上の召喚・特殊召喚・反転召喚を行ったターンに特殊召喚し、あらゆる効果を受けない！」

「守備力2800……！ でも、それなら相手モンスターが増減したことで巻き戻しが発生！ 改めてシャークドレイクで攻撃対象を選び直す！ もちろん攻撃するのはそっちだ！」

「さつきはオルムガンドを場に残さないために受けたけど、それもここまでなんだな！ 墓地の《超電磁タートル》の効果発動！ このカードを除外してバトルフェイズを終了させるんだな！」

「トリケライナーと超電磁タートル……。それにトリケライナーは戦闘破壊しても《機甲部隊の最前線》がある。事前のケアもその後のリカバリーも悪くない。ほんと、凸げき団なんかじゃなかったら凄くないデユエリストだったかもしれない……。あたしはバトルを終了してそのままターンエンド」

一気に凸げき団Bの削り取り、フィールドは壊滅状態。凸げき団Aは一切の効果を受け付けないトリケライナーが存在するものの、スタンバイフェイズには守備力が2300に落ちてしまう。

さらにシャルクのフィールドには攻撃力2800のシャークドレイクとシーラカンス、妨害する2500ラインのシャークランサー、毎ターン墓地の水属性を蘇生するコーラルアネモネ。そうそう簡単に切り崩せるフィールドではない。

「オレのターン、ドロー！ まずは運試しだ！ 魔法カード《カップ・オブ・エース》を発動！ コイントスを1回行い、表ならオレが、裏なら相手が2枚ドローするぜ！ もちろん、この「相手」ってのは自分のことだがなあ！」

「まあ、そりやそうか。どうぞどうぞ、好きにやっちゃって」「ケツ、澄ましやがって。なら遠慮なく……ギャンブルの時間だ！」

カップ中から飛び出した一枚のコインが宙を舞い、再び器の中に入ってカップを地面へと叩きつけた。そして、そのカップを退かして現れたのは――。

「よし、表だ！ よってオレはカードを2枚ドロー！ ……いい引きだ！ オレはフィールド魔法《鋼鉄の襲撃者》を発動！」

「あのフィールド魔法は……！」

「……俺はトリケライナーを手札に戻し、手札の《A・ジエネクス・バードマン》の効果発動！ こいつを特殊召喚する！ そして手札のトリケライナーをコストに《ワン・フォー・ワン》を発動！ デツキから《チューニング・サポーター》を特殊召喚！」

「闇属性じゃない……!? でも機械族なのは同じ……闇属性軸の機械族統一なだけで、属性は少しだけ混合させてるってことか……!」
「この《チューニング・サポーター》はレベル2としても扱う! そしてシンクロ素材になった時、デッキからカードを1枚ドロウできる!」

レベルの合計は4または5。しかも闇属性・機械族デッキのレベル5シンクロとなれば、闇属性以外の属性統一デッキにとっては天敵ともいえる「あのモンスター」が脳裏をチラつく。

「レベル2扱いの《チューニング・サポーター》に、レベル3の《A・ジエネクス・バードマン》をチューニング! シンクロ召喚! レベル5、《A・O・Jカタストル》!」

「出たな! 闇属性以外絶対殺すマン!」

ひどい渾名ではあるが、事実これほど明確にこのモンスターを表す言葉もそうそう無いだろう。

カタストルとは、闇属性以外のモンスターと戦闘を行えば、それらを問答無用で破壊する属性統一デッキキラー。あの「光属性はこいつがいるから強い」とまで言わしめた《オネスト》ですら、このカタストルの前では無力なのだ。

そんなカタストルの登場に、『ヒエツ、カタストル!』『こないで』『カタストルとかいうグロ画像みせんな』『閲覧禁止にしろ』と、ありとあらゆる語彙を用いて罵られている。

「シンクロ召喚に成功したから1枚ドロウだ! さあて、さっそくそのデカいツラした古臭え魚をぶつ潰させてもらおうか! カタストルでシーラカンスを攻撃! この瞬間、カタストルの効果が発動するぜ! こいつが闇属性以外と戦闘を行う時、相手モンスターを問答無用で破壊する! これでシーラカンスを撃破だ!」

「シャークドレイクを効果破壊できないとわかって、シーラカンスを狙ってきた……!」

シーラカンスが破壊されても、これは戦闘という行為を介しているものの、ダメージ計算前の効果破壊であるため、シャルクにも凸げき団Aにもダメージはない。

しかしシーラカンスは展開の要。ここでそれを失ったのはあまりにも痛い。だが、そんなシャルクの感傷を許さないとばかりに、次の一手が彼女へと襲い掛かる。

「カタストルがフィールドのカードを破壊したことで、フィールド魔法《鋼鉄の襲撃者》^{ヘビメタル・レイダース}の効果が発動する！ 手札から闇属性・機械族モンスター1体を、レベルに関係なく特殊召喚するぜ！」

わざわざ「レベルに関係なく」と言うのは、さつきシャルクが使った《白の救済》^{ホワイト・サルベージ}でのやり取りに対する意趣返しだろうか。

「現れる！ オレのエースモンスター！ 《クラッキング・ドラゴン》！」

「攻撃力3000……！ バフ・デバフなしじゃあたしのデッキじゃどうにもならない数值だけ……！」

「まだバトルは続行中だ！ オレは《クラッキング・ドラゴン》で海咬龍シャークドレイクを攻撃！ トラフィック・ブラストオ！」

「ダメージは受けるけど、《ライトハンド・シャーク》を素材としてエクスーツ召喚されたモンスターは戦闘では破壊されない！」

シャルク：LP6800

「だったらここまでだな。ターンエンド！」

ライトハンドとレフトハンドのサポートにより、今のシャークドレイクは戦闘・効果のどちらでも破壊される心配はない。さらに、ここまでの展開で凸げき団Aの手札は既に0枚。ならばまだ十分に仕留めきる余裕はある。

しかし、攻撃力が高いことはわかったが、シャルクはこの《クラッキング・ドラゴン》の効果をまったく知らなかった。そもそもシャルクが知っているのは水属性に関係するカード全般と、過去に大会などで結果を残していたり、色んなデッキに出張したり、あらゆるデッキの必須パーツになったりする有名なカードやコンボだけ。

それは彼女がカードに疎いという意味ではなく、デュエリストならそもそも自分の使うカードと有名なカード以外を知らないのが普通なのである。なぜならこの世界のデュエルモンスターズは生き物であり、野生のデュエルモンスターズをカード化して初めてその効果を

知るからである。

「オイラのターン、ドロロー！ アニキの分まで、動いてみせるんだな！
オイラは手札からレベル9の《アークジェット・ライトクラフター》
をリリースなしで召喚！ こいつは自分の場にモンスターがいなけ
れば妥協召喚できるんだな！」

「また妥協召喚モンスター……けど、元々のステータスはそんなに高
くない。いったい何を狙って……」

「こいつを召喚した時、墓地にいるレベル8以下の機械族モンスター
を特殊召喚し、そのモンスターのレベルは9となつて効果が無効化さ
れるんだな！ オイラは墓地の《サテライト・キャノン》をレベル9
として特殊召喚！」

「《サテライト・キャノン》!? そんなカードいつ……いや、そうか！
オルムガンドの効果で手札からオーバーレイユニットになつた
カード！」

なんて抜け目のない、と悪態をつこうとしたが、それもまた戦術
と言葉を呑み込む。それよりも今は目の前の現実を真つ直ぐに受け
止め、対処しなければ負けるのは自分だと言ひ聞かせる。

眼前にはレベル9が2体。またジェネレイドか、あるいはそれとは
異なるランク9の大型モンスターか。どちらにしても、間違いなく強
力なエクシーズが現れることは、シャルクだけでなくLiveチャッ
トのリスナーでさえ理解できた。

「オイラはレベル9のライトクラフターと《サテライト・キャノン》で
オーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを
構築！ エクシーズ召喚！ ランク9、《無限起動アースシェイカー》
！」

「攻撃力、3100……!?」

「こいつの自慢は攻撃力だけじゃないんだな！ アースシェイカーの
効果発動！ オーバーレイユニットを2つ使い、相手のモンスター2
体を選んで破壊するんだな！ 狙いは《ヴァリアント・シャーク・ラ
ンサー》と《海晶乙女コーラルアネモネ》！」

「マズい、けど……妨害札がない！」

「バトルなんだな！ アースシエイカーでシャークドレイクを攻撃！」

シャルク：LP6500

「カードを1枚伏せて、ターンエンドなんだな！」

残されたモンスターはオーバレイユニットの無いシャークドレイクのみ。しかも相手フィールドには攻撃力3100のアースシエイカーに加え、3000打点で妨害もこなす《トラッキング・ドラゴン》と、闇属性以外を必ず破壊してくる《A・O・Jカタストル》まで控えている。

「これはちよつと、油断できないかな……！」

隠された牙

「あたしのターン！ あたしは《深海のディーヴァ》を召喚！ そして召喚時の効果で——」

「おっと、ちよつと待ってもらおうか！ レベルを持つ相手モンスター1体のみが召喚・特殊召喚されたこの瞬間、《クラッキング・ドラゴン》の効果が発動するぜ！ 召喚された《深海のディーヴァ》は自身のレベルの数×200ポイント攻撃力がダウンし、ダウンした数値だけ相手にダメージを与える！ そしてこの効果は1ターンに何度でも使用できる！」

「そんな効果が……！ でも、ディーヴァのレベルは2で攻撃力は200！ 下がる数値は本来400ポイントだけど、実際にダウンしたのは200ポイント！ だからあたしが受けるダメージは200だよ！」

シャルク：LP6300

「構わねえ！ ディーヴァはデッキからモンスターをリクルートする優秀なチューナーモンスターだってことくらい知ってらあ！ ならお前の狙いは高レベルのシンクロモンスター！ そこでデカイのをぶつけられりやあいんだよ！」

確かに、《深海のディーヴァ》はシャルクのデッキに限らず、多くのデッキで使用される優秀なチューナーモンスター。この1体から、レベル2〜12までのどのシンクロにもアクセスできるとまで言われるモンスターだ。

そして、シンクロモンスターはその性質上、複数の「レベルを持つモンスター」を展開して高レベルモンスターへと繋ぐ。その過程と結果から、間違いなく《クラッキング・ドラゴン》はこの状況に刺さってしまう。

「ディーヴァの効果で、デッキからレベル1の《深海のアーチザン》を特殊召喚する！ ただしこのモンスターの攻撃力は最初から0！ よってダメージは発生しない！ そして特殊召喚されたアーチザンの効果！ デッキトップを墓地に送って、墓地からレベル4の《ハン

マー・シャーク』を蘇生！」

デッキトップから落ちたカードは《エクシーズ・スライドルフィン》だった。

「なら《ハンマー・シャーク》の攻撃力を800ポイントダウンさせ、お前に800のダメージだ！ クラックフォール！」

「くそおつ……！」

シャルク：LP5500

「レベル4の《ハンマー・シャーク》と、レベル1の《深海のアーチザン》に、レベル2の《深海のディーヴァ》をチューニング！ シンクロ召喚！ レベル7、《白鬪気一角》ホワイトオーラ・モノケロス！」

「へっ、やっぱシンクロか！ いいカモだぜ！ 1400ポイントの攻撃力ダウンとダメージをくらえ！ クラックフォール！」

「きやあああつ！」

シャルク：LP4100

「まだまだ……！ モノケロスの効果発動！ 墓地のシーラカンスを蘇生するよ！」

「それでもレベル7！ 同じく1400の攻撃力ダウンとバーンダメージだ！」

「うわあああつ！」

シャルク：LP2700

これでシャルクのフィールドにはレベル7のモンスターが2体。しかし度重なるバーンによって、シャルクの体力が消耗していた。

ここでガイオアビスを出せたとして、確かに《クラッキング・ドラゴン》とカタストルの攻撃は止まるだろう。しかしガイオアビスでは《クラッキング・ドラゴン》の効果を止められない。

また、既にオーバーレイユニットが残っていないアースシエイカーは効果を遣えないが、レベルを持たないため攻撃を封じることができない。だからこそ——シャルクの狙いはただ1つ。

「レベル7のモノケロスとシーラカンスでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！

ランク7、《水精鱗——ガイオアビス》マーメイル！」

「チツ、レベルを持たないエクシーズモンスターには、《クラッキング・ドラゴン》の効果が発揮されねえ……！」

「魔法カード《貪欲な壺》！ 墓地の《ゼンマイシャーク》《発条空母ゼンマイティ》《ヴァリアント・シャーク・ランサー》《海晶乙女^{マリネ}コーラルアネモネ》《ライトハンド・シャーク》をデッキに回収して2枚ドロ―！」

手札に引いた2枚のカードを確認すると、シャルクの口元に笑みがこぼれる。

「あたしは魔法カード《エア・トルピード》を発動！ シャークドレイクのオーバーレイユニットを1つ使い、相手にあたしの手札の枚数×400ポイントのダメージを与える！ この「相手」は【閨属性・機械族】使いのそっち！」

凸げき団A：LP7600

「チツ……だがこのくらいのダメージ、屁でもねえ！」

「だろうね。でも、これで勝利への道筋が見えた！ あたしは手札から《カッター・シャーク》を召喚し、効果発動！ デッキから《ライトハンド・シャーク》を特殊召喚！ そして自分の場にライトハンドがいることで、墓地の《レフトハンド・シャーク》をレベル4として蘇生する！」

「レベル4が3体……！ だが《クラッキング・ドラゴン》の効果忘れてねえだろうな！ レベル4×200×3体！ 計2400のダメージを受けてもらうぜ！」

シャルク：LP300

「ぐうっ……！ レベル4のライトハンドとレフトハンドでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《深淵に潜む者》！」

「攻撃力1700……？ ハッ、《クラッキング・ドラゴン》の効果を恐れてエクシーズしたのはいいが、その程度のモンスターしかもうエクストラには残ってなかったのか？ あアン？」

「それはどうかな？ 《深淵に潜む者》が存在する限り、あたしの水属性モンスターは全て、攻撃力が500ポイントアップする！」

これでガイオアビスとシャークドレイクの攻撃力は3300。
《カッター・シャーク》も2100、深淵自身も2200となった。

あと危惧すべきは凸げき団Bが伏せているセットカードだが――。
「さらにガイオアビスの効果も発動！ 相手は攻撃力3300以下の
モンスター効果を使用できない！」

これでカタストルの効果破壊も封じ、安全に戦闘破壊できるよう
なった。

シャルクはその眼光をより鋭くさせると、バトルを宣言する。

「バトル！ シャークドレイクでアースシェイカーを攻撃！ デプス
バイト！」

「ト、畏発動！ 《シールド・スピア》！ アースシェイカーを対象に
発動し、攻守を400ポイントアップさせるんだな！」

「攻撃力3500……!? だけど、シャークドレイクは戦闘・効果じや
破壊されない！ くっ……うわあああつ！」

シャルク：LP100

ついにライフがデッドゾーンに入ったシャルクだが、この危機だか
らこそ、シャルクはその口元に笑みを浮かべた。

「なら、《深淵に潜む者》でカタストルを攻撃！ 水属性かつ攻撃力が
同じだけど、素材となったライトハンドとレフトハンドが与えた効果
により、《深淵に潜む者》は戦闘でも効果でも破壊されない！ よって
カタストルを一方的に破壊する！」

「いいや！ フィールド魔法《ヘビメタル・レイダース鋼鉄の襲撃者》によってカタストルは1
ターンに一度だけ戦闘破壊されない！」

「ならガイオアビスでカタストルを再び攻撃！」
「ぐっ……！ この程度！」

凸げき団A：LP7000

「だがガイオアビスで封じられてるのは墓地効果とフィールドのモン
スター効果だけ！ 永続魔法は有効だ！ カタストルが戦闘破壊さ
れたことで《マシンナイズ・フロントライン機甲部隊の最前線》が発動するぜ！ デッキから攻撃力
2200未満の閥属性・機械族を特殊召喚する！」

「攻撃力2200以下の閥属性・機械族……。ガイオアビスの影響を

受けるのは効果発動前に存在したモンスターだけ。ってことは、狙いは……！」

「オレは《ツインバレル・ドラゴン》を特殊召喚し、効果発動！ コイントスを2回払い、2回とも表なら相手のカード1枚を破壊する！」
ここでギャンブル効果による反撃。今までのシヤルクでは理解できないプレイングだったが、もしもあのデツキが彼なりに信頼を注いだデツキなら、きつとそのカードたちは彼の想いに応えようとするはずだ。

「さあ、運試しとこのうか！ オレの狙いはもちろんガイオアビス、てめえだ！」

ツインバレルの頭上に現れるルーレット。4つのマスに弾丸のマークが2つ表示されており、二本の針が回転を始めている。

そしてその回転は徐々にスピードを緩めていき——2つの針が弾丸のマークを指した。

「よっしゃあ！ ツインバレルに2発の弾丸が装填された！ いけ、ツインバレル！ ガイオアビスを破壊しろ！」

「ガイオアビス……！」 けど、まだバトルは継続中だよ！ 《カットター・シヤルク》でツインバレルを攻撃！」

「ダメージは受けるが、フィールド魔法の効果で一度だけ戦闘破壊されねえ！」

凸げき団A：LP6600

ライフを一気に1400削ったのはいいが、それでも攻撃力2000越えのモンスター4体での総攻撃でやつとだ。

早々にフィールド魔法を割ってしまったが、今のところ魔法カードを破壊するカードは引けていない。あるいは、《ギヤラクシー・サイクロン》あたりが墓地に落ちていればとも思うが、ないものねだりは意味がない。

「さあて……じゃあいよいよ本気出そうかな！ あたしは海咬龍シヤークドレイク1体でオーバーレイネットワークを再構築！ カオスエクシーズチェンジ！ 深海に潜みし、狡猾にして獰猛なる脅威の咬牙！ 《CNO. 32海咬龍シヤーク・ドレイク・バイス》！」

「な……なんだ!? そのモンスターは!?」

オリジナルのナンバーズの中でも、一部のモンスターだけが至ることのできる真の姿、それがカオスナンバーズ。

そしてこれまでオリジナルのシャークドレイクを所持していた珊瑚でさえ、シャークドレイクをカオス化するまでには至らなかったこともあり、シャークドレイクバイスの能力の全容を知るのは現代においてシャルク一人だけ。

「あたしはこれでターンエンド!」

「あんなモンスター、クォラントタウンのジムリーダーだって使つてなかったぞ……! だ、だがレフトハンドとライトハンドの影響がなくなったことで破壊もできるようになった!」

「でもこつちには2000オーバー打点が4体だよ?」

「構うかよ! オレの《クラッキング・ドラゴン》の攻撃力は3000! てめえの今のライフを忘れたか!」

そう、今のシャルクのライフポイントは僅か100ポイント。

攻撃力3300のシャークドレイクバイスとガイオアビスではダメージを与えられないが、《深海に潜む者》か《カッター・シャーク》を攻撃すれば通過ダメージは800ポイント。十分にシャルクのライフを削りとれる。

仮に《クラック・ドラゴン》の攻撃を防いだとしても、凸げき団Bのアースシェイカーは攻撃力3600。シャークドレイクバイス以外のどのモンスターを攻撃されてもシャルクのライフは0になってしまう。

「行くぜ、オレのターン! バトルだ! 《クラッキング・ドラゴン》で《深淵に潜む者》を攻撃! トライフック・ブラスト!」

「勝負を急いだね! それとも、この子が出たのが序盤すぎて忘れてたのかな? 墓地の《キラール・ラブカ》を除外して効果発動! 水・魚・海竜族モンスターへの攻撃を無効にして、その攻撃力を500ポイントダウンさせるよ!」

「しまっ……!」

シャルクが仕掛けていたセットカード以外のもう一つの罠。それ

は最初のターンに使用した《キララー・ラブカ》を、凸げき団たちの記憶から薄れ、なおかつカオスナンバーズを見て勝負を焦ったこの瞬間に発動すること。

ここからほんの少し前でも後でも、今ほどの動揺は与えられない、まさしく《キララー・ラブカ》の奇襲性を最大限活かせるタイミミング。「——なんつってな！ 速攻魔法発動！ 《ダブル・アツプ・チャンス》！ モンスターの攻撃が無効になった時、ダメージステップの間、そのモンスターの攻撃力を2倍にして再び攻撃ができる！」

「攻撃力5000での再度攻撃……！」

「これで終わりだ！ 《クラッキング・ドラゴン》でシャークドレイクバイスを攻撃！ 撃滅のトラフィック・ブラストオ！」

勝利を確信したように笑みを浮かべる凸げき団Aだが、シャルクの表情は変わらない。

そんな彼女を見て、Liveチャットも何かを察したのか『もしかしてあの効果って……』『えっマジ？ あれ使えるの？』『まあ確かに発動条件は満たしてるな』と、危機感よりも疑問交じりの意見が流れている。

「いいや、まだ終わらないよ！ 《CNo. 32海咬龍シャーク・ドレイク・バイス》の効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、墓地のトライポッドを除外することで、《クラッキング・ドラゴン》の攻撃力を0にする！」

二段構えの防御札。以前戦ったセレブと比べれば稚拙にすら思える防御ではあるが、今この状況では十分にその役割を発揮していた。

効果の全容を把握していなかったLIVEチャットも、『うわあああやっぱりだああああ』『相手ターンにも使えるんかい！』『君よく有能って言われない？』などと困惑と歓喜のコメントで溢れかえる。

「バカな……オレの、クラッキングが……！ ぐわあああああつ！」

凸げき団A：LP3800

今の連続攻撃を防がれ、凸げき団Aの手札は尽きた。場にも墓地にも、このターンできることはもうない。

「バトルフェイズを終了し、ターンエンド。頼んだぜ、弟分……！」

ここで仕留めきれなければ、自分たちに勝利はないと、さすがの凸げき団も理解したのか、両者の表情が険しく引き締まる。

「オイラのターン！ す、既にシャークドレイクバイスはオーバーレイユニットを使い切った！ お前の墓地にも、既に攻撃を妨害するカードはないはずなんだな！」

「ふーん、よく見てるじゃん」

「だったら……ここで仕留めきるんだな！」

凸げき団Bはアースシェイカーを一瞥すると、その狙いを《深淵に潜む者》に定めた。

「バトルなんだな！ アースシェイカーで《深淵に潜む者》を攻撃！

これで——」

「墓地の罫カード《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》発動！ このカードを墓地から除外して、ランク4のシャークドレイクバイスをランクアップさせる！」

「なっ……ここで、ランクアップだど!?!」

そう、これがシャルクの仕掛けた最後の隠されし牙。

「海咬龍シャークドレイクバイスをエクシーズ素材として、ランクアップ・エクシーズチェンジ！ 現れる、ランク5！ 《ヴァリアント・シャーク・ランサー》！」

「よりもよってそいつかよ……！」

「そいつが相手じゃ、手札の《リミッター解除》じゃなんの意味もないんだな……！」

「自分の場に他の水属性エクシーズがいる時、シャークランサーの効果は誘発即時効果となる！ あたしはシャークランサー自身のオーバーレイユニットを1つ使い、アースシェイカーを破壊する！」

これで、凸げき団2人のフィールドにはモンスターは一体もいなくなつた。

「ターンエンド、なんだな……！」

失意のまま、それでも二人はその手をデッキに乗せることなく、ターンの終わりを告げる。

「あたしのターン、ドロロー。……バトル。……バトロー。ガイオアビスで【リンク9】
使いの方に攻撃！ アビスライジング！」

「う……うわあああああつ！」

凸げき団B：LPO

「続いて《ヴァリアント・シヤーク・ランサー》と《深淵に潜む者》で
もう一人の方に攻撃！」

「く、クソっ、おぼえてやがれええええええつ！」

凸げき団A：LPO

わくわくのデツキ調整

「バカな……！　こんなガキに二人がかりで掛かって、負けただと……!?!」

「や、ヤバいんだな……！　こいつ、強すぎるんだな……!」

動揺を隠さないまま尻餅をつく凸げき団を見下ろしながら、シャルクは彼らのデュエルディスクを見つめた。

あの時、成功率25パーセントのコイントスを成功させた《ツインバレル・ドラゴン》はきつと、彼を勝たせたかったのだろう。自分の主が他人に迷惑をかける存在だと知ってか知らずか、それでもツインバレルは必死に彼のために頑張っていた。

もう一人も、度胸はないが戦況を見極める洞察力は大したものだった。最後のターン、進化前のシャークドレイクの効果からシャークドレイクバイスの能力をデバフ効果だと見抜いたのは、間違いなく彼の観察眼と頭脳が合わさったからこそその見事な読みだった。

「……ブラヴオー。いいデュエルだったよ。あなたたちが凸げき団じゃなかったら、きつともっと楽しかったってくらいには」

シャルクはそう言い残すと、凸げき団の横を通ってクーラント鉱山を進んでいった。



「ふーっ、さすがに二人を同時に相手取るのはキツかったなあ。えっ、『その割にはずつとシャルちゃんのペースだったような』？　まあ確かに予想外の展開ってのはそんなになかったけど、やっぱり知らないカードを使われるのは怖いよね。ツインバレルとか何それって感じだったし」

先程のデュエルの疲れからか、炭鉱の中を歩くスピードはいつもよりやや遅く、デュエルディスクに移るLiveチャットにすら、『シャルちゃんけっこう疲れてる?』とまで言われる始末だ。

休憩したい気持ちと、一刻も早くサーマルタウンに着きたい気持ち

がせめぎ合い、今のところ後者が勝っているおかげで、重い足がなんとか前に進んでいる。

「結局出てはこなかったけど、ツインバレルが居たことからして、たぶんあのデツキには《リボルバー・ドラゴン》も入ってたんだらうね。ギャンブル効果による破壊は「確定していない破壊」だから厄介って時はあるよね。《我が身を盾に》とかじゃ守れないしよ」

確定していない破壊効果。つまり、そのカードが発動した時点で「破壊」することが決まっていないカードというものはいくつもある。

インテリの使用していた【ブラック・マジシャン】などに採用される《テイメンション・マジック》などは、発動した時点では魔法使い族を特殊召喚する効果であり、その後で相手モンスターを破壊するかどうかはプレイヤーの任意であるため、破壊が確定していない。

これと同じように、ギャンブル効果による破壊もまた、発動した時点では破壊が不確定であるため、《我が身を盾に》や《テストラクション・ジャマー》などでは破壊を無効にすることができない。

《ダブル・アツプ・チャンス》を採用してたのは、あの人なりの遊び心だったのかな。ほら、あのデツキって【闇属性・機械族】であると同時に【ギャンブル】でもあるからさ、《ダブル・アツプ・チャンス》のイラストってスロットだから入れてたのかなって」

今まではイラストにまで気に懸けたことはなかったが、カード1枚1枚に込められた想いや意味を考えるようになった今だからこそ、シャルクには彼のデツキに対する気持ちがなんとなく理解できた。

そんなシャルクの視点には、リスナーたちも「確かにイラスト的にはピツタリだな』『どんだけギャンブル好きなんだよ』『ホント、凸げき団じゃなかったらいいデュエリストだったんだらうな』と意外そうにしなながらも納得している。

「もう一人の方も、いい目だったよ。最後のターン、あたししか知らないはずのバイスの効果を、進化前の効果から推測して対策してきた。あたしが《深淵に潜む者》を出してなかったら、少なくともギャンブル使いの方はあそこで仕留めきれなかった」

凸げき団Bのデツキは、おそらく【光属性・機械族】であると同時に

に「ランク9」の動きも混ぜたデツキだったのでだろう。

最初のターンで王^{ジュエネレイド}を出してきた時はシャルクでさえ動揺したし、アースシェイカーの登場には危うく《神の氷結》を忘れかけそうになるほどのインパクトがあった。

ランク9は種類こそ少ないが、どれもこれも強力な効果を有する大型モンスターであり、ステータスや効果に関係なく、その威容から対戦相手に与えるプレッシャーはランク4や5などでは再現できないだろう。

「二人とも、すごいデュエリストだった。カードへの想いも、プレイングも。だけど……そんな人がLiveデュエリストじゃなく凸げき団になっちゃったのは、なんか悲しいよね」

凸げき団は犯罪者ではないが、厄介で迷惑な嫌われ者だ。その多くはLiveデュエリストであった者が、なんらかの問題を起こしてD-LIVE^{トライブ}のアカウントを停止されてしまい、自分のチャンネルで配信できなくなったために、他人の配信に「凸げき」するようになった者の集まりだという。

彼らがいったいどんな理由で凸げき団に身を落とすようになったのか、その経緯はわからないし、シャルクにとっても興味はない。それでも——もしも彼らがまっとうなLiveデュエリストであったなら、きつとあのデュエルはもつと楽しかっただろうと思わずにはいられなかった。

「そういうえばさつきチャンネルみたら収益化が通ってたっぽいから、次の配信から投げ銭機能がつくよー。登録者は大会前から3000人くらいいたから、公開してる配信時間の関係かな。まあ投げ銭機能なんて誰も使わないと思うけど」

今のところ特にお金も困ってないし、と言いつつも収益化をONにしているのは、この大会中、収益化に限らずD-LIVE^{トライブ}の利用可能な機能は積極的に利用することが、配信者の都合上問題がなければほぼ強制に近いレベルで推奨されている。

とはいえ、現在のシャルクのチャンネル登録数は1万8000人。大会全体から見れば少ない人数であるが、シャルクは自分のデュエル

スタイルが基本的に人から好かれないものだど理解しているため、自分のリスナーをとっても大事にしていた。

おかげで、本人は知らないがリスナーの間では「クセが強いけどハマったら抜けられないLiveデュエリスト」という共通認識を持たれている。

「さて、出口ももうすぐだし、一度チャット閉じるね。サーマルタウンの宿に入ったらデツキ調整がてらお喋りするから、それまでしばしのお別れ！ おつサマー！」

Liveチャットを閉じてクーラント鉱山の出口を抜けると、エンジンシティのはずれへと到着した。

ここを数百メートルほど進めば、目的地であるサーマルタウンに到着する、のだが――。

『魔法カード《エアールピード》発動！ 手札の数×400ポイントのダメージを与える！ あたしの手札は4枚！ よって1600のダメージを与える！』

『これで終わり！ 《ヴァリアント・シャーク・ランサー》でダイレクタアタック！ おつかれさま！』

『海咬龍シャークドレイクで《雷帝ザボルグ》を攻撃！ 戦闘で相手モンスターを破壊したことでシャークドレイクの効果発動！ ザボルグを弱体化させて引きずり出し、追撃する！』

なんと、このクーラント鉱山を抜けてすぐに3連戦。気分的にはモンスターハウスに引っかけたにも等しい精神状態で、シャルクはそれらを払いのけて全勝。

何せ、蛮族に続いて二番目に早い進行状況であるため、待ち受けている一般デュエリストたちが万全の状態で待ち受けているのだ。そして、そんな一般デュエリストを相手にしている内に、数人のチャレンジャーたちがシャルクを追い抜いていく。

その中には、デュエル中のシャルクにお辞儀をして進んでいったインテリと、軽く手を振って通り抜けていったセレブも含まれていた。

「インテリくとセレブちゃん早っ……！ まだ二日目の夕方前だよ!? 二人ともあたしよりクーラントジムに挑むの遅かったじゃん！」

あー！ それもこれも絶対に凸げき団の相手なんかしてたせいだー！」

さつきまでのリスペクト精神はどこへやら、凸げき団への恨み言をぶつぶつと呟きながらサーマルタウンに到着すると、シャルクはそのまま宿にチエツクインすると、荷物だけ置いてカードショップのストレージコーナーへと移動した。

水属性のいいところのひとつは、マイナー故に効果の強力さに反して安価なカードが多いことだ。水属性同士でなければ戦闘破壊されないという強力な全体耐性を与える永続魔法《ホワイト・サルベージ水舞台アクアリウム・ステージ》や、毎ターン墓地から魚族を回収する《ホワイト・サルベージ白の救済》でさえ、単価2ケタのストレージに埋まっている。

レアリテイの高いエクストラモンスターはさすがにシヨーケースに飾られてそれなりの値段がするもの、ここまでのデュエルでシャルクの懐もそこそこ温かい。だからこそ、次のサーマルジムに挑む前に、ここでデツキを強化していききたいところなのだ。

「おつ、《プリンセス鯨っ子姫》と《ダブルフィン・シャーク》はつけーん！ もう1枚ずつ持つてるけど、2枚積んだ方が安定するし、これは買いたねー！」

『ふむ、《ダブルフィン・シャーク》か。《サイレント・アングラー》も含めば即座にわらわを出せるよいカードじゃな！ まあもつとも、わらわの効果とはあまり相性がよくないがのう……』

「うわっ、シャークドレイク！ こんなところで出てこないで……つて、なんか小さくない？」

『うむ！ あまり大きいと勝手が悪かろうと思ひ、邪魔にならぬ大きさにて顕現したでな！ もっとわらわを褒めるとよいぞー！』

そう言いながらシャルクの肩に乗っているのは、彼女のエースモンスターであり、彼女が持つ数少ない「オリジナル」のエクストラモンスター、シャークドレイク。

デュエル中に喋った時はもう少し威厳のある口調だったようにも思えたが、もしやあれはシャークドレイクなりに対戦相手であるシャルクに対して気を張っていたのかもしれない。シャルクが正式な持

ち主となったことで、その緊張が解けたのか、今はずいぶんと崩れた態度だ。

「ん？ 《ジエネレーション・フォース》？ デツキからエクシーズカードをサーチ……えっ、これモンスターもサーチできるの？ 魔法・罫だけじゃなくて？」

『そのようじゃな。主さまのデツキだと《エクシーズ・リモーラ》と《エクシーズ・スライドルフィン》が対象範囲じゃな！』

「買うわ。せっかくだしもう1枚リモーラないかなー。うーん……うーん……あつた！ これでモンスター枠2枚で実質リモーラ3枚！ 状況次第では《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》と《エクシーズ・ギフト》にも対応してるの有難いね」

『わらわ、オーバーレイユニット多くなりがちじゃからギフトは使いやすそうじゃの』

シャークドレイクも興味を示した《エクシーズ・ギフト》は、自分の場に2体以上のエクシーズモンスターが存在する時、それらからオーバーレイユニットを2つ使うことで2枚ドロウする効果を持つ。

汎用カードとして使われる《貪欲な壺》と比較すると、状況は限られるが墓地アドバンテージを減らすこともデツキ枚数を増やすこともなく2枚ドロウできるのは間違いなく強力なのだが――。

「いや、言っておいてなんだけど、たぶんギフトは抜くかな。シャークドレイクを出す時って素材をたくさん使うから複数のエクシーズを並べる余裕ないし、むしろスライドルフィンで素材を増やして《ストイック・チャレンジ》つけて殴った方がダメージ出るしね」

『《ストイック・チャレンジ》か……。確かに強力なコンボなのはわかるんじやが、あれ付けられるとわらわ効果を使えぬし、何よりなんとなく束縛感があって嫌いなんじやよね……』

「じゃあ《ストイック・チャレンジ》も後で抜こつか。いくら有効なコンボでも、シャークドレイクが嫌がることしたいわけじやないし。うん？ この《光の護封壁》って、もしかして最初からライフ7000払えたりしない？」

『ライフを7000……？ 　もしや序盤からわらわの真の姿を使う気

マンマンじゃな！ よいぞよいぞ、もつとわらわを活躍させよ！』

そうなるトリカバリーのためにライフを回復するカードも欲しいなあ、と言いながらストレージを漁っていると、新しい客がシャルクの隣に立ち、同じようにストレージを漁り始めた。

サーマルタウンはこのあたりでは一番栄えている街であるため、こうして何人かが並んでストレージを漁るのは珍しいことではないが、シャルクがついなんとなく視線を横にやると、そこにいたのは――。

「インテリくん？」

「はい？　――ああ、先客はあなたでしたか。さつきもお会いしましたね」

「あ、うん……。でもなんでインテリくんがストレージを？　【ブラック・マジシャン】関連のカードってどれもこれも高いから、こんなところにはないと思うけど」

「ええ。そもそも【ブラック・マジシャン】デッキは既にほとんど完成形ですので、新規のカードが追加されない限りほとんど弄るところはありません。なので、こちらに用があるのは僕の本当のデッキの方です」

インテリの本当のデッキ。

確かに、以前の戦いでインテリは自身の【ブラック・マジシャン】について「リーグマスターから受け取った」と言っていた。それは即ち、【ブラック・マジシャン】が彼本来のデッキではなく、あくまで「勝つためのデッキ」であることの証だ。

しかし、勝つことが目的であるのなら、【ブラック・マジシャン】デッキだけを使い続ければいい。なのにこうしてカードショップのストレージを漁っているということは、彼が自分の本来のデッキのことを今でも大切にしていることの証明に他ならない。

「へー、どんなデッキなの？」

「言うと思いますか？　仮にも我々はお互いに同じ大会のライバル同士。わざわざ手の内を晒すようなバカな真似はしませんよ」

「それもそっか。でも複数のデッキを使いこなすってカッコいいよね。あたしは一個だけで手いっぱいだよ。あつ、《ホワイト・ミラー白の水鏡》みーっ

け。ストレージはこんなもんかな。じゃ、あたしショーケースの方にいくから。またねインテリくん！」

軽く手を振ると、あちらも小さくお辞儀をして別れた。

ストレージコーナーから少し離れると、融合やシンクロ、属性別、あるいは魔法・畏などいくつかの種類にわけてショーケースが並んでいた。

「エクシーズ、エクシーズ……うわっ、やっぱりナンバーズは高いなあ。まあ水属性のナンバーズなんてそうそう……えっ!?」

ナンバーズはそもそもオリジナルが各種1枚ずつしか存在しないため、レプリカもなかなか製造されない。そのためオリジナルとは比較にならないものの、レプリカも十分にレアで高価なのである。

そして、そんなレアで高価なナンバーズの中でも、注目度の低さからかほとんど目にする事のないカードが、今まさにシャルクの目の前にあった。

「《No. 37 希望織龍スパイダー・シャーク》……! 素材に水属性指定があるからほとんど注目されないけど、効果は間違いなくピカイチ! けど4200DPかあ……! あたしの今のDPは42300……ストレージのと合わせるとちよつとだけ足りないけど……ええーい悩んだら買いだあつ! すみませーん店員さーん!」

「はい、ショーケースのカードですね。ただいま向かいまーす!」

シャルクがショップ店員に声をかけると、いくつかの鍵が束になったホルダーを手にして、こちらへと早足で向かってきた。

「どちらになさいますか?」

「えつと、このカードなんですけど、300DPだけまけてもらえませんか?」

「ああ、ナンバーズですか。珍しいからって高値にはしたんですけど、やっぱり使いにくいのか全然売れなかったんですよ。300どころか500DPくらいおまけしても構いませんよ」

「本当!? じゃあその浮いた500DPでこっちのカードもお願いしますー!」

「かしこまりました! ではカウンターにお越しください」

ほくほく顔でシヨップから宿に戻った時には、懐はすっかりすつからかん。1DPすら残っていないが、シャルクはすぐさまLiveチャットを開き、デツキ調整を開始した。

「じゃっじやーん！ 見て見てみんな！ これなーんだ？」

自慢気にドアップでスパイダーシャークを画面に移すと、チャットはすぐに大騒ぎとなった。

『2枚目のナンバーズ!?』『野生? シヨップ?』『レアリティがノーマルだからレプリカだな』『またそんな高額カード買って……』『これでも受け取ってもつと軽率にナンバーズを購入しろ!』と、何人かは投げ銭までしている者もあり、ついさつき露となって消えたシャルクのDPが元手を超えていくのが見えた。

最初の内は「ありがとねー!」と言ってはしゃいでいたシャルクだが、投げ銭システムの一日の上限額である50000DPが10件を超えたあたりから悲鳴を上げ始めた。

「まってまってみんな！ 投げ銭は嬉しいんだけど額！ 額見て！ お金は大事にしよう!? もう十分すぎるくらいもらったから！ このままだとスパイダーシャーク3枚できる額になっちゃう! 『3枚投入しろ?』? いやいやいやシヨップにもうないから！ お願い止まって!」

『どうした、何事じゃ主さま』

「シャークドレイク! どうしよう! なんか投げ銭がすごいことになって……ああああ中古のバイク買えちやう金額になったああああ!」

ただでさえ暴走気味の投げ銭が、シャークドレイクの登場によって『ちっちゃいシャークドレイク出てきた!』『のじゃろドリドレイクだどお!?』『いやロリではないだろ』『そもそも人ですらないだろ』『構うもんか! さらに諭吉イ!』と收拾がつかなくなっていく。

「うええええ……お金こわいよう……。えつと、これ抜いて、代わりにこっち入れて……ひいつ、また投げ銭きた! あ、このカード2枚積まなきや……」

『おいたわしや主さま……。あつ、わらわこやつ好き』

「2枚入れますう……！」

ひんひん泣きながらデッキ調整をするシャルクを慰めながら、容赦なく自分好みのカードを入れさせようとするシャーウッドレイクに、『幼女のデッキを自分色に染めていくドレイク』『1ターン目からシャーウッドレイク出すのに特化しつつあって草』と呆れの色を見せるリスナーたち。

しかし実際のところ、今までピン挿しであった《エクシーズ・リモータ》を2枚にしたり、《カッター・シャーク》にアクセスできる《鱒つ子姫》プリンセスを2枚にすることで実質《カッター・シャーク》4枚扱いにしたりと、どんどんエクシーズ召喚へのスピードが上がっているように見える。

「《ジェネレーション・フォース》入れたいけど、どれ抜こうかな……」「《ストイック・チャレンジ》の代わりは既に2枚目の《白の水鏡》ホワイト・ミラーで埋まっておるしのう……！」

「エクシーズが横に並びがちなたたしのデッキだと、《団結の力》とかもシャーウッドレイクと相性がいいんだけど、枠が足りないねえ……」シャルクのデッキは基本的にモンスター24枚、魔法11枚、罠5枚を黄金比としつつ、ジム戦では直前にジムリーダー対策のカードを投入している。また、けっこうな頻度でデッキを調整していることもあって、「ぎっきのデュエルでは使ったのに次のデュエルではデッキにすら入っていない」ということがままある。

そんな中、コンセプトの中核となるカードをフォローするカードはなかなか抜きにくい。特に既に入っている装備魔法《白のヴェール》と、今入れようとしている《団結の力》は、同じカードのサポートとして入れようとしているものの、役割が大きく異なる。

戦闘中の魔法・罠を封じる《白のヴェール》は、シャーウッドレイクバイスの連続攻撃を安全に通すことができる。しかしエクシーズを複数並べがちなこのデッキでは、《団結の力》による上昇値はシャーウッドレイクの連続攻撃と合わさって、相手に大ダメージを与える鍵となる。

どちらもシャーウッドレイクをサポートするカードであるが、役割的

にいえば「守りのヴェール」「攻めの団結」といったところで、シャルクのプレイング的には前者を優先しがちだが――。

「シャークドレイク、あなたはどっちがいい？」

『どちらも好みじゃが……やはり白はわらわの真の姿で間に合ってる！ それにわらわはどちらかと言えばガンガンに攻めたい方じゃ！』

「だよねー。じゃあ《白のヴェール》抜いて団結入れようか。んでホワイト・ミラー《白の水鏡》を1枚にして《ジエネレーシヨン・フォース》を採用。あとはこれとこれを入れ替えて……よしつ、完成！」

ようやくデツキを完成させると、シャルクは投げ銭の総金額から目を逸らしたまま挨拶を終え、Liveチャットを閉じた。収益化初日は思えないような額だったような気がしたが、こんなことはこれつきりだと信じながら。

サーマルジム対策会議

デュエルシティ2日目の夕方。さすがにシャルクを追い越すデュエリストも何人が出てくる頃。

シャルク的にもさすがに「二番目」にこだわるのはこの辺りが限界かと思切りをつけ、その日は宿でゆっくりデッキの見直しと、SNSでエゴサーチと次のジムの情報収集。

サーマルタウンのジムリーダーは炎属性使い。前年度のファイナルトーナメントでは一回戦敗退となっていたが、その対戦相手が昨年の優勝者でもある以上、ある程度は諦めもついただろう、という意見もいくつか見られた。

だがシャルクには——いや、デュエリストなら誰でもわかる。「公式戦で負けて悔しくないデュエリストなどいない」と。その瞳に熱く燃える炎を宿して背筋を正すサーマルジムリーダーもまた、きつと「諦め」などついているはずがない。

それに、画面に映るそのジムリーダーの背後に立ち、その雄大で美しい紅蓮の翼を広げるモンスターも、彼の「次は負けない」という意思を表しているかのようにであった。

「サーマルジムのジムリーダー……エクストラデッキはわずか3枚。たった1種類のエースだけで戦い続ける、燃える不死鳥に愛された男、ホムラ……か」

このデュエルシティに参加する時、シャルクは前準備としてD-ドライブ LIVEにアーカイブが残されている映像から、すべてのジムリーダーのデッキやプレイングを研究した。その中で、彼女が最もそのデッキ構成を理解できないまま、「まあ勝てるだろう」と判断した相手がホムラだ。

エクストラデッキのカードは、メインデッキとは異なり条件さえ満たせばいつでも強力なモンスターを呼び出すことができるため、エクストラデッキを封じることには戦略的な意味がない限り、そこに含まれる種類と数は多ければ多いほど強いことになる。

なのに、ホムラのデッキにはエクストラデッキを封じるカードもな

ければ、その種類はわずか1種類。それを3枚積んだとしても、できることは限られてしまう。だからこそ、かつてのシャルクは彼の戦術は幅が狭く深みもないものだ」と判断していた。

「シャークドレイク」

『呼んだか主さまー』

シャルクが呼ぶと、カードの中から嬉々とした様子でシャークドレイクが顕現し、無邪気に彼女の周りをうろちよろと飛び回る。

「明日、サーマルタウンに挑むんだけどさ……さすがのあたしも、今回ばつかりはちよつとビビってるんだよね」

デュエルシテイには6つの関門として六属性それぞれのプロフェッショナルが待つジムが存在するが、実際にこの大会に出るにあたって、過去のチャレンジャーたちが声を揃えて言うのは「最初の関門はサーマルジムだ」ということだ。

かつてシャルクがそう思っていたように、一見デッキ構成だけ見れば、付け入る隙はいくらでもあるように見える。しかし今のシャルクにならわかる。彼のデッキにたった1種類しかエクストラモンスターが存在しない理由が。

それは彼がそのカードに対して絶対の信頼を置き、カードもまた彼の信頼に応えようとした結果、デッキ構成や戦術だけではどうにもならない部分——すなわち「ドロー」に関して、おそらくジムリーダーの中でも屈指、あるいは最強のドローを持っているのだと。

「あたしのスタイルは、無駄を最大限削ったデッキ構成で回転率と安定性を一定に保ち、相手の妨害をしながらエクストラデッキにアクセスして状況に最も合った対策をとりつつ安全に勝利するものだ。あたしの知る限り、それが多くの場合「強いプレイング」だと思う」

『そうじゃな。デュエルに対して天賦の才を持つような者でない限り、多くはそういうものじゃ』

「けど……蛮族と戦って、世の中にはとんでもないドローをする人がいることを知った。セレブちゃんと戦って、カードと向き合い、カードを信頼することを知った」

カードが最も求めているものは、デュエリストからの信頼だ。「お

前が来てくれたら勝てる」「お前がいてくれるから戦える」そう思われて嬉しくないカードなどいないのだと、シャークドレイクは敢えて言わなかったが、おそらく今のシャルクはそれを理解している。

「そして、カードを信頼するという一点において、このホムラさんは突き抜けている。戦略と知識だけで作った盤面なら、この人はドロークード1枚で打ち崩してくる。それを可能にさせるだけの信頼を、この人は自分のデッキに注いでる」

『なるほど……であれば、こやつのエースモンスターも、おそらくは厄介となるじやろうな。なにせ、こやつは——』

「出しにくくて強い」を顕著に表すモンスター……。モンスターの評価はおおよそ「出しやすさ」と「デュエルに及ぼす影響」を比較し合つてその強さが決まるけど、もしもその「出しやすさ」を度外視できるなら、単に効果が強力であればいい。そういう条件なら、このモンスターは間違いなく「強い」カードだからね」

シャークドレイクの真の姿たるバイスもまた、ライフ1000以下という厳しい条件を強いるものの、効果は間違いなく「強い」部類だろう。

自分・相手ターンに関係なく効果を使用でき、ダメージステップ中の発動が可能で、同一チェーン上でオーバーレイユニットの許す限り何度でも使える。また、忘れがちだがオーバーレイユニットに《N.O. 32 海咬龍シャーク・ドレイク》がない場合でも機能不全に陥らない。

攻撃力を0にするため実質的にモンスターを戦闘破壊しながらダメージトアタックに等しいダメージを与えられるため、「効果で破壊されない」カードはもちろん、「戦闘破壊されない」カードもサンドバックとして扱える。

しかし、そんな「強い」効果も、やはり出せなければ意味がない。シャークドレイクを素材にして出すとしても、3体のモンスターを素材にする必要があるし、さらにはライフを1000以下までもつていかなければならない。

「炎属性で共通する脅威性といえば、やっぱりバーン効果だよな。《火

霊術―「紅」を筆頭として、永続的に効果を発揮する《バックファイア》も警戒しなきゃならないし、ライフを削るために《ギャラクシー・サイクロン》を抜いて《コズミック・サイクロン》を採用したのは正解か失敗か……ちよつと不安だね」

『バーンだけが脅威ではないぞ。炎属性といえば《真炎の爆発》があるからろう。採用しているカード次第では一気に展開されかねん！』
「加えてこのエースの最大打点。相変わらずあたしのデツキの元々の最大打点じゃどうにもならないし、対象を取る効果と効果による破壊は意味を為さない。一番現実的なのが戦闘破壊だけど、バイスの効果は対象を取るから0にできない」

そして最大の難点は、彼のデツキには蘇生カードがとにかく多いということだ。一度や二度エースを倒した程度ではその場凌ぎにしかならず、特にエースに至つては「一度現れたらデュエルが終わるまで居座り続ける」とさえ言われている。

「今のところとれる対策としては対象を取らないバウンスと除外なんだけど、たぶんそつちの対策もしつかりしてるだろうし、何よりこの人のドロローの前に小手先の技じゃどうすることもできない」

『ならば、出来ることと言えばひとつしかなかろう！』

「うん。今のあたしにできること……それは、自分のデツキを信じること。もつともつと、デツキと心を通わせながらデュエルそのものを楽しむこと！ だよね、シャークドレイク！」

『うむー』

デツキを信じていれば、デツキはその信頼に必ず応えてくれる。今のシャルクに足りないものはデツキへの信頼だ。特にそれが顕著なのは、危機的状況に陥った時、次に引くカードではなく手札とフィールドのカードだけで解決しようとするところだろう。

次に引くカードは不確定だ。安定性のない可能性を戦略に組み込むことはできない。だからシャルクが次のドロローに期待するのは、単に「カードの内容に関わらず手札が1枚増える」という事実だけ。その1枚の手札をブラフに相手を警戒させたり、あるいはコストにすることを考えてしまう。

だがデツキを信じているのなら、デツキからカードをドロウするとは「次にあのカードが来れば逆転できるかもしれない」という未来へとつながっていく。

確かに戦略的には愚かな行為なのかもしれない。だが理屈だけではどうにもならない奇跡を、ドロウは……カードたちとの信頼は齎してくれるかもしれない。

「……ちよつと遅いかもしいけど、せつかくサーマルタウンにいるんだし、リフレツシユに街に出てみようか」



サーマルタウンの街に出ると、シャルクが向かった先はこの街の郊外にある橋の上。ワイルドエリアの南側を一望できるここからは、ワイルドエリア内の飛行型モンスターを上から見下ろせる数少ないスポットだ。

少し遠目に見ることはなるが、大型の水棲モンスターが生息する湖も、ここから見ることができ。シャルクとしては、どちらかといえばそつちがメインだが。

「シャークドレイク」

『お呼びか主さま！』

「大きくなって空飛べる？」

『もちろんじゃ！ もつとも、あんまり高いところには行けぬし、せいぜい10分程度じゃが』

「じゅーぶん！ モンスターの背中に乗って飛ぶのって夢だったんだよね！ あたしのモンスターほとんど飛べないし！」

彼女のデツキで、シャークドレイクを除いて飛行可能な翼をもつモンスターは、同じく海竜族の《バハムート・シャーク》だろうが、あれは飛行というよりも浮遊・遊泳のためのヒレのようなものであるため、長時間かつ高いところへ飛ぶことには向いていないし、何より体型的にシャルクが乗るには不向きである。

『よい……せつとー、これでよいかの？』

「おおつ、ほんとにおつきくなった……」

お邪魔しましす、と断つて原寸大へと戻ったシャークドレイクの背中に乗ると、上空へと飛び上がった。

眼下には野生のモンスターひしめくワイルドエリア。もうほとんど沈んでいる夕日を見ながら、シャルクはシャークドレイクの首に抱き着いた。

『む？ 主さま、わらわの肌はサメ肌ゆえ主さまの柔肌には少々危ういでな、あまり強く抱き締めぬ方がよいぞー』

「ううん。シャークドレイクの肌だつて綺麗だよ。でも、バイスになつた時はもつと綺麗だつたなあ。純白で、まっさらで……白無垢を着たお嫁さんみたいだつたよ」

『そうかそうか！ 主さまがそう言うのであれば——とりたいところじゃが、あの姿になるとわらわあんまり飛べんのじゃ。すまんの、主さま』

「いいよいいよ。じゃあもし海に出ることがあつたら、その時によろしくね」

『うむー』

後で聞いてみると、バイスはどちらかというと遊泳に特化した姿であるため、飛行に必要な翼の柔軟さと幅の広さが損なわれてしまったらしい。

とはいえ、海を渡るとすればシャークドレイクやバイスよりもゼンマイテイの方が安全なように思えるが、残念ながらゼンマイテイはレプリカのカードであるため実体化はできないのである。

「シャークドレイク」

『なんだ主さま』

「明日は、勝とうね」

『もちろんじゃー！』

不死身の巨鳥

デュエルシティ開始から三日目。3つめのジムであるサーマルジムに入ると、入れ違いになる形でインテリが中から現れた。

「どうやら先を越されたようで、インテリは普段の余裕のある表情にやや疲れを見せながら、それでもシャルクが声をかけるといつも通りのしゃつきりとした姿で彼女に返事を返した。

「インテリくん！ 早いね、もう終わったの？」

「ええ。僕ほどのエリートともなれば当然ですよ。むしろ、あなたが昨日の内に進んでいなかったことの方が驚きです」

「うん。ホムラさんには万全の対策で挑みたかったからね。昨日はデッキ構築に時間を当てたんだ」

「そうですね。まあ、それが賢明でしょうね。ホムラさんは間違いなく強敵ですよ。彼が誇るあの不死身のエースモンスター、本当に最後まで倒れませんでしたしね」

相手をよく観察し、的確なプレイングで自らの強みとなる流れへと持っていくインテリが、最後まで退かすことができなかつたホムラのエースモンスター。

それを聞いて、シャルクも一段と緊張を走らせるが、どこか意地の悪そうな笑みを浮かべると、彼はシャルクに1枚のカードを渡した。「それ、差し上げますよ。ワイルドエリアで手に入れたはいいものの、僕が持っただけでも意味のないカードですから」

「《ネメシス・アンブレラ》……？」

「あなたなら活かすこともできるでしょう。では、僕は次の街に急ぎますので」

先に失礼します、と言って頭を下げると、インテリはそのままジムを出て行ってしまった。ひとまずもらったカードをデッキに入れ、受付へと声をかけると、そのままスタジアムへと繋ぐ通路に通される。

これでジム戦は3回目。だがスタジアムで待ち受ける観客の視線と歓声はどれだけ経っても慣れるものではない。シャルクは首に巻いたマフラーで口元を隠すようにすると、デュエルディスクに貼った

サメのシールに触れ、覚悟を決めて歩き出した。

すると、向かい側の通路から現れたのは、40代にしてはやや老けた顔の男性——ホムラ。スタジアムの中心でシャルクを向き合うと、そのキリつとした表情をこちらへと向ける。

「ようこそ、サーマルジムへ。僕はこのジムでジムリーダーを任されているホムラ。珊瑚君から聞いたよ。彼女のエースを託されたんだってね。なら、悪いけれど手は抜けないな。あのナンバーズの強さは僕も知ってる。何よりデュエリストとして、強そうな相手とのデュエルに、我慢なんてできないだろう?」

「ごっちこそ。あなたみたいな強そうな人と戦えるんなら、ビビってる暇がもつたないよ! 挑む前までああしたらこうしたらって考えてたのが吹っ飛んじやうくらい、今はもうワクワクだけが残ってる! さあ、デュエルを始めようよ!」

ここに立つまでシャルクを縛り続けていた緊張が、デュエルディスクを構えたことで興奮へと昇華され、二人は互いにその闘志をぶつけ合う。

「オープンチャンネル! Liveデュエル、オンエア!」

ジムリーダーのホムラが勝負をしかけてきた!

デュエルの開始と同時に、D—LIVEへと接続、周囲にはコメントを表示するパネルが投影され、会場の熱気もさらに高まっていく。「まずは僕のターンからだね! 僕は手札から魔法カード《隣の芝刈り》を発動!」

「《隣の芝刈り》……?」

「このカードは自分のデッキの枚数が相手よりも多い時、デッキの上から差分の数に等しい枚数のカードを墓地へ送る。僕のデッキは現時点で55枚。シャルク君は?」

「35枚……ってことは……!」

「そう、僕のデッキの上から20枚のカードが墓地に送られる」

序盤の1枚目から一気に20枚ものカードが墓地を肥やしていくのを見て、シャルクは即座にその危険性を理解した。シャークドレイクとも話していた通り、炎属性において墓地が肥えた上で最も恐れる

べきカード、それは――。

「続いて魔法カード《真炎の爆発》を発動。墓地に存在する守備力200の炎属性モンスターを可能な限り蘇生する」

「やっぱり握ってた……!」

「墓地から《陽炎獣ヒツポグリフォ》2体と《陽炎獣ヒュドラー》、
《陽炎獣サーベラス》、そして《ラヴァル・ランスロッド》を特殊召喚

!」

最初のつげ
最初からレベル6モンスターを5体も揃えたホムラのフィールドを見て、シャルクは固唾を呑み込んだ。

彼のドロローが脅威である以上、最も恐れるべきなのは5枚のカードをドロローする最初のターン。まさしく最初からクライマックスとも言うべきこの展開を、シャルクは警戒していた。

「さらに魔法カード《星呼びの天儀台》を発動。フィールドの《ラヴァル・ランスロッド》をデッキボトムに戻し、2枚ドロローするよ」

「ドロローを加速させてきた……!」

「うん、いいカードだ。では永続魔法《陽炎柱》を発動し、その効果で手札から《陽炎獣スピックス》をリリースを行わず召喚。さて……そろそろ温まってきたし、いつてみようか!」

「来る……ッ!」

相手のフィールドには同じレベルのモンスターが5体。この状況でやることといえば、一つしかない。

「僕はレベル6のヒツポグリフォ2体とヒュドラー、サーベラス、スピックスでオーバーレイ! 5体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築! エクシーズ召喚! ランク6、《陽炎獣バジリコック》!」

「ついに来た……ホムラさんのエースモンスター、バジリコック! しかもよりによつてエクストラモンスターゾーンに……!」

さっそく現れたホムラのエースモンスター、バジリコック。その圧倒的な存在感に、『出た! ホムラさんのエースモンスター!』『こうなったらデュエル中ずつと居るからな……』『よりによつて素材がバッチリ5個なんだよなあ』とLiveチャットの興奮もより高まつ

ていく。

「バジリコツクの攻撃力はオーバーレイユニットの数×200ポイントずつアップする。現在のオーバーレイユニットは5つ。よって攻撃力は——」

「3700……!」

「そしてオーバーレイユニットを5つ持っているバジリコツクは相手のカードの効果対象にならず、効果では破壊されない。僕はバツクに1枚伏せて、ターンエンドするよ。さあ、君はこの燃え盛る高い壁にどう挑むのかな?」

燃える壁。確かに、ただの壁ならばよじ登る余地もあるが、バジリコツクの耐性と高打点は、寄せつけてきえくれはしない。

今の手札だけで、この状況は突破できない。だからこそ、このドローに全霊を込めなければならない。

「あたしのターン、ドロロー! ……まずは《ブリンセス鯯っ子姫》を召喚し、効果発動! 自身を除外して、デッキからレベル4以下の魚族を特殊召喚するよ! おいで、《カッター・シャーク》!」

「《ブリンセス鯯っ子姫》に《カッター・シャーク》……【魚族】寄りの【水属性】といったところかな?」

「まあね! じゃあ《カッター・シャーク》の召喚に反応して、手札から《シャーク・サッカー》を特殊召喚! そして《カッター・シャーク》の効果発動! レベル3の《シャーク・サッカー》を対象として、デッキからレベル3の魚族を特殊召喚する! おいで、《キララ・ラプカ》!」

これでレベル3のモンスターが2体。このままゼンマイテイへ持っていく、《ゼンマイシャーク》を呼び出して《カッター・シャーク》と共にランク4まで持っていくとして、素材2体で出せる《バハムート・シャーク》と《深淵に潜む者》ではバジリコツクには対抗できない。

いや、手札にある「あるカード」を使えば素材3つのランク4にも繋がられるが、シャークドレイクでもブラックレイランサーでも突破できないばかりか、仮にライフを削って1000以下にしたとして、

バイスですら効果が通用しない。

さすがに手の打ちようがない。エア・フォースのような対象をとらないバウンスを引くまで耐え続けるしか方法はない。そう思いかけた時――。

『諦めるでない！ 既に逆転の一手は揃っておる！』

実体化せずエクストラデツキに納まっているはずの、シャークドレイクの声が脳裏に響いた。

逆転の一手。自分のデツキへの理解は誰よりも深いと自負しているシャルクが見逃している一手。それは――。

「……そっか、「あの子」がいた！」

「む……？」

「あたしはレベル3の《シャーク・サッカー》と《キラ・ラブカ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク3、《発条空母ゼンマイティ》！」

返しのターンを警戒してゼンマイティを守備表示で出したが、ここまでは先程までのプランと同じ。だが、ここからが逆転の一手への繋ぎ。

「ゼンマイティの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、デツキから《ゼンマイシャーク》を特殊召喚！」

「今度はレベル4が2体……」

「いくよ！ レベル4の《カッター・シャーク》と《ゼンマイシャーク》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク》！」

昨日デツキに入れたばかりの、シャルクにとって実質2枚目のナンバーズ。

どこか《バハムート・シャーク》にもシャークドレイクバイスにも似た雰囲気を感じたそのモンスターの背中に守られながら、シャルクはバジリコックを強く睨みつけた。

「バトル！ スパイダーシャークでバジリコックに攻撃！」

「攻撃力2600でバジリコックを……？ 何か狙っているね？」

「もちろん！ この瞬間、スパイダーシャークの効果発動！ オー
バレイユニットを1つ使うことで、相手フィールドに存在するすべ
てのモンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる！」

「対象を取らない大幅なデバフ……！ 確かにバジリコックは効果で
は破壊されないが、戦闘でなら破壊できる。確かに合理的な解決方法
だけど……だからこそ読まれやすいとは思わなかったのかい！ 罠
カード《バイバイダメージ》！ 自分のモンスターが戦闘を行うダ
メージ計算時に発動し、バジリコックの戦闘破壊を防ぐ！」

ホムラ：LP7900

戦闘による破壊を読まれていた。その事実を把握した時、シャルク
は自分の読みの甘さを悔いた。バジリコックの耐性は「破壊以外の対
象を取らない除去」以外には無敵だ。加えてその打点は3500。そ
のため、多くの場合はバウンスと除外を狙っていくものだと思ってい
た。

しかし、そうなる多くのプレイヤーが警戒するのは《魔宮の賄賂》
などの魔法・罠を無効にするカードだ。だからこそ、その裏をかこう
として高い打点でバジリコックを上から殴ろうとする。なぜならバ
ジリコックの耐性は「効果」に対するものであって「戦闘」には無力
だからだ。

そしてだからこそ——ホムラはその裏の裏をかい、戦闘への準備
をとっていた。魔法・罠で除去してきた場合、それがバウンスにせよ
除外にせよ、そういうカードは使い切りのものが多いため2体目を出
せば済む話だ。それを可能にする《真炎の爆発》を、彼のドロローは必
ず引き当てる。

「そしてこの戦闘で受けたダメージを、倍にして相手に返す！」
「うわあっ！」

シャルク：LP7800

今の一撃、通れば間違いなく状況は一変しただろう。ホムラの手札
はわずか1枚。あれが《真炎の爆発》だとしたら、彼は最初のターン
に2体目のバジリコックを出していた可能性すらある。

事実、彼がバジリコックを召喚したのはエクストラモンスターゾー

ン。2ターン目以降で2体目のバジリコックを召喚するためにそうしたのだろう。

「や、やってくれる……！　ならバトルは終了。バツクにカードを2枚セットして、ターンエンドするよ！」

このままスパイダーシャークを維持できれば、バジリコックを処理することは可能だ。さつき戦闘破壊を防いだ《バイバイダメージ》も使い切り。次のターンさえ回ってくれば――。

「次の自分のターン、スパイダーシャークで攻撃を行えばバジリコックを破壊できる。そう思っているね？」

「――ッ!?　そ、そうだよ！　スパイダーシャークの効果は相手ターンにも使用できる！　仮にあたしのターンでオーバーレイユニットが残ってなくても、そつちから攻撃を仕掛けてきたところで返り討ちだからね！」

「残念だけれどそうはいかない。僕もバジリコックも、デュエルが終わるまでは一歩も下がる気はないんだ。悪いけれどその程度の盤面なら崩させてもらうよ」

高慢――ではない。ジムリーダーとして培われてきた経験と、それを可能にするだけのドロ―。何より、バジリコックへの絶対的な信頼が、ホムラにそう言わせるのだろう。

並の相手であれば一笑するシャルクでさえ、彼の言葉には警戒心を刺激させられた。そんな彼女の様子に、Liveチャットのリスナーたちも『やつぱりホムラさんつえーな』『あの自信、よつぽどカードを信じてないと出てこないよな』と、その様子を固唾を飲みながら見守っている。

「僕のターン、ドロ―」

「この瞬間、速攻魔法《コズミック・サイクロン》を発動！　ライフを1000ポイント払い、相手の魔法・罠カード1枚を除外する！　あたしが選ぶのはもちろん《陽炎柱》！」

シャルク：LP6800

「追加の陽炎獣を警戒してきたか……。悪くない対応力だね。ならば僕は魔法カード《貪欲な壺》を発動。墓地の《フレムベル・パウン》《フ

レムベル・ヘルドツグ《犬タウルス》《炎天禍サンバーン》《陽炎獣ス
ピンクス》をデツキに戻し、デツキからカードを2枚ドロ―させても
らう」

「またドロ―……！」

「デツキの枚数はむしろ増えてるから圧縮にはならないけどね。僕は
3枚目の《陽炎柱》^{ヘイスピラー}を発動。効果はもうわかってるだろう？ ああ、
ちなみにさつき除外されたのが2枚目だよ。1枚目は《隣の芝刈り》
で真つ先に落ちたからね」

「これでまたリリースなしで陽炎獣^{ヘイスビースト}が現れる……！」

「まあ、そうなんだけどね、今回はそっちが本命ではないんだ。僕は
《陽炎柱》^{ヘイスピラー}のもうひとつの効果を発動。手札の陽炎獣^{ヘイスビースト}を、場のバジリ
コックのオーバーレイユニットとすることができる。僕は手札のペ
リュトンをオーバーレイユニットに変換！」

そんなバカな、とシャルクは吼えた。なぜなら――。

「バジリコックの「効果で破壊されない効果」は他の2つと違い、あく
まで「素材が5つの場合」にだけ現れる効果！ 素材を6つにしてし
まえば、攻撃力は上がるけれど破壊耐性が失われて――」

「もちろんそれは承知しているよ。だけど、これならどうだい？ 僕
はバジリコックの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、相
手のフィールド、または墓地のモンスター1体を除外する！ 狙いは
もちろんスパイダーシャークだ」

「除外……!?!」

よりにもよって、と思いつながらも、バジリコックの効果を抑える術
がない。フィールドには相手の攻撃と効果を封じる《神の氷結》を伏
せてはいるものの、対象をとれない相手には無力であるため今のとこ
ろ死に札となっているからだ。

異次元へと送られるスパイダーシャークを見ながら、シャルクはそ
れでもホムラとバジリコックから目を離さない。一瞬でもいい。彼
の隙を見出せるなら、そのためにどこまででも耐えよう。そう思いな
がら。

「ではバトルといこうか。バジリコックでゼンマイティを攻撃。コス

モブレイザー！」

「ぐうっ……！」

前のターン、スパイダーシャークで突破できなかった時のことを考えてゼンマイティを準備表示で出していたのが功を奏し、ダメージを防ぐことには成功した。

しかしバジリコックと《陽炎柱》^{ヘイズピラー}のコンボの凶悪さが、今の動きでようやくその全貌を見せた。相手のターンはバジリコックの強固な耐性で耐えつつ、自分のターンになれば手札の陽炎獣^{ヘイズビースト}を素材に変えて相手のカードを除外。そして効果を使ったことで再び耐性が元に戻る。

今、ホムラの手札は2枚。どちらも情報不明のカードである以上、あの2枚の中には既に次のターンでオーバーレイユニットに変換するための陽炎獣^{ヘイズビースト}が握られているかもしれない。

「バトルは終了。僕はバックにカードを1枚セットして、ターンエンド」

いったいこの不死身の鳥を、どう攻略すればいいのだろうか。

最強ドロローの弱点

「あたしのターン、ドロロー！」

ホムラとの戦いが始まり、既に後攻2ターン目。削れたライフはたったの100ポイント。モンスターを倒すどころか有効打すら見つけられない状況に、シャルクは焦っていた。

少なくとも、彼女のエクストラデッキのモンスターの中で、スパイダーシャーク以外にバジリコックに対応可能なものはないだろう。だからこそ、シャルクは「ある1枚のカード」を引くことに賭けていた。

「あたしは《深海のディーヴァ》を召喚し、その効果でデッキから《深海のアーチザン》を特殊召喚。さらにアーチザンの効果でデッキトップを墓地に送り、墓地の《カッター・シャーク》を特殊召喚する！」
「おお、一気に3体のモンスターを……！ やはり君は優秀なデュエリストだ。珊瑚君が入れ込むのもわかる気がするよ」

「レベル1の《深海のアーチザン》と、レベル4の《カッター・シャーク》に、レベル2の《深海のディーヴァ》をチューニング！ シンクロ召喚！ レベル7、《白鬪気一角》ホワイトオーラ・モノケロス！」

アーチザンの効果で墓地に落ちたのは《エア・トルピード》だが、この効果を使う前にまずやる必要がある。

また、シャルクの操る2体のシンクロモンスターのうち、およそガイオアビスのお供というイメージの強いモノケロスだが、現在のところ墓地には相方のシーラカンスは不在。しかし――。

「モノケロスの効果発動！ 墓地の《カッター・シャーク》を復活させ、効果発動！ モノケロスを対象に、それと同じレベル7の魚族をデッキから効果を無効にして守備表示でリクルートするよ！ おいで、

《超古深海王シーラカンス》！」

「レベル7のモンスターが2体……！」

「あたしはレベル7のシーラカンスとモノケロスでオーバーレイ！

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシー

ズ召喚！ ランク7、《水精鱗マーメイド―ガイオアビス》！」

シャルクの信頼する大型エクシーズモンスター、ガイオアビス。しかしこのモンスターの持つ2つの効果の範囲に、バジリコックは存在しない。だからこそ、次の一手が大きな意味を持つ。

「アーチザンの効果で墓地に送られていた《エアー・トルピード》と《発条空母ゼンマイティ》を除外し、効果発動！ デッキからカードを2枚ドロー！ ……よし！ 永続魔法《ホワイト・サルベージ白の救済》を発動！ 墓地の《シャーク・サッカー》を手札に回収する！」

「あれは、モンスターの召喚に反応して特殊召喚されるモンスター……」

「その通り！ あたしは手札の《ネメシス・アンブレラ》の効果発動！

このカードを手札から特殊召喚し、除外されているスパイダーシャークをエクストラデッキに戻す！ そしてアンブレラの特殊召喚に反応して、《シャーク・サッカー》が特殊召喚される！」

これでレベル3のモンスターが2体。

「ソニックさん、力を借りるよ！ あたしはレベル3のアンブレラとサッカーでオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク3、《虚空海竜リヴァイエール》！」

ウインドミルジムでソニックから受け取ったエクシーズモンスター、リヴァイエールの登場に、ホムラもこの時ばかりは驚きの表情を隠し切れなかった。

「リヴァイエールの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、除外されている下級モンスター1体を特殊召喚する！ 帰っておいで、《プリンセス鯨っ子姫》！ 特殊召喚された《プリンセス鯨っ子姫》を再び除外し、効果発動！ デッキから《ランタン・シャーク》を特殊召喚する！」

「《プリンセス鯨っ子姫》が忙しそうだねえ」

「働き者ですからね！ レベル4の《カッター・シャーク》と《ランタン・シャーク》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ もう一度お願い！ 《No.37希望織竜スパイダー・シャーク》！」

これで、スパイダーシャークで対処できなくとも効果さえ発動でき

ればガイオアビスで攻めることができるようになった。

少々ゴリ押しにも思えるが、今のところこれが最適解であることは疑うべくもない。

「バトルだ！ スパイダーシャークでバジリコックを攻撃！」

「来るね……！」

「スパイダーシャークの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、相手の場の全てのモンスターの攻撃力を1000ポイント下げる！ これでバジリコックの攻撃力がスパイダーシャークを下回る！」

「さすがに、二回目はそうそう躲しきれないねえ……！」

ホームラ：LP7800

ようやく破壊されたバジリコック。しかし、その爆炎の中から、四つ腕の炎の巨人が現れ、バジリコックを模した炎がシャルクを襲った。

シャルク：LP5300

「なっ……！ い、今のは……ッ!？」

「僕はバジリコックの破壊と同時に、手札の《炎天禍サンバーン》の効果を発動していた。フィールドの炎属性が破壊された時、このカードを特殊召喚し、破壊されたモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える」

「くっ……！ だけどまだガイオアビスの攻撃が残ってる！ ガイオアビスでサンバーンを攻撃！ アビスライジング！」

「けれど、守備表示のモンスターが破壊されてもダメージは受けない」

ようやくバジリコックを倒したと思ったら、一気に2500ものダメージ。しかもホームラには一撃も入れられなかった。

現時点で削れているライフはたったの100。相手の手札は0だが、次のドロウ次第では状況も一変する。バジリコックがいない今、準備を整えるチャンスはここしかない。

「あたしはバトルを終了して、バックにカードを1枚セット！ ターンエンド！」

最初のターンから伏せている《神の氷結》はバジリコックに対しては無効。だからこそタイミングが命だ。今伏せたカードと合わせて、

一瞬の判断が勝負を大きく分ける。

だからこそ、次のホムラの動きを見逃すわけにはいかないというシャルクの緊張感を、リスナーたちも感じ取ったのか、『シャルちゃん表情険しいな』でもいいよな、ああいうギリギリの勝負』わかる。あの緊張感があるからデュエルって楽しいんだよな』とその緊張感に肯定的なコメントが流れていく。

「僕のターン。ふむ、良いカードだ。僕は2枚目の《真炎の爆発》を発動。墓地から守備力200のヒツポグリフオ2体とヒュドラー、サーベラス、サンバーンを特殊召喚！」

「レベル6が4体……！」

「僕はレベル6のヒツポグリフオ2体とヒュドラーとサーベラスでオーバーレイ！ 4体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク6、《陽炎獣バジリコック》！」

「攻撃力3300……！」

「いいや、ヒュドラーを素材としてエクシーズ召喚されたバジリコックの効果が発動する。墓地の陽炎獣1体——《陽炎獣メコレオス》ヘイズビーストをオーバーレイユニットに変換する」

再び、オーバーレイユニットを5つ持つバジリコックが現れてしまった。だがホムラの手札は再び0枚となり、シャルクの脳裏に反撃のルートが見え始めた。

「僕はバジリコックの効果を発動。オーバーレイユニットを1つ使い、スパイダーシャークを除外する」

「まあ、次のターンでスパイダーシャークによる反撃を防ぐにはそれしかないよね。ごめんねスパイダーシャーク……」

異次元に送られていくスパイダーシャークの瞳に憂いはなく、まるでシャルクに「勝て」と言うかのように見つめている。

そんなスパイダーシャークのエネルギーを受け取ってか、シャルクの眼光がより鋭く輝く。

「バトルだ。バジリコックでガイオアビスに攻撃。コスモブレイザー！」

「させない！ 永続罠《光の護封壁》！」

「光の……護封壁？ 護封靈剣ではなく？」

「あたしのライフを5000ポイント払い、相手は攻撃力5000以下のモンスターでは攻撃できなくなる！」

シャルク：300

これがシャルクの仕掛けた最後の一手であり、最大のギャンブル。もしもホムラのドローしたカードが展開用の《真炎の爆発》ではなくドロー加速系のカードだったなら、《サイクロン》系の除去を引かれていたかもしれない。

だが、シャルクはここまでの戦いで、彼の驚異的なドローの最大の弱点を見つけ出していた。それは――。

「ホムラさんのデツキとの信頼が為す奇跡のドローは間違いなく脅威だった。あたしがどんな盤面を練り出しても、必ずそれを突破するカードを引いてくる。だけど――わかったこともある」

「わかったこと……う？」

「ホムラさん、さっきあたしの《コズミック・サイクロン》に反応せず、除去された後で《貪欲な壺》を発動し、3枚目の《ヘイスレラー陽炎柱》をドローしたよね？ あれでわかったんだ。ホムラさんがドローで解決できないのはあくまで「現時点での公開情報」だけで、未公開情報には対処できないんだって！」

そう、だからこそ――シャルクの「ギャンブル」は「確信的な一手」へと昇華した。

「だからあたしは《光の護封壁》を躊躇なくセットできた！ スパイダーシャークがいれば、ホムラさんは必ずバジリコックで対処するために《真炎の爆発》をドローする！ 逆に言えば、《真炎の爆発》だけでスパイダーシャークを処理できるから、ドロー加速で《サイクロン》系のカードを引くことができなかつたんだ！」

「……っ！ なるほど、ドローには自信があつたけれど……僕のこのドローに、そんな弱点があつたなんてね。でも、だとしてもどうするつもりだい？ ライフを一気に5000ポイントも払って、君のライフはすでにデッドゾーン。次のターン、僕がバーン効果を持つカードを引けば――」

「そう、あたしは負ける。ホムラさんならそれを引ける。だからこそ、次のターンなんて来ない！」

そう強く宣言すると、ホムラはその細めた目を大きく見開いた。

さつきまで重苦しい緊張感に押し潰されそうになっていたシャルクの戦意が、今になってその勢いを大きく増した。まるで静かな小波さざなみが津波となつて押し寄せるかのように。

「だったら、君の全力でかかってくるといい。僕はこれでターンエンド」

ホムラのライフは7800。このターンでそれを全て削るには、あのカードを呼ぶしかない。

「あたしの、ターン！……ありがとう、あたしのデッキ」

「何を引いた……？」

「まずは魔法カード《ジェネレーション・フォース》を発動！ 自分の場にエクシーズモンスターが存在する時、デッキからエクシーズと名の付くカードを手札に加えることができる！ あたしは《エクシーズ・リモーラ》をサーチ！」

「ついにエースモンスターがお出ましかな……？」

「まあね！……続いて《白の救済》ホワイト・サルベージの効果で《シャーク・サツカー》を回収するよ！」

場にはオーバーレイユニットを2つ持ったガイオアビス。そしてサーチした《エクシーズ・リモーラ》も加え、Liveチャットのリスナーたちが声を揃えて『始まった』『お待たせ』『いつもの』と流れを察する。

「ガイオアビスのオーバーレイユニットを2つ使い、手札の《エクシーズ・リモーラ》の効果発動！ このカードを特殊召喚し、墓地から《ゼンマイシャーク》と《カッター・シャーク》を特殊召喚！」

「レベル4のモンスターが3体……来るか！」

「うん！ レベル4の《カッター・シャーク》《ゼンマイシャーク》《エクシーズ・リモーラ》でオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 狡猾にして寧猛なる脅威の牙！ ランク4、《No.32海咬龍シャーク・ドレイク

！』

これでシャークドレイクバイスを呼ぶ準備は整った。既にシャルクのライフは1000を切っている。発動条件は満たされている。だが――。

「だが君のエースモンスターの真の姿、C.N.O. 32の効果は珊瑚君から聞いているよ。あれはライフが1000を切った時に発動し、相手の攻撃力を0にする強力な効果だね。だがそれは対象を取る効果だ。バジリコツクの素材は4つ。効果破壊はされてしまうが、対象を取る効果を受け付けない効果は未だに残っている」

「そんなの、もちろんわかってるよ！ だからライフ1000未満はあくまで保険！ 魔法カード《エクシーズ・ギフト》を発動！ あたしの場にエクシーズモンスターが2体以上いる時、それらの持つオーバレイユニットを2つ使い、デッキからカードを2枚ドローする！

お願い……来て！

勢いよく引き抜いた2枚のカードを見て、シャルクはその視線をシャークドレイクへと向けた。

「……いいカードは引けたかな？」

「もちろん！ 最高のドローだよ！」

「……」

「まずは《虚空海竜リヴァイエール》の効果！ 除外されている《鱒っ子姫》を呼び戻し、効果発動！ デッキから2体目の《カッター・シャーク》を特殊召喚し、そのままカッターの効果で《ランタン・シャーク》を特殊召喚！」

レベル4が二体並んだことで、ホムラの警戒心が増す。

「あたしは魔法カード《白の水鏡》ホワイト・ミラーを発動！ 墓地から《エクシーズ・リモータ》を特殊召喚し、デッキから同名カードをサーチする！」

「一気にEXモンスターゾーンも含めて全てのモンスターゾーンが埋まった……！」

「最後の切り札は、仲間が多いほどいいからね！」

「そうでしょうか？ とその手に握ったカードに視線を送り――、

「仕上げだよ！ シャークドレイクを対象に装備魔法《団結の力》を発

動！ あたしのフィールドのモンスターの総数×800ポイント、シャークドレイクの攻撃力を上げる！ 今あたしの場にはモンスターが6体！ よって攻撃力は4800ポイントアップ！」

「攻撃力、7600……！」

「いっちゃえシャークドレイク！ バジリコックを攻撃！ デプスバイトオ！」

「ぐっ……うわああああっ！」

ホムラ：LP3700

「まだまだよ！ シャークドレイクの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、戦闘破壊した相手モンスターの攻撃力を1000下げ、引きずり出し、再び攻撃の権利を得る！ 行け、シャークドレイク！ 再びバジリコックを攻撃！ デプス……ッ、バイトオオオッ！」

「やはり君は、強敵だったようだね……」

ホムラ：LPO

攻撃力7600によるモンスターからの苛烈な攻撃を受けながら、彼は後退りこそしたものの、倒れることなく立っていた。

そして一步一步を踏みしめるようにスタジアムの中心へと戻ると、シャルクと向き合い、握手を交わし合う。

「ブラヴオー！ 最高のデュエルだったよ！」

「こちらこそ、楽しいデュエルだった。特に僕のドロウの弱点を見出したあの瞬間は最高だった。相手をよく観察・分析し、的確にその弱点を見出すプレイング、これからも大事にしていくといい」

今まで、シャルクのプレイングを褒めてくれる人はいくらか居た。だが彼女の観察眼について深く言及してくれたのは、ホムラが初めてだ。

シャルクは心底嬉しそうにニコニコと笑うと、少しだけ照れくさそうにマフラーで口元を隠す。

「さあ、これがサーマルジムを攻略した証、テストロスバッジだ。それと……君のデツキは全体的に攻撃力が低い気がするから、これをあげよう。君ならきつと活かせるはずだ」

「これは……『バイバイダメージ』？ 確かにあたしのデツキとは好相

性だけど、いいの？」

「ああ。ぜひ使ってほしい」

受け取ったテストタロスバッジをパズルフレームに嵌めると、ホームラから貰った《バイバイダメージ》を予備のデツキホルダーへと入れた。

「では、今度会う時は決勝トーナメントで会おう」

「はい！ 次に会う時も、負けませんから！」

釣りといんタビュー

シャルクがサーマルジムを出ると、彼女はそのままワイルドエリアへと繰り出した。

ワイルドエリアはその名の通り、野生のモンスターがそこかしこに存在するエリアであり、多くのデュエリストにとっては仲間となるモンスターを手に入れるに最適な場所でもある。

以前にも言った通り、サーマルジムは6つのジムの中でも、大会参加者の大半が一度は躓く「最初の関門」でもある。そこを乗り越えた今だからこそ、デツキはこれまでのままではいられないとシャルクは悟ったのだ。

今回のデュエルでわかったことは、前々から思っていた「火力不足」に加え、「対象を取らない破壊以外の除去」が今のところ《神風のバリアーエア・フォース》しか存在しないことだ。

バジリコックにはなかったが、この上さらに「バトルフェイズ中の魔法・罠の発動を無効にする」類の効果が現れた場合、シャルクにはどうすることもできなくなってしまう。

だからこそ、その全てをケアできないにしても、何かしらの対抗手段は得なければならぬのだ。そして、彼女が行きついた先は——。「こういう時は釣りに限るよねえ……。全然狙ってないカードしか釣れないけど」

『今のところ釣果は《マーメイド・シャーク》《デプス・シャーク》《深海王デビルシャーク》《スピア・シャーク》《グレート・ホワイト》の5枚じゃな』

今日はDラ—LイIブVプEでの配信を急遽「釣り配信」と称し、ワイルドエリア南側の湖周りで釣りをして新たな仲間を増やすことにしていた。

が、蓋を開けてみれば寄ってくるのはサメ、サメ、サメ……。どう考えても淡水魚ではないモンスターたちが続々と吊り上がってくるばかりか、それらはデュエルを介さず自ずからカードとなってシャルクの手に渡っていった。

そんな光景をかれこれ一時間見せられ続けたりスナーたちは当然ながら『またサメか』『ほんとサメに愛されてんな』『サメからの求婚がすごい』『将来的にサメと結婚しそうな勢い』と呆れと驚きを交えたLiveチャットが寄せられ続けている。

「んっ？　また何か来たね。せいやつ！　……つとと、この子は……ゲイザー・シャークかな？」

「ゲイジャアアアアック！」

「なかなか活きがいい上に従順じやのう。主さま、こやつの頭を撫でてやってくれんか」

「お安いご用だよ！　よーしよーし、可愛いサメさんだねー。たくましいサメ肌、背ビレも第二背ビレも胸ビレも腹ビレも臀ビレもないスマートなフォルム、サメらしい体の下側についた王道の口周り！　かつこいいねえ、かわいいねえ。あれ？　蒸気出てるね。照れ屋さんなんだねえ。よーしよーし、ごめんね、恥ずかしかったねー」

サメを撫でろ、と言われたのを「サメを可愛がれ」と脳内で勝手に解釈したシャルクによる怒涛の可愛がりにより、ゲイザー・シャークは嬉しいながらもいたたまれずカード化し、シャークドレイクによって彼女の予備デツキホルダーへと納まる。

もつと可愛がりたかった、というシャルクの様子を見て、Liveチャットでは『サメを赤ちゃんか何かと勘違いしておられる？』『サメに対する母性がヤバイ』『シャルちゃんはサメのママだった……？』『おんぎゃー……ママー！』と阿鼻叫喚の有り様となっている。

中にはシャルクに対して完全にバブみを見出している者もあり、何人かの良心的な有志によって諫められているが、シャルクは今のところ釣りとサメに興味が向いていて気がついていないのは幸いか。

「いいよねえ、釣り……。あたしが糸を垂らすと8割以上の確率でサメしか釣れないけど、これもサメの女神のご加護なのかな。あたし的には最高の加護だよね。は？　『サメしか釣れないとか神罰では？』……って、どこが罰なの？　むしろご褒美じゃん」

さも当然のように言つてのけるシャルクに、多くのリスナーも『サメはご褒美、みんな知ってるね？』『新参コメかな？　まあ肩の力抜け

よ』『サメしか釣れないとかいう極上の加護やぞ』と、彼女のノリを理解している者も随分と増えたように思える。

本人曰く「サメデツキ」と称される「水属性」を使うだけあって、彼女にとってサメに関するあらゆるものがご褒美となるが、やはり実際のサメを手で触れるのは格別ということなのだろう。

カードにしてしまうと、デュエル以外ではほとんど出すことがないというのも一因か。サメ——というよりも水棲生物の大半にとって、人間の体温は高熱なのである。そのため、触れる際は基本的に手袋の使用が推奨される。ましてサメの場合は、サメ肌による怪我を防ぐためにも、より強く着用を求められる。

実際、今こうして釣りをしているシャルクの手にも、指サック程度の薄さでありながらサメ肌で裂けない丈夫なゴム手袋が着けられており、カード化した後はカードが水で濡れないようにシャーケドレイクに啜えて運んでもらっている。

「次のが掛かってくるまでサメ談義でもしよっか。そうだねえ、一番こういう話をしてウケがいいのは「実はサメじゃない魚」とかの話かな。たとえばキャビアで有名なチョウザメとか。そもそもサメって体の骨が軟骨で出来てる軟骨魚類なんだけど、チョウザメは普通の魚と同じ硬骨魚類で——」

「あのー、ちよつといいかな?」

不意に背後からかけられる声。不審者かと思いつつ、どこかで聞いたことがあるようなないような、そんなあやふやな記憶の中、ひとまず相手の顔を確かめようと振り向いた先に居たのは——。

「……えっと、どちらさまで?」

「あつ、そっか。あの時はちよつと顔を合わせたただだもんな。俺の名前はトーク! 趣味でブログをやってるんだけど、今はデュエルシテイのことを書きたくてね。君とは初日に蛮族とのデュエルの直前に顔を合わせてたんだけど、やっぱ覚えてないかー!」

「蛮族とのデュエルの直前……? あ、あー! あのサイバース使つて蛮族にめっちゃボコボコにされてた人! まああたしも負けた以上は人のこと言えないけど……でもあなたもサーマルタウンまで来

てるってことは、ちゃんと強くなってきたってことだよ！ サーマルジムはどうだった？」

「あ、いや……俺はチャレンジャーじゃないんだよ。あくまでデュエルもできるってだけの一般ピープル。デュエルをのあれこれを主な記事にするから、最低限デュエルができるってだけだよ」

あ、そうなんだ、と少し残念そうにしながらも、シャルクの視線は彼の腰のデツキホルダーへと移った。サイバース族は、主にサイバネット世界と呼ばれる情報世界に存在し、ほとんど人前には姿を現さない。

ただ、最近はネットの普及も広がり、DラILイVEなどの動画配信サイトを中心に、インターネットとサイバネットは隔てられたまま繋がり、人間とサイバースの交流が行われるようになったことで、若い人々の間ではサイバースの存在は割と広く知られている。もっとも、さすがに現実で見たという例は相変わらず少ないが。

そして、それらサイバネットの守護騎士セキユリテイを務めているのが――。
「サイバース族デツキ、珍しいよね。あんまり現実にサイバースが出てこないのもあるけど、彼らは基本的に警戒心が高いから、人に懐くイメージがないんだよね」

「懐かれてはいないよ。ただ、デュエリストとしてはまだまだ初心者だし、セクレ……サイバースたち曰く「あんまり危なつかしくて放っておけない」みたいだから、それで懐かれてるように見えただけじゃないかな」

「好きでもない人のことを心配してくれるほど、人もモンスターも博愛主義じゃないよ。特にサイバースみたいな気難しい種族ならなおさらね。あなたはきつと、自分で思ってるよりもカードたちから大事にされてるはずだよ」

そう言つて微笑むと、シャルクは釣り用の折り畳み椅子をカバンにしまい、彼と正面から向き直る。

「そうかな。だったら嬉しいけど……って、ああ！　そういえば本題を忘れてた！」

「本題って？」

「ああ。君、クーラントジムで珊瑚さんからオリジナルのナンバーズを受け取って、しかもそれを進化させたって噂になってるんだ。だから今回は、そのモンスターについての記事が書きたくてね。俺とデュエルしてくれないかな？」

「記事、かあ……。別にバイスのことが知られるのはいいけど、効果については伏せてもらえるかな？　せっかくの情報アドバンテージだし、握り隠しておけるアドバンテージは握ったままにしておきたいからね」

写真とレビューだけ書かせてくれたら効果の詳細までは書かないし、なんなら君自身のデュエルについてのレビューもさせてもらおうよ、とトークがその条件を呑むと、さっそく二人はデュエルディスクを構えた。

シャルクのデュエルディスクは通信端末として使えるDパットに、デュエルフィールドを外付けした第四世代型のデュエルディスクだが、トークのものはデッキの構成をデータ入力することで手札とドロートデッキの管理を全てオートで行い、フィールドがないまま立体映像化する第六世代型のものようだ。

「じゃあ確認だけど、デュエルの条件は2つ。あのカオスナンバーズを出すことと、君の得意とするスタイルで動いてもらうこと。あとはまあ……。俺まだビギナーだから、手加減はしなくてもいいけど説明とかを丁寧にしてくれると助かる」

「わかった。じゃあさっそくだけど、やろっか！」

互いの条件を確認し合い、デュエルの準備は万端。

「オープンチャンネル！　Liveデュエル、オンエアー！」

デュエルビギナーのトークが勝負をしかけてきた！

「とりあえずバイスを出す前に、まずはあたらしいデュエルから見せてあげるね！　あたしのターン！」

「さて、どんな動きをするのかな……。つと！」

「まずは手札から《ランタン・シャーク》を召喚！　召喚時の効果で《エクシーズ・リモーラ》を特殊召喚し、これらのモンスターたちでオーバレイ！」

まず1ターン目は早々にお得意のエクシーズ召喚から、と淡々とした動作で動くシャルクに、トークは冷や汗を垂らした。

デュエルが高速化した昨今、1ターン目からEXモンスターが召喚されるのはままあることだ。しかし、他のエクストラ召喚と違って、エクシーズ召喚はその召喚条件としてモンスターを墓地には送らないうための、墓地の再利用がしづらい召喚法だ。

そして、昨今のデュエルでは墓地の利用手段が少ないというのは、あまりにもリスキーだ。1体のエクシーズを出せても、続く2体以降がどうにも出しづらい、というのがエクシーズ召喚の基本的な常識の一つだ。――が、トークはそれを知らない。

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《バハムート・シャーク》！」

「おおっ！ いきなりエクシーズ召喚！ しかもすげーカッコいいの出てきたー！」

「でしょー、カッコいいでしょ！ あたしの自慢のサメ！」

「えっサメ？」

「え？ うん、サメ」

「ドラゴンじゃなく？」

「サメ」

あつそう……とどこか納得のいかない表情で頷くトークの様子を見て、『まあ普通そうなる』『至極真つ当な反応』『バハムートは魚、いいね？』『アツハイ』と彼の反応に理解を示すリスナーたち。

しかし中には『いやまあバハムートって聞いたたらドラゴンだと思っよな』とのたまう裏切り者も存在し、それらには『謀反マンだ、逃がすな！』『バハムートは魚、はい復唱！』『神話・伝承の授業のお時間だ！』と袋叩きにも等しい総ツッコミが入る。

「エクシーズモンスターは同じレベルのモンスター2体以上を重ねることで行う召喚法。そしてその真価は、自らの魂たるオーバーレイユニットを使うことで発揮される。……って、これくらいは知ってるよね」

「まあ、そのくらいならさすがにな」

「じゃあその真価を見せる前に、まずはこつちを使おうかな。魔法カード《エアール・トルピード》を発動！ 《バハムート・シャーク》のオーバーレイユニットを1つ使い、あたしの手札の枚数×400ポイントのダメージを相手に与える！ あたしの手札は2枚！ よって800ポイントのダメージだよ！」

「先攻から効果ダメージ!? うわあああつ！」

トーク：LP7200

先攻1ターン目はドロローおよび攻撃が行えない。そのため、攻めの一手として効果ダメージは非常に有効な手段だ。

特にシャルクのような、戦闘によるダメージで相手を攻め立てるデッキにおける先攻1ターン目のカードとしては、かなり優秀なカードの類だと言えるだろう。

「続いて《バハムート・シャーク》のオーバーレイユニットを1つ使い、効果発動！ 1ターンに一度、発動後の攻撃権を失う代わりに、エクストラデッキからランク3以下の水属性エクシーズ1体を特殊召喚するよ！ おいで、《トライエッジ・リヴァイア》！」

「攻撃できなくなる代わりに特殊召喚か……さっきのバーンといい、先攻にめちやくちや向いてるカードだな」

「まあバハシャが攻撃できないのは誓約効果じゃなくて特殊召喚から攻撃禁止までが一連の起動効果だから、効果を使わずに殴った後だったら効果使えるよ。だから後攻でもそこまで問題はないかな。後攻の場合はヴェーラー使わせたら儲けもんくらいの気持ちだし」

「へー、便利ー」

ヴェーラーを使わせたら儲けもん、というのは《バハムート・シャーク》の効果がそれによって封じられた場合、「攻撃できなくなる」という効果も同時に消えるからだろう。

もちろん本来のプランからは大幅にズレが生じてしまうため、そこまで好ましい状況ではないものの、攻撃権を残したままフィールドアドバンテージを損なわず、相手の手札、しかも手札誘発の無効札1つを減らせるとすれば、そこまで悪いとも言えない。

《トライエッジ・リヴァイア》の特殊召喚に反応して、手札から《エ

クシーズ・スライドルフィン』を守備表示で特殊召喚！」

「一気にモンスターが3体……！」

「仕上げてリンク3のトライエツジでオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイネットワークを再構築！ リンクアップ・エクシーズチェンジ！ リンク4、《F A—ブラック・レイ・ランサー》！」「黒騎士!? うっひょーかっけえー！」

とても純粋なトークの反応を見て、『反応がピユアで草』『ジュニアスクール生かな?』『大丈夫? 飴ちゃんいる?』『こんな子にシャルちゃんの相手させて大丈夫なのだろうか』などと言われているが、実年齢はシャルクの方が圧倒的に下のはずだが。

「あたしはバックにカードを1枚セットして、ターンエンド！ これを手札もないし、そっちも好き放題動けるでしょ、うん」

「お気遣いどーも！ じゃあ俺のターン、ドロー！」

ターンがトークへと回り、シャルクは彼の挙動に注目する。

手札のカードをまじまじと見ながら考える様子から、どうやらシャルクのターンは本当に彼女自身のフィールドにばかり注目していたようで、その間に手札の効果を把握する、ということはいなかったようだ。

「まずは《スタック・リバイバー》を召喚。そして自分の場にサイバース族モンスターのみが存在するため、手札の《サイバース・コンバーター》を特殊召喚」

「サイバース族……展開力が高い代わりに、打点が低くて手札の息切れが激しい種族だね。まるで種族そのものがひとつのカテゴリのように繋がりが強いという意味では、初期のサイキック族にも似てるかな」

「俺より詳しくない?」

「いや最近はいんターネット調べればこれくらい誰でも調べられるでしょ。でも……そうだね、あたしの勝手なイメージで言うなら、その性質上リンクモンスターに頼りがちな動きになるってことかな。リンク以外のエクストラモンスターが少ないのもそうだけど、何よりメインデッキのモンスターに切り札級のカードが少ないんじゃない」

？」

決して、リンク以外のエクストラがまったくいないというわけではない。むしろ儀式・融合・シンクロ・エクシーズ・リンクと、ペンデュラム以外ならほとんど全てが揃っている。

しかし、それでも数はやはり圧倒的にリンクモンスターが大多数を占めており、召喚条件だけでなく効果にもサイバースを指定するものが多い。そのためメインデッキのモンスターは基本的にリンクに繋ぐため展開力に特化させるのが常であり、メインデッキのモンスターで戦うことはあまり想定していない。

それはシャルクのデッキにも言えることではあるが、一応彼女には《超古深海王シーラカンス》というド級のエースが存在するため、少なくともトークのデッキよりは地力があると言えるだろう。

「そ、そっか……。で、でもまだまだこっから！ 俺は《スタック・リバイバー》と手札の《マイクロ・コーダー》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は効果モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《コード・トーカー》！」

「手札からリンク素材にできるカード……！」

「おっ、これはシャルちゃんも知らなかったかな？ そう、《マイクロ・コーダー》は「コードトーカー」モンスターをリンク召喚する時には手札から素材にできる。そして、その素材となって墓地にいったことで、デッキから《サイバネット・オペティマイズ》を手札に加える！」

「一気に動いてきたね……！」

「さらに自身を素材としてリンク召喚を行ったことで、墓地の《スタック・リバイバー》の効果も発動。墓地の《マイクロ・コーダー》を復活させる！」

これでモンスターは3体。《コード・トーカー》を2体分として扱えばリンク4までは持つていける状況だが、果たして……。

「永続魔法《サイバネット・オペティマイズ》発動！ 1ターンに一度、サイバース族に限り召喚権を一回追加できる！」

「あ、それ召喚権を追加する効果じゃないよ」

「えっ」

「《サイバネット・オブティマイズ》は「追加で召喚を行う効果」であつて、「追加で通常召喚を行う効果」じゃないから、いわゆる召喚権……正しくは「通常召喚をする権利」は増えない。わかりやすく言うとモンスターをセッ卜できない」

「あ、そうなの？ 通常召喚と召喚つて違うのか……。ありがと、覚えとく。じゃあ気を取り直して……オブティマイズの効果で《レディ・デバツガー》を召喚して効果発動！ デツキから《バックアップ・セクレタリー》を手札に加える！」

これで《コード・トーカー》を除いてもモンスターが3体。リンク3へ繋ぐには十分な数のモンスターが揃つた。1ターンで2回目のリンク召喚ができるとあつてか、トークの表情にも自信が表れる。

しかし「コード・トーカー」といえば、サイバネット世界の守護騎士として有名なモンスター群であるはずだ。多くがリンク3で構成されており、戦闘に関わる強力な効果を持つ。

そんなサイバネット世界の守護者が従うほど、彼はモンスターに——サイバースたちに愛されている、ということだろうか。

「俺は《マイクロ・コーダー》《サイバース・コンバーター》《レディ・デバツガー》をリンクマーカーにセッ卜！ 召喚条件はサイバース族モンスター2体以上！ リンク召喚！ リンク3、《シユューティングコード・トーカー》！」

「《シユューティングコード・トーカー》の……オリジナル!? ヘー……ホントに愛されてるんだね。てつきりレプリカ満載のなんちやつてデツキだと思つてたよ。なんかごめんね」

「いや、よく言われる。実際マジで不思議なくらいサイバースたちが集つてくれたから、俺もなんでかなつて思つてるくらいだし。だけど……それくらいサイバースたちが強いって思われてるならそれでいい」

確かに、それを言われてしまえばシャルクとしても何も言い返せない。なぜならシャルク自身、サメの良さを——強さを知ってもらえるなら、自分の悪評については見て見ぬフリができたからだ。

たとえば他人から何を言われても、自分のプレイングがどれほど悪辣

で狡猾なものであったとしても、それによってサメの強さを証明すれば、悪評を上回るほどの人気を得られれば、それでいいのだと思っていた。

「俺は永続魔法《一族の結束》を発動。自分の墓地とフィールドの種族が統一されている場合、その種族のモンスターの攻撃力を800ポイント上げる！ さらに《コード・トーカー》は自らのリンク先にモンスターがいれば攻撃力が500ポイントアップし、戦闘・効果で破壊されない！」

これで《コード・トーカー》の攻撃力は2600、《シユーテイングコード・トーカー》が3100となった。

シユーテイングコードで《バハムート・シャーク》さえ処理すれば、攻撃力という点ではシャルクのどのモンスターにも勝ることになるが……。

「《シユーテイングコード・トーカー》のリンク先に《バックアップ・セクレタリー》を特殊召喚し——バトルだ！」

「来る……ッ！ 確か《サイバネット・オプティマイズ》には戦闘時に相手のあらゆる効果を発動させない効果があったはず！ だったらバトルフェイズ開始時に《光の護封壁》を発動！ ライフを7000ポイント払い、相手は攻撃力7000以下では攻撃できない！」

「な……7000ッ?! 確かに攻撃を封じるには十分な数値だけど、さすがに払い過ぎだろッ！ せいぜい4000も払えば十分じゃね!?!」

「まあまあ、それは後でのお楽しみってことで！」

シャルク：LP1000

オプティマイズの効果が適用されるのはあくまでも「コード・トーカー」モンスターの戦闘が開始されダメージステップが終了するまでの間のみ。それまでに発動された効果に対してはどうすることもできない。

「くっ……! バトルは終了。俺はカードを1枚伏せて、ターン終了！」

攻撃力7000以下の攻撃を封じているとはいえ、トーカーのファイ

ルドには攻撃力3100、2600、2000のモンスターが並んでいる。

どれも耐性を持たないモンスターではあるものの、攻撃力3100のシューティングゴードはさすがにそうそう簡単に突破できる数値ではない。

とはいえ——何もできないという意味ではないが。

「あたしのターン！　いくよ、トークくん！」

「ああ！　来い、シャルちゃん！」

きつと強くなる

「あたしのターン！　いくよ、トーク君！」

「ああ！　来い、シャルちゃん！」

シャルクとトークのデュエルは意外なほど均衡を保っていた。

もちろんシャルクが本気でないことは間違いない。確かにライフを1000以下にする狙いはあっただろうが、彼女のデッキにはライフコストを要するカードはいくらか存在するし、後のことを警戒すればトークの言う通り4000も払えば十分な状況であった。

それでも7000ものライフコストを支払ったのは、彼女自身が《ゴズミック・サイクロン》などの一部のカードの使用を自ら封じるためでもあり、ライフだけを見た時、トークにもある程度の自信を持たせるためでもあるだろう。

だがそんな露骨なほどの手加減にも気づかないくらいに、トークはこのデュエルを楽しんでいるようで、シャルクも自分がデュエルを始めたばかりの頃の記憶を呼び起こされるような気分で彼を見守っている。

「まずは《バハムート・シャーク》と《エクシーズ・スライドルフィン》をリンクマーカーにセット！　召喚条件は水属性モンスター2体！

リンク召喚！　リンク2、《海晶^{マリネス}乙女コーラルアネモネ》！」

「リンク召喚?!　シャルちゃんはエクシーズ召喚だけじゃなくリンク召喚も使えるのか！」

「まあ一応ね。さて、コーラルアネモネの効果を使わせてもらうよ！　1ターンに一度、墓地に存在する攻撃力1500以下の水属性モンスターを自身のリンク先に特殊召喚する！」

「おっと、それは通せないな！　カウンター罠《サイバネット・コンフリクト》発動！　自分の場に「コード・トーカー」が存在する時、相手の発動したカードの発動を無効にして除外する！　そしてこのターン、除外されたものと同名のカードは効果を発動できない！」

異次元に消えていくコーラルアネモネを悲しげに見送りながら、シャルクはそれでもすぐに視線を対戦相手であるトークへと戻した。

ビギナーとはいえ、細かいルールについてはまだ理解が深くないものの、カードの組み合わせは決して悪くはない。何より、先ほどのオプティマイズや今のコンフリクトといい、ベストなタイミングを見つけて出すのは頭で考えてるわけではなく天性の直感によるものだろう。今はまだ粗削りな原石だが、これからデュエルを繰り返し返していけば立派に輝く宝石になることは間違いない。だとすれば——このデュエルに限っては小さく灯っていた「勝ちたい」という感情が、少しだけ大きく燃え上がったようにも感じる。

「へへっ！ もうオーバーレイユニットはなかつたけど、攻撃力2600の《バハムート・シャーク》を素材にしてまで出したリンクモンスターを除外できたぜ！」

「いいねー、これはあたしも負けらんないな！ じゃあ魔法カード《白の水鏡》を発動！ 墓地の《ランタン・シャーク》を特殊召喚し、デッキから同名カードを手札に加える！」

「攻撃力1500くらいなら全然こわくねえー！」
「だろうね。だから本番はここからだよ。墓地の《エアールピード》の効果発動。墓地のこのカードと《バハムート・シャーク》を除外して、デッキからカードを2枚ドロウするよ！」

カードをドロウしようとデッキトップに手を置くと、まるで声ではない声が響くように、シャルクの全身にカードの鼓動が伝わってきた。

その鼓動を信じてカードをドロウすると、そこにあったのは《カタール・シャーク》と《深海のディーヴァ》の2枚。なるほど、とシャルクは口元をニタリと歪める。

「あたしは《深海のディーヴァ》を召喚して効果発動！ デッキから《深海のアーチザン》を特殊召喚。アーチザンの効果でデッキトップを墓地に落として墓地のリモータを蘇生！」

「一気に4体も並べてきた……！ しかも、その《深海のディーヴァ》ってモンスターはもしかして……！」

「お？ 察しがいいね。そうだよ、この子はチューナーモンスター。だからもちろんやることは決まってるよね？」

にっこりと微笑む11歳児の笑顔が、こうも邪悪で凶悪で恐ろしいものだったのかと、この時トークは初めて知った。――が、それはシャルクだけに限った話であって、普通の11歳児はもう少しまともだ。

「でもまずは《F A ーブラック・レイ・ランサー》と《エクシーズ・リモーラ》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性を含むモンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《清冽の水霊使いエリア》！」

「おお、またコーラルアネモネとは別ベクトルで可愛いモンスターが来たな……」

「でしよー？ さつき釣りしてたらひよこつと出てきてカードになったんだよねー」

最初は「誰この人」って思ったけど、と言いながら笑うシャルクだが、Liveチャットでは『あれはマジでびっくりした』『人型モンスターに声かけられるとマジで人間かモンスターかわかんない時あるよな』『わかる。ナイトエンドソーサラーと出逢った時は困惑した』『いやそれはわかれよ』と困惑の色が濃いようだ。

実際、このエリアはいくつか存在する《清冽の水霊使いエリア》の中でも特に無口な個体であったようで、出会って早々にじつと見つめられ、満足げに微笑むとそのままカード化した、という経緯があったために、シャルクですら少し戸惑ったほどだ。

「続いてあたしはレベル4の《ランタン・シャーク》とレベル1の《深海のアーチザン》に、レベル2の《深海のデューヴァ》をチューニング！ シンクロ召喚！ レベル7、《ホワイトオーラ・モノケロス白鬨気一角》！」

「シンクロモンスター!? エクシーズ、リンクに続いて、シンクロもできるのか!? ほんとすっげーなシャルちゃん……」

「そう？ ちゃんと勉強さえすればみんなできるでしょ。とりあえずモノケロスの召喚時の効果を発動するよ。墓地の《ランタン・シャーク》を蘇生して、効果発動！ 手札から《カッター・シャーク》を特殊召喚！」

トークの「まだ動くの!?!」という悲鳴交じりのリアクションに、L

iveチャットでは『まだまだ序の口だろ』『ここからが地獄だぞ』『ゼンマイテイがないだけ温情』『例のアレ確定ルート入った』『見慣れた地獄』と盛り上がり、それを見たトークがさらに怯える。

「今度は《カッター・シャーク》の効果発動だよ！ モノケロスのレベルを参照して、デツキからレベル7の魚族、《超古深海王シーラカンス》を特殊召喚！」

「レベル7と4が2体ずつ……まさか!？」

「大あたり！ レベル7のモノケロスとシーラカンス、レベル4のカッターとランタンでそれぞれオーバーレイ！ モンスター2体ずつでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク7、《水精鱗―ガイオアビス》！ ランク4、《No.37希望織竜スパイダー・シャーク》！」

一気に2体のエクシーズモンスターを並べてきたシャルクに後退りしかけるトークだが、今このフィールドで最も攻撃力が高いのは自分の従える《シューティングコード・トーカー》であることを思い出し、なんとか冷静さを取り戻す。

加えて、自身のリンク先にシューティングコードが存在することで、《コード・トーカー》は戦闘でも効果でも破壊されない。相棒たる《バックアップ・セクレタリー》だけが防ぎようがないことは、心の中でちくちくと痛むものがあるが、この時ばかりはどうしようもない。「バトルだ！」

「狙いはセクレタリーか……!？」

「まあね！ まずは《清冽の水霊使いエリア》で《バックアップ・セクレタリー》を攻撃！ この瞬間、スパイダーシャークの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、相手モンスター全ての攻撃力を1000下げる！」

「ええええええええ!! 1000も下がんの!! でも俺の場にある《サイバネット……あつ! そっか、セクレタリーを狙ったのは……!」

「そつ、永続魔法《サイバネット・オペティマイズ》は「コード・トーカー」が戦闘を行う時、あらゆる効果を封じてくる。しかも自分・相手ターンに関わらずね。だから先にセクレタリーを攻撃させても

らったんだ！」

これでシューティングコードの攻撃力は2100、セクレタリーが1000、《コード・トーカー》も1600まで落ちた。

ここを攻め時と判断したのか、シャルクは一気に畳みかける。

「これで攻撃力は逆転！ エリア、やっちゃって！」

「セクレタリーイイ！」

トーク：LP6700

「続いてガイオアビスでシューティングコードを攻撃！ アビスライジング！」

「ぐわあああつ！」

トーク：LP6000

「行け、スパイダーシャーク！ 《コード・トーカー》を攻撃！」

「リンク先にモンスターのいない《コード・トーカー》は攻撃力が500ダウンし、戦闘でも破壊されるようになる……！」

トーク：LP4500

これでトークのフィールドのモンスターは0、手札も0、あるのは永続魔法が2枚だけ。《一族の結束》はともかく、《サイバネット・オプティマイズ》は手札が多いことを前提にした効果であるため、この状況ではほとんど意味をなさない。

しかし、それでもトークはデュエルを諦めてはいなかった。以前の彼ならとつくにサレンダーをしているところだが、シャルクは「君はサイバースたちに愛されてる」と言った。あの言葉が嘘でないのなら、その想いを裏切らないためにも、デュエルを諦めたくはない。

それに、今もこうしてフィールドに残っている《一族の結束》は、蛮族にもらったカードだ。このカードがある限り、蛮族が背を押してくれているような気分になる。もちろん、実際の彼はそんなこととしてくれないだろうが、気持ち的にはそんな気分だった。

だからこそ、トークはこのデュエルから——これから先、どんなデュエルからも逃げたりしない。サレンダーしたくなる状況でも、そこで逃げ出せば対戦相手にも失礼だし、何よりデッキに申し訳が立たない。だから彼は——シャルクをまつすぐに見つめた。

「バトル終了。メイン2に移行して、《清冽の水霊使いエリア》の効果発動。相手の墓地に存在する水属性モンスター1体を、エリアのリンク先に特殊召喚する。じゃあ《シューティングコード・トーカー》をちよつと借りようかな！」

「ああっ！ 俺のシューティングコードおお！」

「あははっ！ ごめんごめん、ちよつと借りるだけだつてば！ あたしはこれでターンエンド！ ほら、あたしからシューティングコードを取り返してみなよ！」

さつきライフを大量に支払ったシャルクだが、未だにそこからライフが動かないまま。それに反して、トークのライフはこのたった2ターンの間で大きく削られた。数値だけなら間違いなくトークが勝っているが、削ったライフは0と3500、まったく意味が異なる。

「俺のターン、ドロー！ まずは《ドラコネット》を召喚し、効果発動！ デツキからレベル2以下の通常モンスターを特殊召喚する！

来い、《プロトロン》！」

「おお、いいカードだね。シンプルに使いやすい展開札はいいね。その水属性版が欲しいよ」

「俺もシャルちゃんの手持っている《カッター・シャーク》だっけ？ あれのサイバース版が欲しいよ。《プロトロン》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件はレベル2以下のサイバース族モンスター1体！

リンク召喚！ リンク1、《トークバック・ランサー》！」

小柄な「コード・トーカー」に似た騎士が現れると、シャルクは訝しむようにそのモンスターを睨んだ。外見だけなら「コード・トーカー」に似ているが、果たしてその効果はどんなものか、と。

「トークバックの効果発動！ フィールドの《ドラコネット》をリリースして、墓地の《コード・トーカー》をこのカードのリンク先に特殊召喚する！」

「やっぱり「コード・トーカー」関連の効果……！」

「そしてこの《コード・トーカー》と《トークバック・ランサー》をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は効果モンスター2体以上！ リンク召喚！ リンク3、《トランスコード・トーカー》！」

「また新しい「コード・トーカー」……!」

「トランスコードの効果発動! 墓地の《コード・トーカー》をこのカードのリンク先に特殊召喚し、相互リンクとなったことで自身と《コード・トーカー》の攻撃力を500上げて相手の効果対象にならなくさせる! そして《コード・トーカー》は自身の効果で攻撃力が500上がり、戦闘・効果で破壊されなくなる!」

「しかも《一族の結束》でさらに攻撃力が800上がってる……!」

これで攻撃力3100と3600が並び、片方は効果対象にならず戦闘でも効果でも破壊されない鉄壁のモンスターと化した。このまま行けば、たとえばガイオアビスが相手でも対処できるはずだ。

《サイバネット・オプティマイズ》がある限り、スパイダーシャークは怖くねえ! バトル! トランスコードでエリアを攻げ——」

「できないよ?」

「……えっ?」

「あれ? もしかして忘れてる? ほらこれ、ライフ7000払った《光の護封壁》。これがある限り攻撃力7000以下はみんな攻撃できないよ」

「で、でもそれは《サイバネット・オプティマイズ》で……」

「いや、《サイバネット・オプティマイズ》が封じるのはあくまで「効果の発動」だから。既に発動して適用され続けている効果に対しては無効にできないよ。《コード・トーカー》は「効果対象にならず」「効果で破壊されず」「戦闘で破壊されない」けど、別に「効果を受けない」ってわけじゃないしね」

トーク、ここにきて痛恨の凡ミス。ここまでの展開には目を瞠るものもあったからか、リスナーからは『いや何もないんかい!』『トランスコードの効果知らないから無効もつてると思ってた』『ああ、素で忘れてたのか』と苦笑い気味のLiveチャットが次々と寄せられる。

しかしそれでも手痛い批判がないのは、彼の人柄だろうか。ビギナーとはいえ相手のフィールドの公開情報に対する注意力の欠如はさすがに苦言を呈したいところだったが、それはこれからデュエルを

重ねていけば身に着く技術だ。

それよりも、どれだけ失敗してどれだけ劣勢に追い込まれても、こ
うも楽しそうにデュエルできる精神は、間違いなく彼自身の天性の才
能だろう。技術は後から身に着けることができるが、才能はそうもい
かない。だからこそ、シャルクは敢えて何も言わなかった。

「くっそー！　じゃあもう何もできねえ！　ターンエンドだ！」

「あはは、惜しかったね！　じゃあそろそろあたしも本気でいくよ！」

あたしのターン、ドローツ！」

悔しげに、しかしトークの視線は素直にまっすぐに対戦相手である
シャルクを見つめていた。そして同時に、彼女のフィールドに立つ
シューティングコードに対しても。

対戦相手へ向けられる最大限の警戒心と、仲間へ向けられる最大限
の信頼。それは、シャルクが元々身に着けていた最高の武器であり、
セレブから学んでようやく身に着けた至高の精神だ。

「……トーク君。君はきつといいデュエリストになるよ。あたしが必
死になって見出したプレイングと、あたしが友達から教わってようや
く見つけたデッキとの向き合い方が、トーク君はもうできてるから
ね」

「えっ？　何いきなり」

「あははっ！　いや、トーク君はすごいなってただだよ！　対戦相手
とデッキ、両方と向き合うその姿勢ができてるなら、あとは知識と技
術だけだ。でも、そんなのは勉強次第でどうにでもなる。いつトーク
君に負ける日が来るか、今からハラハラするよ」

でも、とシャルクは一拍おくと――。

「だからこそこのデュエルは、あたしが勝利をもらう！　魔法カード
《エクシーズ・ギフト》を発動！　ガイオアビスとスパイダーシャーク
のオーバレイユニットを1つずつ使い、デッキからカードを2枚ド
ローする！」

「ここにきて、ドロー加速……ッ!?」

「永続魔法《ホワイト・サルベージ白の救済》発動！　1ターンに一度、墓地から魚族モン
スター1体を手札に戻す！　あたしはシーラカンスを回収し、シュー

テイニングコートとスパイダーシャークをリリースして《超古深海王
シーラカンス》をアドバンス召喚！」

「あれはさつき出てきてすぐガイオアビスの素材になったモンスター
……！ でもこの局面で出すつてことは、ただの最上級モンスター
じゃない、つてことだよな……！」

もちろん、と言うシャルクの言葉に、トークの冷や汗が加速する。
同様に、Liveチャットのリスナーも『やっと本気出した』『とうと
う殺意が隠し切れなくなったシャルちゃん』『殺意は今までも隠れて
なかっただろ！』『ライフ7000払った時から殺意は洩れてたぞ』と
彼女がずつと維持し続けた「ライフ1000」についてのコメントが
殺到する。

「手札を1枚捨ててシーラカンスの効果発動！ デッキからレベル4
以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する！」

「か……可能な限り!? なんだそのぶつ壊れ性能！」

「まあ使ってるあたしでさえ魚族じゃなかったら許されない効果だと
思うよ」

苦笑いしながらも、《トライポッド・フィッシュ》《ハリマンボウ》《キ
ラー・ラブカ》を特殊召喚し、それを見たトークが「レベル3が3体
？」と頭の上に疑問符を浮かべる。

せつかく3体ものモンスターを並べられるのなら、レベル4のモン
スターを3体も用意すれば、より強力なモンスターを呼び出せるはず
なのに、と。

「レベル3の《ハリマンボウ》と《トライポッド・フィッシュ》でオー
バーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築
！ エクシーズ召喚！ ランク3、《発条空母ゼンマイテイ》！」

どこかから『ヒエツ』『うわ出た』『コナイデ……コナイデ……』と
いうLiveチャットが流れてきたようにも見えたが、それを無視し
てさらに動こうとするシャルクに、トークは一抹の恐怖を覚えた。

「ゼンマイテイの効果発動！ オーバーレイユニットを1つ使い、
デッキから《ゼンマイシャーク》を特殊召喚し、《ゼンマイシャーク》
の効果発動！ このカードのレベルを3にする！」

「ま、またレベル3が2体……！」

「レベル3の《ゼンマイシャーク》と《キラールラブカ》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク3、《超量機獣グランパルス》！」

これでエクシーズモンスター3体とリンクモンスター1体、さらに最上級モンスター1体がシャルクのフィールドに並んだことになり、当然ながらそれを前にしたトークは息を呑んだ。

圧倒的な展開力。それを可能にするだけのカードへの知識と、その知識を活かせる技術と戦略。今の自分にはなくて、コードトーカー使いとして必須のスタイル。多少の差異はあれども、自分のデッキの理想の場所に最も近い動きをする少女を前に、トークは畏怖と尊敬を込めてただ一言。

「……すげえ！」

「あははっ、ありがと！ でもまずはグランパルスの効果で《サイバネット・オプティマイズ》を破壊させてもらおうよ！ さすがにバトル中に効果を無効にされるのは痛いからね！」

「だが、《一族の結束》が生きてれば、既にスパイダーシャークのいないそっちのモンスターじゃトランスコードと《コード・トーカー》を超えられない！」

「それはどうかな？ あたしは墓地の《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》を除外して効果発動！ あたしのフィールドにいる水属性エクシーズ1体を素材として、それよりランクの一つ高い水属性エクシーズにランクアップさせる！」

そんなカードをいつ、と振り返り、シーラカンスの手札コストかと思いつたが、あれは《白の水鏡》ホワイト・ミラーの効果でサーチした《ランタン・シャーク》であるため、その可能性はない。

だとすれば一体———と思ったところで、もうひとつだけそのタイミングがあったことに気づく。

「《深海のアーチザン》で墓地に落としたデッキトップか！」

「おっ、よく覚えてたね。そっ、あのタイミングで墓地に行ってたんだ。じゃあいくよ！ あたしは《発条空母ゼンマイティ》をエクシー

ズ素材としてオーバーレイネットワークを再構築！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！ エクシーズ召喚！ 狡猾にして獰猛なる脅威の牙！ 《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「これが、水属性のジムリーダーから受け継いだっていう、オリジナルのナンバース……！ つてことは！」

「そして《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》をエクシーズ素材として、オーバーレイネットワークを再構築！ カオスエクシーズチェンジ！ エクシーズ召喚！ 深海に潜みし、狡猾にして獰猛なる脅威の咬牙！ 《CN0. 32海咬龍シャーク・ドレイク・バイス》!!」

シャルクの呼び出す、純白で純潔で純粹なる深海の帝王——
シャークドレイクバイス
CN032。その威容に、トークは言葉すら出せないでいた。

「装備魔法《団結の力》をバイスに装備！ あたしのフィールドの表側表示のモンスターの数×800ポイント、装備モンスターの攻撃力を上昇させる！ 今あたしのフィールドに表側表示のモンスターはバイス、ガイオアビス、シーラカンス、グランパルス、エリアの5体！ よって攻撃力4000アップ！」

「攻撃力、6800……！ け、けどその攻撃力じゃ《コード・トーカー》を攻撃しても通過ダメージは3700！ 俺のライフは800残る！」

「いいや、残らないよ！ バイスの効果発動！ あたしのライフが1000以下の時、オーバーレイユニットを1つ使い、墓地のモンスターを除外して、相手モンスター1体の攻撃力と守備力をターン終了時まで0にする！ あたしは《深海のディーヴァ》を除外して、《トランスコード・トーカー》の攻撃力を0にする！」

「ライフ1000以下……そうか、だから《光の護封壁》であんな膨大なライフを……！」

脱力したように俯くトランスコードに驚いたように視線を向けると、トークはそのまま最後の1撃を迎えるように身構えた。

「……そう、デュエリストなら最後の瞬間まで対戦相手から目を離しちゃダメだよ。——バトル！ 海咬龍シャークドレイクバイスで、《トランスコード・トーカー》に攻撃！ デプス・カオス・バイト！」

「くっ……ぐあああああっ!!」

トーク：LPO

攻撃力6800のダイレクトアタックに等しいダメージを受け、大きく吹っ飛ばされていったトークに、シャルクは慌てて駆け寄っていきくと、彼は「いつててて……」と言いながらも、手を貸すまでもなく身軽そうな動きで立ち上がった。

「ブラヴオー！ キミに負けるかもしれない未来が楽しみになるデュエルだったよ！ またやろうね、トーク君！」

「こつちこそ。やっぱデュエルって楽しいよな！ まあ俺はどつちかっていうと見る方が好きだけど……でも、やっぱ楽しいよ。それにシャルちゃんのカオスナンバーズ、すげー綺麗でカッコよかった！ くうーっ、俺もあんな感じのカッコいいエースが欲しいよ！」

「あははっ！ でもコードトーカーだって十分カッコいいじゃん！ シューティングコード、使ってみてわかったけど凄く強くて頼もしかったよ！ 次にデュエルする時は、今よりもっとカッコいいコードトーカーたちの姿が見たいな！」

「それもそっか！ コードトーカーたちもよくやってくれたよ。それにサイバースのみんなも。でも、やっぱデュエリストはみんな自分のデッキのモンスターが一番かわいいんだよな！」

それは違うね、と言って笑い合うと、シャルクは荷物をまとめて次の釣りポイントへと去っていった。

残されたトークは先程のデュエルの映像を見返しながら、シャークドレイクバイスの登場シーンを切り抜いて、メモリーカードへとデータを移して、彼もまたその場を後にした。

この後、トークのブログおよびSNSアカウントで公開されたシャークドレイクバイスの写真をめぐって、様々な憶測やコメントが大量に押し寄せ、トークは2日ほどデュエルディスクの通知機能に怯えて過ごすことになるのだが、それはまた別のお話。

縁と絆

サーマルジムを抜けると、次のジムまではワイルドエリアの砂漠区域を抜けなければならない。しかし、砂漠区域はほとんど年中ずっと砂嵐に視界を遮られ、日中と夜の寒暖差が激しく、野宿を禁止されている。

その代わりとばかりに、他の区域と比べて休憩用のロッジが多めに設置されており、街でいうところのカードショップと同様、大会参加者は無料で利用することが許されている。

ホムラによれば、シャルクより先にサーマルジムを突破したのは、蛮族とセレブとインテリの3人を除き、2人だけだという。故に——この状況は半ば当然でもあった。

「セレブちゃん、もっかい！ もう一回やろ！」

「わたくしはまだ3戦目だから構いませんけれど……彼を含めてあなた既に7回デュエルしてますのよ？」

「だって二人ともめっちゃ強いし、ロッジの中でデュエルデスク使うわけにはいかないからテーブルデュエルだし、何よりLiveデュエルじゃないから勝敗がカウントされないし、こりやもう体力が許す限りデュエルするしかないよ！」

「7戦5勝2敗ならそりや楽しいでしょうよ……。しかも負けた内の一回は手札事故でしたしね」

蛮族と他二人の大会参加者は別のロッジにいるのか不在であったが、シャルクが入ったロッジには既にセレブとインテリの二人が休んでいた。

シャルクと顔を合わせるなり、インテリはいつも通り不愛想な表情ながらもデツキを弄る手を休めて挨拶を返してくれたし、セレブは穏やかな微笑みを浮かべながらシャルクに駆け寄り、両手を合わせながら再会を喜んでくれた。

他の多くの大会参加者にも言えるが、シャルクはこの地方でも特に辺境の田舎町出身の子供であるため、行動を共にする仲間というものがない。意思を持つカードたちは間違いなく仲間ではあるが、同じ夢

を志す人間の同志という意味では、セレブとインテリだけがシャルクにとつての「友達」なのだ。

とはいえ、インテリからすると「ライバル」という意識はあつても友達とは思っていないだろうし、セレブに対しても憎からず思われているだろうが、本人にわざわざ訊いたこともないので、ほとんどシャルクの一方的な友情ではあるが。

「セレブちゃんの守りは本当に堅いから、ほんの少しの攻め時を見遇ごしたらそのままジリジリやられるからね。そりゃあ負ける時は負けるよ」

「高嶺はそうそう簡単に手が届かないからこそ、高嶺なのですわ」

「インテリくんは……なんだろうね、プレイングは間違いなく巧みだし、カードの知識も多くて信頼関係もできてるんだけど……なんとなく攻めやすいんだよね。こう、違和感みたいなのが常にある感じ。それが何かって言われると、ちょっとわからないんだけど」

「違和感、ですか……。いえ、思い当たる節がないわけではないので構いませんよ。もちろん、だからといってこのデツキを手放すつもりはありませんが」

デツキを手放す、と聞いたシャルクは、慌てた様子で「そんなつもりで言ったわけじゃないよ!？」と否定するが、インテリにとつても別にシャルクの言葉がそのまま自分の発言に繋がるものではないことは理解していた。

むしろ、他人からデツキの改善点を教わっただけでデツキを手放せるようなら、それはもうデュエリストではない。何万種類もあるカードの中から、数十枚のカードを選び抜くということは、それは即ちカードとデュエリストの「縁」を自ら選んで結ぶことに等しい。

縁とは魂と魂の繋がりだ。デツキの調整のために抜かれるカードがあるとしても、それは決して無駄なカードなどではない。カードにとつて最も重要なのは「主を勝利へと導くこと」であり、デュエリストにとつて最もすべきなのは「カードの導きを正しく読み取り、勝利へと繋ぐこと」だ。

そしてカードの導きを正しく読み取れてもなお勝利から遠ざかる

ようであるのなら、それはどちらが間違っていたわけでもない。今あるカードの導きに、勝利へと繋ぐための必要なピースが足りていないのだ。だからこそ、デッキのカードは常に入れ替わる。抜かれたカードもまた、身を引くことで主を勝利へと導いている。

だからこそ——カードと正しく向き合い続けているデュエリストであれば、誰もがそれを理解しているはずだ。それがインテリほどのデュエリストであれば、なおのこと。

「いえ、別に【ブラック・マジシャン】が弱いなどとは口が裂けても言いませんよ。このデッキの強さはみなさん知っていますでしょうし、もちろん僕もわかっています。むしろ、誤解を恐れずに言えば、純粋なカードパワーならお二人よりもずっと高いでしょう」

「そうだね。数値上のステータス、属性・種族としてのメリット、専用のサポート、戦術の幅や召喚方法の種類まで、悔しいけど水属性は【ブラック・マジシャン】の足元にも及ばないのは認めるよ」

「そうですね。わたくしの仲間はみな精鋭揃いですが、やはりカードパワーの格差で言えば間違いなくそちらが上ですわ」

まあそこは戦略でどうにかするけど、だとか、もちろんそこは信頼でどうにかしますけれど、という声はスルーして、インテリは続ける。

「ただ、そもそも僕の本래のデッキは【ブラック・マジシャン】ではないんですよ。これは僕の恩人から受け取ったデッキですので」

「……えっ。え、っ!? 嘘お!! えっちよっ……えっ?」

「シャルクの「えっ」が飽和状態ですわね」

本来のデッキではない。まして自分で作り上げたデッキですらない。それはシャルクにとって、あまりにも未知の出来事であった。彼とカードの絆は間違いなく本物だった。彼の危機には必ずデッキが応え、逆転の札を呼び込み何度も彼を勝利へと導こうとしていた。

だが、絆とは「縁の太さ」だ。さつきも言ったように、縁とは魂と魂の繋がりであり、それはデュエリストが無数のカードの中から自分の意思で自分が使うカードを選び抜くことで結ばれ、幾度の闘いを経て生まれた「信頼」がその「縁」が太く強くさせていき、「絆」となるのだ。

だからこそ、インテリの言葉はとても真実とは思えなかった。彼の言葉が嘘でないのなら、彼は「自分とはまったく縁のないカードの束」を使い、そして今こうして何度も逆転のカードを——勝利を呼び込ませたいと思わせるほどカードとの絆を強くさせた。

誰もが「縁」という下地の上に「信頼」を重ねて「絆」とし、その絆の強さが「デッキとデュエリスト」の強さになる。それを彼は、縁という下地がゼロの状態から「信頼」だけでここまで持ってきた。それがどれだけ厳しく険しい道程なのかわからないほど、シャルクとセレブは愚かではない。

「でも、じゃあ本当のデッキは……」

「この大会中は使いません。いえ……そうですね、今はLiveデュエルでもなければ勝敗もカウントされませんし……お二人が「このデッキ」のことを黙っていてくれると約束してくださるのなら、今からお相手しましょう」

それには血気盛んなシャルクだけでなく、あの凜としながらも淑やかな態度を崩さないセレブでさえ己の闘志にその身を震わせた。

「戦いたい」——そんな純粹な想いを、どうして止められるだろうか。他者から受け取ったデッキでさえも、あれほどの絆を紡いだデュエリストが、自らの意思で選び抜いた数十枚の英傑たち。

そんな強敵を前にして「戦いたい」と願うのは、もはやデュエリストとしての本能にも等しい。

「お二人ともやる気のようにですし、貴女たちはデッキの相性も悪くありません。だから——お二人まとめてお相手しましょう」



「負けた……。すごい……すごいよインテリくん！ ブラヴオーすぎる!!」

「わたくしの守りも、シャルクの戦略も、一切ミスはなかったはず……。なのに……!」

結果から言えば、勝負はインテリの辛勝。さすがに今まで蛮族以外

には無敗を誇ってきたシャルクと、そのシャルクの猛攻を幾度となく防いできたセレブを相手取って、インテリも楽には勝てなかった。だが——勝った。間違いなく勝利した。

シャルクとセレブの戦術は攻撃と防御という面だけで見れば真逆だが、同じ「水属性」をベースにしたカードとプレイングである以上、むしろ攻守の方向性が真逆だったのはメリットですらあった。

シャルクの最大の切り札である《No. 32 海咬龍かいこうりゅうシャーク・ドレイク・バイス》はライフが1000以下の時にだけという限定的な状況でのみ発動可能な代わり、絶対的なほどに強力なデバフ効果を持っている。

そこで、敢えてライフを減らす戦術をとるシャルクを、セレブが幾重にも張り巡らせた防壁によって守り続けることで、シャルクは躊躇なくその効果を発揮し、攻め続けることができた。誰から見ても最高のコンビネーションだったことは疑いようもない。

なのに——負けた。

シャルクのエースによる強力なデバフ能力は全て躲された。戦闘で攻め込もうと効果で崩そうと、それらはほとんどが防ぎきられた。何度かその守りの上から撃ち抜いても、それらはすぐに状況を持ち直した。

セレブの信頼する頑強な守りは全て剥がされた。守るだけがサポートではないと、攻め込むための準備まで整え、前線とバックアップのフォローにも一切手を抜かなかった。だがそれらも全てすり抜けて、ライフを削り取られた。

「バフなしの最大攻撃力は3200……。サポートカードは豊富だけどモンスターの種類はそこまで多くない。属性もメジャーじゃないし種族もバラバラ……。ほとんどカテゴリーとしての纏まりだけで成立してるデツキなのに……。攻撃も防御もサポートもまったく隙がなかった！」

「とにかく「躲す」のが巧みでしたわね……。防ぐのではなく、躲す……。全てのモンスターに意思があるかのように縦横無尽に動き回っていましたわ。そして何より攻めのタイミングの見極めがとに

かく上手かったように思えましたわね」

「まあ、属性の不遇さに関してはお貴女方とそう大差ありませんよ。むしろ種族のまとまりの悪さはお二人以上です。ですが、それは戦略と信頼で補えばいい。……でしよう？」

戦略と信頼。間違いなく、それはシャルクとセレブにだからこそ向けられた言葉だろう。

かつて戦略だけでインテリを倒した者。そして信頼だけでインテリが勝てなかった相手を苦しめた者。今でこそ互いに刺激を受け合い、シャルクは信頼の、セレブは戦略の重要性を見直したが、やはり各々の考え方の根底には「戦略」と「信頼」が別けられて根付いている。

しかしインテリはそんな二人の「戦略」と「信頼」をゆうに上回り、その上で「知識」を活かした戦術をとっていた。そう、彼の強みは「知識」——自分の使用するカードやメジャーカードだけでなく、自分が「苦手」とするカードの知識がとにかく多かった。

敵を知り自分を知れば百戦危うからず、とはよく言ったもの。彼は間違いなく、常に自分が一番苦手とする相手やカードを想定してプレイしている。ゆえに彼は——「知略」の将なのだ。

「でも……こんなに強いなら、なんでインテリくんはこっちのデッキで大会に参加しなかったの？ 別に言いたくないなら無理には訊かないけどさ」

「別に構いませんよ。とはいえ、そこまで深い理由はありません。さつきも言った通り、これは僕の恩人から頂いたデッキです。なので、僕はこのデッキで優勝することで、このデッキが……そしてこのデッキを組み上げた恩人の凄さをみなさんに知ってほしいというだけですよ」

「だけ、とは言いますけれど、それが容易なことではないことはインテリも理解しているでしょう？ 何せこのデュエルシティはこの地方だけでなく、腕に自信のあるデュエリストが集まる大規模大会……全力を出せないデッキで勝てるほど甘くはありませんわ」

「もちろんわかっています。でもそれなら全力以上の力を……120

%、150%、200%の力を発揮すればいいだけです。そのために、本命のデッキにも手伝ってもらってこのデッキのプレイングを練り上げたんですから」

恩人のデッキの凄さを知らしめる。そして何よりプレイングを練り上げるといふインテリの言葉の真に意味するところを、シャルクとセレブは即座に理解した。

彼はきつと、あの「ブラック・マジシャン」のレシピを、一度たりとも変えていないのだろう。たった一枚でもレシピを変えてしまえば、それは「恩人のデッキ」ではなく「インテリのデッキ」になってしまう。

だからこそ、彼はプレイングを磨いたのだ。カードの力だけでは補いきれない部分を、知識で補い、そして相手の癖や隙やパターンを即座に見抜くための目を鍛えた。「ブラック・マジシャン」が対処できないカードをリスト化し、それが投入されうるデッキを相手取る時はそれを妨害するための動きを覚えた。

それはきつと、本命のデッキを使っていればすぐに身に着けられるものだっただろう。本命デッキなら、インテリにとつて最も求めているカードを、デッキが読み取って引かせてくれるはずだ。だが、彼のデッキはそうではなかった。彼の期待に応えようとはしてくるが、彼が求めているものをいまいち読み取れていない。

だからこそ、シャルクはそれを「違和感」として感じ取った。「ブラック・マジシャン」デッキは彼のために一生懸命だし、インテリもそのデッキの導きを正しく読み取って最善のプレイングをしている。

なのに「負けるかもしれない」という危機感を感じ取れないのは、デッキが彼の真意を理解できず、ベストではなくベターなカードを引かせているからだ。

「インテリくん、もう一度【ブラック・マジシャン】であたしとやろう。インテリくんの知識には勝てないかもしれないけど、戦略でならあたしも助言ができるかもしれない」

「わたくしもお手伝いしますわ。カードとの信頼関係なら、わたくしも負けてはいませんもの。カードとの付き合い方や交流のしかたな

どで、より良い関係を結べるかもしれませんわ」
「……まったく、お節介な方々ですね」

対シャルクの研究成果

セレブ、インテリと楽しく一夜を明かすと、昼まで眠ると言った二人を残して、シャルクは次の街——スモッグタウンを目指した。

道中、釣りで入手した新たなカードをシャークドレイクと相談しながらデツキ調整したり、昼食のカレーのトツピングを鳥獣型モンスターに持ち去られたりもしたが、概ね順調に歩みを進めていた。

しかし、その道中でほとんど他のLiveデュエリストを見かけなかったのが不思議であった。シャルクより先に進んだデュエリストは、今ロツジで寝こけている二人を除いて三人。蛮族と、他2名のはずだ。

それなのに、見かけるのは参加者ではない一般デュエリストばかり。もちろん、一般デュエリストといっても野生のモンスターが闊歩するこのワイルドエリアを歩き回る実力を兼ね備えたデュエリストではあるのだが、大会参加者はいったいどこにいるのかとシャルクは警戒心を強めた。

あるいは、先んじてスモッグタウンにまで到達しているのだろうか。だとするのなら、自分もここでのんびりはしてられないと、並居るデュエリストを倒し、押し退けて進んだ先に、ようやくワイルドエリアの北端——スモッグタウンの入口が見えた。しかし——、「オーット！——ここから先に進みたいならこのワタシ——」「ドクター」とのデュエルに勝利してからデスよ！」

「凸げき団!?!——こんなところにまで……。でも、今日の私は機嫌がいいんだ。お望み通りボツコボコにしてから進ませてもらうからね！」シャルクとドクターは互いにディスクを構えると、コメント欄がチャットパネルとしてシャルクの横にのみ投影され、デュエルが開始される。

「オープンチャンネル！ Liveデュエル、オンエアー！」

「さあ、最高に楽しいLiveデュエルを——楽しもうね！」

凸げき団のドクターが勝負をしかけてきた！

「まずはフィールド魔法《ミュートリア進化研究所》を発動。手札から

《被検体ミュートリアST-46》を特殊召喚し、効果発動デス！

デッキから《フュージョン・ミュートリアス》を手札に加えますデス」

開始と同時に発動されたフィールド魔法の効果により、周囲が不気味な生体ポットに包まれた施設に変貌し、その中から謎の生命体が浮かぶポットが場に召喚される。

うげえ、と不快感を露わにしたのはシャルクだけでなく、チャット欄でも『ミュートリアか……』『あんまり見ないカテゴリだけど、あんなデザインなのか』『キモくて低ステータスは強いカードの証だぞ』『それはそう』とデザインへの難色を示すコメントがいくらか見受けられる。

「そして被検体ST-46をリリースし、手札の《ミュートリアル・アームズ》を除外して効果発動。デッキから《ミュートリアル・ビースト》を特殊召喚し、ワタシは2400のライフを失うデス！　ここまで何か質問は？」

ドクター：LP5600

「ない。とつとと先に進めて」

「オーケイ。フィールド魔法の効果により、除外されているミュートリアの数だけ、場のミュートリアの攻撃力は100ポイントアップするデス。現在のところ除外カードは《ミュートリアル・アームズ》1枚のみ。よってビーストの攻撃力は2500。まずまずといったところデスね。カードを2枚セットしてターン終了デス」

シャルクの睨む先には、形容しがたい異形の怪物。提示されている情報は基礎ステータスのみ。シャルクの持つ知識の中にもあまりデータのないカテゴリだけに、対処に悩んでいるようだ。

「じゃああたしのターン、ドロロー。まずは《カッター・シャーク》を召喚。魚族が特殊召喚されたことで、手札の《シャーク・サッカー》を守備表示で特殊召喚。さらに《カッター・シャーク》の効果発動——」
「オーット！　それは通せないデスね。永続罠《ミュートリア連鎖応動》発動。墓地の《被検体ミュートリアST-46》を除外して、《カッター・シャーク》の効果は無効デス！　慌てないでください、勝負は始まったばかり。楽しもうね！」

「うげ……でもまだ手はある！ 自分のフィールドに水属性モンスターが存在することで、手札の《サイレント・アングラー》は特殊召喚できる！ おいで、《サイレント・アングラー》！」

レベル4のモンスターが2体並び、チャット欄も見慣れたその光景に『いつもの』『親の顔より見た盤面』『もつと親の盤面見ろ』『親の盤面は初手クリステリアなのでNG』『アツハイ』などと割と言いたい放題になっている。

「レベル4の《カッター・シャーク》と《サイレント・アングラー》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク》！」

「攻撃力2600……。けれどさつき《ミュートリア連鎖応動》の効果で《被検体ミュートリアST-46》が除外されたことで、フィールド魔法の効果により《ミュートリアル・ビースト》もまた攻撃力が2600となっているデスよ！」

「だつたら下げればいいだろ！ バトルだ！ スパイダーシャークで《ミュートリアル・ビースト》を攻撃！ そしてこの瞬間、オーバーレイユニットを1つ使い、効果発動！ 相手の場に存在する全てのモンスターは攻撃力が1000ポイントダウンする！」

「くっ……なかなか強力なモンスターだつたようデスね……！」

ドクター：LP4600

レプリカといえどもナンバーズ。強力な全体デバフでミュートリアルを突破ラインまで抑え込む。しかし、対するドクターは未だ余裕を崩しはしない。

おそらくは破壊時、あるいはフィールドを離れることで発動する効果があるのだろうということまでは、シャルクにも理解できている。だが、それだけならばこの背筋を撫ぜる悪寒は——と思考を巡らせつつも、シャルクは表情を崩さない。

「相手によって破壊された《ミュートリアル・ビースト》は除外されているミュートリア罫を回収する効果があるけれど、今のところそんなカードは除外されてないデスよ」

「(破壊時効果が狙いじゃない……?) あたしはバトルを終了して、バックにカードを1枚セット! ターンエンド!」

最初から最上級モンスターを場に出したのだから、それを維持するか、あるいはそれが何かのトリガーとなるのではないかと危惧していたシャルクは、思わず肩透かしを食らうことになった。

しかし、ライフアドバンテージとボードアドバンテージを離されておきながら、未だに余裕を崩さない彼の様子を見るに、ここまでの状況は決して想定外ということはないらしい。

「ワタシのターン、ドロロー。そうデスね……壁のために用意はしていたんデスが、使っても問題なさそうなのでセットしていた《緊急テレポート》を発動。デッキからレベル3以下のサイキック族モンスター《被検体ミュートリアM-05》を特殊召喚」

「被検体……M-05? さっきのST-46とはまた別のモンスター……?」

「特殊召喚時に自身をリリースし、手札のミュートリア魔法を除外することでデッキから《ミュートリアル・ミスト》を特殊召喚。さらに場にミュートリアカードが存在する時、手札から《変異体ミュートリア》を特殊召喚。これをリリースすることで、デッキからミュートリアモンスターを除外して、デッキから《ミュートリアル・ビースト》を特殊召喚デス」

「二気に最上級モンスターが2体……! しかも進化研究所の効果で除外枚数×1000の強化を受けてるから、今は400アップで……!」

攻撃力3100の《ミュートリアル・ミスト》と、攻撃力2800の《ミュートリアル・ビースト》から、最上級特有の威圧感を感じるも、シャルクの場合には攻撃力を1000ダウンさせる《No.37希望織竜スパイダー・シャーク》が存在するため、精神的余裕はどうか保たれている。

「バトル。《ミュートリアル・ビースト》でスパイダーシャークを攻撃デス」

「スパイダーシャークの効果を把握してる上で攻撃してきた……!?

あいつの効果は破壊された時にミュートリア罨を除外から回収する効果だけじゃないの……!? だったら罨カード《神の氷結》を発動!

ビーストの攻撃と効果を封じる!」

「オーツト! 相手の罨の発動に反応して、《ミュートリアル・ミスト》の効果が発動するよ! 場の《ミュートリア連鎖応動》を除外して、デッキからカードを2枚ドロウ。ちょうど手札がカツカツだったんデスよ。ご助力に感謝デス。これでまだまだ動けるよ。楽しもうね!」

「罨の発動を止めもせずにとりがらに……そうか、狙いは「そっち」だったのか……!」

スパイダーシャークの効果を把握しておきながら、これだけ不審な攻撃を行ったのは、警戒心の高いシャルクのプレイングを逆用して《ミュートリアル・ミスト》のドロウ効果を通すのが目的だったのだろう。

あの状況で、シャルクには「スパイダーシャークによる迎撃」と《神の氷結》による停止」が選択肢にあった。しかし片方は相手にも公開されている情報であるため、その上で攻撃してくるというのは、前者への対処法があるのだとシャルクは判断した。

だが、それこそがドクターの狙い。あの状況、実はドクターにはスパイダーシャークへの対処法など何もなかった。だからこそ、先程の攻撃は完全なるブラフ。あのままスパイダーシャークに迎撃されていれば、何もできずターンを譲ることしかできなかった。

しかし、だからこそシャルクは「そんな分の悪い賭けをするわけがない」と思ってしまった。だからこそ《神の氷結》を使ってしまった。攻撃と効果を封じ、《ミュートリアル・ビースト》を場に残したまま《ミュートリアル・ミスト》の効果を通す結果になってしまったのだ。「バトルは終了、メイン2に移行デス。ライフ800払って《サイコパス》発動。除外されている《被検体ミュートリアGB-88》と《被検体ミュートリアST-46》を手札に回収。ワタシはまだ召喚権を消費していないので《被検体ミュートリアST-46》を召喚し、その効果で《フュージョン・ミュートリアス》をサーチ」

「フュージョン……融合魔法？　メイン2の今？」

「相手がこのターン中に効果を使用しているため、《フュージョン・ミュートリアス》を発動し、場の《ミュートリアル・ミスト》と《ミュートリアル・ビースト》、そしてデツキの《ミュートリアス・アームズ》を素材として融合デス！」

デツキを含んだ3体融合。シャルクにとっても初めて見る「デツキ融合」の一種。ここまでのミュートリアには正直に言って「キモい」以外の感想は彼女の中にはなかったが、今こうしてその力を前に戦慄を感じずにはいられない。

「怒りのまま混じり合い、生命を冒瀆しろ！　融合召喚！　レベル10、《究極体ミュートリアス》！」

「攻撃力……4200!？」

このターンのバトルでスパイダーシャークの効果を温存したとはいえ、それに対処可能なのはせいぜいが3600まで。シャルクのデツキに入っている最大打点で挑んでも3800までであるため、4200は何かしらの効果で弱体化させないと対処はできない。

だが、それはおそらくあちらもわかっているだろう。だからこそ、あのモンスターは『究極体』の名に相応しい効果を持っているはずだ。「とはいえ既にメイン2……ワタシはこれでターンを終了」

ドクター：LP4600

「あたしの、ターン！　あのデカブツを倒すには……まず《キラール・ラブカ》を召喚！　レベル3の《キラール・ラブカ》と《シャーク・サツカー》をオーバーレイ！　2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！　エクシース召喚！　ランク3、《ブラック・レイ・ランサー》！」

「あのモンスターは……なるほど、ミュートリアスがどんな効果を持っているようが、そいつの効果で封じようというわけデスね。いいだろう、受けて立つデス！」

「いくよー！　《ブラック・レイ・ランサー》の効果発動！　オーバーレイユニットを1つ使って、相手モンスター1体の効果を封じる！　狙いはもちろん《究極体ミュートリアス》！」

「通すと思ったのデスか? 《究極体ミュートリアス》の効果発動! 相手が効果を発動した時、それと同じ種類のミュートリアカードを場・手札・墓地から1枚除外することで、その発動を無効にして除外する! ワタシはフィールドに存在する《被検体ミュートリアST-46》を除外して《ブラック・レイ・ランサー》の効果は無効にして除外デス!」

「無効にして、除外ツ!?!」

まさかの無効の果ての除外。無効までは想像していた。場合によつては破壊されるころまでは。しかし、まさかの除外。こればかりはさすがのシャルクの表情にも焦りがチラつく。

ここまで驚くほどに相手のペースに? まれっぱなしの彼女を見て、チャット欄がざわつく。『シャルちゃんがペースを掴まれっぱなし……!?!』『今までのデュエルが嘘みたいに相手の策に全部ハマってる!』『明らかに調子がわるいけど、まさか蛮族以外では初の黒星あるか……?』と、シャルクラしからぬプレイングに困惑しているようだ。「くっ……永続魔法《白の救済》を発動。墓地の魚族モンスター《カッター・シャーク》を回収。フィールド魔法《忘却の都レミューリア》を発動。……けど、それでも対処可能範囲は3800までだ。攻撃力4300になつてる究極体相手にはどうにもならない。スパイダーシャークを守備表示に変更してターンを終了するよ!」

究極体を前に、ここまで攻めの手を決して緩めようとしなかったシャルクがとうとう守りに回る。

これには、ライブチャット欄も大いに沸いた。『今まで相手が攻勢になつてもリカバリーこそ用意したけど守りにだけは絶対に入らなかつたシャルちゃんか!』『あのゼンマイティ以外のエクシーズを決して守備にしようとしないういシャルちゃんか!』『たえ相手の方が攻撃力高くてもブラフのために攻撃表示を貫くシャルちゃんか!』と困惑の嵐だ。

事実、シャルクはエクシーズモンスターをほとんど守備にしない。展開用のゼンマイティこそ守備で出すことはあれど、除去や無効化などの攻勢に出られるエクシーズは基本的に全て攻撃表示である。も

しも相手に攻撃力で上を取られたとしても、伏せをブラフとして活用するために守備にして弱気なところを見せようとはしない。

だが同時に、シャルクはプライドよりも堅実に勝利を求めるタイプであることも、リスナーは理解していた。今シャルクのフィールドには表側表示のカード3枚のみ。その内、究極体の行動を抑止できるのはスパイダーシャークのみだが、それでも戦闘による破壊は免れない。ブラフも用意できない今、彼女は守りに移らざるをえないのだらう、と。

「では、ワタシのターン。ワタシは手札の《ネメシス・フラッグ》の効果を発動デス。除外されている《ミュートリアル・アームズ》をデッキに戻し、このカードを守備表示で特殊召喚。除外されているミュートリアが減ったことで、究極体の攻撃力は4200にダウン」

「あたしのアンブレラと同じ、炎のネメシス……！ 召喚条件が同じということとは、異なるのは起動効果の方ってことか……」

「お察しの通りデス。《ネメシス・フラッグ》の効果発動。デッキから自身とは名前の異なるネメシスをサーチ。ワタシは《ネメシス・コリドー》を手札に加え、効果発動。同じ条件で今度は《ミュートリアル・ミスト》をデッキに戻し、守備表示で特殊召喚。究極体の攻撃力は4100」

「でもまだ召喚権を残してる。手札にはさつき《サイコパス》で回収したGBー88があるはず。確かさつき除外されてた時に見た記憶が正しいなら、そいつのレベルは4。となると……狙いはリンク3か、それともリンク4か、つてところ？」

「話が早くて助かるよ。ワタシの場に《ミュートリア進化研究所》が存在することで、《ミュートリアGBー88》を特殊召喚。そしてGBー88とコリドーでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。さあ来るんだ、リンク4。《暗遷士カンゴルゴーム》」

ナンバーズという存在が入手困難なこの世界において、カンゴルゴームの存在感は圧倒的であった。

縛りのない素材2体で出せるリンク4では、ナンバーズを除いてカ

ンゴルゴームを上回る打点を持つのは《ジエムナイト・パール》《希望の魔術師》《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》《ファイアウォール・X・ドラゴン》《エクソシスター・ミカエリス》の5体だけだからだ。

しかし、《希望の魔術師》はペンデュラム、《ファイアウォール・X・ドラゴン》はリンク、《エクソシスター・ミカエリス》に至ってはエクソシスターというカテゴリに関連する効果であり、実質《ジエムナイト・パール》《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》の2体のみ。

だが頼みの綱の《ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン》はナンバーズほど入手不可能というほどでないにせよ、レプリカの製造に難航しており、オリジナルしか存在しないため高額かつ希少なカードであり、多くのプレイヤーが当然のように持っているわけではない。

故に、この世界における汎用ランク4の採用基準において、打点を優先して《ジエムナイト・パール》を取るか、使う機会が無くもない《暗遷士カンゴルゴーム》を取るか、あるいは両方を採用して状況に合わせて切り替えるか、というのが常識なのである。

「今、カンゴルゴームの効果を適用できるようなモンスターは居ないけれど……」

「スパイダーシャークの守備力は2100。カンゴルゴームで十分対処可能デス。ではバトル。《暗遷士カンゴルゴーム》で《No. 37 希望識龍スパイダー・シャーク》を攻撃」

「それは通せないね。スパイダーシャークの効果発動。相手の攻撃宣言時にオーバーレイユニットを1つ使うことで、相手モンスター全ての攻撃力を1000下げる！」

「ならば究極体の効果を……」

「まだだ！ 同じタイミングで墓地の《キララー・ラブカ》の効果発動！

相手モンスターが水・魚・海竜族を攻撃対象にした時、その攻撃を無効にし、その相手モンスターの攻撃力を500ダウンする！ これで、究極体がチェーンできるのは《キララー・ラブカ》に対してだけだ

！」

キラール・ラブカに対する無効・除外は既に意味を為さない。なぜなら《キラール・ラブカ》を挟んだことよってスパイダーシャーケの効果が確定している以上、カンゴルゴームの攻撃力はスパイダーシャーケの守備力を下回ってしまう。むしろ攻撃が止まることで反射ダメージを防げるのなら、通した方が得ですらある。

加えて、無効にして除外する効果を「除外」に注目したところで、《キラール・ラブカ》は既に自身の効果で除外している。正直、この時点で究極体の効果を使うとするなら、コストとして墓地のミュートリアを除外することがメリットになるかならないかというところ。

「究極体の効果は使わない。では改めて、攻撃力3100となった《究極体ミュートリアス》でスパイダーシャーケを攻撃」

「スパイダー……ッ！ 破壊されて墓地に送られたスパイダーは自身以外の墓地のモンスターを蘇生する効果があるけど、それは使わない」

「ふむ……ではバトルを終え、そのままターンを終了させてもらおうかな」

今の攻防でダメージを受けずにターンを返させたのは、状況的に見てきわめて大きな収穫だと言えよう。

それはライブチャットも同様に見たようで、「《キラール・ラブカ》の発動条件と攻撃無効を最大限に生かしたバトルだった」「先にラブカ打ってたらダメだったの？」「先にラブカを打ったらスパイダーが無効+除外だから今のが最適解」「よく究極体のプレッシャーと緊張感を受けてそんな冷静な判断できたな」と称賛の声が上がっている。

事実、あの状況で最も被害が少ないのは、スパイダーにチェインする形でのラブカだ。逆の順序であれば、攻撃を無効にしてもスパイダーが除外され、攻撃力も4100のままダイレクトアタックを受けていた。

相手が凸げき団とはいえ、Liveデュエルをしている以上、これは大会の公式戦。負ければ戦績に悪影響が出る。絶対に負けられない緊張感。そして目の前に居る巨大で強大なモンスターが放つプ

レッシュャー。少しの判断ミスが大きく響くこの状況で、シャルクの戦略は一切のブレを生じさせなかった。

「あたしのターン！……まずは永続魔法《白の救済》の効果を発動。墓地の魚族モンスターを手札に回収。チェーンは？」

「毎ターン回収されるのは面倒だけれど、さすがにまだかな。好きにするといいい」

「なら墓地から《シャーク・サッカー》をサルベージして、手札から《カッター・シャーク》を召喚。さらに魚族モンスターが召喚されたことで《シャーク・サッカー》を特殊召喚！ 続けて《カッター・シャーク》の効果発動！」

「それは通さない。《究極体ミュートリアス》の効果発動。相手が発動したカードと同じ種類……即ちミュートリア「モンスター」を除外することで、その効果の発動を無効にし、除外する」

カッターの効果はデッキからのリクルート。手札や墓地とは比較にならない選択肢の中から好きなモンスターを展開できるとなれば、さすがのドクターも見逃してはくれない。

だが、それはシャルクにもわかっていたことだ。故に——この最後の一枚が効く。

「ここまでは読んでたよ！ だから本命はこつちだ！ 魔法カードフィッシュ・ソナー《魚群探知機》を発動！ レベル7以下の水属性の通常モンスターまたは「テキストに「海」と記されたモンスター」をデッキからサーチし、場に「海」があればさらに水属性の通常モンスターをリクルートできる！」

「フィールドゾーンに存在する《忘却の都レミューリア》は確か……」
「そう、カード名をルール上《海》として扱う！ だからあたしはデッキから《デス・クラーク》を手札に加え、デッキから《グレート・ホワイト》を特殊召喚！」

「究極体を突破して展開したのはいいが……レベルの異なるモンスターが2体。それにチューナーもない。過去のキミの対戦は見させてもらったが、キミが所持するリンクモンスターはどちらも展開用のリンク2のみ。究極体を脅かす存在はない。どうやら手詰まりのよう

だな」

手詰まり。ドクターの口から、初めて「確信した」かのような言葉が洩れた。だが、その言葉の裏にあるものが何か、シャルクは知っている。否——シャルクだからこそ理解できる。

あれは、自分が手詰まりであることを悟らせまいと、まるで自分が優位であるかのように相手を錯覚させるためのブラフ。特にシャルクは、このドクターの戦略というものに一定の敬意を持っていたからこそ、その真意が読み取れた。

究極体は間違いなくドクターの切り札だろう。あれほどに強力なモンスターを従え、なおかつそのサポートとしてカンゴルゴームを添える「慎重な攻め」の姿勢には、もはや共感にも等しいものを感じていた。だが——故に今が攻め時だとわかる。

「あなたが私のデュエルを観てくれたことは、Liveデュエリストとしてとても嬉しいけれど……でも、だとしてもそれは昨日まで、さつきまでのあたし！ あなたの知らないあたしは、今もうここにいるんだ！ あたしは手札の《デス・クラーケン》の効果発動！」
「また水属性お得意の展開札かな？」

「うん。だけどそれだけじゃないよ！ 《デス・クラーケン》の効果発動にあたって、まずは場の《シャーク・サッカー》と《究極体ミュートリアス》を選択！ このカードを特殊召喚し、《シャーク・サッカー》を手札に戻して《究極体ミュートリアス》を破壊する！」

「それが狙いなら残念だったね。対象を取る効果ならカンゴルゴームで……いや、これは……！」

「そう！ カンゴルゴームで対象を変更できるのはあくまで「カード1枚を対象にする効果」だけ！ それに対して《デス・クラーケン》の効果は同時に2枚のカードを対象に取るから、カンゴルゴームで狙いを逸らすことはできない！」

驚愕の表情を浮かべながら、ドクターは自分の背後に佇む究極体への振り返った。《デス・クラーケン》の引き起こした激流に？み込まれて消滅した《究極体ミュートリアス》の遺志をその目に焼き付けた彼は——。

「まだデス！ 究極体はその身を滅ぼそうともワタシに確かな研究成果を残してくれる！ 究極体が相手によって破壊された時、除外されているミュートリアカードを最大三種類まで手札に戻す！ ワタシは《被検体ミュートリアST-46》《フュージョン・ミュートリアス》《ミュートリア連鎖応動》を回収！」

「次のターンで確実に巻き返すつもりだね……だけどそうはさせない！ あたしはレベル4の《グレート・ホワイト》と《デス・クラークン》でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ ランク4、《バハムート・シャーク》！」

「シャークドレイクの陰に隠れてはいるが、そのモンスターもまた《F Aーブラック・レイ・ランサー》と同じくキミを支え続けたモンスター……なるほど、これからが本気というわけか！」

「《バハムート・シャーク》のオーバーレイユニットを1つ使い、効果発動！ エクストラデッキからランク3以下の水属性エクシーズを特殊召喚する！ あたしは《トライエッジ・リヴァイア》を特殊召喚し、オーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを再構築！ ランクアップ・エクシーズチェンジ！ ランク4、《F Aーブラック・レイ・ランサー》！」

効果を使用した後、《バハムート・シャーク》はバトルに参加できないが、それを補って余りある力を《F Aーブラックレイランサー》は持っている。

それは、彼女を研究するために彼女の対戦を観てきたドクターもわかっていた。

「バトルだ！ レミューリアと自身の効果で攻撃力が2500になっている今、カンゴルゴームも射程範囲内！ 《F Aーブラック・レイ・ランサー》で《暗遷士カンゴルゴーム》を攻撃！ ブラックブライトスピアー！」

「ダメージはたったの50だが……これはまずいことになったな……」

「あたしのデュエルを観たならもちろん知ってるよね？ 《F Aーブ

ラック・レイ・ランサー』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手の魔法・罠カードを1枚破壊できる！ 狙いはもちろん『ミュートリア進化研究所』！」

「これでこちらのフィールドはフラッグを残すのみ……随分と好き放題してくれる」

ひとまずフィールドをまくることに成功したシャルクだが、その表情は未だに張りつめている。ボードアドバンテージは間違いなくシャルクにあるだろう。一度きりとはいえ、『F Aーブラック・レイ・ランサー』は破壊耐性もある。レミューリアの影響もあり、2500ラインと2800ラインを同時に展開できたのは間違いなく「良」だ。

だが相手の手札は4枚。次のドロワーで5枚になるばかりか、公開札の中にはミュートリア専用の融合魔法まである。この状況をひっくり返すには十分すぎる枚数だ。それに対し、シャルクの手札はわずか1枚。しかも情報割れしている『シャーク・サッカー』のみ。伏せカードもなく、現時点で使用可能な墓地発動もない。

「あたしはこれでターンエンド。……さあ、まだまだデュエルはここから、でしょ？」

冒読者の矜持

「ワタシのターン、ドロロー。まずは《被検体ミュートリアSTR46》を召喚し、効果発動。デツキから《ミュートリア進化研究所》を手札に加え、そのまま発動」

「ほんと、たった1枚から流れるように動くね……」

「キミも似たようなものだろう？　続いて自分の場にミュートリアカードが存在することで手札の《変異体ミュートリア》を特殊召喚して効果発動。変異体をリリースし、デツキの《ミュートリスの産声》を除外することで、デツキから《ミュートリアル・アームズ》を特殊召喚」

「だけどその代償として、《ミュートリアス・アームズ》の攻撃力分のダメージを受ける、だよな？」

ドクター：LP4600↓1600

「それでも、攻撃力3000オーバーは君にとって十分すぎるほど脅威になるはずだ。続けて被検体STR46の効果発動。自身をリリースし、手札の《ミュートリア反射作用》を除外することでデツキから《ミュートリアル・ミスト》を特殊召喚」

「今度は攻撃力2700……！」

「ではバトルといこう。ワタシは《ミュートリアル・アームズ》で《バハムート・シャーク》を、《ミュートリアル・ミスト》で《FAーブラック・レイ・ランサー》を攻撃する」

「そういうことか……！　あたしは《FAーブラック・レイ・ランサー》の効果は使わず、そのまま破壊されるよ」

シャルク：LP8000↓7800↓7600

敢えて破壊されることを選んだシャルクに、ライブチャットがどよめく。どうして破壊を選んだのか、ただでさえカードを発動することに厄介な効果を持つ上級ミュートリアが2体も並んでいる状況で、無抵抗なのはどういうことか、と。

だがそれは同じくチャット欄によって鎮静化した。『さっきの究極体で回収したカード忘れたのか』『ドクターの手札にはあの融合魔法

がある』『ここでFAの効果を使つてたらまた究極体が来てたかもしれない』そう説明するチャット欄を見て、ドクターはニタリと笑った。「随分と優秀なリスナーに恵まれているようデスね」

「もちろん。水属性のことも、最近は興味を持つてくれてるみたいで、嬉しい限りだよ」

「羨ましいデスよ。Liveデュエル全盛の時代とはいえ、キミのような若いLiveデュエリストにも一定のリスナーが付く。特にキミのような、優秀なデュエリストならば尚のこと」

「あなたはそうじゃなかった、って言いたいのなら残念だったね。あたしはそんなことで同情なんてしないよ。あなただけじゃない。この大会に出て自分の限界に心が折れた人、出る前に挫折した人、そんなのいっぱい居るんだ。けどあたしはそれを哀れだなんて思わない。負けた人、挫折した人……その人たちの怨念を背負いながら強くなっていくのが、勝者の義務だと思うから」

公式戦では蛮族にしか負けたことのないシャルクだからこそ言える。そして公式戦で何度挑んでも蛮族に負け続けているシャルクだからこそ言える。

勝ち続ければ恨まれる。一度や二度なら笑つて過ごせるようなことでも、何度も何度も勝利を繰り返せば、その対戦相手に、あるいは対戦相手を応援しているリスナーや家族、友人に。どんなに恨まれてもそれを無視はしない。だが真正面から受け止める必要もない。その恨みを背負つて歩くしかない。

負けた時はひたすら自分を悔いる。デュエリストなら誰でも「カードのせい」なんて思えない。デッキのせいで負けたならそれは構築の甘い自分のせい。構築に問題がないなら自分のプレイングのせい。構築もプレイングも問題なければ運を引き寄せることのできない自分自身のせい。

だからこそシャルクは勝つた数だけ負けた相手の想いを背負う。負けた数だけ自分の弱さを見つめなおす。それを繰り返したからこそ、今のシャルクがいる。どんな罵声や暴言にも怯まない、どんな挫折を味わつても必ず再び立ち上がる。そんな「今のシャルク」に。

「いいや、負け惜しみは趣味じゃない。キミを羨みはするけれど、ワタシの挫折は後悔だけをワタシに与えたわけじゃない。あの挫折があったから……ワタシはこの研究成果デツキに出会えた！ これらは全て、ワタシの苦痛に寄り添い、それを餌に培養されたワタシの感情の結晶！ だからこそ……ワタシはミュートリアを勝たせたい！」

「ふふっ、いい目つきだね。でもだからこそ……もつと負けるつもりがなくなつたよ！ あたしのターン！ あたしは永続魔法ホワイト・サルベージュ《白の救済》の効果発動！ 墓地の《デス・クラーケン》を回収！」「アームズとミストは魔法カードの発動には反応しない……好きにするといい」

「だったら続けて《貪欲な壺》を発動！ 墓地の《バハムート・シャーク》《F Aーブラック・レイ・ランサー》《トライエッジ・リヴァイア》《グレート・ホワイト》《サイレント・アングラー》をデッキに戻して2枚ドロー！」

5枚回収とはいうが、エクストラに3枚戻しているため、実質的にメインデッキに戻っているのは2枚だけ。2枚のドローで手札を増やしつつ、デッキの増減を最低限に留めるのは、エクシーズモンスターの消耗が激しいシャルクだからこそだろう。

「いいカードは引けたかい？」

「もちろん！ あたしのデッキはいつだってあたしのために全力で力を貸してくれるんだから！ 永続魔法《潜海戦術シー・ステルスII》を発動！ このカードがある限り、水属性モンスターは水属性モンスター以外の効果対象にはならない！」

「なるほど、モンスター効果に反応する《ミュートリアル・アームズ》が相手のモンスター効果に反応して除去を行うのは対象を取る効果……！ キミはそれを引くのを待っていたのか……！」

「もちろんそれだけじゃない！ あたしは《デス・クラーケン》を召喚し、それに反応して《シャーク・サッカー》を展開！ そしてこの2体をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《海晶マリオンセス乙女コーラルアネモネ》！」

ここで、シャルクが呼び出したのは攻撃力2000の展開用リン

ク。《貪欲な壺》で痩せこけた墓地には、攻撃力1500で有用なモンスターなど——そう誰もが思った。

否、断じて否。昨日までは……「さつきまで」はそうだったかもしれない。それでも、今は違う。

「コーラルアネモネの効果発動！ 墓地の《デス・クラーク》を——」
「させはしない。永続罠《ミュートリア連鎖応動》！ 墓地の《被検体ミュートリアST-46》を除外し、コーラルアネモネの効果はこのターンだけ無効にする！」

「ならこのままバトルだ！ バトル開始時に《潜海戦術II》の効果発動！ 互いのバトル開始時に、手札か墓地から水属性のバニラモンスターか、「テキストに「海」を含むモンスター」を守備表示で特殊召喚する！」

「そこまでしてデスクラークを——」

「いいや違うね！ あたしは手札からこのモンスターを特殊召喚する！ 現れる……《海竜神—リバイアサン》！」

リバイアサン。「さつきまで」シャルクのデッキにはいなかったそのモンスターは、今のシャルクのフィールドに確かに君臨している。

それは——シャルクが倒したデュエリストがくれた、シャルクにだからこそ扱える海の竜神。「高嶺の舞台には似合わない」と言いながら、それでも必死に使い手を探し、その相手にシャルクを見出してくれた友達がくれたカード。

勝利は敗者を生み、敗北は勝者への反骨心を生み出す。だが反骨心は時として、他の何にも勝る最大の敬意になることもある。これが……この忘却の都に佇む一目に忘れがたき竜神が、それを物語っている。

「レベル5の《海竜神—リバイアサン》が特殊召喚されたことで、墓地の《神の氷結》をフィールドにセット！ さらにリバイアサンの永続効果！ このカードが存在する限り、互いに水属性以外のモンスターを1体しか場に留まらせてはならない！」

「対象を取らず、破壊でもなく、発動すらしない最上級の除去効果……！ ならばワタシは《ミュートリアル・ミスト》と《ネメシス・フラツ

グ》を墓地に送り、《ミュートリアル・アームズ》を維持する！ 攻撃力なら未だにこちらが上さ。まだ終わらせはしない。まだ……楽しむもうね！」

「バトルには入ったけど、攻撃力でそっちを上回るモンスターはいない。このままバトルを終了し、リバイアサンは破壊される」

対象を取る効果に対する耐性。バトルの度に復活するリバイアサン。毎ターンの墓地回収。手札こそ尽きてはいるが、フィールドが丈夫に仕上がっているのは間違いなくシャルクだ。

それに対し、ドクターのフィールドは攻撃力3500の《ミュートリアル・アームズ》1体。罠の対象にならない効果と、モンスター効果に反応して除去を行う効果を持つが、対象をとってしまう以上、頼りになるのは破壊された時の回収効果とその高い打点のみ。

現時点でシャルクの場合にはコーラルアネモネ1体。伏せは《神の氷結》だけなので、バトルに入ってリバイアサンが場に現れる前後ならば発動できない。つまりは、メインフェイズでどれだけ動けるかが肝となる。

「ワタシのターン、ドロー。……水属性以外のモンスターを維持できないというのなら、ここで使わざるをえないな。魔法カード《フュージョン・ミュートリアス》発動！ 場の《ミュートリアル・アームズ》と手札の《被検体ミュートリアGB―88》を融合！ 融合条件は属性の異なるミュートリア2体！ 融合召喚！」

「フィールドの属性を絞って……？」

「欲望のままに交じり合い、叡智と共に冒険しろ！ レベル9、《シンセシス・ミュートリアス》！」

「最上級の……水属性ミュートリア!？」

まずい、とシャルクが察した時には既に遅かった。

「シンセシスの効果発動！ このカードの融合召喚に成功したことで、コーラルアネモネを対象に、それを破壊する！」

「くっ……ここで水属性の除去持ち融合モンスターなんて……！」

「バトル！」

「バトルフェイズ開始時に永続魔法《シーステルス潜海戦術II》の効果発動！ 墓

地から《デス・クラーケン》を守備表示で蘇生する！」

「構わない！ そのまま行け、《シンセシス・ミュートリアス》！」

「攻撃宣言時、《デス・クラーケン》を手札に戻すことでその攻撃を無効に……」

「オーツト！ それはダメだね！ 《シンセシス・ミュートリアス》は1ターンに一度、相手がカード効果を発動した際にその効果を受けず、このターン同じ種類の効果を受けない！ 手札に戻すのは構わないが、戦闘は続けさせてもらう！」

しまった、と言う間もなく、《シンセシス・ミュートリアス》の太い触手がシャルクを強かに打ち付けた。

「うあああああっ！」

シャルク：LP7600↓4400

「レベル9のシンセシスが相手モンスターを戦闘破壊したことで《ミュートリア連鎖応動》の効果発動。デッキから1枚ドロロー。さて、キミのレミューリアのおかげで打点もそれなりだし、次のキミの行動を観察させてもらおうか。ワタシはこれでターンエンド」

ライフは未だシャルクの優勢。ドクターがダメージを優先してコーラルアネモネを破壊し、《潜海戦術ⅠⅠ》を破壊しなかったこともあり、まだフィールドはそこまで壊滅的ではない。

だが相手は《ミュートリア進化研究所》に加え、シャルクの《忘却の都レミューリア》の効果も合わせて攻撃力3200。しかも水属性であるため《潜海戦術ⅠⅠ》はおろか、もしも《水舞台》を引いてしまえば完全に死に札。

あるいはモンスターで展開できたとしても、その効果こそ止められないにせよ、シンセシスはモンスター効果では除去できなくなってしまう。

シャルクのデッキはとにかくモンスターを展開し、エクシーズモンスターを並べ、そのエクシーズで除去や無効化を行い、雪崩れ込むように攻めていくスタイル。故に展開時にモンスター効果を使えば、シンセシスは除去も無効化も受け付けない3200の壁となる。

「あたしのターン……ドロロー！」

「さあ、キミの組み立てたプランを見せてもらおうか。運命のドロ―
なんてものも乗り越え続けた……キミだけの逆転計画を！」

「あたしは永続魔法《白の救済》ホワイト・サルベージの効果発動！」

「……《シンセシス・ミュートリアス》の効果はまだ使わない」

少し落胆するように、しかし同時に「それもそうか」と言うように、
シャルクは視点を手札まで下げた。

今引いたこの1枚を最大まで活かせるカードは――。

「なら墓地の《サイレント・アングラー》を手札に戻して、そのまま召喚。さらに自分の場に水属性モンスターが存在することで、手札の《アビス・シャーク》を特殊召喚し、効果発動！ デッキからレベル3〜5の魚族モンスターをサーチする！」

「では《シンセシス・ミュートリアス》の効果を発動。相手がカード効果を発動した時、このモンスターにそのカードと同じ種類のカード効果への耐性を付与する。今キミが発動したのはモンスター効果。よって《シンセシス・ミュートリアス》は相手のモンスター効果を受けない！」

シャルクのデュエルを観察してきたドクターは、彼女のウィークポイントを明確に捉えていた。

彼女のデッキは慢性的な高打点不足に悩まされ続けていた。フィールド魔法の効果でようやく3000ラインに手が届くこの状況でも、相手の攻撃力は3200であるため手が届く範囲を超えている。

そして彼女がその打点を補う手段の多くは相手へのデバフ効果。直接的な破壊効果は《ヴァリアント・シャーク・ランサー》くらいで、それを見越していたからこそドクターは永続魔法を見逃してモンスター効果への耐性をつけたのだろう。

「そうはさせない！ 畏カード《神の氷結》を発動！ あたしの場に水属性モンスターが2体以上存在することで、あなたの《シンセシス・ミュートリアス》の攻撃と効果を封じる！」

「畏カードによる耐性の無効化……狙いは《ヴァリアント・シャーク・ランサー》デスか……！」

「……いいや。あなたのミュートリアへの愛情や信頼は間違いなく『本物』だった。カードたちもそれに応えようと必死に戦ってるのがわかるくらい。だから、ミュートリアを押し退けてあなただけを叩くような真似はしないよ。あなたとミュートリア、両方をまとめて全力で叩き潰す！それがあたしなりの、あなたとあなたのデッキへの礼儀だと思うから！」

シャルクはニヤリと口元を歪める。

そして、そんな彼女を見たLiveチャットも『場にはレベル4が1体とレベル5が2体……ランク5?』『ヴァリアント以外にこの状況をひっくり返せるカードなんてあるか?』『いや、もしかしてあのレベル5ってカッターとかランタンみたいなタイプか?』『あー、確かにもう終盤だわ』『どういうこと?』と盛り上がりを見せている。

「あたしはアビスの効果で《クリスタル・シャーク》を手札に加え、効果発動！互いの場に存在する水属性から1体を選択し、そのモンスターへの攻撃力を半減させてこの子を特殊召喚する！」

「シンセシスの攻撃力が、1600に……！」

「そしてアビスとクリスタルはナンバーズを召喚する際、レベルを3か4としても扱う！」

「……なるほど。やはり君は、その相棒が一番よく似合う。……いいだろう！その最大限の賛美、この身で受け止めようか！さあ……たのしもうね!!」

シャルクの頭上に構築されるオーバーレイネットワーク。

そこに飛び込む3つのサメの魂。

「エクシース召喚！狡猾にして獰猛なる脅威の牙！《No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク》！」

現れ出ずる彼女のエースモンスターに、ドクターは言い知れぬ憧憬と敬意のようなものを胸に抱いていた。

これが、ドクターの求めていたもの。プレイヤーとカードの信頼が生み出した「成果」であり、彼女がこのカードのために用意した無数のプランを、研究し構築したデッキだからこそ最大の輝きを放つシャークドレイク。

そして彼女の指が指し示す先には、自分とミュートリア。そして、これから辿るべき道筋のようにも思えた。

「バトル！ シャークドレイクで《シンセシス・ミュートリアス》を攻撃！」

「そして同時に、君のナンバーズが与えるダメージは……」

「そう、《アビス・シャーク》のサーチ効果が適用されたターンの最初の一撃に限り、相手へのダメージを2倍にする。これで終わりだ！ 必殺の……デプス、バイトおツ!!」

この一撃が、その道を辿るための唯一の切符なら。

「……やはり、キミは最高の——」

ドクター：LP1600↓0

デツキと向き合う

「いやあ、さすがに強い。この大会において最初の難関であるサーマルジムを抜けた実力は確かだ。それでこそ理想の研究対象というものだね」

「あなたは……そんなにデツキを愛していて、そんなにデュエルを愛していて、どうして凸げき団に？」

「別に凸げき団にこだわっているつもりはない。ただ、ワタシの研究を否定したやつらを見返したかっただけデス。そんなワタシに凸げき団は居場所をくれたし、最近ついた凸げき団の協力者はワタシの研究費用も出してくれた」

「凸げき団の協力者？」

「まあ、そんなことは今のキミには関係のない話さ。さあ、この門をくぐり、次のジムに向かうといい。次の活躍も楽しみに見させてもらう」

ドクターが道を開け、さっさと行け、と言うようにシャルクに手を振った。

きつと、彼の瞳には彼にしか見えない何かが映っているのだろう。生命をも冒流する究極生命体を従える彼の瞳に、すでに正気などはあるはずもない。それでも最後の一瞬、彼の狂気の瞳が捉えたものは迫り来るシャークドレイクではなく、彼を庇うように触手を伸ばす《シンセシス・ミュートリアス》であった。

冒流者^{ドクター}などと皮肉る彼の言葉にはいくらほどの真実を孕んだものか。彼の追いかけて続けた研究テーマは「生命の冒流」……即ち『デュエルモンスターズがカードになることの原理と弊害の解明』である。「シャルク。キミは本当に最高の研究対象だ。あんなにもデュエルモンスターズに愛されていないながら、シャークドレイクの「声」しか聞こえていない。あれほど彼女を溺愛している《バハムート・シャーク》の声すらも届いていないとは、いったいどういことなんデスカね……？」

デュエルモンスターズの「声」とは、シャルクのシャークドレイク

のように、デュエリストと強固な絆で結ばれたモンスターが発する「思念」であり、デュエリストは「モンスターとの絆」という通信回線を介してこれを聞くことができる。

しかし、シャルクは自らのデツキを強く信頼し、デツキたちも彼女に応えようとしている。なのに、彼女はとうとうわけかシャークドレイクの声しか聞こえないでいる。それはつまり、一般的に知られる「声」を聴く条件が単純な「絆」だけでない「何か」を含んでいることになる。

その「何か」がなんなのかは未だにわからないままだが、それを欠如してなおもデツキと心を通わせるシャルクの存在は、ドクターの興味をあまりにも強く刺激した。

「デュエリストがデュエルモンスターズの「声」を聴く「器官」……それがキミに欠如している「何か」だとするのなら、キミはワタシの研究の一端を担う重要な鍵にもなるはずデス。どうか、ご武運を」



「ここがスモッグタウン……。かつて、この地方の技術発展に最も貢献した街、だっけ……」

うつすらと暗む空を見上げると、シャルクは周囲の街の様子を見回した。こんなにも薄暗い空なのに、街は意外なほど活気に溢れていて、あっちにもこっちにも魅力的な出店が立ち並んでいる。

小腹も空き、軽く何かつまもうかと手をつける店を探そうとしたところで、不意に背後から声をかけられた。

「最近の子にしては随分と勉強熱心なコじゃない！ アタシ感心しちゃうわ！」

「あなたは……スモッグジムのジムリーダー？」

「アタシのことも知ってるのね！ そう、アタシはこの街のジムリーダーをしているカオル！ 親しみを込めてカオルちゃんと呼んでちょうだい！」

澆刺とした語気と明るい笑顔はまさしく快活な女性のそれである

が、目の前のカオルという人物はどこからどう観察しても健康的に引き締まった筋肉を誇る成人男性。別に言葉遣いに性差など関係ないと知識では知っていたシャルクであったが、さすがに直面してみると違和感はすごかった。

まして、彼(?)はジムリーダーとしての活躍が他の地方よりもメディアへの露出が多い「画面の向こうの人」でもある。そんな人物がこうも堂々と女言葉を口にするのは、シンプルな驚愕をシャルクに与えた。

「カ、カオルちゃん……は、男の人？ 女の人？」

「あらー！ アナタはアタシのことをちゃんと知ろうとしてくれるのね！ だいたいの子の第一声は「男なのに女言葉なんて変なの」って感じなのよ？ 失礼しちゃう！ いいわ、あなたのその素敵な好奇心に応じて教えちゃう！ アタシは体こそ見ての通り男だけど、女性のように柔らかく穏やかなハートを持っているの！ 覚えておいて！」

「あ、あぁー……。心が女性で、体が男性ってこと……？」

「そうね！ 女性のような柔らかさ、穏やかさ、繊細さ……そういうハートってとても大切だと思うの！ お嬢ちゃんにはちよつと難しかったかしら？」

「あー……いや、なんとなくわかったような……？ あたしも、紳士的な男の人っていいなって思うし、そういう人の辛抱強さみたいなのところはリスpektしたいなって思うし」

特に彼女のデュエルは、他の多くのデュエリストがやるようなド派手な除去効果や高打点で魅せるデュエルとは真逆の、計算高くも地道にアドバンテージを稼ぎながら徐々に獲物を追い込んでいく戦いだ。

ともすれば執拗で陰湿ともとれる戦略でもあるが、彼女は勝利のためならその戦略を躊躇なく選んできた。対戦相手はもちろん、ギャラリィからの批判も受けながら、ド派手な戦術を全て躲し、水面下で確実に勝利へ駒を進める彼女に最も必要なのは、間違いなく「紳士のごとき辛抱強さ」であることは間違いない。

「いいじゃない、辛抱強さ！ 心に紳士を宿すデュエリスト……なん

て、野暮なことを言っちゃったわね。ごめんなさい、レディ？」

「あう……れ、レディはさすがにちよつと照れるような……。そうだし、そういえばカオルちゃんもスモッグタウン暮らしたんだよね。こんなに空が暗いのに、街はみんな明るくて……。すつごくいい街だね！」

「ええ、ここはアタシの自慢の街よ。昔、この地方が技術の発展のために生み出した大量の光化学スモッグがこの街の空を覆っちゃってね……。それが街の名前にもなつて、きつと向こう何百年はこの街の空はこんな感じだけど……。それでも、その薄暗さを撥ね退けるくらいこの街の人はみんな明るくて優しいわ！ ぜひ楽しんでいってちょうだい！」

街の名前。そういえば、とカオルと別れた後、シャルクはデュエルデイスクとあるカテゴリのカードを検索した。カードの名前は「サーマル・ジエネクス」……。サーマルタウンと同じ名前を冠するカードであるが、ジエネクスは「発電」や「資源」に関する名前を持つことと有名なカテゴリである。

そしてここまでシャルクが通ってきた街は「ウインドミルタウン」「クーラントタウン」「サーマルタウン」そして「スモッグタウン」の四つ。風車、冷却器、火力発電……。大気汚染物質。おそらくは、この地方自体がよその地方よりも科学の発展に精力的なことも一因なのだろう。だとすると――、

「二応、スモッグジムは6番目のジムだから、次に目指すべきなのはここを南東に下つた先の……。ギアタウン、かあ」

歯車の名を持つ次の街には、今から向かつて最短で4時間は歩き続けなければならない。ようやくワイルドエリアの砂嵐を抜けて到着したのだから、今日はこの街のカードショップに宿泊しようと、チエックインに向かった。

「さーて、さつそくデッキ調整といこっかー」

カードショップの宿泊ルームに入ると、さつそくLIVEチャットを繋いでデッキと大会中に入手したストレージカードをテーブルに開けた。

シャルクのデッキは《カッター・シャーク》や《超古新海王シーラカンス》をはじめとしてデッキに干渉する効果が多いため、同じカードを複数枚積むよりも対応範囲を広げるために採用するカードの種類を広げている。

元々は必要なカードを積む方向で安定させていたが、セレブとの出会で「デッキとの信頼がドローに影響する」ということを学び、そして蛮族とのデュエルで「圧倒的なドロー力を持つことでハイランダー構築の方が対応できる幅が広い」ということを思い知らされた。

最初は理解できなかった蛮族のデッキ構築も、今となれば「性質の異なるカテゴリを兼ね合わせることで戦術の幅を持たせる」ということに繋がるのではないかと、自らを納得させようと試みたが、どうしても彼女の中の常識的な部分が「いやそうはならんでしょ」とストップをかけてくる。

「まず展開の起点となる《カッター・シャーク》は抜けないし、この子と相性のいい《アビス・シャーク》と《ランタン・シャーク》は絶対に入れておきたいよね」

シャルクのエースモンスターである《No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク》は、デバフと追撃効果によって甚大な戦闘ダメージを叩き込むことができる強力なモンスターではあるが、召喚にはレベル4モンスターを三体も必要とするため、どうしても「重い」という評価を覆せない。

そのためデュエルの序盤に《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》を墓地に落としておいて、《発条空母ゼンマイティ》で追加戦力用の《ゼンマイシャーク》を用意しながらランクアップの準備をする、というのが今までの彼女のベースとなる動きであったが……。

Liveチャットの中でも『カッターとランタンに加えてアビスとクリスタルも入ったし、レベル変動が楽になったな』と言われていた通り、これまでランク3〜5の素材として柔軟な仕事をこなしてきた《ゼンマイシャーク》は、《アビス・シャーク》と《クリスタル・シャーク》の加入によって席を失った。

無論《ゼンマイシャーク》にしかできない仕事も存在する。《カッ

ター・シャーク』と《ランタン・シャーク》はレベル3・5として扱う場合は水属性しかエクシードズ召喚できないし、《アビス・シャーク》と《クリスタル・シャーク》をレベル3・4として扱う場合ナンバーズしか出せない。

そのどちらでもない《ブラック・レイ・ランサー》を使おうとするなら、《ゼンマイシャーク》のこなす仕事はかなり重要性は高い。しかし、それでも……。

「旨味がないわけじゃないけど、薄い……」

現状、このデッキには既に十分すぎるほどレベル変動ができるカードが存在し、即座に起点になれるカッターやランタン、サーチ効果を持つアビス、エクシードズを挟めば何度でも復活するクリスタルたちと違い、ゼンマイシャークはこのデッキではレベル変動「しか」できない。

確かに《ブラック・レイ・ランサー》の素材になるレベル4という点ではとても重要なカードではあるが、そのために用いるのなら《白の水鏡》と《海晶乙女コーラルアネモネ》を共有でき、なおかつ《浮上》にも対応する《トライポッド・フィッシュ》もまた同じ仕事をこなせるだろう。

レベル5として扱うのなら《トライポッド・フィッシュ》にはできない仕事とも言えるかもしれないが、彼女のデッキに「水属性でなく」「ナンバーズでない」「ランク5」のモンスターは《シャーク・フォートレス》のみ。だが《シャーク・フォートレス》の効果は彼女のエースモンスターにアンマッチであるため既にストレージ行きが決定済み。

「トライポッドならハンマーと併用して《ブラック・レイ・ランサー》の素材になった後、能動的に墓地に送って蘇生効果がそのままレベル変動に繋がる……。《ゼンマイシャーク》は《シャーク・サツカー》と一緒に《ブラック・レイ・ランサー》になれるけど、それはトライポッドも同じ、か……」

カッターの効果でデッキから直接呼び出せばトライポッドとは棲み分けができるだろう。こちらはランク4の、あちらはランク3の素

材として活躍できる。だが、そうになると競争相手は《トライポッド・フィッシュ》ではなくなくなってしまふ。

そもそも《カッター・シャーク》のデメリットである「リクルートしたモンスターは効果を発動できない」という点は《ゼンマイシャーク》の強みをつつりと打ち消してしまっているため、どうせ呼ぶなら墓地効果を持つ《キラール・ラブカ》《妖海魚》《ドリーフ》《ゲイザー・シャーク》あたりの方が有用なのは間違いない。

また、墓地効果以外にもエクシーズ素材になることで効果を発揮する《ライトハンド・シャーク》《レフトハンド・シャーク》なども、《ゼンマイシャーク》を選ぶ理由を打ち消してしまっている。

「……効果が無効になってもレベル4でいられること、レベル5にもなれること、ゼンマイテイでリクルートできること。この3つが《トライポッド・フィッシュ》と差別化できるポイント。でも1つめは元々のレベルが4ならなんでもいいし、2つめを補うカードも多い。つまり実質《ゼンマイシャーク》はゼンマイテイとセットで考えなきゃいけない」

ゼンマイテイを採用する理由は、ゼンマイシャークのリクルートを除くと大きく2つ。水属性のランク3として《エクシーズ・リバイブ・スプラッシュ》の墓地効果でシャークドレイクを特殊召喚できることと、シンプルに層の薄い「レベル3×2で出る水属性ランク3」だということ。

これらはどちらもこのデッキの中核となるギミックであり、ゼンマイテイに必要な性は決して低いものではない。ゼンマイテイの有用性が上がれば、ゼンマイテイのオーバーレイユニットを積極的に墓地に送りながらデッキから呼び出せる「レベル3・4・5として扱うカード」として《ゼンマイシャーク》の評価も相対的に上昇する。

実際、《カッター・シャーク》に反応する《シャーク・サッカー》が手札にいれば、戦略的にも選択肢が増える。カッターでサッカーを選択してデッキからレベル3を呼び、ランク3のゼンマイテイで《ゼンマイシャーク》を呼んでカッターと一緒にランク4にできる。これがバハムートならさらに展開することも可能だ。

「うん、これまで通り《ゼンマイシヤーク》はピン挿しておこう。あとシヤークドレイクと相性いいカードもほしいよね。《ダブルフィン・シヤーク》を使うと水属性しか出せなくなるデメリットがあるから、最近はおっぱら《エクシーズ・リモーラ》に頼ってるけど」

もしも相手の盤面に関係なく、特にこれといった条件みたいなものもなく、相手の場に送り付けることができ、攻撃力1000以下の、できることなら《ダブルフィン・シヤーク》のデメリットも踏み倒せる水属性のモンスターがいれば迷わず採用するのだが、そんな都合のいいモンスターなど、そうそういるわけがない。

Liveチャットの誰もがそう思っていた。というか、シャルクすらもそう考えていた。

「……ん？」

しかし、無造作に散らばったカードの中から、シャルクは一枚のカードを拾い上げた。

そのカードは決して希少なカードではない。カードとして刷られた「レプリカ」としてはストレージ行き確定。このカードのようにワイルドエリアで釣り上げた「オリジナル」だとしても、多くの場合は「ハズレ」扱いされ湖へとリリースされてしまうカードだ。

シャルクにとっても、これまではそうだった。特殊召喚時に発生するデメリットが、同時に得られるメリットよりも遥かに大きい。だからこそ、彼女はここに至るまでそのカードにさほど強い魅力を感じてはいなかった。

だが、それは今こうしてデッキと向き合い、彼女の中のデッキコンセプトが固まっていくにつれて覆されていった。このカードができること……このカードにしかできないことがある。

相手に送り付けるのなら、あらゆる耐性を踏み倒せる《海亀壊獣ガメシエル》の方が強いのではないのかというコメントもちらりと視界の端に映ったが、とんでもない。そうではない、そうではないのだ。

このカードなら「相手の場にモンスターがいなくてもいい」「リリートを封印されていてもいい」何より「ガメシエルよりも攻撃力が低い」というのがとてもいい。シャルクは思わず拳をぐつと握った。

「これ、場合によっては後攻ワンキルいけるかも……?」

このデツキだから成し遂げられる。他のデツキでは真似することのできない「たった一つの冴えたワンキル」の道筋が出来上がった。さすがに狙ってやろうとは思わないが、それでも「手札がよければワンキルもできる」というのは大雑把に「強いデツキ」としての指標のひとつになる。

これまでは「大量のモンスターをずらりと並べて一斉攻撃」がシャルクの基本戦術であった。だが、これからはそれに加えて「シャークドレイクだけでゲームエンドまでもっていく」という戦術も不可能ではなくなったのだ。これは決して小さくない進歩であろう。

Liveチャットでも『だからシャルちゃんにワンキルルートを与えるなどあれほど』『ここまでワンキルルートがないことが救いだつたのに』『またシャルちゃんが殺意を加速させてる』と概ね好意的な意見が流れている。

「よし、じゃあ後はこれとこれと……いや、これは抜いても大丈夫かな。それよりこつちで制限をかけて、これでサポートして……バトル中の駆け引きが手薄になるなあ。これ入れてみようか。そうなるならサーチとドローに割ける枚数は……このくらいかな。主に妨害はガイオアビスと《深淵に潜む者》がやってくれるから、展開札を増やして……」

デツキの方向性が固まっていくと、そこからは早かった。今までよりも対応する幅は狭まったものの、動きが遥かに加速した。これならば1ターン目で何もできず無意味にカードを伏せて沈黙、などということにはなるまい。

試しに軽くシャツフルして、トップから5枚を引いて確認する。にんまりと笑顔を湛えると、シャルクはその手札をLIVEカメラに見せつけた。

『シャークドレイク後攻ワンキル』の完成だね」

皇を統べる力

翌日。スモッグタウンの宿泊施設を出たシャルクは早々に次の目的地であるギアタウンに向かっていた。

道中では他のLIVEデュエリストや凸げき団に次々とデュエルを仕掛けられたシャルクであったが――、

『ガイオアビスでダイレクトアタック！ この時《深淵に潜む者》の効果であなたは墓地の《ネクロガードナー》を使用できない！』

『墓地の《エクシース・リバイブ・スプラッシュ》発動！ 《深淵に潜む者》からランクアップした《ヴァリアント・シャーク・ランサー》で追撃！』

『スパイダーシャークで攻撃！ この時、相手モンスター全ての攻撃力は1000ポイントダウン！ やっちやえ、スパイダーシャーク！』

それらを全て蹴散らし、屍の山を築き上げた彼女は、その背後に近づく気配に気づくと、サメの牙のように鋭い視線をその気配に向けた。

『見つけたぞ、皇を統べる者の器』

「……だれ？」

振り向いた先に姿はなく、しかしこの耳に届く空と大地を揺るがすような巨大な気配を孕んだ声は、ギアタウンに繋がるこの林道で鳥や虫たちを怯えさせることさえしていない。

つまり――この声を聞いているのは間違いなく自分だけなのだと知ると、シャルクは静かにLIVEチャットを繋いだ。

「あたしはシャルク。……あなたは？」

『名など無い。私は決して満たされることのない魂たちを乗せた箱舟の守護者……方舟に乗った魂たちが天へと運ばれるその時まで死ぬことを許されない不死身の槍術士。故に、私が守護する魂たちは私のことをこう謳う。――Dark Knight、と』

「ダークナイト……あなたはあたしを『皇を統べる者の器』って言ったよね、それはどういうこと？」

『シャルク……君は私の信頼する多くの眷属たちに愛され、そして選ばれた。君は……古の神官に選ばれなかった『皇』を統べるに相応しい者なのだ』

古の神官。選ばれなかった皇。それらはシャルクの与り知らぬ言葉ばかりであったが、ひとつだけ気にかかるものがあつた。

「あなたの信頼する眷属って……？」

『私はこの星の生命を生かし、そして脅かすことで生命のバランスを調整する役割を与えられている。そして、それを一度に可能とするフィールドとは『海』において他はない。故に、私は海の覇者である『サメ』を信頼し、己の眷属としている。シャルク、君はそのサメたちを心から愛し——そして彼らに愛された。私の信用を勝ち取って余りあるほど』

サメを従えるもの。生命のバランスを保つもの。満たされぬ魂を乗せた方舟を守護するもの。そして——『皇を統べる者』に忠誠を誓う使者。

ダークナイトは己の存在意義を明らかにしながらも、その姿を一向に見せようとしない。

「じゃあ、あなたはサメたちの王さまってこと？」

『そのように捉えることも間違いではない。だが……如何に君が私の眷属が選んだ使い手だとしても、『皇』を統べる者と認めるにはその実力を私のこの目で見極める必要がある』

「なるほど……いいよ、あたしの力を示すことがサメたちの選択が間違いでないことを証明することだとしたら、あたしは絶対に負けない……サメたちの想いに応えてみせる！ さあ、姿を見せなよ、ダークナイト！」

シャルクがそう言うと、『よかろう』と言ってその姿を露わにしたのは——山ひとつ押し潰すほど巨大な純白の方舟。その威容に、シャルクは思わず固唾をのみ込んだ。

だが震える体を『武者震いだ』と強引に口元を吊り上げ、そして叫ぶ。

「オープンチャンネル！ LIVEデュエル、オンエアー！」

『シャルク……君の高潔なる魂が、この棺の方舟に収められた無数の魂を守護する私を従えるに相応しいか——いざ証明してみせよ！』

方舟の守護者のダークナイトが勝負をしかけてきた！

『さて……君が皇を統べる者であるのなら私も手加減はできない。先手はいたたく、私のターン！』

(この圧倒的な気迫……様子見をしながら勝てる相手じゃない！長引けば長引くだけあたしが不利……だとすれば、あたしの狙うべき動きは……！)

D—LIVEの配信モードをオープンにしたことで、チャンネル登録者以外の人物でもこのデュエルを観戦可能な状態——つまり「公式戦」となる。

No. 101……100を超える前代未聞のナンバーズ。少なくとも、この勝負の結果がどうあれその存在は間違いなく自分一人が占有しているような情報ではないと判断したシャルクによる、退路を断ったデュエルモンスターズの常識に対する警鐘。

前触れなくいきなりデュエルが始まったことに対しては特に驚く様子もないリスナーたちだったが、さすがに「No. 101」を名乗る存在と、身を押し潰すかのような威圧感を放つ威容に驚く声は多かった。

『まずは手札から《電気海月—ファイサリア》を召喚。デッキから《海》を墓地に送り、手札から水属性モンスターを特殊召喚する。私はデッキから《海》として扱う《伝説の都アトランティス》を墓地に送り、《海竜神—リバイアサン》を守備表示で特殊召喚』

「リバイアサン……！」

『ふむ、その反応を見るにリバイアサンを知っているようだな。では説明は必要あるまい。デッキから《シーステルス・アタック潜海奇襲》を手札に加え、魔法・罫ゾーンにカードを2枚セット。さらに永続魔法《シーステルス潜海奇襲II》を発動してターンを終了する』

見かけは静かな立ち上がり。だが水属性使いとして、何より同じくリバイアサンを従える者として、あのカードの脅威性とその後ろに控えた3枚のカードの内、実質的に見えている2枚の「シーステルス」も

含めれば、シャルクの手は小さく震えた。

それは一部のリスナーも同じ。『これ、シャルちゃんじやなきや既に詰んでるだろ』『動けねえ……』『えげつない制圧力してる』と、水属性以外の反抗を許さないリバイアサンの制圧能力に慄いている。

「あたしのターン、ドロー！」

「フェイズ移行時、伏せていた《シーステルス・アタック潜海奇襲》を発動。墓地から「海」として扱う《伝説の都アトランテイス》を発動。これにより君は水属性以外のモンスターを1体しか維持できず、魔法・モンスター効果が発動すればそれを無効にしてファイサリアの攻守が600アップする」（召喚制限は無視できるとして……問題はファイサリアの妨害。アトランテイスを割ろうにも《シーステルス・アタック潜海奇襲》の破壊耐性付与効果がある……。デッキのアーキタイプはロックビートと見ていいはず。ならやっぱり長引けば長引いただけ向こうが有利になる！　ここは速攻を仕掛けるしかない！）

手札を確認する。ファイサリアのタイミング次第ではあるが——勝機はある。

「あたしは魔法カード《ツイインツイスター》を発動！　手札の《エアールピード》をコストに、そっちの《シーステルス・アタック潜海奇襲》と《伝説の都アトランテイス》を同時破壊！」

「それは通せないな。ファイサリアの効果発動。相手の発動した魔法カードの効果を無効にし、攻守を600アップする」

「アトランテイスも合わせて攻撃力2200……でもこれで見えてる妨害はバツク耐性の《シーステルス・アタック潜海奇襲》だけ。あたしは《妖海魚デッドリーフ》を召喚して効果発動。何かある？」

「いいや。続けて構わないよ」

召喚だけでなく特殊召喚時にも発動するとはいえ、デッドリーフのような召喚時に発動するモンスター効果は、通常召喚権を行使して発動した以上、そこを止めればそのターン中には2回目のチャンスがほとんどやってこない。妨害側からすればいわゆる「止め得」の効果だ。

ダークナイトのバツクには自軍の水属性に対して水属性以外からの対象効果を受けない《シーステルス潜海奇襲II》と、任意のタイミングでリバイ

アサンを一時的に除外して魔法・罫を破壊から防ぐ《シリーズ・アタック潜海奇襲》の他に、あと1枚の伏せカードがある。

ここで止めないということは、モンスター効果に対して無効を叩きつけるような妨害札ではないと判断すべきか。あるいは、ここを見逃してこちらに無効札が無いと誤認させ、致命的なタイミングを見計らっているのか。シャルクは積極的に動きながらも、その1枚に対して警戒を解かなかった。

「デッキから《クリスタル・シャーク》を墓地に送る」

「なるほど。癖はあるが強力な一手だ。しかし、そこでは止まるまい」「もちろん。手札から《アビス・シャーク》の効果発動。自分の場に水属性しかいない時、手札から特殊召喚してデッキからレベル3〜5の魚族をサーチする。特殊召喚からサーチまでが一連の効果だから、サーチごと無効にしたいなら手札で発動したこのタイミングだけだよ」

「構わない。好きに動くといい」

好きに動け、という言い方にシャルクは引っかけかりを覚えた。単につっけんどんなわけではない。好きに「動け」ということは、少なくともこのメインフェイズ中に限れば「動き」を止める気がないのかもしれない、と判断したシャルクは、そこからまくしたてるように動く。「じゃあ《アビス・シャーク》を特殊召喚してデッキから《サイレント・ウォビー》を手札に加える。続いて場の2体をリンクマーカーにセット！ 召喚条件は水属性モンスター2体！ リンク召喚！ リンク2、《アビス・オーパー》！」

「リンクモンスターか」

「《アビス・オーパー》はリンク召喚成功時、そのリンク先に手札の水属性を特殊召喚できる！ あたしはオーパーの左下のリンク先に《超古深海王シーラカンス》を特殊召喚し、効果発動！ 手札の《神の水結》をコストに、デッキから《ライトハンド・シャーク》2体と《レフトハンド・シャーク》《深海の白タウナギ》を特殊召喚！」

「さすがに皇を統べる者の資質を持つ少女……！ 小粒とはいえ、これほどの輩を統べる深海王をこころも容易く従えるとは……！」

まだ後攻1ターン目とはいえ、普段よりも遥かにハイペースなシャルクに対して感服の意を示すダークナイトではあったが、それに反してチャット欄でのコメントは『ペース早くない?』『焦ってる感じだな』『相手のプレッシャーに呑まれないギリギリで耐えてる』『まさかワンキル狙い?』と様々であった。

「続いてシーラカンスと《ライトハンド・シャーク》をリンクマーカーにセット! 召喚条件は水属性モンスター2体! リンク2、《海晶乙女マリリンセスコーラルアネモネ》を《アビス・オーパー》の左下のリンク先にリンク召喚!」

「2回目のリンク召喚……。だがあのフィールド……。ここでは止まるまい」

「さらにレベル3の《レフトハンド・シャーク》にレベル4の《深海の白タウナギ》をチューニング! レベル7、《白鬪気一角》を《アビス・オーパー》の右下のリンク先にシンクロ召喚! シンクロ召喚時の効果で墓地の《超古深海王シーラカンス》を蘇生するよ!」

「またしても深海王……。しかし、既に手札は先ほど《アビス・シャーク》でわざわざサーチした《サイレント・ウォビー》1枚……。いや、墓地の《デッドリーフ》で確保するつもりか!」

「あ、バレた? でもその前に、フィールドにレベル5以上の水属性が特殊召喚されたことで墓地の《神の氷結》がセットされるよ! 続いて墓地の《デッドリーフ》の効果発動! 墓地から《アビス・シャーク》《ライトハンド・シャーク》《深海の白タウナギ》をデッキに戻して1枚ドロー!」

シンクロ召喚された白鬪気一角ホワイトオーラ・モノケロスの効果によつて蘇生したシーラカンスは、このターンの攻撃こそ封じられるものの、本命であるモンスター効果に制限はない。

「これでコストは確保できた。手札の《トライポッド・フィッシュ》を墓地に送り、デッキから《ランタン・シャーク》を特殊召喚。そしてレベル7の《白鬪気一角》と《超古深海王シーラカンス》をオーパーレイ! 2体のモンスターでオーパーレイネットワークを構築!

《アビス・オーパー》の右下のリンク先に《水精鱗マーメイル—ガイオアビス》を

エクシーズ召喚！」

「リンク2を2体だけでなく、リンク7のエクシーズモンスター……それに場にはまだレベル4のモンスターが2体……！」

「それだけじゃない！ 自分の場に《ライトハンド・シャーク》がいる時、墓地の《レフトハンド・シャーク》はレベル4になって復活する！ いくよ……！ レベル4のライト、レフト、ランタンでオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ リンク4、《No. 32海咬龍シャーク・ドレイク》！」

「シャーク、ドレイク……！」

「仕上げだよ。コーラルアネモネの効果発動！ 墓地の《トライポッド・フィッシュ》をアネモネのリンク先に蘇生！ 墓地から復活したトライポッドはレベル4になる！ さらに墓地の《クリスタル・シャーク》の効果！ トライポッドの攻撃力を半減させて復活！ レベル4扱いのこの2体でオーバーレイ！ リンク4、《No. 37希望竜スパイダー・シャーク》！」

対峙するダークナイトだけではない。

その1ターンを見守っていた誰もが息を呑んだ。

2体のリンクモンスターまでなら、まだ見慣れた光景だっただろう。贅沢にもシンクロモンスターと最上級モンスターを素材にしたリンク7のエクシーズモンスター。極めつけは2体のナンバース。戦闘・効果のどちらにおいても破壊耐性を持つシャークドレイクと、シャークドレイクの連撃を致命的なものに換えるスパイダーシャーク。

5体ものエクストラモンスターたちが、ダークナイトの放つ威圧的なプレッシャーから彼女を庇うかのように並び立っていた。

「このターンで仕留める！ あたしは手札の《サイレント・ウオビー》の効果発動！ このカードを相手の場に特殊召喚し、あなたは1枚ドロウ、あたしはライフを2000回復する！」

「相手にドロウさせた上でモンスターを追加……シャークドレイクの的にするのが狙いか！ さすがにそれは通せないな！ 罠カード《暗

岩の海竜神^{リバイブサン}》を発動！ 場に存在する「海」扱いの《潜海奇襲II》^{シーステルス}を墓地に送り、デツキからテキストに「海」が記されたモンスター1体とレベル6以下の水属性の通常モンスターを可能な限り特殊召喚する！」

「《サイレント・ウオビー》が出る前にメインモンスターゾーンを無理やり埋めてきた……！」

「デツキから《海竜―ダイダロス》、《ジェノサイドキングサーモン》、《海月―ジェリーフィッシュ》を守備表示で特殊召喚する！」

（まだ攻撃表示モンスターにはフィサリアがいるけど……未だに「海」は健在。攻撃しても《潜海奇襲》^{シーステルス・アタック}で逃げられる……！ やっぱり、最初の《ツインツイスター》を無効にされたのが痛い……！）

とはいえ、何もできないわけではない。

「バトル！ シャークドレイクでフィサリアを攻撃！ 攻撃宣言時にスパイダーシャークの効果でオーバーレイユニットを1つ取り除いて相手モンスターの攻撃力を全て1000下げる！」

「永続罠《潜海奇襲》^{シーステルス・アタック}の効果発動。《電気海月―フィサリア》をゲームから除外し、このターン私の場に表側表示で存在する魔法・罠カードは効果破壊されない。そしてモンスターの数が変動したことで巻き戻しが発生する！」

「ならジェリーフィッシュを攻撃！ 戦闘破壊後、シャークドレイクのオーバーレイユニットを1つ消費してジェリーフィッシュの攻撃力を1000下げた状態であなたのフィールドに攻撃表示で特殊召喚し、もう一度攻撃する！」

「くっ……うおおおおあっ!!」

ダークナイト：LP8000↓5400

「《アビス・シャーク》のダメージ2倍は最初の戦闘でダメージが発生しなければ意味がない……。仕方ない、続けていくよ！ 攻撃力1700のオーバーで守備力1200のキングサーモンを、攻撃力2200のアネモネで守備力1700のダイダロス^{リバイブサン}を攻撃！」

「くっ、このままでは……ッ！」

「このターンで仕留める……ッ！ スパイダーシャークでリバイアサンを攻撃！」

「いいや、これ以上はさせない！ その攻撃宣言時、手札の《デス・クラーケン》の効果発動！ リバイアサンとガイオアビスを対象として特殊召喚し、リバイアサンを手札に戻してガイオアビスを破壊する！」

「特殊召喚から破壊・バウンスが一連の処理だから今このタイミングでガイオアビスの効果をチェーン発動しても後から出てくるせいで妨害できないし、スパイダーで追撃しようにも相手のモンスターの総数が一時的に変化したせいで巻き戻しが発生して攻撃宣言をやり直す必要があるから《デス・クラーケン》の効果で攻撃が止まっちゃう……！」

まるで津波のように猛威を振るうシャルクの猛攻を紙一重でかわしたダークナイトの手際に、LIVEチャットも『シャルちゃんの怒涛の連撃をかわしきった!?!』『あれだけの展開を許しながらもあの余裕、次のターンが恐ろしいな』『しかもあれほどのプレッシャーの中で、シャルちゃんの精神力が持つのか?』とざわつきを隠せない。

そして事実、シャルクにとって今の攻撃を受けきられたのは手痛かった。ダークナイトの放つ圧倒的な威圧感の前に、シャルク精神力は既に摩耗しきっていた。このままでは次のターンまで持つとは断言しきれない。相手がターンを長引かせるだけで、自分の敗北がチラつくのだ。

「あたしはバトルを終了し、メイン2に移行！ 墓地の《エアール・トルピード》の効果が発動し、このカードと墓地のガイオアビスを除外して2枚ドロ―！ バックにカードを2枚セットして、ターンエンド！」

「このエンドフェイズに《シーステルス・アタック潜海奇襲》によって効果処理が確定していた除外状態の《電気海月―フィサリア》が私のフィールドに戻る」

シャルクの予想では、ダークナイトのデッキは「海」として扱う《伝説の都アトランティス》を軸としたロックビート。通常ならば水属性

以外に対して強力な制圧力を誇るリバイアサンを早々に設置し、二種類のシーステルスによって盤面をより強固にしていく戦術をとる。

つまりは、守ることに関しては「海」ギミックで完成されているということ。となると、問題はダークナイトが使うナンバーズ。よほど攻撃的な効果を持つのか、それとも……。

「では私のターン。……さすがは皇を統べるに相応しい器。たった1ターンで私の大量展開をここまで瓦解させた者は君が初めてだ。……しかし、それでもまだ足りない。君が真に皇を統べる者となるまで、私の全てを君に預けるわけにはいかないな」

「……あなたの、全て……う？」

「だとしても君の雄姿は紛れもないものだった。だからこそ、最後に見せてあげよう。私の全力のひとかけらを！　いくぞ！」

ダークナイトがデッキに指をかけた瞬間、まるで終わることのない闘志が群青色のオーラとなってその右手に宿るのが見えた。

——カオス・ドロー！

決死の攻防

圧倒的な威圧感を放ちながらシャルクの精神力を削り続ける「試練」を与えるダークナイト。

そんな彼の右手に、果てなき闘志が群青色のオーラとなって宿るのが見えた。彼が引いた運命の一枚は……。

「私が引いたカードは《七皇昇格》^{セブンス・アセンション}！ デッキからこのカードとは名前の異なる「セブンス」カードをサーチ、またはデッキトップに配置する！ 私は《R U M―七皇の剣》^{ランクアップマジック}を手札に加える！」

「RUMならいくつか聞いたことがあるけど……七皇の剣？」^{ザ・セブンス・ワン}

「このRUMは通常、ターンの最初のドロローに引かなければ効果を発動できない。加えて、このカードの効果処理はデュエル中に1度しか行えない」

本来ならばサーチなどする必要はなく、むしろ放置して素引きに賭けるほうが意義のあるカード。それを伝えるという時点で、シャルクも、そしてこれまでシャルクの対戦を見守ってきたリスナーたちも、あれが無意味なサーチではないことを理解していた。

「だが……墓地の《七皇昇格》^{セブンス・アセンション}の効果発動！ 相手の場にエクストラデッキから現れたモンスターが存在する時、このカードを除外し、手札の「RUM」を墓地に送ることで、そのカードの発動時の効果処理を行う！」

「サーチしたRUMの効果をコピーする墓地効果……！」

「私は《RUM―七皇の剣》^{ザ・セブンス・ワン}の効果を適用！ エクストラデッキからオーバーハンドレッドナンバーズを特殊召喚し、そのモンスターをカオスナンバーズへとランクアップさせる！ 私はランク4の《No.101 S・H・Ark Knight》^{サイレント・オナーズ・アー}1体でオーバーレイネットワークを構築。カオスエクシーズチェンジ！」

（あたしのバイスと同じカオスナンバーズ……!? いや、カオス化だけじゃない！ ランクアップも同時にしてる……!）

ダークナイトが七皇の剣を天高く掲げると、彼のエクストラから呼び出された純白の巨大な方舟――《S・H・

Ark Knight《がその威容を現し、コアユニットから四肢のない人形を発射。

その人形を追うように射出された追加ユニットが両腕と両脚となり、紅蓮の槍を掲げた漆黒の槍術師がその姿を露わにする。

「深淵に沈む魂の方舟よ、今その闘志を露わにし、漆黒の騎士となつて未来を拓け！」
《C N o . 1 0 1 S ・ H ・
Dark Knight》！」
サイレント・オナーズ

「この圧迫感……！ この異様なほどのプレッシャーの正体は、このモンスター……!!」

「これだけのプレッシャーの中、それでも私を畏にかけようという君の胆力には恐れ入る。しかし君の伏せカードのひとつが《神の氷結》であることはわかつている。それは水属性が場に2体以上いる時、モンスターの攻撃と効果を封じる効果があつたはずだ」

（ま、バレルよね……。けれど実際のところ、効果不明のダークナイトを封じるべきか、あの人の最後の手札……《デス・クラーケン》で戻つた《海竜神―リバイアサン》のサーチ効果を封じるかはまだ悩んでるのがホントのところだ。少なくとも、あのリバイアサンを出さない選択肢は向こうにはない）

シャルクのバックに構える1枚は、相手の攻撃と効果を封じる《神の氷結》……前のターンに墓地からセットされているため、実質的な公開情報となつている。

しかし、残る2枚のバックは《エア―トルピード》で引き当てた完全な非公開情報。《電気海月―フィサリア》によつてモンスター効果による妨害が難しくなつているが、それでも畏を封じる術はあちらにはない。

「手札から《海竜神―リバイアサン》を召喚し、効果発動。デッキから「海」または「リバイアサン」魔法・畏、「シーステルス」魔法・畏のいずれかを手札に加える」

「……効果のわからないモンスターでハズレを引くくらいなら、確実にキツイ効果を封じさせてもらう！ 畏カード《神の氷結》！ リバイアサンの攻撃と効果を封じる！」

「いいだろう。では処理後、《デス・クラーケン》の効果発動。リバイアサンを手札に戻し、《海晶乙女コーラルアネモネ》を破壊」

（けどこれで攻撃できるモンスターは3体。ダークナイトの攻撃力3000はともかく、残りは1600のファイサリアと《デス・クラーケン》だけ。スパイダーシャークの効果ファイサリアに止められたとしてもまだ凌げる……!）

頬に汗が伝い、息が乱れる。

既に精神力は底をつきかけ、ほとんど気力だけで立っているような状態。

故に——普段では考えられないような思考ミスが発生する。

「ファイサリアの効果発動。デッキから「海」扱いの《伝説の都アトランティス》を墓地に送り、手札から《海竜神—リバイアサン》を特殊召喚する」

「しま……ッ!?!」

そう、ファイサリアの展開能力が頭から抜けていたのである。

「……私はレベル3の《デス・クラーケン》と《電気海月—ファイサリア》でオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。ランク3、《エクシーズ・アーマー・トルピード》」

「ここで、追加エクシーズ……?」

「アーマートルピードの効果発動。オーバーレイユニットを2つ使い、デッキからカードを1枚ドロウ。そして素材のないランク3水属性エクシーズでオーバーレイ。1体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。ランク4、《F A—ブラック・レイ・ランサー》」

「F Aレイランサー……!」

「さらに《F A—ブラック・レイ・ランサー》を素材として、1体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。ランク5、《エクシーズ・アーマー・フォートレス》」

「専用カードを用いない連続ランクアップ……!」

エクシーズモンスターを横に並べること、そして縦軸に強化するこ

とは水属性デツキの得意技だ。同じ水属性デツキとして、ダークナイトがそれをするに違和感はない。

しかし、嫌な予感はこので途切れてくれない。さっきの判断ミスが、今の自分が冷静さを欠いていることをシャルクに否応なく自覚させた。

「《エクシーズ・アーマー・フォートレス》の効果発動。オーバーレイユニットを2つ使い、デツキから「アーマード・エクシーズ」カードを2枚サーチする」

「アーマード、エクシーズ……?」

「私はデツキから《アーマード・エクシーズ》と《フルアーマード・エクシーズ》を手札に加え、《エクシーズ・アーマー・フォートレス》1体でオーバーレイネットワークを構築！ エクシーズ召喚！」

「また、専用カードのないランクアップ……!?!」

だが今度は先程までとは比べ物にならない存在感が、オーバーレイネットワークから溢れ出している。

「深淵より出でし漆黒の騎士よ、無双の武装を身に着け、堅牢なる守護者となって未来を拓け！ 《F A—ダークナイト・ランサー》！」

「2体目の、ダークナイト……!?!」

「このダークナイトは、このカードが持つオーバーレイユニットと装備カードの数だけ、攻撃力が300ポイントアップする。今のところはユニット1つ分とアトランティスを合わせ攻撃力3300といったところだが……魔法カード《アーマード・エクシーズ》を発動！」

「さっきサーチしてた魔法カード……!?!」

「このカードは墓地に存在するエクシーズモンスターを場のモンスターに装備し、装備カードの攻撃力と属性をコピーする。私は《エクシーズ・アーマー・トルピード》を装備。攻撃力がアーマートルピードと同じ2500になった後、ダークナイトの効果で600、アトランティスで2000アップするため数値は3300から変動はないものの、本命はそこではない。1ターンに1度、ダークナイトランサーが存在する状態でモンスターに装備カードがつけられた時、相手のモンスター1体を対象として、そのモンスターをこのカードのオーバー

レイユニットに変換する」

「破壊や除外ではなく、モンスターを自らの素材として吸収する効果……!?!」

シャルクの場に佇むシャークドレイクは、その素材となった《ライトハンド・シャーク》と《レフトハンド・シャーク》によって戦闘効果では破壊されない。

しかし破壊以外の手段に対しては無力であり、除外あるいは戦闘で発生するダメージに対して警戒していたシャルクは、残った2枚のバックによつて戦闘ダメージはケアしていた。しかし、ここで破壊・除外・バウンスのどれでもない除去を受け、彼女の精神は大きく揺らいだ。

既に冷静な普段通りの判断力などほとんど残っていない。彼女のLIVEデュエリストとしての本能が、彼女の闘志を支えているに等しい。しかし、そんな彼女にダークナイトは無慈悲に断頭の刃を下ろす。

「私は君の場に存在するシャークドレイクをダークナイトランサーのオーバーレイユニットに変換。ダークソウル・ウォーダー!」

「シャークドレイク!」

「そしてダークナイトランサーの素材が増えたことで攻撃力は3600まで上昇。次にS・H・Dark Knightの効果。相手モンスター1体をオーバーレイユニットに変換する。対象はスパイダーシャークだ。ダークソウル・ローバー!」

「スパイダーシャークまで……!」

強力な耐性を持つていたはずのエースモンスターと、破壊時に後続を呼びつつ攻防どちらにも優秀なデバフ効果を持っていたナンバーズを呑み込まれ、シャルクのフィールドは一気に瓦解。

リンクモンスターゆえに防御をとれない《アビス・オーパー》と、たった1枚の伏せカードだけ。

「ここでダークナイト・ランサーの最後の効果を発動。1ターンに一度、墓地から「エクシーズ」カードを手札に戻す。私は《アーマード・エクシーズ》を回収し、再び発動。《海竜神―リバイアサン》に《FA

「ブラック・レイ・ランサー」を装備し、攻撃力は2300となる」
ではバトルだ、と静かに告げるダークナイトの声色に、落胆や失望の気配はなかった。

「ダークナイトランサーで《アビス・オーパー》を攻撃」

「リバーズカード、《ポセイドン……」

「無駄だ。《エクシーズ・アーマー・トルピード》を装備したモンスターが攻撃する時、相手はダメージステップ終了時までカードを発動できず、表側表示のカード効果は全て無効となり、また装備モンスターを効果対象にはできない」

「なんて無慈悲な戦闘制圧能力……！」

シャルク：LP8000↓5900

「そして戦闘後のダメージステップ終了時、《エクシーズ・アーマー・トルピード》を墓地に送ることでダークナイトは再び攻撃可能。この時、攻撃力は元々の2800に自身の効果とアトランティスの効果を加えた3600。ダイレクトアタックだ」

「ならここで改めて罫カード《ポセイドン・ウェーブ》を発動！ 既に《エクシーズ・アーマー・トルピード》が装備から外れているなら、これが通るはずだよ！ 相手の攻撃を無効にする！」

「いいだろう。では続いてS・サイレント・オナーズ・ダーH・Dark Knightナで攻撃」

「それは、受けざるを得ない……！」

シャルク：LP5900↓3100

「最後だ。リバイアサンでダイレクトアタック」

「ぐっ……！ 受けてあげるよ……ここまではね！」

シャルク：LP3100↓800

「何……？ いや、罫だとしても、踏み抜かねば正体は掴めないか。いいだろう、装備状態の《F.A.ブラック・レイ・ランサー》を解除し、リバイアサンで追撃！」

「はあ、はあ……罫カード《カウンター・ゲート》！ 相手の直接攻撃宣言時にその攻撃を無効にし、げほっ……デッキからカードを1枚ドロウする！ はあ……そのカードがモンスターカードなら、それを表側攻撃表示で通常召喚できる！」

既にシャルクは満身創痍。誰の目から見ても継戦可能な状態ではない。

それは戦っているダークナイトだけでなく、画面の向こうで見ているリスナーたちもわかっていた。『シャルちゃん生まれ!』『中断しろ!』『これ以上は無理だ!』『もういいだろ、デュエルを中止しろ!』と誰もが口を揃えた。

しかし——その制止を振り切ったのは誰か。

「はあ……はあ……これで、そっちにはもう、おえっ……攻撃手段は、なくなつた……げほっ」

「……ああ」

「ドロ……。ぜえ……あたしが引いたのは《妖海魚デッドリーフ》だ、攻撃表示で召喚し、効果を……げほっ、発動するよ……。デツキから……はあ、《キラララブカ》を墓地に送る。はあ……さあ、続けて?」

「バトルを終了。ターンエンドだ」

だよね、とシャルクは小さく笑う。

「あた、しの……ターン……。ドロ……。……魔法カード、はあ……死者、蘇生……発動! 墓地から《超古深海王シーラカンス》を特殊召喚し、手札の《サイレント・ウオビー》をコストに効果発動! デツキから《カッター・シャーク》《深海の白タウナギ》《セイバー・シャーク》を特殊召喚!」

「あの瀕死の状況から、ここまで……!」

「レベル4のカッター、セイバー、デッドリーフ、白タウナギでオーバレイ! 4体の水属性モンスターでオーバレイネットワークを構築、エクシーズ召喚! 深海に潜みし、狡猾にして獰猛なる脅威の咬牙! ランク4、《CNo.32 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス》!!」

「……まさか、私の最後の連続攻撃を受け続けていたのは、この状況を想定して……!」

そのために、思考能力の低下も認めたと上で、精神力の摩耗した状態でのダメージを許容したとするのなら……。

「バトル……！ はあつ、はあつ……シヤークドレイクバイスで、
サイレント・オナーズ・ダー
S・H・Dark Knightを……げほつ、攻撃……！ ダ
メージステップに入り……ぜえ……ダメージ計算前にバイスの効果
発動……！ 自分の、はあ……自分のライフが1000以下の時……
はあつ……！ 墓地のランタンシヤークを除外して、げほつ……オー
バレイユニットを1つ使うことで……ダークナイトの攻撃力を
……」

あと一歩。あとほんの一言が出れば、このゲームは彼女の勝利で終
わる。

誰もがその一言を待ち望むその瞬間――、
「ぜろ、に……」

ついにシヤルクは崩れ落ちた。

シヤルク：LP800↓デュエル続行不能